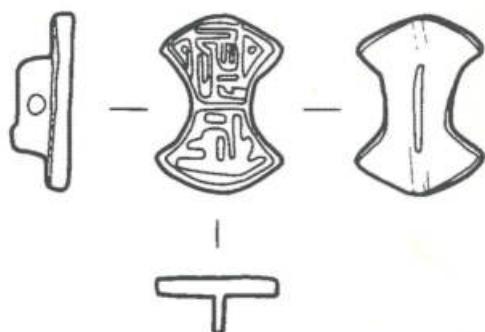


今帰仁村文化財調査報告書第29集

# 今帰仁城跡発掘調査報告V



2011年 3月

なきじん  
沖縄県今帰仁村教育委員会

今帰仁村文化財調査報告書第29集

# 今帰仁城跡発掘調査報告V

－今帰仁城跡外郭発掘調査報告2－

平成23年(2011) 3月

なきじん  
沖縄県今帰仁村教育委員会

## もくじ

第Ⅰ章 序 言 (玉城 靖)	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 保存と整備	1
第3節 保存と整備のための委員会	2
第4節 調査体制	2
第Ⅱ章 調査概要 (玉城 靖)	
第1節 調査地域	4
第2節 調査経過	4
第Ⅲ章 遺 跡 (玉城 靖・与那嶺俊)	
第1節 位置と環境	9
第2節 遺 構	13
第3節 層 序	14
第Ⅳ章 報 告 (玉城 靖・宮城弘樹・有銘倫子)	
第1節 VIII区(外郭4・5・6・7・9・10次調査)	17
1. 遺構	17
2. VIII区包含層出土遺物	96
第V章 総 括	
第1節 今帰仁城跡出土明代青花瓷の研究(1) (柴田圭子)	167
第2節 外郭VIII区の発掘調査成果について (玉城 靖)	191
図 版	199
付 図 同封	

## 序

本報告書は、史跡今帰仁城跡の保存修理事業に伴う発掘調査の成果をまとめたものであります。

収録したのは、平成19年度～平成21年度に史跡整備事業に伴って実施された発掘調査の報告書であります。これまで今帰仁城跡では様々な調査研究が行われ、特に主郭では城郭の主要部分における利用の変遷や王城としての機能をうかがい知ることのできる傑出した陶磁器の出土、あるいは志慶真門郭においては家臣団的集団の居住区の確認など多くの興味深い資料が得られています。以上のように郭内の面的調査によって得られた情報は今帰仁城跡の復元整備において参考にされ着実に整備が進められているところであります。

また、2000年12月には本村の今帰仁城跡を含む県内9遺産とともに、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として今帰仁城跡が世界遺産登録されており、近年ではグスクにとどまらずその周辺地域の調査が進むことで、今帰仁城と集落の実像が解明されつつあります。

今帰仁村では今帰仁城跡周辺地域が史跡今帰仁城跡と一体となる文化財として保護・活用を図ることを目指しており、本調査によって発掘された出土資料は地域の住民に公開され活用していくことを計画しております。

最後に、これまで調査にあたっては貴重なご指導を賜りました文化庁保護部記念物課、沖縄県教育委員会文化課、県立埋蔵文化財センターをはじめ、調査を指導していただいた今帰仁城跡調査研究整備委員の先生方に心から御礼申し上げます。

平成23年3月

今帰仁村教育委員会  
教育長 謝花 弘

## 例　　言

1. 本報告は、今帰仁村教育委員会が国・県の補助を受けて、平成19年度～平成21年度に実施した「史跡等総合整備活用推進事業」で、2007年4月23日～2008年3月31日に実施した「今帰仁城跡外郭第5次調査」、2008年4月1日～2009年3月31日に実施した「今帰仁城跡外郭第7・9次調査」、2009年4月1日～2010年3月31日に実施した「今帰仁城跡外郭第10次調査」の発掘調査の成果を主に収録したものである。
2. 発掘調査、資料整理等で次の方々のご指導、ご協力を得た。記して謝意を表する。  
石器・石製品、地質等に関する所見：神谷厚昭（金城町石疊地質研究所）  
陶磁器等に関する所見：金城亀信、新垣力、瀬戸哲也（沖縄県立埋蔵文化財センター）、野上建紀（有田町歴史民俗資料館）、向井亘（シラバコーン大学大学院歴史考古学科（タイ）博士課程後期）  
その他遺跡全体の調査に係ること：金武正紀（今帰仁城跡調査研究整備委員長）、富田裕次、赤嶺和雄、高橋誠一、上原靜、田中哲雄、渡辺美季（今帰仁城跡調査研究整備委員）  
発掘調査等にあたっては本中眞、山下信一郎（文化庁記念物課）、島袋洋（沖縄県教育庁文化課）、盛本勲（）、瀬戸哲也（）、上地博（）、伊禮良栄（）ほか多くの先生方からご指導ご鞭撻いただいた。記して謝意を表する。
3. 発掘調査は今帰仁村教育委員会が実施した。本報告の執筆は下記の6名あたり、もくじに文責を記した。なお、陶磁器の分類と本書の編集は玉城・宮城が中心となって行った。  
宮城 弘樹・玉城 靖（今帰仁村教育委員会文化財係）  
黒沢 健明・有銘 倫子・与那嶺俊（今帰仁村教育委員会文化財係臨時職員）  
柴田 圭子（愛媛県埋蔵文化財センター）
4. 資料整理は下記のメンバーで行った。  
上間 恵子　　松本 綾子　　玉城 亜紀　　玉城 静香　　新垣 あゆみ  
神山 知枝子　島袋 滉子　　山城 留利子
5. 現地での写真撮影は宮城、玉城、與那嶺、黒沢が担当した。遺物の撮影は玉城が担当した。
6. 出土遺物と発掘調査に係る資料は全て今帰仁村教育委員会（今帰仁村歴史文化センター）において保管する。
7. 報告書の引用・参考文献は巻末に収めた。
8. 本報告出土遺物の分類については既刊の今帰仁村教育委員会発行の報告書分類を用いているが、青磁、白磁に関しては瀬戸ほか2007の分類に従っている。
9. 本報告出土遺物の金属製品の観察表において、釣り針などの湾曲する製品の外径は外周の計測値を表記している。

# 第Ⅰ章 序 言

今帰仁城跡外郭は、今帰仁城跡城内の最も北側の郭で、昭和54(1979)年に追加指定された地域にあたる。その郭の面積は約20,000m<sup>2</sup>で今帰仁城跡の郭の中でも最も広い地域となっている。

本報告では主に、今帰仁城跡外郭東区の試掘調査として先行実施した17年度および、4次調査として実施した平成18年度、5次調査として実施した平成19年度、6・7・9次調査として実施された平成20年度、10次調査として実施された平成21年度の事業による、外郭地区Ⅷ区において検出された遺構、遺物について収録したものである。

## 第1節 調査に至る経緯

国指定史跡今帰仁城跡の近傍に駐車場や便益施設等を設置する計画が持ち上がった。目的は、史跡指定地内の駐車場撤去の代替として計画されたものである。事業は北部振興策事業によって今帰仁村が主体となって実施された。平成17年9月には整備を完了し今帰仁村グスク交流センターを開館させた。これら新たに設置された施設によって城内の駐車場が撤去され、史跡が機能していた往時の姿へと復元されつつある。他方、駐車場から平郎門へ向かう導線上に、史跡の理解を促すためのガイダンス広場として、今帰仁城跡の地形模型(S=1/100)を設け、今帰仁城跡および周辺地域の現況を一瞥できるように工夫している(平成19年度報告)。

さて、上記の整備事業の進捗に伴って城内駐車場は不必要となり撤去されることにより、目立たなかった外郭地区が景観的あるいは史跡散策を目的として利用導線上重要な地域として重要度が増し、整備を早急に行うべき地域として位置づけられることとなった。これに伴って、平成17年度からは従来の史跡整備事業から史跡等総合整備活用推進事業へ事業を移行させ、早期整備と史跡の活用に関する充実を目指し整備を進めることを計画した。計画については、整備委員会をはじめとする関係機関との議論を重ね、史跡の総合的な活用を目指すこととした。

## 第2節 保存と整備

外郭の整備事業は城外を東西、城内を東・西及び中央の概ね5つの地区に大別している。このうち今回整備対象となるのは、城内の東地区の一部である(第1図)。この東地区は石垣が150mにわたり良好な状態で残されており、更に今帰仁城跡でも重要な参拝場所である「レコーラウーニー」や「古宇利殿内」が残っている。地表面で既に観察することのできる遺構や地中から現れる遺構、あるいは祭祀や畑の耕作といった人々の継続的な営みによって作られた史跡景観が多く残っているのが外郭の特徴である。なお、史跡内における調査は遺構検出面まで留める方法を採用し保存することを最優先課題としている。

### 第3節 保存と整備のための委員会

1981年に調査研究整備委員会を発足させ、年1回の整備委員会を開催し必要に応じて年数回の整備指導をいただいている。委員は次の通りである。なお、事業全体については、本中眞・山下信一郎（文化庁）、島袋洋・盛本勲・瀬戸哲也・上地博・伊禮良栄（県文化課）のご指導をいただいた。

#### 〈平成21年度〉

委 員 富田 裕次（海洋博記念公園管理財団理事長・都市計画）  
委 員 赤嶺 和雄（設計同人G A N・建築学）  
委 員 上原 静（沖縄国際大学・考古学）  
委 員 金武 正紀（今帰仁村発掘調査アドバイザー・考古学）  
委 員 高橋 誠一（関西大学・地理学）  
委 員 田中 哲雄（元東北芸術工科大学・史跡整備）  
委 員 渡辺 美季（東京大学東洋文化研究所・歴史学）

#### 〈平成22年度〉

委員長 金武 正紀（元今帰仁村発掘調査アドバイザー・考古学）  
委 員 富田 裕次（海洋博記念公園管理財団理事長・都市計画）  
委 員 赤嶺 和雄（設計同人G A N・建築学）  
委 員 上原 静（沖縄国際大学・考古学）  
委 員 田中 哲雄（元東北芸術工科大学・史跡整備）  
委 員 高橋 誠一（関西大学・地理学）  
委 員 渡辺 美季（神奈川大学・歴史学）

### 第4節 調査体制

調査体制は教育委員会が主体となって実施した。事業全体の総括責任者は教育長、課長、主幹までが担い、調査担当者は宮城弘樹、玉城靖の専門職員によって充てた。なお、当該職員だけでは事業の遂行は困難であることから、補助員として与那嶺俊、具志堅亮・黒沢健明・有銘倫子らによって現場・資料整理の調査補助を行うと共に、隨時発掘調査アドバイザーとして金武正紀に遺跡の総括的な評価などについてご指導をお願いする体制を整えている（平成22年3月まで）。また、実際の現場、資料整理については複数名の臨時職員にご尽力いただいた。

#### 〈平成20年度・発掘調査、資料整理〉

事業主体 今帰仁村教育委員会  
事業責任者 教育長 田港 朝茂  
 総合教育課長 島袋 隆則  
 総合教育課長補佐兼歴史文化センター館長 仲原 弘哲  
事務総括 文化財係長 田港 朝津  
 文化財係主事 玉城 恵 金城 研  
調査担当者 文化財係専門員 宮城 弘樹 玉城 靖

発掘調査アドバイザー	金武 正紀			
調査補助員（臨時職員）	與那嶺 俊	具志堅 亮		
発掘作業員（臨時職員）	仲村 善洋	宮里 政公	平安俞美子	宮城 章
	諸喜田富士子	金城 政利	玉城 京子	仲宗根直美
	山内 豪	大城いち子	松田 清美	城間 節子
	仲原美代子	千田 寛之	内間美佐子	野村 富子
	上原 尚樹	大城ヒデ子	玉城 光則	松尾美智子
資料整理（臨時職員）	上間 恵子	玉城 静香	新垣あゆみ	玉城 亜紀
	松本 綾子	島袋 滉子	神山知枝子	山城留利子

〈平成21年度・発掘調査、資料整理〉

事業主体	今帰仁村教育委員会			
事業責任者	教育長 謝花 弘			
	総合教育課長 島袋 隆則			
	総合教育課主幹 上間 恒章			
	総合教育課長補佐兼歴史文化センター館長 仲原 弘哲			
事務総括	文化財係長 長田 光吉			
	文化財係主査 玉城 恵			
	臨時職員 日高 寛人			
調査担当者	文化財係専門員 宮城 弘樹	玉城 靖		
発掘調査アドバイザー	金武 正紀			
調査補助員（臨時職員）	與那嶺 俊	黒沢 健明		
発掘作業員（臨時職員）	仲村 善洋	宮里 政公	平安俞美子	松尾美智子
	宮城 章	金城 政利	玉城 京子	玉城 光則
	仲宗根直美	山内 豪	松田 清美	城間 節子
	仲原美代子	内間美佐子		
資料整理（臨時職員）	上間 恵子	玉城 静香	新垣あゆみ	玉城 亜紀
	有銘 倫子	松本 綾子	島袋 滉子	神山知枝子
	山城 留利子			

〈平成22年度・資料整理〉

事業主体	今帰仁村教育委員会			
事業責任者	教育長 謝花 弘			
	総合教育課長 島袋 隆則			
	総合教育課主幹 上間 恒章			
事務総括	文化財係長 長田 光吉			
	文化財係主査 石野 裕子			
	臨時職員 日高 寛人	大城 慎也		
調査担当者	文化財係専門員 宮城 弘樹	玉城 靖		
調査補助員（臨時職員）	黒沢 健明	有銘 倫子	豊口 敬	
資料整理（臨時職員）	上間 恵子	玉城 静香	新垣あゆみ	玉城 亜紀
	松本 綾子	島袋 滉子	神山知枝子	山城留利子

## 第Ⅱ章 調査概要

### 第1節 調査地域

今帰仁城跡は概略10の郭から構成されており、外郭はその中でも最も北側にある郭で昭和54年に追加指定された地域にあたる。その郭の面積は約20,000m<sup>2</sup>で今帰仁城跡の郭の中でも最も広い地域となっている。外郭を区画する石垣は北側に150mにわたり良好な状態で残っているが、門については道路で分断され現況が著しく失われている。また、西側についても残りが悪く土壘状になっているだけで、近代になって破壊された可能性が考えられる。外郭一帯は史跡指定以前から開発されてきた地域で、指定当時には屋敷や店舗が5軒あり、駐車場が造成され、道路が外郭を東西に分断している状況であった。村では昭和49～50年度に主要な部分の用地購入を、その後も平成10年度から未公有化の土地の積極的な公有化事業を行い、店舗や住宅の物件補償を行うなど史跡の景観の回復に努めてきた。

外郭の郭内の区画はまず大きく分断している現況道路を境界として東側を東区、店舗がある中央は中区、西側を西区として調査を行っている。中でも最も残りの良い東区では平成17年度に駐車場の撤去を行い、試掘調査を実施することで概ね9つの小区画に区分している。これら小区画を東区I～IX区の名称として発掘調査を進め、それぞれがいくつかの平坦面で構成されている。

対象となる地域の調査地区の設定については、これまで今帰仁城跡周辺遺跡で行ってきた座標を基準とする地区設定を基に実施している。即ち、国土座標第15系（平成14年4月1日に施行された改正測量法に基づく）のX=76,800をM、76,790をN、以下南へ10m毎にO・P・Q…と英数字を振り、Z以降については、AA・AB・AC…として表記した。Y軸は、Y=42,500を原点10とし、10m毎に東へ11・12・13…として算数字を振り、その組み合わせによってM-10（X=76,800-Y=42,500）、AG-20（X=76,600-Y=42,600）のように呼称し、交点の杭はそれぞれ北西のグリッド区画を指示することとした。なお、調査区の設定や個々の遺物の取り上げについても国土座標系で取り上げ、ファイルを作成して整理している。

遺物の整理に関しては今帰仁城跡外郭第2・3・4・5次調査（ex：3次外郭）を付しグリッド名と層序、遺構、遺物回収Noを付して注記することとした。

### 第2節 調査経過

今帰仁城跡内の発掘調査はこれまで志慶真門郭（1,700m<sup>2</sup>/S55～57年度）、主郭（880m<sup>2</sup>/S57～60年度）において実施されている。これ以後は城壁の基礎部分を中心に調査を実施してきたことから、面的な遺構確認の発掘調査は、平成16年度の外郭調査によって再び着手されることとなった。

外郭調査を本格的に着手した目的は、近年進んでいる周辺地域の整備に伴って、これまで駐車場となっていて活用が図られていなかった外郭地域を、史跡として積極的に活用できる環境が整ったということが大きな理由である。特に外郭地域は、平成17年度に完成し運用されているグスク交流センター及び駐車場より平郎門までの利用導線上にあることから、史跡に訪れる来訪者への理解を促す為にも導入部分として位置付けることができる地域である。この為、外郭地域の整備は早急に行われるべきとして、現在も早期完了を目指し、整備委員会・文化庁・県の指導のもと、調査・整備を進めている。

発掘調査の計画は概略5年間を一区切りとして、発掘調査前の地形や石垣等の遺構あるいは地籍等を踏まえて東・西・中・城外北西・城外東区の5つのエリアに分けて調査を実施することを計画した。外郭整備第一期の5ヶ年間は、外郭東地区（以下、外郭東区）に設定し、平成17年度から発掘調査を開始している。外郭東区は外郭地区全体の中でも戦前からの地形変化が比較的少なく、石垣などの遺構の残りもよい。このため、調査着手前に、遺構の平坦地や地籍、石積み遺構に基づき、I～IX区の9つに区分けを行った。この中でも、大きく四つの平坦面が確認されており、またその平坦面を区画するように石垣や石列が延びていたため、この空間「III・IV」「VII」「VIII」「VI～IX」とした。

平成16年度は城壁の外側平坦地（約800m<sup>2</sup>）の調査を実施した（1次調査）。またこの他にも鳥居撤去の立ち会い（H15／4m<sup>2</sup>×2箇所）、墓撤去の立ち会い（H17／9m<sup>2</sup>×1箇所）によって地下の状況等について確認を行っている。平成17年度は道路によって分断されている地区の内壁側（R-28・29／約250m<sup>2</sup>）を中心に石垣の状況確認を目的に調査を実施している。また外郭地区の地下遺構残存状況等を把握するために、南北トレンチ約30m、東西トレンチ約40mの試掘溝を設定し調査を進め、外郭の概要を把握するとともに地区設定を行った（2次調査）。平成18年度は主に2つの調査区に分けて作業を行った。一つはIII・IV・VII区（約1400m<sup>2</sup>）の発掘調査（3次調査）。もう一つは石垣の根石確認を目的とした確認調査である（東側城壁内壁面約100m：4次調査）。平成19年度はVII・VIII区（約1,000m<sup>2</sup>）の発掘調査を行った（5次調査）。なおVIII区にある祭祀施設の古宇利殿内については、地下に良好な形で遺構が埋没していることがわかったため、平成20年度に移設工事を行い、移設後、継続調査を行っている。6次調査は4次調査の残りとして外郭東側城壁根石確認及び測量調査を行っている。なお平成20年度の調査として7・8次調査を実施、継続的に調査を行っている。

平成19年度「史跡等総合整備活用推進事業」2007年4月23日～2008年3月31日

#### 今帰仁城跡外郭第5次調査（東区）

5次調査は今帰仁城跡内外郭東区の調査を村教育委員会が直営で実施した（約1,000m<sup>2</sup>）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として與那嶺俊・具志堅亮があたった。調査はVII・VIII区を中心に発掘調査を行った。VII区は3次調査の残りの箇所を調査した。VIII区は外郭東区で最も標高の低い箇所にあたり、祭祀施設の古宇利殿内がある。なお古宇利殿内については、地下に良好な形で遺構が埋没していることがわかったため、平成20年度に移設工事を行い（IX区に仮移設後、平成21年度にV区へ本移設）、継続調査を行っている（一部既報告）。

平成20年度「史跡等総合整備活用推進事業」2008年4月1日～2009年3月31日

#### 今帰仁城跡外郭第6次調査（東区）

6次調査は今帰仁城跡内外郭東区の写真測量図化作業を行った。調査は村教育委員会が直営で実施した。調査は宮城弘樹が担当し、調査補助として與那嶺俊があたった。4次調査の根石確認調査の成果を基に写真測量を行った（既報告）。

#### 今帰仁城跡外郭第7次調査（東区）

7次調査は今帰仁城跡内外郭東区VIII区の調査を村教育委員会が実施した（約400m<sup>2</sup>）。前年度に実施し古宇利殿内の地下に残存する遺構を中心に発掘を行った。VIII区から出土する遺物や検出される遺構が多いことから次年度まで調査を延ばすことになった。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として與那嶺俊があたった。

### **今帰仁城跡外郭第8次調査（東区）**

8次調査は今帰仁城跡内外郭東区の調査を村教育委員会が直営で実施した（約400m<sup>2</sup>）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として與那嶺俊があたった。調査はV区を中心に発掘調査を行った。なお、当該地区に平成21年度事業で古宇利殿内を移設、整備完了している。

### **今帰仁城跡外郭第9次調査（東区）**

9次調査は今帰仁城跡内外郭東区の写真測量図化作業を行った。調査は村教育委員会が直営で実施した。調査は宮城弘樹が担当し、調査補助として與那嶺俊があたった。4・6次調査として実施してきた事業の残り部分の調査を行っている（既報告）。

平成21年度「史跡等総合整備活用推進事業」2009年4月1日～2010年3月31日

### **今帰仁城跡外郭第10次調査（東区）**

10次調査は今帰仁城跡内外郭東区の調査を村教育委員会が直営で実施した（約600m<sup>2</sup>）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として與那嶺俊・黒沢健明があたった。調査はV区検出の遺構詳細調査を行った。

### **今帰仁城跡外郭第11次調査（西区）**

11次調査は今帰仁城跡内外郭西区の調査を村教育委員会が直営で実施した（約1,000m<sup>2</sup>）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として與那嶺俊・黒沢健明があたった。調査は西区城壁根石確認を目的として発掘調査を行った。

### **今帰仁城跡外郭第12次調査（中区）**

12次調査は今帰仁城跡内外郭中区の調査を村教育委員会が実施した（約250m<sup>2</sup>）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として與那嶺俊・黒沢健明があたった。調査は外郭地区の西側城壁と東側城壁の繋がりを確認するために、沖縄県北部土木事務所の許可のもと、県道115号線道路下の掘削を行った。

平成22年度「史跡等総合整備活用推進事業」2010年4月1日～2011年3月31日

### **今帰仁城跡外郭第13次調査（西区）**

13次調査は今帰仁城跡内外郭西区の調査を村教育委員会が実施した（約1,000m<sup>2</sup>）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として黒沢健明・有銘倫子があたった。調査は昨年度実施した西区城壁根石確認調査の残りの部分を発掘、図面作成作業を行った。

### **今帰仁城跡外郭第14次調査（西区）**

14次調査は今帰仁城跡内外郭西区の調査を村教育委員会が直営で実施した（約120m<sup>2</sup>）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として黒沢健明・有銘倫子があたった。調査は13次外郭調査において城壁根石が県道115号線道路下へと延長していることが確認されたことにより、沖縄県北部土木事務所の許可を得て2010/11/22～2011/2/28の日程で県道下の発掘調査を行った。調査の結果、県道下より良好な状態で城壁が確認されている。



第1図 発掘調査箇所位置図 (S=1/2000) (※アミカケ部分発掘調査箇所)

第1表 今帰仁城跡及び周辺遺跡のこれまでの調査（※ゴシック体・アミカケ部分は今回報告）

年度	西暦	史料整備事業等に伴う発掘調査				今帰仁城跡周辺遺跡の発掘調査			
		事業名	調査地区	調査面積	期間	調査	調査地区	調査原因	調査面積
平成元年	1989	主に整備・資料整理							
平成2年	1990	主に整備・資料整理	主郭東側城壁（2次）写真測量 に伴う崩落石除去（直営）	約40m <sup>2</sup>					
平成3年	1991	主に整備・資料整理							
平成4年	1992	主に整備・資料整理							
平成5年	1993	主に整備・資料整理							
平成6年	1994	志慶真門郭東側石積み基礎調査	志慶真門郭東側石積外壁側基礎	約6m <sup>2</sup>	9/12～9/13				
平成7年	1995	志慶真門郭東側石積土質調査	志慶真門郭東側石積外壁側基礎	約20m <sup>2</sup>	9/13～1/13				
平成8年	1996	志慶真門郭東側石積試掘調査	志慶真門郭北東部北側アザナ調査	約20m <sup>2</sup>	9/2～9/14				
		志慶真門郭東側石積試掘調査	志慶真門郭北東部南側アザナ調査	約20m <sup>2</sup>	10/7～10/19				
平成9年	1997	志慶真門郭南側石積試掘調査	志慶真門郭南側石積外壁側基礎	約2m <sup>2</sup>	6/25～9/12				
		志慶真門郭南側石積試掘調査	志慶真門郭南側石積外壁側基礎	約5m <sup>2</sup>	2/16～3/24				
平成10年	1998	外郭石積遺構調査	外郭西地区石積み遺構調査	約10m <sup>2</sup>	5/11～7/29				
平成11年	1999	志慶真門外壁遺構調査	志慶真門	約10m <sup>2</sup>	4/13～2/29				
		階段構造確認補足調査	主郭西側階段遺構	約3m <sup>2</sup>	9/30～10/1				
		主郭東側石積遺構確認調査	主郭東側調査（3次）	約10m <sup>2</sup>	3/17～3/26				
平成12年	2000	主郭東側工事に伴う立会調査	主郭東側調査（4次）		11/13～2/22				
平成13年	2001	大隅城壁修理工事に伴う事前確認調査	大隅城壁調査	約10m <sup>2</sup>	9/26～3/31				
		主郭東側崩落石撤去工事に伴う立会調査	主郭東側調査（5次）		9/21～12/19				
平成14年	2002	主郭東側城壁内壁武櫓調査	主郭東側調査（6次）	約40m <sup>2</sup>	9/2～9/20				
		主郭東側工事に伴う立会調査	主郭東側調査（7次）		2/6～3/27				
平成15年	2003	主郭南側城壁崩落石撤去	南側城壁調査（1次）		9/1～10/31	2次 西区I区・II区b 3次 ハラクブ 4次 東区（1+7区）	公園整備（記録保存） 遺跡範囲確認	1300m <sup>2</sup> 41箇所（5,000m <sup>2</sup> ） 2地点（30m <sup>2</sup> ）	4/24～11/7 5/14～7/25 9/24～10/28
		鳥居撤去工事に伴う立会調査	Z-30	8m <sup>2</sup>	9/30～10/1	5次 西区V区・IV区の一部 6次 西区III c + IV区（旧番地d） 7次 西区IV区	公園整備（記録保存）	400m <sup>2</sup> 800m <sup>2</sup> 400m <sup>2</sup>	10/27～1/7 12/8～2/25 1/14～1/26
		第1次外郭発掘調査	城外北西区R-23～26、S-23～26	400m <sup>2</sup>	4/21～3/31	8次 西区Ⅲa 9次 西区Ⅲ b	公園整備（記録保存）	400m <sup>2</sup> 600m <sup>2</sup>	5/13～11/10 5/13～12/4
		工事に伴う立会調査	主郭東南アサナ調査		11/12～3/21	10次 西区Ⅱa 11次 通路敷下		200m <sup>2</sup> 200m <sup>2</sup>	12/21～1/21 1/20～3/31
		墓撤去立会調査	U-24	9m <sup>2</sup>	2005年4月	12次 東区（7区）	遺跡範囲確認	200m <sup>2</sup>	12/2～3/31
		第2次外郭発掘調査	武蔵、東区IX区R-28～29、III区V-33ほか	800m <sup>2</sup>	8/9～3/31				
		主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査（2次）南西アザナ基礎調査	10m <sup>2</sup>	6/22～8/22				4～3月
平成17年	2005	主郭東側工事に伴う立会調査（工事）	主郭東側調査（8次）		1/26～3/31				
		第3次外郭発掘調査	東区Ⅲ・Ⅳ区U-33～36、T-33～36ほか	1000m <sup>2</sup>	4/24～3/30	補足 大川原遺跡 資料整理	法面崩落（記録保存）	20m <sup>2</sup>	4月～3月
		第4次外郭発掘調査	外郭東区域基礎調査	200m <sup>2</sup>	4/24～3/30	確認 今泊集落内	遺跡範囲確認	4m <sup>2</sup> ×3箇所	4月～3月
平成18年	2006	主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査（3次）上段部基礎調査	20m <sup>2</sup>	5月～7月				
		第5次外郭発掘調査	東区Ⅸ区S-33、R-33・34、Ⅹ区0-30～33ほか	1000m <sup>2</sup>	4/23～3/30	13次 親泊ムラ跡（4983番地）	遺跡範囲確認	43m <sup>2</sup>	9/19～10/10
平成19年	2007	主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査（4次）下段部基礎調査	20m <sup>2</sup>	5月～6月	14次 志慶真ムラ跡（4853番地ほか）	遺跡範囲確認	32m <sup>2</sup>	12/1～12/28
		第6次外郭発掘調査	外郭東区域基礎調査	200m <sup>2</sup>		16次 ハラクブ試掘調査（4929-1番地）	遺跡有無確認	2m <sup>2</sup> ×5箇所	7月1日
平成20年	2008	第7次外郭発掘調査	東区Ⅸ区0-30、R-30～32、S-31	400m <sup>2</sup>	7/1～11/28	15次 ナガレ庭遺構調査（4699番地ほか）	測量調査	40m <sup>2</sup>	8/1～8/14
		第8次外郭発掘調査	外郭V区R-36、S-36ほか	400m <sup>2</sup>		17次 今帰仁ムラ跡（5012番地）	遺跡有無確認	362m <sup>2</sup>	11/4～12/9
		第9次外郭発掘調査	外郭Ⅸ区0-32・33ほか	200m <sup>2</sup>					
		第10次外郭発掘調査	東区Ⅸ区0-30～33、R-30～32ほか	約600m <sup>2</sup>	4/15～10/1	18次 チンマーサ遺構調査	測量調査	約700m <sup>2</sup>	8/3～8/14
平成21年	2009	第11次外郭発掘調査	外郭西区域基礎調査	約1000m <sup>2</sup>	4/15～10/30	19次 今帰仁城跡周辺の旧道調査	遺跡有無確認		2/1～2/26
		第12次外郭発掘調査	外郭中区県道115号道路下調査	約250m <sup>2</sup>	12/3～3/31				
平成22年	2010	第13次外郭発掘調査	外郭西区域基礎調査	約1000m <sup>2</sup>	4/1～3/31	20次 大首原遺跡	公園整備（記録保存）	約200m <sup>2</sup>	8/2～9/30
		第14次外郭発掘調査	外郭西区県道115号道路下調査	約120m <sup>2</sup>	11/22～2/24				

## 第Ⅲ章 遺 跡

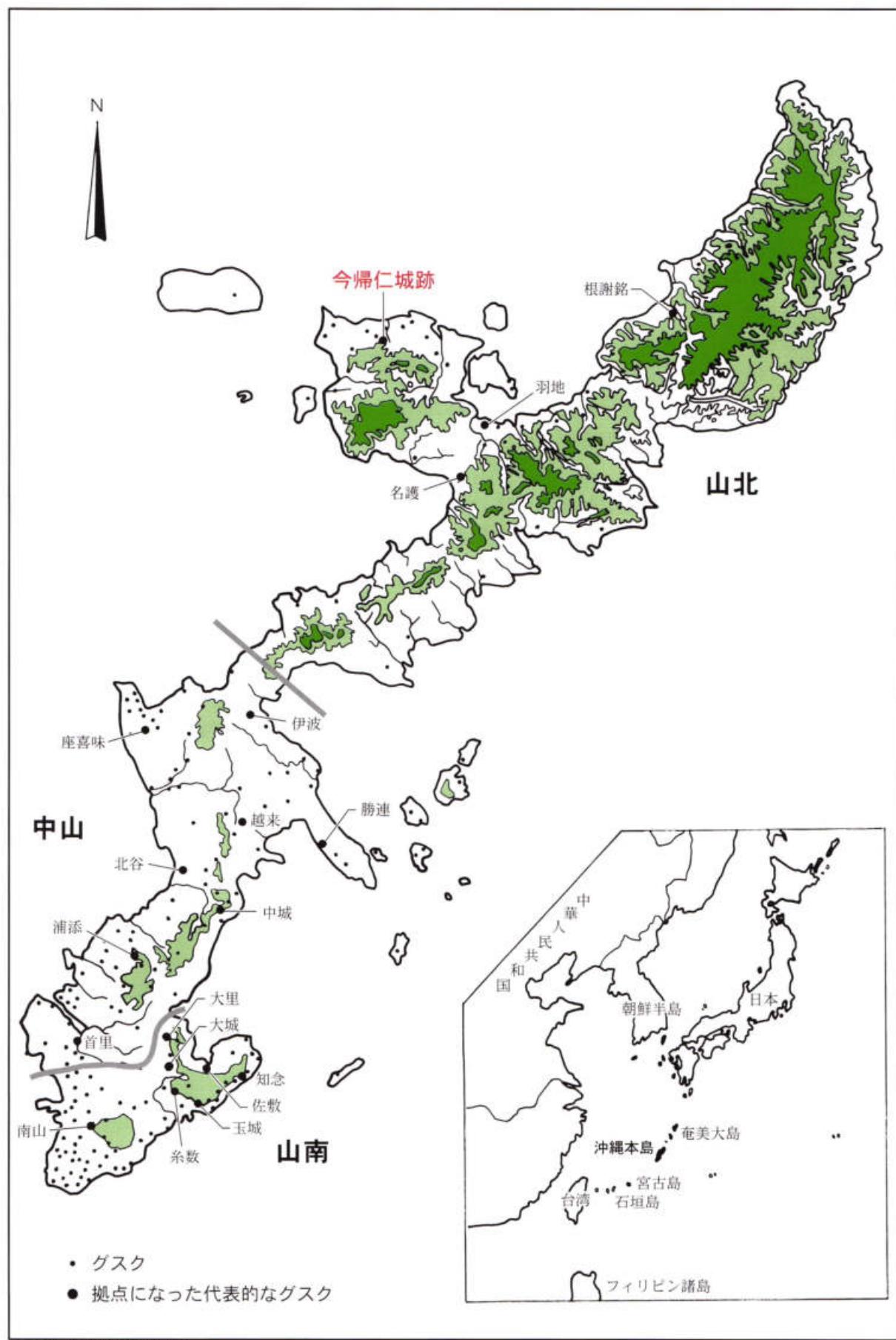
### 第1節 位置と環境

今帰仁村は沖縄本島北部、本部半島の北側に所在する人口約9,500人の自治体である。本島北部地域一帯は中南部に比して全体的に山地主体となっているため「山原（やんばる）」と呼称されている。今帰仁城跡は今帰仁村の中でも西端、字今泊に立地している。城地の立地する丘陵は標高約100mを測り、丘陵頂部の主郭・御内原からの眺望は広く、北に伊平屋・伊是名島、与論島を望むことができる良所にある（第2図）。本部半島の地形的特徴は概して山地部にみられる今帰仁層・本部層（与那嶺層）という中生代初期頃に堆積した地層群と、低地・海岸部にみられる琉球層群の2つのブロックに大別される。今帰仁層群は中生代三疊紀に堆積した地層で、今帰仁城跡の立地する丘陵一帯から本部町の大堂・浜元付近までの地域に広がっている。特に今帰仁城跡の立地する北西部には、結晶化が進んで硬質、厚さが平均して20cm前後で割れやすい特徴の層状石灰岩が基盤岩となる。

一方、この今帰仁城跡の周辺には集落遺跡、拝所、御嶽、石積み遺構など今帰仁城跡を中心に関連する。今帰仁城跡周辺遺跡の名称はこの関連遺跡群の総称である（第3図）。中心となる今帰仁城跡は今帰仁村大字今泊小字ハンタ原に所在し、城壁に囲まれた面積は約4haの広さを持つ大規模なグスクである（第1図）。最高所の標高は約100mとなり、基盤岩の古生代石灰岩の丘陵上に位置する。丘陵の頂上部が主郭、大庭、御内原となり、その東は70~80mの深い渓谷をつくり天然の要害となる。東側の谷筋は志慶真川が蛇行して流れ、西側の谷筋はタキンチャガーラが流れ東シナ海に注いでいる。今帰仁城御内原の郭に立つと志慶真川の渓谷を脚下に遠く伊是名島、伊平屋島、伊江島、古宇利島を望み、晴れた日には遠く与論島を眺望することができる。今帰仁城跡の城壁は立地する基盤岩の古生代石灰岩という灰色の硬い石を積み上げた石垣で、県内でも有名なグスクである首里城跡、中城城跡、勝連城跡などの白い琉球石灰岩の石垣とは雰囲気が異なる。今帰仁城跡の石垣の総延長は約1.5kmを測り、屏風状に曲線的に積み上げられている。城壁で囲まれた空間は先の主郭・大庭・御内原以外にもカーザフ、大隅、外郭、志慶真門郭など概ね10の郭からなり、石畳や石段で各郭は結ばれている。10の郭のうち最も北側にあり広い郭が外郭である。城外から外郭へのアクセスを行ったと考えられる門の部分は道路の開削などがあって不明瞭ではあるが、概ね現在道路に分断された地点にあるものと考えられる。

今帰仁城跡の歴史は、琉球が3つの勢力に分かれていた、いわゆる三山鼎立時代に山北（北山）として、中国明代に琉球國中山王、山南王とともに記録に登場する。これまでに確認されている史料をたよりに概述すると、最古史料の一つに『明実錄』があげられる。太祖寛錄卷一五八・洪武二十六年一二月庚午朔（1383年12月15日）「琉球國山北王怕尼芝、遣其臣摸結習、貢方物。賜衣一襲。」と記され、山北王「怕尼芝」の名称が記述されるのを似て嘴矢とするようである。以後記録によれば、最初の1383年から最後の1415年の33年間に山北王・怕尼芝が6回、山北王珉が1回、山北王攀安知が11回、中国皇帝へ使者を送り朝貢貿易を行ったことが記されている。この時代山北は沖縄北部地域と奄美大島近隣まで領域として支配していたようである。

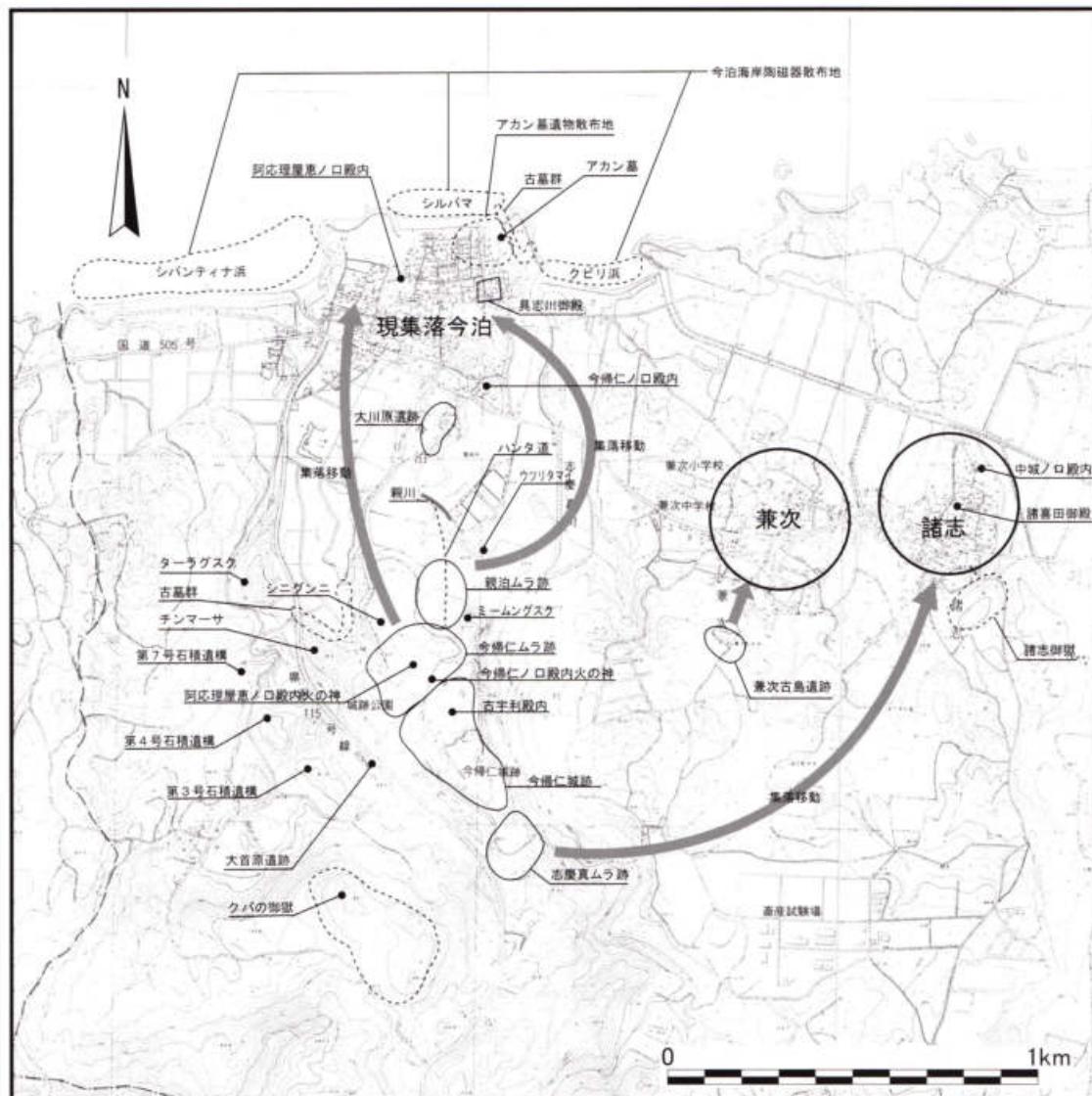
しかし、その山北（攀安知）も本島内で急速に勢力を拡大する中山王尚巴志によって1416年（1422年の和田説もある）に滅ぼされてしまう。中山の山北平定後、城地には中山によって中山王の子弟や重臣を山北監守に任じ、沖縄本島北部やんばる地域を管理している。それは1665年に監守体制が廃止されるまで続く。この間のことを監守時代と呼んでいる。この監守時代の間、1609年には薩摩



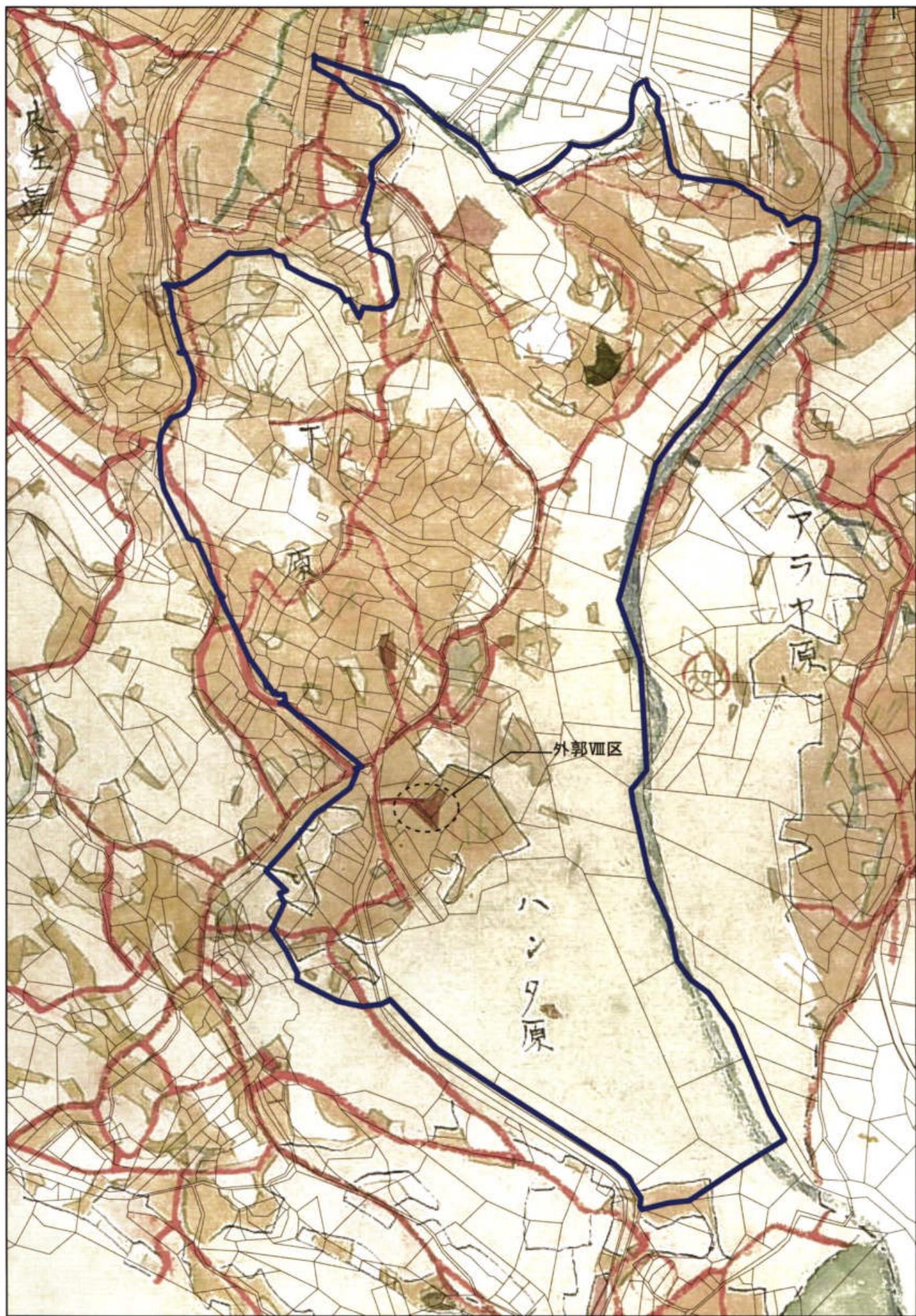
第2図 今帰仁城跡位置図

軍によるいわゆる琉球入りがあり、今帰仁城に立ち寄っていることが従軍日記「琉球渡海日々記」に記されている。日記によれば「首里城へ向かう途中、運天港に停泊、親泊での和議が受け入れられず城へ放火した」とあり、実質的な廃城は監守引き揚げよりも早い、1609年頃にあったと考えられる。

今帰仁城跡は昭和47（1972）年には沖縄の日本復帰と同時に国指定の史跡に指定され、昭和55（1980）年より今帰仁村が主体となって環境整備事業がすすめられている。この中で、平成12（2000）年には世界遺産として登録されたことによって、周辺地域が景観保全地区に指定、さらに平成21（2009）年7月には城下北側に広がる11.5ヘクタールが新たに史跡地域として追加され、翌22（2010）年2月にはシイナグスクが追加指定され、「今帰仁城跡附シイナ城跡」として名称を改め史跡面積合計約22ヘクタールとなっている。今帰仁城跡周辺遺跡が集落として機能していた時代は今から500年以上の時を経ている。現在の土地利用や祭祀空間を直接結びつけることは困難である。しかしグスク時代の景観が大規模な開発を受けることなく今日まで残されており、今帰仁城跡の立地する今泊（旧今帰仁・親泊）をはじめ、具志堅（旧具志堅・上間・真部）、諸志（旧諸喜田・志慶真）などの村落祭祀の重要な参拝地であるとともに、「今帰仁上り」と称される拝所・旧跡めぐりの重要な参拝地となっていることも重要である。ここから遡って文化的な伝統や、空間利



第3図 今帰仁城跡及び周辺遺跡位置図



第4図 今帰仁城跡の現況地積図と明治の地積図の重ね図（※青線は史跡指定地域）

用、景観の復元を行うことは集落のあり方や、検出される遺構を理解する参考となる。実際に調査地点の近傍には各集落、門中の祭祀において重要な参拝地となっている「クバの御嶽」への遙拝を行う「サカンケー」が所在している。「サカンケー」は「参詣」もしくは「坂迎え（あるいは酒迎え）」という語意と解され、南西方向にあるクバの御嶽を遙拝するための香炉がある。

## 第2節 遺構

外郭地区は発掘調査以前より地表面に露出している遺構が数多くみられる。石垣はその代表的なもので、今帰仁城跡の大隅郭を区画する大きく蛇行した石垣は存在感のある遺構の一つである。また外郭東区にある石垣は良好な状態で保存されている。この他にも外郭内を区画する石垣なども確認されている。

発掘調査において検出された遺構は柱穴、土坑、土留め石積み、石敷などの遺構である。これ以外にも今回当該地域に発掘前より地表面にあった古宇利殿内も遺構として記録に収めた。なお、基本的には発掘調査時に検出面までの確認で留めており、グスクが城として現役だった時代の調査地区における最も上位の遺構までの調査となっている。ただし、一部の遺構については、整備委員会の指導に基づいて遺構の検出作業を実施している。

今回の報告では特に、注目される遺構として、SB08とした基壇状の建物跡と想定される遺構がある。この推定建物跡はⅧ区のほぼ中央にある石敷の遺構である。

今回確認された遺構は以下の様に記載し報告する。

- ・祠：現地表面で確認できる祠で、ご神体などが祀られ、参拝者が現在も訪れる遺構。
- ・柱穴 (Pit, 記録上「S」に番号を付して整理した)：柱の穴。
- ・土坑 (SK)：柱穴とは異なり、遺構検出面で検出された遺構の掘方の径が広く円形ではなく不整形の場合は、土坑として調査を行っている。
- ・土留め石積み (SR)：今帰仁城跡の周辺では、同種の石材は未見である。このため持ち込みの石材と判断されるが、今後注意を喚起しておきたい。
- ・石積み遺構（城壁、もしくはSR）：今帰仁城跡の場合、発掘以前より地表面に現れているグスクの防御線を構成する石積み遺構は「○○城壁」と呼称されている。一方、城壁以外にも複数の石積み遺構があり、城壁の規模にははるかに及ばないが、石積み遺構、あるいは石積み根石のみ残存する石列が確認されており、SRと呼称している。
- ・建物跡 (SB)：住居等の建物跡で、建物跡を構成されると考えられた石列や石敷などもこれに含めた。
- ・道跡状遺構 (SF)：石疊等通用路を構成されると考えられる遺構。
- ・不明遺構 (SX)：整理時点においても遺構の機能が判然とせず、時期も不詳の資料は不明遺構としている。
- ・造成層：遺跡を覆う堆積層として整理されている。遺構内の覆土は、覆土の表記方法に従う。
- ・覆土：なお、遺跡を覆う堆積層の層順は I ・ II ・ III ・ ・ ・ で表記したが、遺構を覆う堆積層は上から順に「i ・ ii ・ iii ・ ・ ・ 」で表記している。

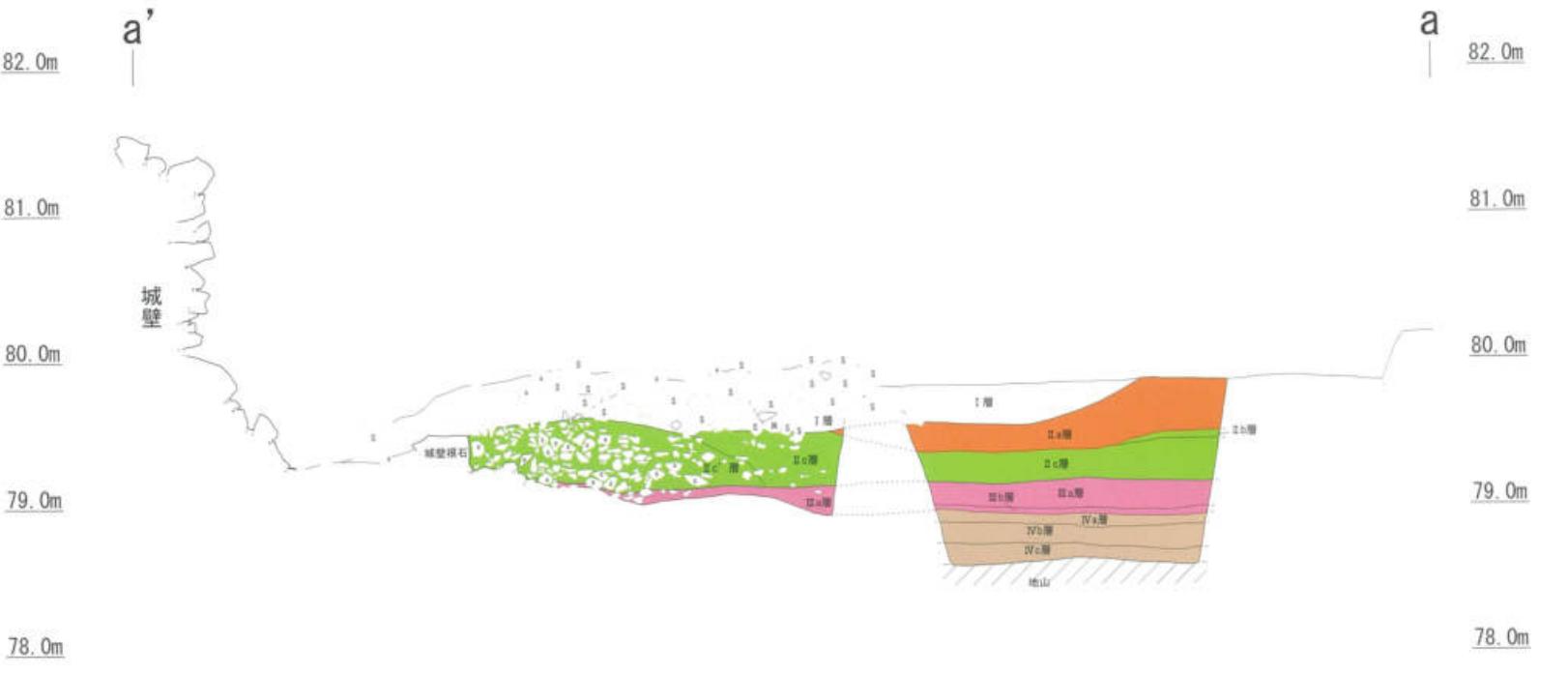
### 第3節 層序

遺跡全体を覆う堆積層は、現代の表土・旧耕作土のⅠ層で、この下にグスク時代の遺物包含層が堆積する。また、グスク時代の包含層下に堆積する層が造成層による堆積層、岩盤の露頭、遺物を全く含まない自然堆積層の地山の幾つかのパターンが認められる。P-31に設けた試掘トレーニチを基本層序とした（第5図）。

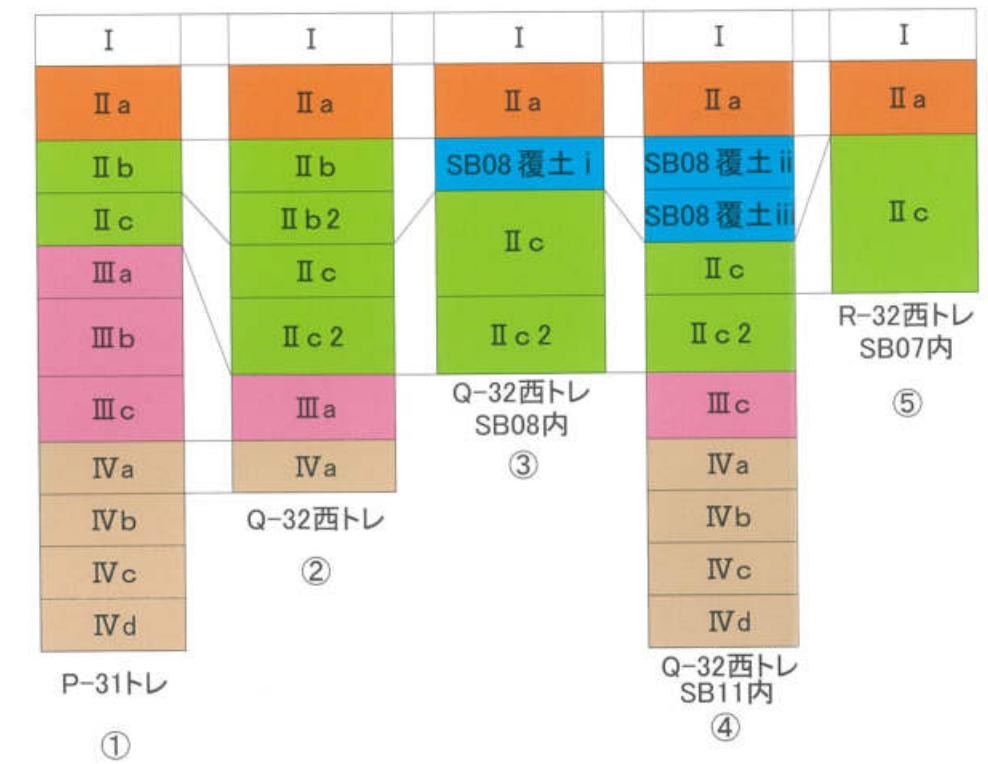
#### VIII区基本層序

- I 層：【にぶい黄褐色土層】腐食・耕作土層。調査地のほぼ全域が覆われる。地下深くに耕耘が及ぶ地域では包含層や地山を掘削し、ガラスビンや近現代の陶磁器等を包蔵する。
- II 層：【暗褐色土層・褐色土層】当該遺跡の形成期のグスク時代の遺物包含層（Ⅱa～Ⅱb）。遺跡全体を覆う。VIII区で検出される遺構のほとんどがこの時期のもので、15世紀中頃～17世紀初頭（主郭第Ⅳ期～第Ⅴ期）の遺物が得られている。
- III 層：【にぶい黄褐色土層・褐色土層】当該遺跡の形成期のグスク時代の遺物包含層（Ⅱc→Ⅲa～Ⅲc）。当該層序は外郭城壁にもぐり込み、14世紀～15世紀前半（主郭第Ⅱ期～第Ⅲ期）の遺物が得られている。
- IV 層：【灰黄褐色土層・暗褐色土層・にぶい黄褐色土層】当該遺跡の形成期初頭の層と考えられ、炭を含み粘性が強い。層中には焼土、明褐色土ブロックを含む。出土遺物は在地土器を中心とする13世紀後半～14世紀中頃の遺物が主に得られている。
- 地山層：【明赤褐色土層・黄褐色土層】古期石灰岩の岩盤が至る所で露頭。

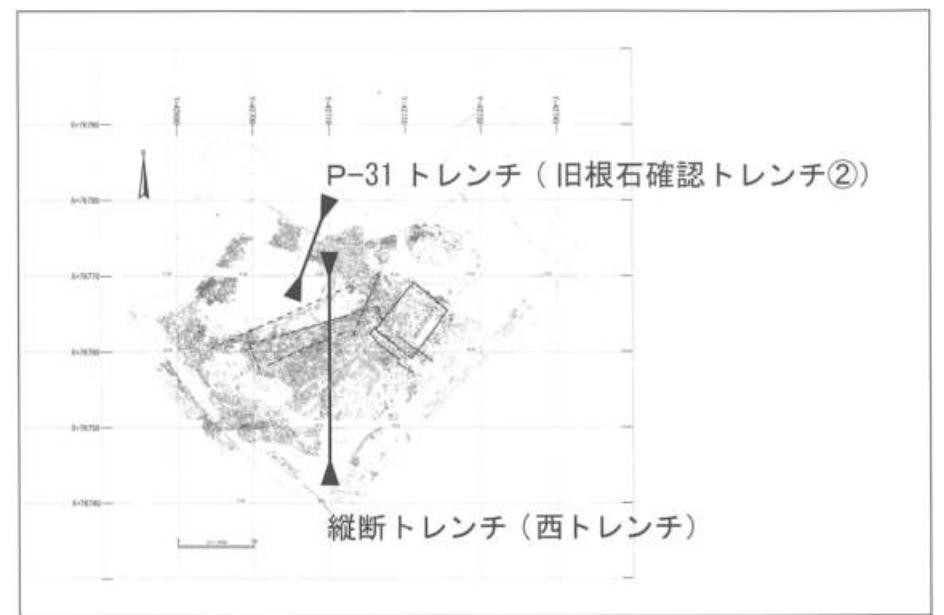
P-31 トレンチ（旧根石確認トレンチ②）



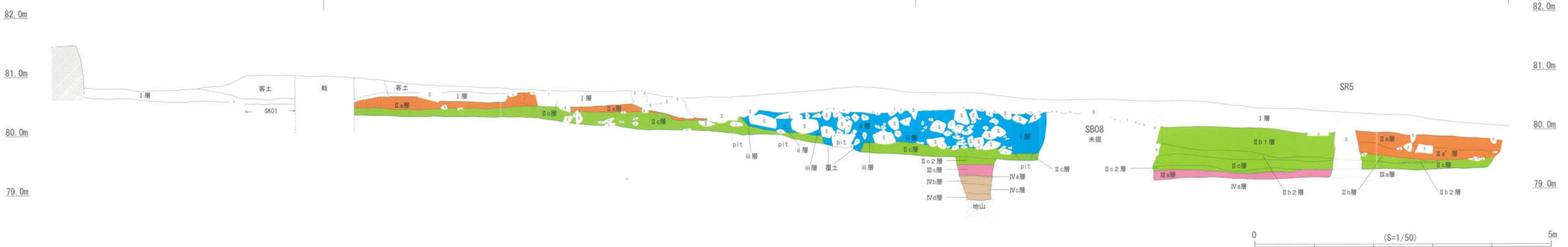
外郭VIII区層序断面模式図



基本層序位置図



縦断ライン（西トレンチ）  
R-31



第5図 VIII区層序

## 第IV章 報 告

### 第1節 VIII区（外郭4・5・6・7・9・10次調査）

VIII区は今帰仁城跡の最北端防御壁である外郭城壁で囲まれる外郭区域の中で最も北側に位置する地区である。面積は約600m<sup>2</sup>の平坦面で、Ⅲ・Ⅳ・VII区よりも標高が2～5mも低くなり、城外の今帰仁ムラとも標高はほとんどかわらない (GL=79.5～81m)。中央には調査以前から祭祀遺構である古宇利殿内がある。調査に際し古宇利殿内の地下にも石敷遺構が埋没していることが予想されたことから、一端IX区に仮移設、平成21年度事業においてV区に移設した。南側にはVII区との境界となる土留め石積みを配し、西はSR2、東・北側はSR1や城壁に囲まれる。5次調査において先行してトレンチ調査を実施し、その結果おおまかに4枚の堆積層が確認されている。断面図を第5図に図示している。

#### 1. 遺構

VIII区は調査以前は畑として利用されており、畝が確認されている。I層とした耕作面を10～30cm程度除去すると、直下より拳大の石が大量に検出されはじめた。これらはVIII区全体を覆っており、これまで外郭で検出されたような柱穴遺構が少なく、Ⅲ・Ⅳ・VII区とは大きく異なる様相を呈している。このような石で構成された遺構については主郭や大庭、御内原で確認されているような礎石建物であった可能性があるが、残念ながら礎石らしいものは1石だけで殆どが耕耘、もしくは何らかの活動によって破壊されていた。9次調査において本格的に当該遺構の検出を試み、遺構の切り合いが確認されるまでSB07として遺物の取り上げを行っている。Ⅲ層以下の遺構については、保存修理事業の性格上、石で構成された遺構面で掘削を止めたことにより不明な点が多いが、トレンチ調査でこれら遺構の下からは柱穴遺構も確認されている。

種類	遺構数
・祠	1棟（古宇利殿内）
・柱穴（SP）	94基
・土坑（SK）	4基（SK01, SK825, P-32グリッド検出の柱穴群内）
・土留め石積み（SR）	1基（SR5, SR10※旧称SB10, SR11※旧称SB11）
・石積み遺構（SR）	3基（外郭東側城壁、SR1、SR2）
・建物遺構（SB）	4基（SB08※旧称SB07, SB09）
・道跡状遺構（SF）	1基（SF1※旧称SW1）
・石敷遺構（SX）	1基（VIII区南西の石敷遺構）



第6図 VIII区遺構配置図

**[名 称]** 古宇利殿内（祠） **[位 置]** 今帰仁城跡外郭西区VII区（R-32・R-31・R-30・S-31）  
**[遺構図]** 第7～9図 **[図 版]** 図版4-1～7  
**[検出面]** 現地表（I層） **[構 成]** 石壁、石列、サンゴ礫敷  
**[規 模]** 祠：（内法）桁行約185cm×梁桁約180cm 屋根形状（コンクリート造）：（外寸）桁行248cm  
 （両側15cmの底部分含む）×梁行216cm（底部分25cm含む） 庭：長軸500cm×300cm

**[所 見]** 石積みの壁建ちの祠で屋根はコンクリート造の建築物で、コンクリート造に改修されたのは、昭和42年（1967.11.5竣工）である。祠内部の床はサンゴ礫敷で、祠の奥側には幅約20cmで石を並べ、奥行き約60cmの棚状に区画している。なお、当該建物は古写真が残されており、これを基に屋根形態（寄棟造）が復元整備され、III・IV区とV区の間に移築復元整備が実施されている（図版4-7）。

#### 【遺構内堆積層】

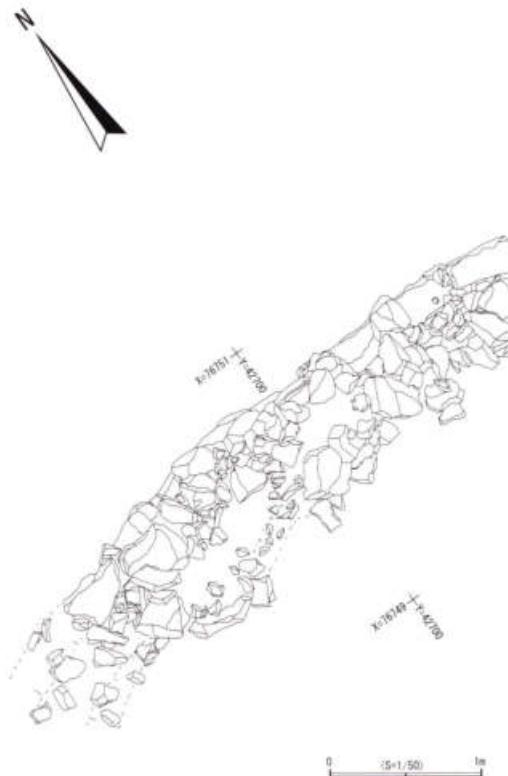
古宇利殿内を移築する際にトレンチを入れて層序確認をおこなった。

i層：【褐色土層】バラスが混入する造成層。昭和42年にコンクリート造に改修された際の造成と思われる。この造成層の上に石を並べて区画石列を構築、床にはサンゴを敷いている。この層からは表採された瓦（第10図-4・5）とともに屋根に葺かれていたと思われる瓦片が出土している。

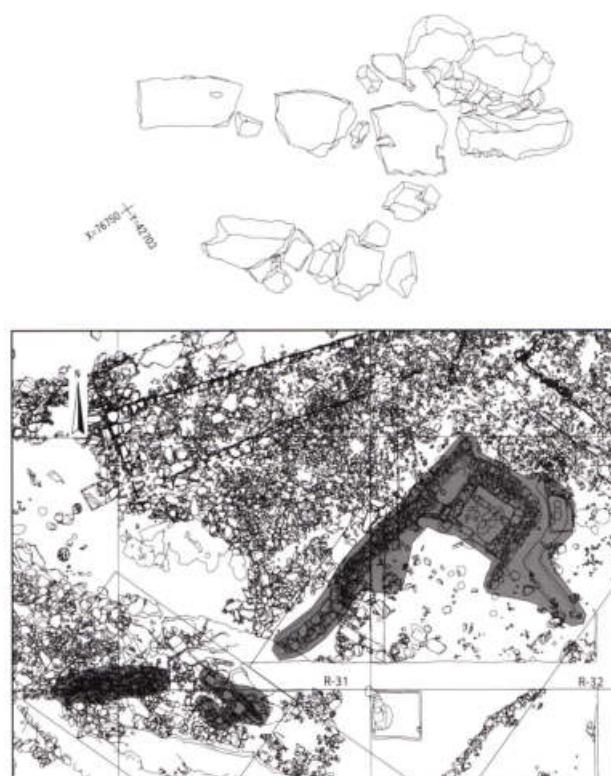
ii層：【黒褐色土層】調査時はII'a'層としていた層で、土の感触は柔らかい。5～10cm程度の堆積であった。特徴としては魚骨・アラスジケマンガイの出土が特に多く、VII区では所々でこの層が部分的に確認できているが判然としない。16世紀～17世紀前半の遺物で占められ、近世の遺物も確認されていないことから、VII区（今帰仁城跡）が廃棄される頃の層の可能性が考えられる。下層からは基本層序と同様のIIa層となる。

#### 【遺物】（第10図）

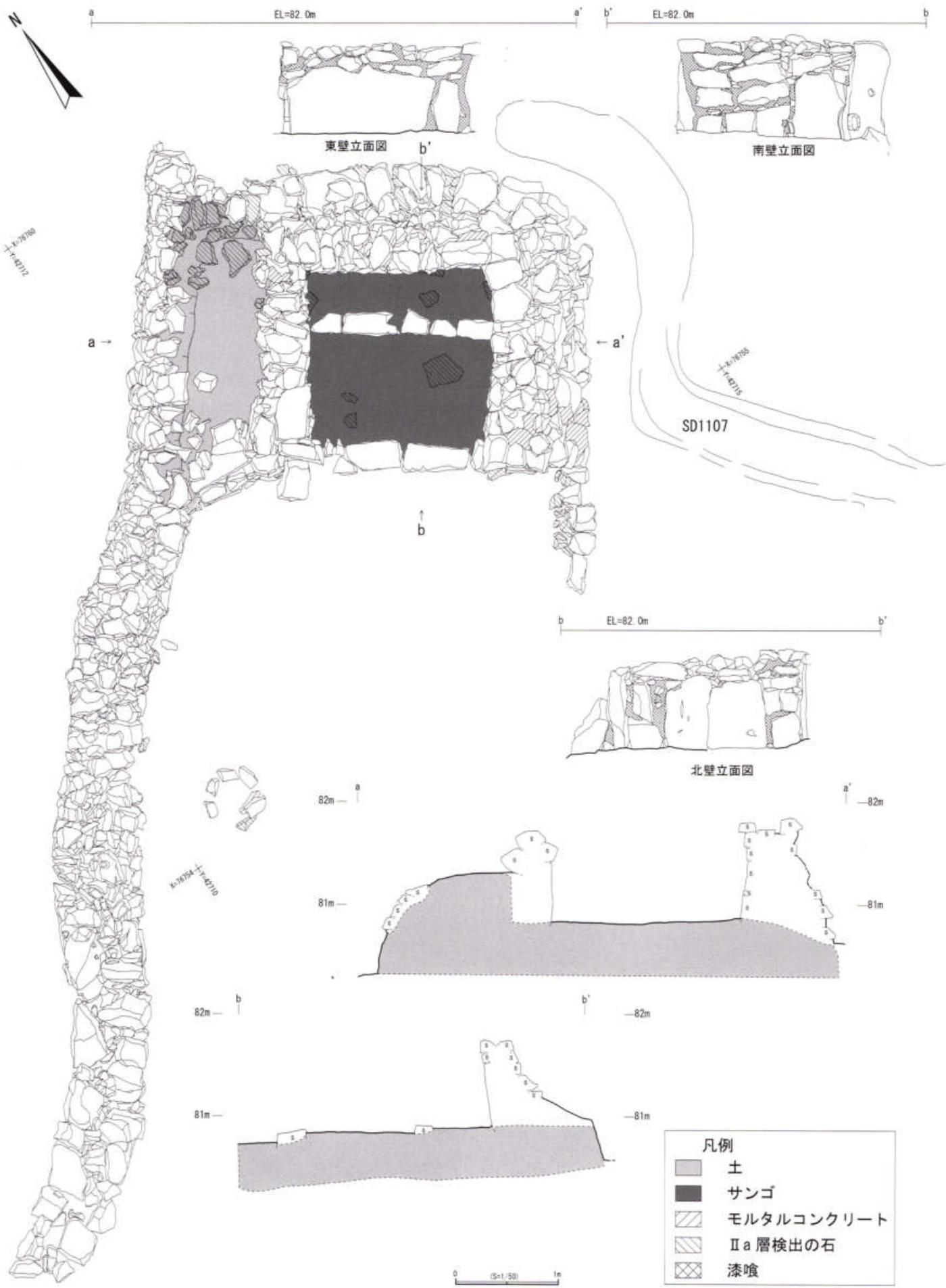
**香炉（第10図-1～3）** 祠内には靈石7石、香炉3点が確認されている。靈石と香炉の配置は、調査着手時には向かって左から最小サイズの香炉（第10図-1）にご神体の石が2点。線彫りの龍が描かれた香炉（同図-2）にご神体の石が2点。右側の最大サイズの香炉（同図-3）がご神体3石と



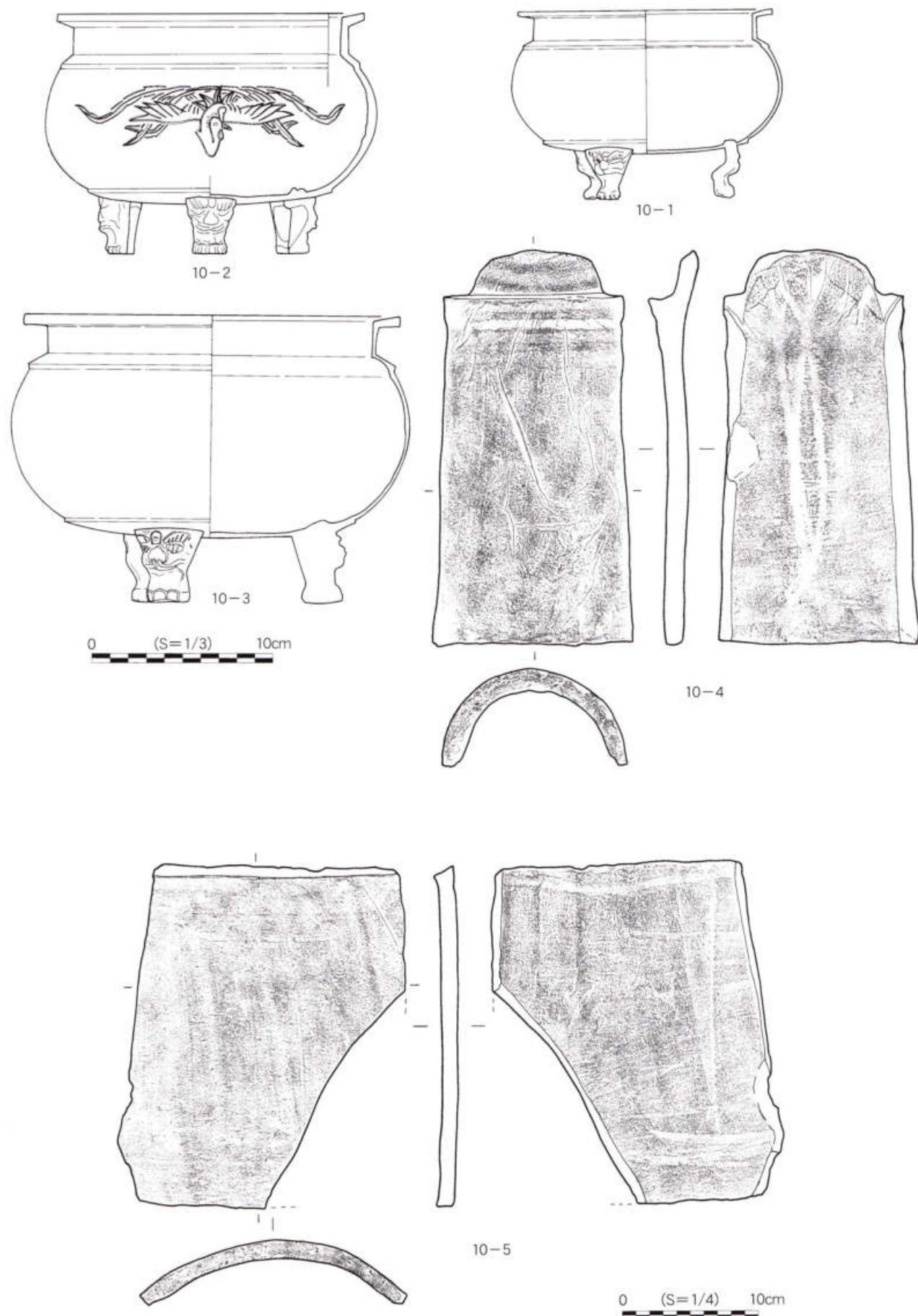
第8図 古宇利殿内遺構詳細図（1）



第7図 古宇利殿内位置図（S=1/300）



第9図 古宇利殿内遺構詳細図（2）



第10図 古宇利殿内出土遺物

なっている。ご神体として祀られる自然礫は当該地の露頭岩として一般的な古期石灰岩である。香炉3点は調査着手時には向かって左から小さい順に1・2・3の順で配置されていた。金属製の香炉で脚部の接続はネジ留めと見られることから、断定的なことは言えないが近代以降の製作と推量される。沖縄県教育委員会が実施した金工品関係資料調査報告書に幾つか香炉が紹介されており、類品として鼎形香炉（那野-宗-1、宜博-宗-1、名博-宗-1）などが挙げられる（沖縄県教育委員会2008:pp11-12）。2は胴部には頭を中央に主翼を広げ、尾羽を広げるデザインの鳳凰が手彫りで描かれている。3は口径20.8cm×器高15.9cm、2は口径17cm×器高13.3cm、1は口径14.2cm×器高10.5cmで、いずれの資料も三足の鼎形香炉で、いずれとも脚部正面には獣面のデザインが施されている。なお、3の脚部1カ所は欠損し外れている、また当該資料3点については調査後復元された古宇利殿内の祭壇内に戻した。

**瓦（第10図-4・5）** この他の出土遺物として、古宇利殿内の周囲からは瓦が表採されている。古宇利殿内に葺かれていた瓦と考えられいずれも赤瓦である。瓦の推定個体数は平瓦の広部と狭部を、丸瓦は玉縁と端部をそれぞれ数え、多い方を最小個体数としてカウントした。集計の結果回収された平瓦は116個体。丸瓦は46個体と推定される。採集された2点の瓦を図示する。第10図-4は丸瓦、同図-5は平瓦の資料である。

**[名 称]** SK01・土坑（S-32試掘調査検出の土坑）

**[位 置]** 今帰仁城跡外郭VIII区（S-32）

**[遺構図]** 第11・12図

**[図 版]** 図版4-8

**[検出面]** 現地表（I層）

**[遺構構成]** 土坑

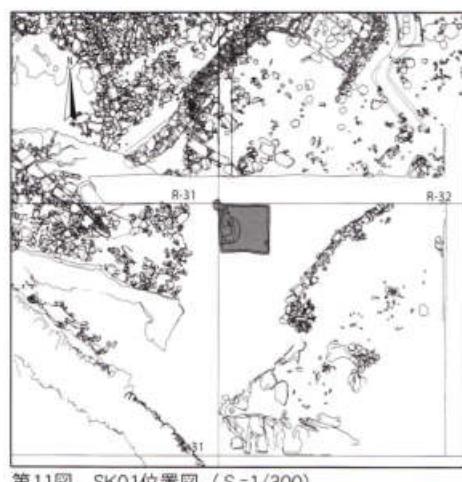
**[規 模]** 長軸約170cm、短軸約120cm、深さ約10cm

#### [所見]

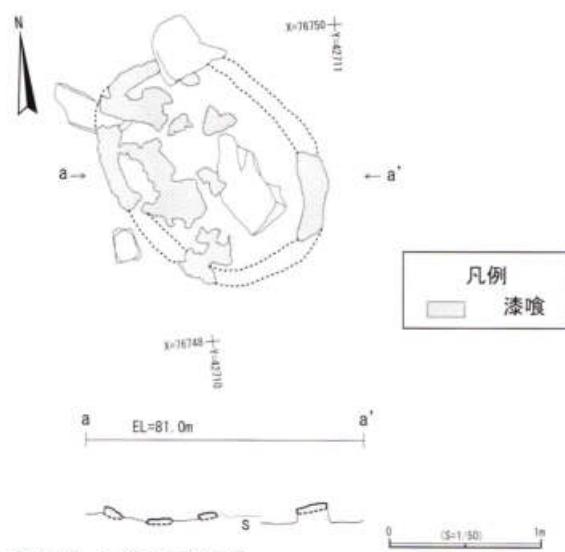
平成17年度に行った試掘調査で確認された。地表面の腐植土等を除去するとすぐに確認された土坑で、褐色の漆喰で造られていて楕円状となる形状である。全体が上層の耕作行為等の搅乱によつて壊れていますが、残存状況から推定すると、楕円の縁辺部から若干窪む程度で土坑の深さは浅い。総じて皿のような形状をしている。

#### [遺構内堆積層]

i層：【褐色土層】10YR褐色土や4/4黄褐色土が多く混入する層。黄褐色土が多く混ざる。粘性は比較的強く堅く締まっている。VIII区全体で被覆するI層とほとんどかわらない。遺構から遺物が確認されなかったことから年代は不明であるが、近世以前まで遡るような古い要素は見られない。



第11図 SK01位置図（S=1/300）



第12図 SK01遺構詳細図

**[名 称]** SR1（石壘及び石階段状遺構）  
**[位 置]** 今帰仁城跡外郭西区Ⅷ区（P-31, P-32, Q-32）  
**[遺構図]** 第13～15図  
**[図 版]** 図版5  
**[検出面]** II層  
**[遺構構成]** 石壘  
**[規 模]** 長軸約13m 短軸約2.5m 高さ約0.5m  
階段状遺構 長軸約7m 短軸約2.5m 高さ約1.3m

#### 【所見】

SR1は外郭城壁D'-E内壁に隣接する石壘及び、城壁に繋がれた階段状遺構である。石壘は10cm～100cm大の大小様々な石が東西にわたり雜に積まれ、外郭城壁と平行していた。この遺構がどのような機能か判然としなかったため、先行トレンチを設けた結果（第26集p41～42）、石壘は城壁の崩落石の上層に積まれたものであった。さらに出土遺物は現代遺物を含んでいたことから、近現代の耕作行為や、根石調査の際に退かされ積み上げられたものと考えられる。これだけでは報告するに値しないが、土壘からは出土遺物が大量に得られたこと、隣接する階段状遺構に繋がるように存在していたことから調査時より全体をSR1として理解し報告するに至った。

階段状遺構は30～50cm大の石を積み上げ、上面では平坦な面を整列させ並べている。北側は外郭城壁に取り付けられているが、取り付けられる側の城壁は、階段を構築する際に破壊され、階段状遺構が造られていることがわかっている（写真図版5）。南東側は段差を2ヶ所設け約50cm下へ往来できるようにしている。

#### 【遺構内堆積層】

i層：【暗褐色土層・黒褐色土層・黄褐色土層】焼土を少量含む。30～50cm大の石を多く含み、締まりが悪くサラサラとした混礫土層。現代の遺物が一部確認できるが、出土遺物の大半はグスク時代のもので多く得られている。

#### 【遺物】（第16～18図）

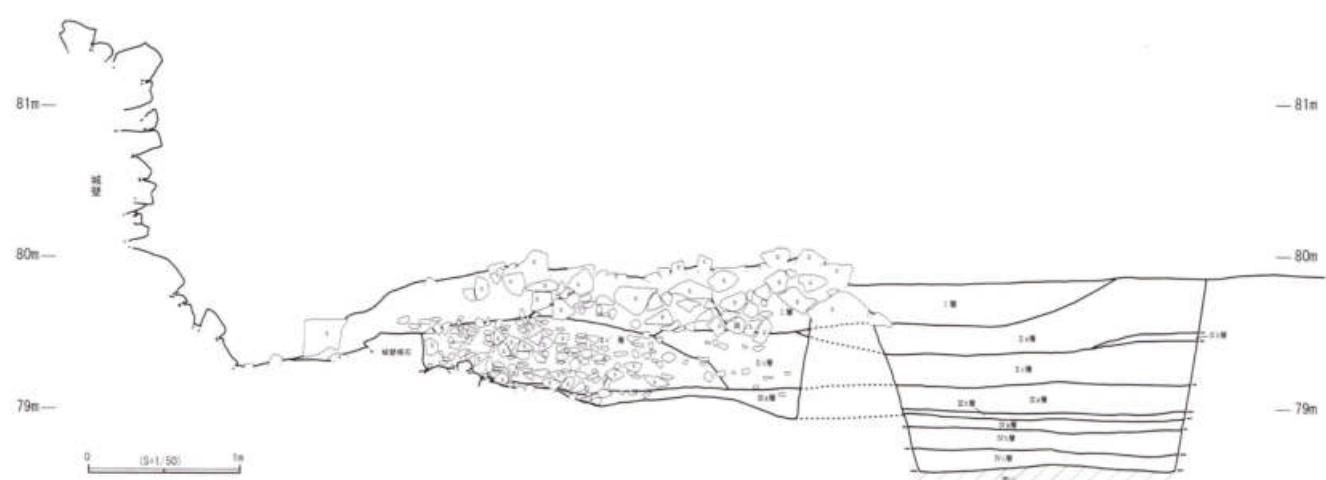
SR1の石壘から採集された遺物は比較的大片で出土し、回収量も豊富であった。これらは崩落石もしくは、近現代に耕作や調査などの理由で崩落石上に積み上げられた石壘と考えられ、石積下部にはモルタルなど近現代の遺物が含まれていた。しかし、城壁に接合する階段状の遺構は比較的古い石積と判断され撤去せずそのまま現状保存しオリジナルのまま整備地域に保存されている。

単純に崩落石の石壘と考えられる石積みだが、近代以降の遺物はほとんど含まれず、含まれる遺物は今帰仁城跡が城として現役だった時代の遺物で構成されていることから、本来はⅧ区に包蔵されていたものが、畑などの耕作によって地表面に露出し、投棄されたものと考えられる。このため遺構の性格や時代を推察する遺物群というよりも、Ⅷ区の空間内において、なんらかの理由で利用された遺物群と類推される。

1. カムィヤキ 第16図-1はカムィヤキの底部資料でいわゆるB群に該当する資料と考えられる。
2. 沖縄産瓦質土器 2～3は沖縄産の瓦質土器で前者は擂鉢、後者は不明だが鉢などの脚部と推定される。
3. 土器 4は土器で、いわゆる宮古の土器と考えられる壺の口縁部。
4. 青磁 5～11は青磁で、5は龍泉窯系青磁碗I類。6はIV類の碗底部。7は蓮弁文を施す碗でV類と推定される。8は直口皿、9は腰折皿でいずれもV類と考えられる。10は外反皿で型式は判然としないがV類と推定される。11は蓋置と推定され小品で体部が削り抜かれ窓枠とする。類品として東京国立博物館蔵の青磁夜学蓋置をあげることができる（東京国立博物館1990, p134, №524）。
5. 白磁 12～16は白磁で、12～14はD群に該当する。12は外反碗、13は浅い碗で見込みは露胎とする。14はD2群の灯明皿。15・16はE群の皿である。



第13図 SR1位置図 (S=1/300)



第14図 SR1遺構詳細図 (1)



第15図 SR1遺構詳細図（2）

**6. 青花** 第16図-17～32は中国産の青花である。17～28は青花碗で、17は外反する資料でⅡ類に分類され花唐草文が外面全体に描かれている。18～24はⅢ類（蓮子碗）で、18は三つ葉状の文様を豹文の様に連続的配す、19～21は梵字文、22・23は底部資料で、前者は腰部に蕉葉文、後者は豹文となる。24は口縁と底部の破片資料で同一個体と推測され図上復元している。口縁帶は波涛文、見込みには渦状の文様を配する。25・26はⅣ類、口縁部を外側に屈曲させるタイプ、前者は花文、後者は馬士文を配する。27はV類口縁帶は波涛文で、腰部にはアラベスク文を配する。28は口縁部を大きく外反し、同一個体と推定された底部資料とともに図上復元した。若干肥厚する資料でⅦ類と推定、外面には唐草文が描かれる。29はI類皿口縁は外反させる口径12.6cmの小品。外面は唐草文、見込みは十字花文を描く。30は杯Ⅲ類、外反する口縁に草木の枝が描かれるが小品のため全体のモチーフは不明。31は粗製の小杯、同図32は小壺の資料である。

**7. 肥前陶器** 第17図-33～38は肥前陶磁で、34は砂目の陶器皿で年代的には16世紀後半頃の生産年代と評価される。33は染付山水文の碗で17世紀の第3四半期には収まると推定される。35は頸部に網目文が描き、胴部に花文を配する瓶で年代的な位置づけは不詳。36～38は擂鉢で、年代や産地は不詳である。

**8. 褐釉陶器** 39～41は中国産の褐釉陶器で、39は壺、40は鉢、41は今帰仁城跡の出土品としては最も出土例の多いI類の大型壺の底部資料である。

**9. タイ陶磁** 42～44は褐釉陶器の壺で42・43の比較的小さなタイプの壺と、44の大型壺の2種確認されている。いずれも胎土と器形からメナムノイ窯系と分類されるタイプと考えられる。45は鉄絵の合子蓋で、宝珠状の摘みが蓋頂部に付される。46は黒褐釉陶器の小壺。

**10. ベトナム陶磁** 同図-47は小片のため判断がつかないが、仮にベトナム産の白磁小碗底部資料と推定した。48はベトナム産染付磁器で、頸部窓枠内に文様を施すがモチーフは不詳。

**11. 沖縄産陶器** 17図-49～51、第18図-52～53は沖縄産陶器で、49は直口の碗、50は壺等の底部、51は四ないしは三耳壺である。いずれも無釉陶器で湧田ないしは喜名などの窯跡資料と胎土、器形が類似しており、沖縄産陶器でも初期の生産品と考えられる。52・53も同様に初期沖縄産陶器と思われる資料で、52は瓶、53は鉢。53は胴部下半にサンゴ目、底部外面に「\*」の窯印が施される。

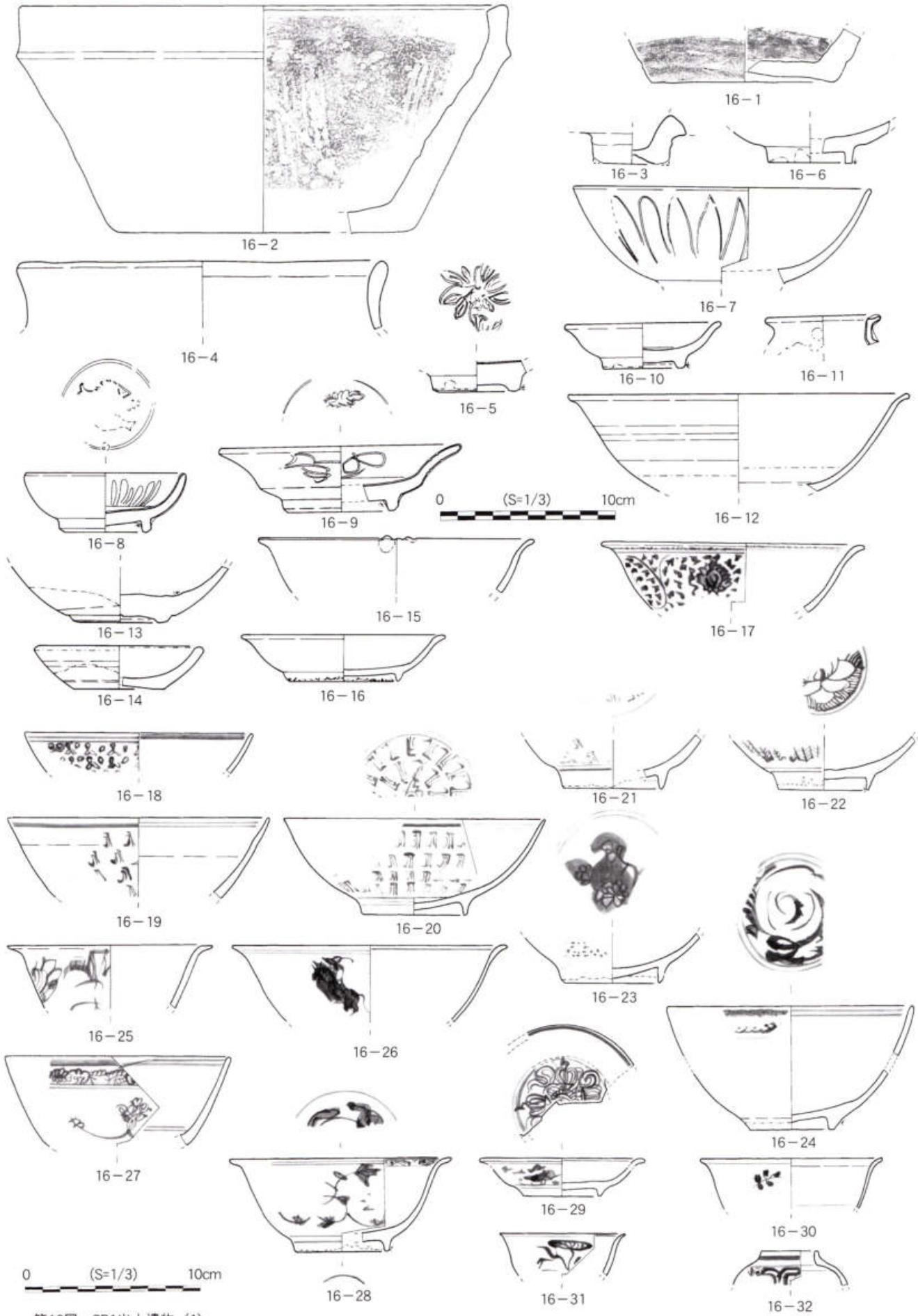
**12. 金属製品** 54は鉄鍋。55は金属製品で、推定される長軸が5.3cmの小型の簪である。

**13. 玉類** 56は石製の勾玉で、SR 1の下部のⅡc'層より回収されている。

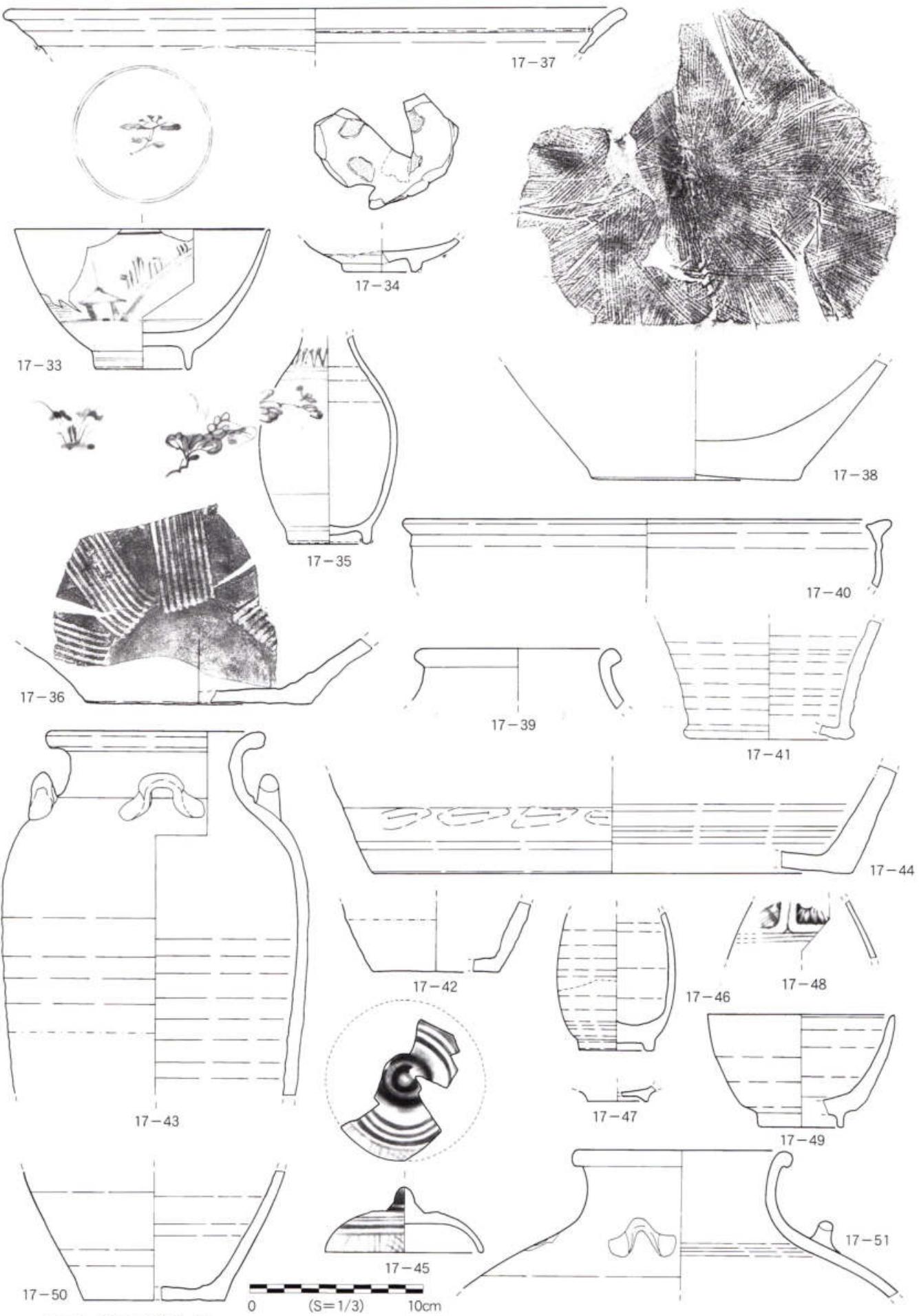
**14. 煙管** 57・58は煙管の雁首で、いずれも石製の加工品である。円筒状を呈す資料であり、火皿部分が煤けていることから使用した形跡が確認できる。

**15. 石器** 59～63は石製品で、59は角棒形の提砥と推定される砥石である。頭部に表裏両面に貫通した孔が1つ穿たれている。60は胴部が一部欠損するが全形を窺うことのできる両刃の石斧。61は砥石として利用したと考えられる平坦面があるが、縁辺部に敲打痕を残す資料。62は砥石で、砥面に何本かの溝がみられる。63は石灰岩製の碗底部に類する破片で、高台部分が小さく残るため器形の石製品と推定し図上復元している。破片全形は図版25を参照されたい。

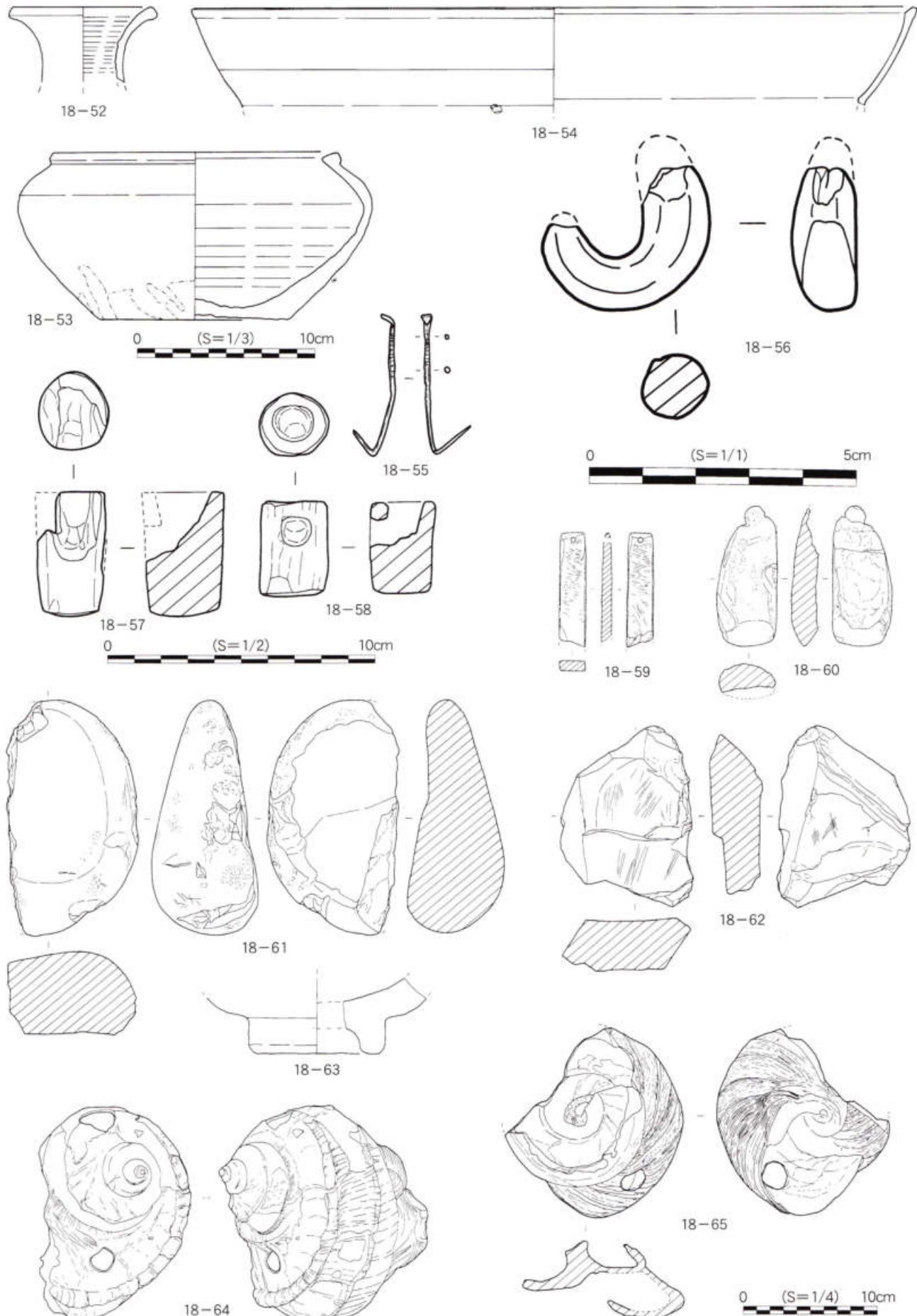
**16. 貝製品** 64・65はヤコウガイの貝殻で、体部に殻口近くの体層部に径1.5～2.0cmの穴が穿たれており、いわゆるヤコウガイ養殖の殻加工の痕跡と推定される。



第16図 SR1出土遺物 (1)



第17図 SR1出土遺物 (2)



第18図 SR1出土遺物 (3)

[名称] SB09、SF 1 (建物跡および道跡) [位置] 今帰仁城跡外郭西区VIII区 (Q-32,Q-33,R-32,R-33)

[遺構図] 第19・20・21図

[図版] 図版6

[検出面] IIa層

[遺構構成] 建物跡 (SB09)、道跡 (SF 1)

[規模] SF 1 : 長軸約800cm 短軸約250cm / SB09 : 長軸約800cm 短軸約500cm 深さ約30cm

[所見] VIII区の東側に位置するQ・R-32・33付近のI層を除去すると、VIII区全体に被覆するIIa層が確認された。このIIa層を少しずつ除去していくと、およそ50cm大の礫が並ぶ石列が確認された。VIII区の西側で確認されているような基壇を思わせる遺構とは異なり、造りはかなり雑である。しかし、調査時に東側と西側の石列面と思われた箇所の遺構外で礫がほぼ皆無であったこと、その内側で焼けたような堆積層 (i層) が確認されたことが、遺構の境界を明確にしている。さらにSB09の南東側において道跡 (SF 1) が確認された。前者と同様に50cm大の礫を雑に並べ、ほとんど壊されていて詳細は不明であるが、一部残存する箇所において礫の平坦な面を意図的に並べている状況であったことから道跡とした。SF 1はSB09西側石列と平行していること、さらにそれを切るように確認されていることから前者と関連性のある遺構と思われる。

#### [遺構内堆積層]

i層 : 2.5YR暗赤褐色3/6の焼土層。1~5cmの堆積で、主に遺構内の中央部分に分布する。そのことから炉的な遺構があった可能性も考えられるが詳細は不明である。耕作によって破壊されたことも考えられる。1~3cm程度の玉砂利が混入する。

ii層 : 7.5YR明褐色5/6と10YR暗褐色3/3が混ざる。なかでも褐色土の混入が多く、明褐色のブロックと赤褐色のブロックが少量混入する。ii層は全体的にかたく締まっていて、下層に敷き詰められた20~30cm大の礫の中に造成されている層である。

[遺物] 第22図-1~16に主な出土遺物を図化した。本報告のSB08とSB09+SF 1を大きな石敷遺構SB07として調査を行った。このため、SB08やSB09として調査されたのは10次調査を主とする調査終盤で回収されたもののみである。以下に紹介する資料以上に本来的には遺構に伴う資料もあると考えられるが一部は包含層出土資料として紹介され、遺構表記にSB07と記されている。このため本掲載資料は、限定的な回収資料であることを付記しておく。

第22図-1~16はSB09に設けたトレンチの回収遺物である。

1. 青磁 第22図-1は青磁外反碗でV類。2は青磁細蓮弁文碗。3は青磁V類碗底部資料。4はVI類の青磁皿底部資料。5は見込みを蛇目釉剥ぎする粗製の青磁皿。

2. 青花 6はII類の青花碗で外反口縁の体部に渦巻き状の文様が確認できる小片、7は漳州窯系青花杯。

3. タイ陶磁 8は褐釉陶器大型壺の口縁部でシーサッチャナライ窯系。

4. 錢貨 9は熙寧元寶(北宋・1068年)、10は紹興通寶(南宋・1131年・折二錢)、11は紹熙元寶(南宋・1190年)、12は口大通口で銭銘が判読し難いものの至大通寶(元・1310年)と推定される。13は口元重寶と判読できるが欠損しており、特徴などから乾元重寶と推定される。

5. 玉類 主郭分類b2とcの2つのサイズが出土している。14は主郭分類b2種(黄みの白)。15(濃い緑みの青)・16(明るい灰)は巻き上げによる資料でc種。

第22図-17~22はSF 1より検出された遺物である。

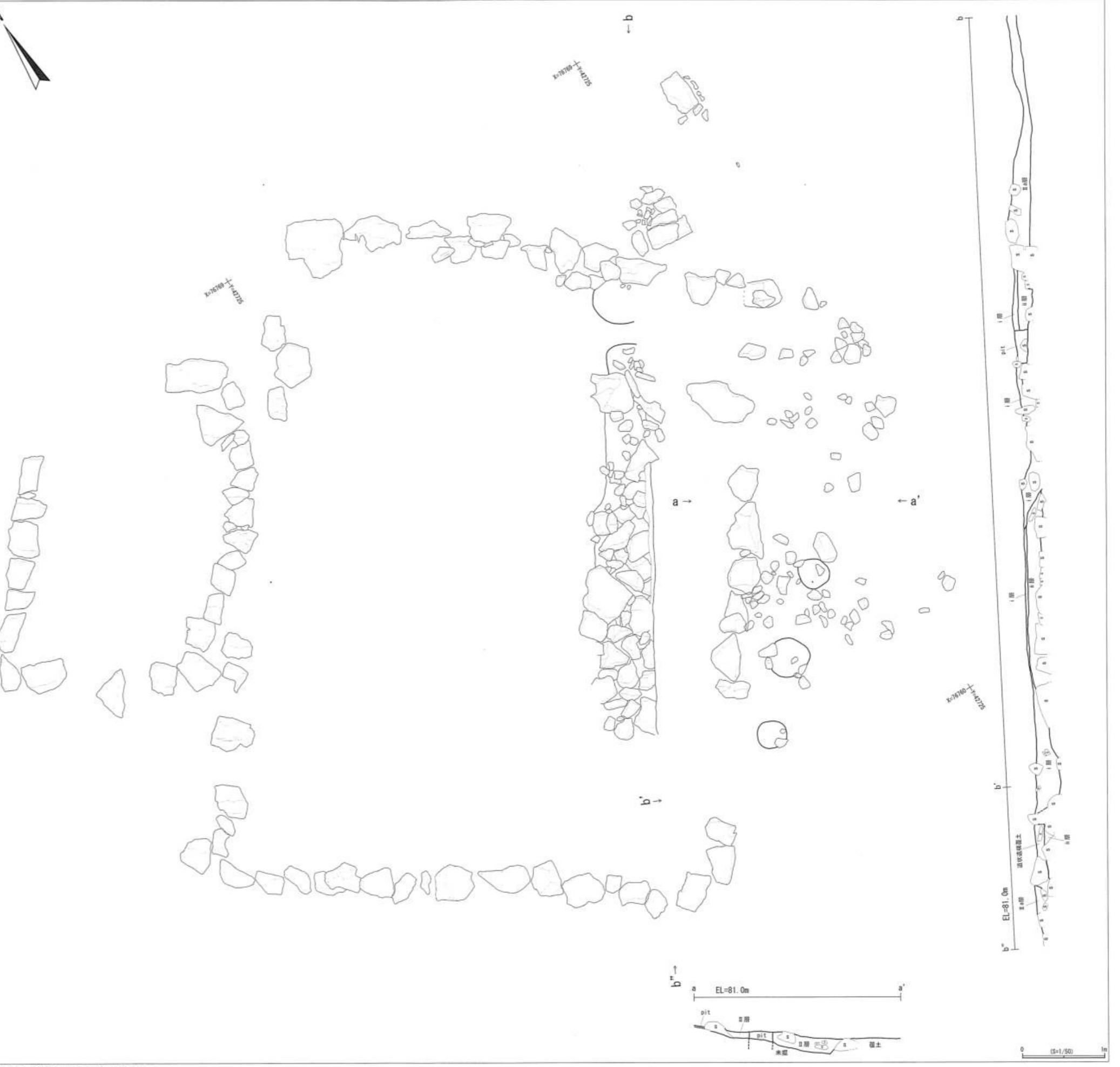
6. 沖縄産瓦質土器 17は鉢の底部資料で底径16.4cmを測る。

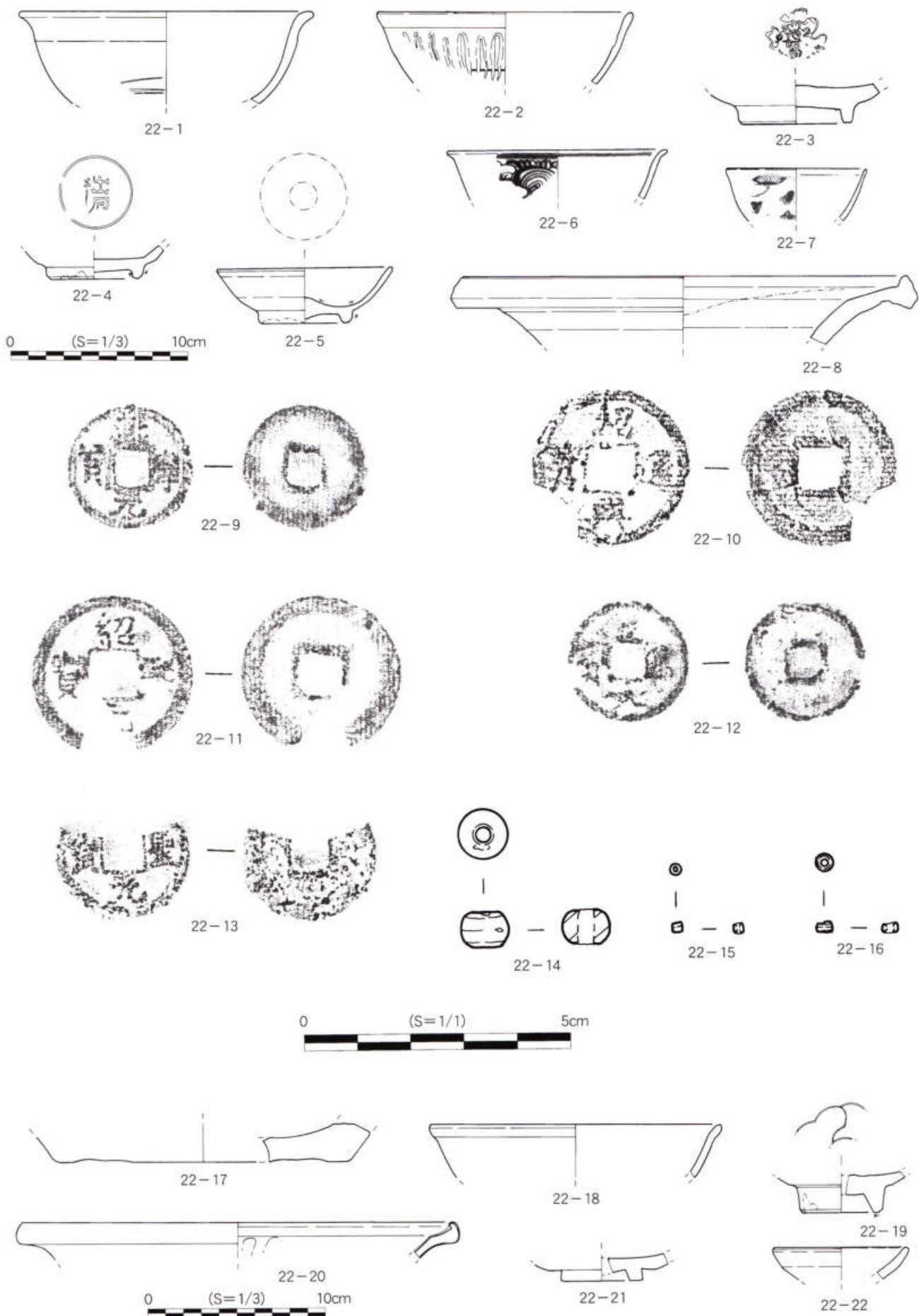
7. 青磁 18青磁碗V類の口縁部、19は青磁粗製碗(VII類)。20は頸縁の盤。

8. 白磁 21はD群の皿底部。22はD'群の皿口縁資料。



第20図 SB09・SF1遺構詳細図





第22図 SB09・SF1出土遺物

[名 称] SK823・土坑 (P-32)

[遺構図] 第23・24図

[検出面] IIc層

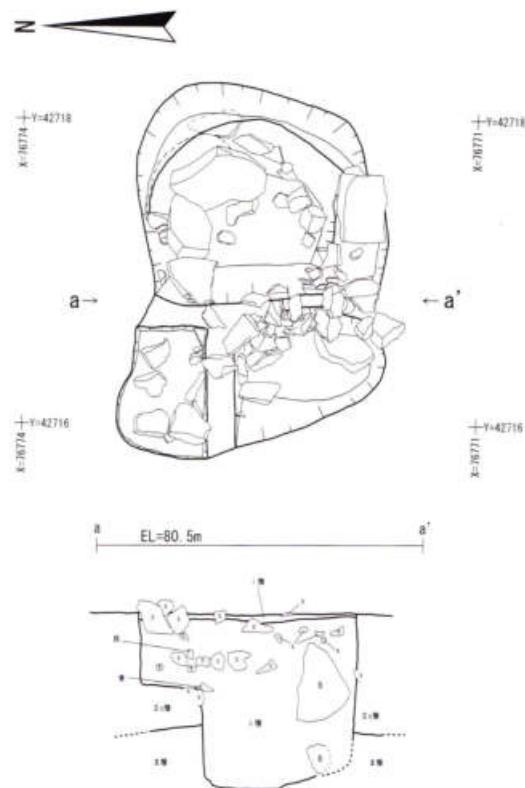
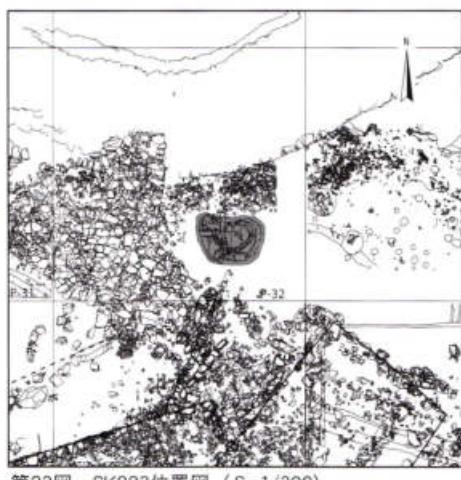
[規 模] 長軸約250cm 短軸約170cm 深さ約100cm

[所 見] P-32グリッドにおいてIIa層を除去し、IIc層が検出された段階で検出した土坑で、SK823単独で構成されるものと考えられる。平面形は楕円形となり、規模は長軸が約250cm、短軸が約170cmとなり、深さは検出面より110cm前後を測る。土坑底面は平坦にならず、凹凸が残る。側壁は南側のみにおいて垂直に立ち上がり、南側以外では、緩やかな傾斜で立ち上がる。土坑底面より、焼土ブロックが検出しており、土坑の性格を示すものと考えられるが、土坑の性格は判然としない。

[遺構内堆積層] 土坑内覆土はi～ii層に分層された。

i層：10YR暗褐3/3。しまりが非常に悪く、サラサラした手触りとなる。炭や焼土を多く含み、魚・骨・貝などが多く検出された。遺構内で検出された覆土ではR-32グリッドで検出された柱穴遺構やIIa'層に酷似する。

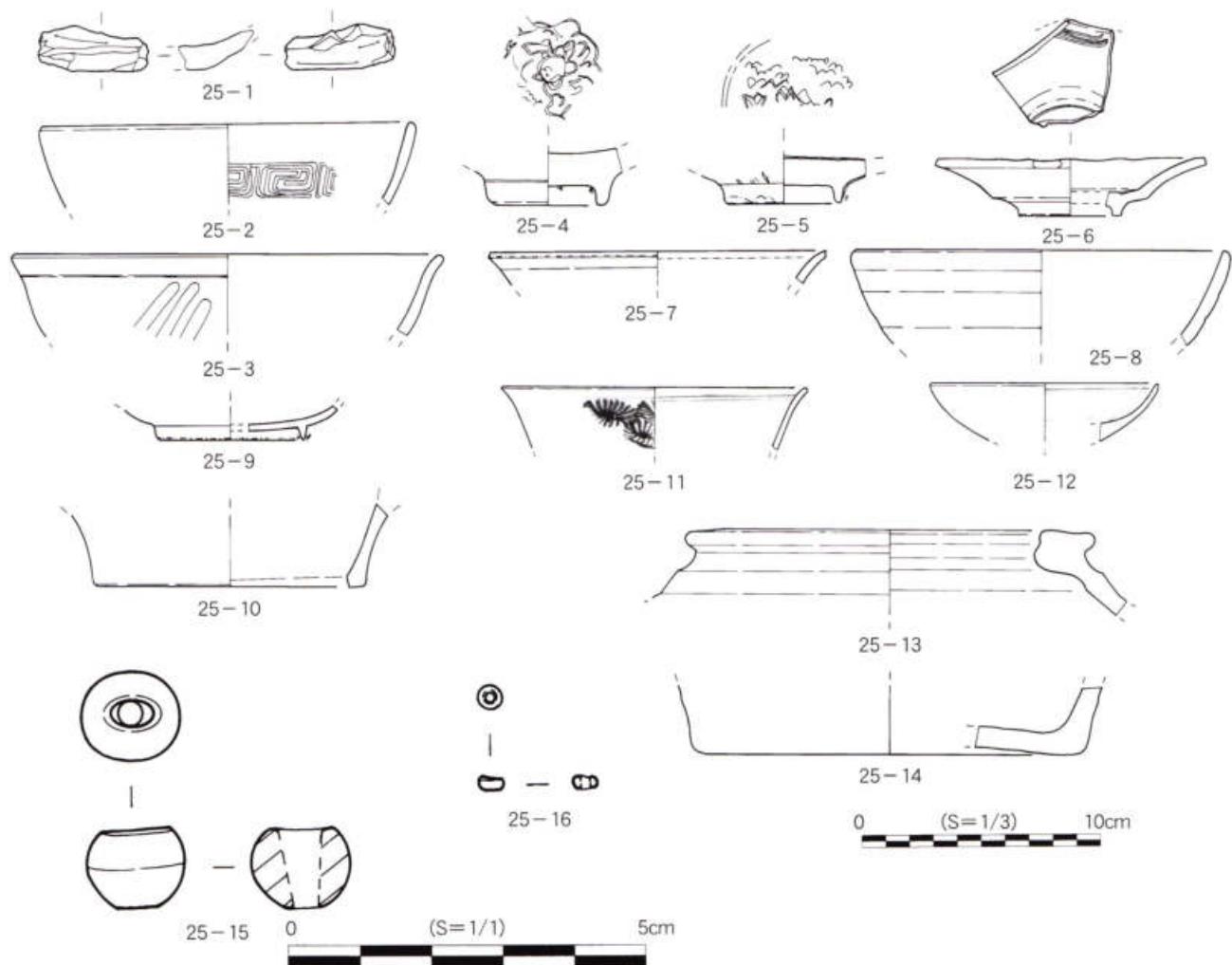
ii層：10YR暗褐3/4。しまりが悪くサラサラしている。上層よりも若干堅くしまるような手触りとなる。炭・焼土を含む。貝が多量に出土している。礫を多く含む。層は厚く最も深いところでは110cmを測る。



第24図 SK823遺構詳細図

[遺物] 第25図にSK823の覆土出土の主な遺物を図化した。

1. 土器 1はグスク土器で底部資料である。
2. 青磁 2～6は青磁である。2は内面にスタンプの雷文を施す。3は外反碗の口縁部で、外面に指で施文？した文様が斜位に確認できる。4は見込みに印花文を施す底部資料で、外底蛇の目釉剥ぎでV類に分類される。5は見込みに印花文を押印するIV類資料。6はVII類腰折皿で口縁を刻み稜花とする。
3. 白磁 7～9は白磁である。7は口禿の碗もしくは皿と考えられる資料でA群。8はC2群いわゆるピロースクII類。9はE群の皿。
4. 青花 10は青花の酒会壺の蓋と目される資料だが、絵付けされた部分が無いため暫定的に青花に分類しておく。11は青花碗II類と推定した資料だが小片のため、こちらも暫定的な評価としておきたい。12は皿II類と考えられる口縁部資料である。
5. 褐釉陶器 13は方形口縁の壺I類に分類される。
6. タイ陶磁 14はタイ褐釉陶器の底部で胎土等からメナムノイ窯系に分類されると考えられる。
7. 玉類 ガラス製の玉で15は主郭分類b2種（青みの暗い灰）、16はc種（緑みの灰）である。



第25図 SK823出土遺物

**[名 称]** SB08 (旧SB07の一部・建物跡)  
**[位 置]** 今帰仁城跡外郭西区VII区(Q-30~32, R-31~33)  
**[遺構図]** 第26・27図    **[図版]** 図版8・9  
**[検出面]** II層    **[遺構構成]** 石列 (SB08)

**[規 模]** 基壇残存箇所 長軸約17.5m (北側)  
短軸約4 m (西側)・1.8m (東側) 高さ約1 m

**[所見]** VII区中央部において確認された大規模な礫敷き遺構。これまで外郭(III・IV・VII区)で確認された遺構は掘立柱建物であったが、主郭・御内原・大庭の主要三郭以外で初めて確認された石で構築された建物跡の遺構である。



第26図 SB08位置図 (S=1/300)

I層を除去後、VII区全体に被覆するII層を少しづつ除去すると、5~100cm大の礫を敷き詰めた礫群を区画するように約50cm大の礫が並ぶように東西北で石列が確認された。調査時は他の箇所でも石列(SR10・SR11)が確認されたこと、規模が大きかったこと等、遺構を確定するのに時間を要したことから、VII区全体から検出される礫敷き遺構(旧SB07)として大量の遺物を取り上げた。最も残りの良い北側石列は約17.5mと建物遺構としては今帰仁城跡の中で最大である。ただし西側では欠損、東側ではSB09の構築作業により欠損、さらに南側では石列は確認できなかったことから、西側・南側においてトレンチを入れて延伸状況を確認した。両トレンチではそれぞれ明確な石列は確認できなかったが、建物内外を区画できるような層の違いが両者のトレンチ断面で確認することができた。このことからSB08の遺構規模は、長軸が北側石列の約17.5m、短軸は南側トレンチを基に少なくとも約8 mと想定することができるが、本来はもっと延伸していたものと考えられる。

#### [遺構内堆積層]

i層：【褐色土層・暗褐色土層】基壇内に大小様々な礫で占められる礫層。部分的な差違はあるが、覆土は褐色と暗褐色土層に分けられる。

**[遺物]** 第28図に主な出土遺物を図化した。1~10は10次調査で実施したSB10の面石検出時のトレンチの調査によって出土した遺物である。11~18はBトレンチ、19はCトレンチより出土した資料である。

#### 【SR10前面のトレンチ】

1. 青磁 1は青磁碗VII類の碗で口縁部外面に波状文が施される。2・3は盤で2は内面にヘラで蓮弁を描き、3は見込みにスタンプ、外底蛇の目釉剥ぎとなる底部資料。1は16世紀後半と推定される当該調査区の中では比較的新しい資料で、SB08の年代を窺う上では貴重な資料である。しかしこれ以外の遺物はやや年代的には古い遺物が含まれるため、取扱いについては検討をする。

2. 白磁 4はC3群(無文外反・閩清窯系)の底部資料で角高台の見込みに印花文が施される。

3. 青花 5はVII類の碗で外面に花鳥図、6はI類の皿で見込みに玉取獅子文を描く。7・8は同一個体でII類に分類される。報告書作成中に接合されたことから、分けて掲載されていることをご了解願いたい。粗製の碗で同一個体の外反口縁碗で呉須の発色が不良でやや雑なつくりとなるが明代初期の青花碗と推量される。

4. ベトナム陶磁 9はベトナム産の白磁で白濁した釉の内面に型押しによる花文と推定される文様が描かれる。

5. 玉類 10はガラス製の小玉で、主郭分類c種に該当するものである。



第27図 SB08遺構詳細図

### 【Bトレーニチ】

1. 土器 11はIV a層出土資料で、基壇の下層より回収された遺物である。SB08を構築する造成層より下部の層と解される。

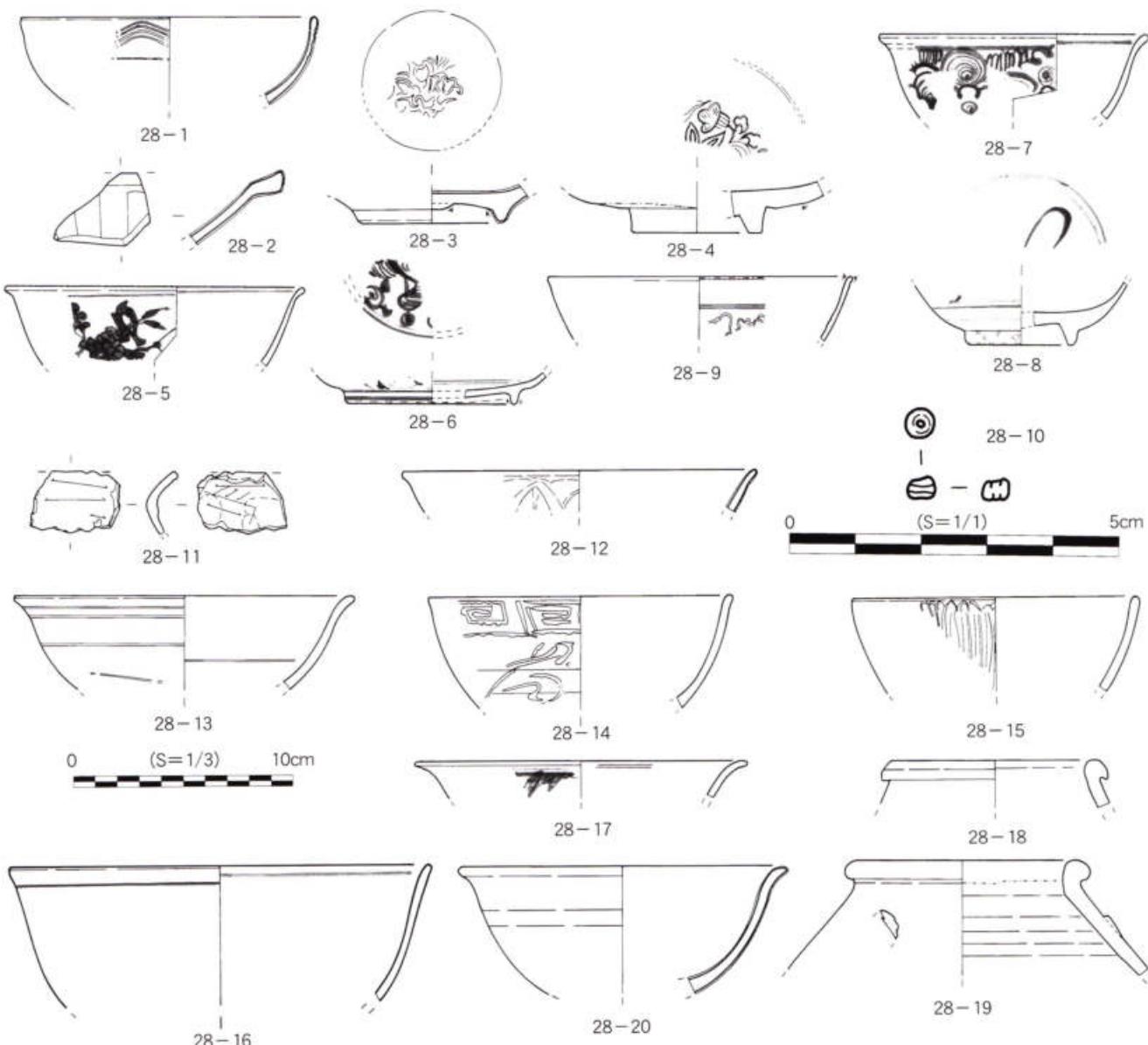
2. 青磁 12は鎧蓮弁文碗で、龍泉窯系II類に分類される。出土したのはIIc層で、IIc層はSB08の下層の包含層である。13は青磁IV類の外反碗である。14は外面に雷文帯をヘラ彫りするV類資料。15はVI類で細蓮弁文を体部に描く。

3. 青花 16は圓線以外の文様が明らかでないが、青花碗VI類の口縁部と思われる。17は粗製の青花碗口縁資料の小片である。

4. 褐釉陶器 18は3類の壺で、口縁部に向かって内傾し肥厚する（分類詳細p118記載）。口縁部上面には釉がかからない。

### 【Cトレーニチ】

1. 褐釉陶器 19は3類の壺で、口縁部に向かって内傾し肥厚する（分類詳細p118記載）特徴を有する。口縁部上面には釉がかからない。



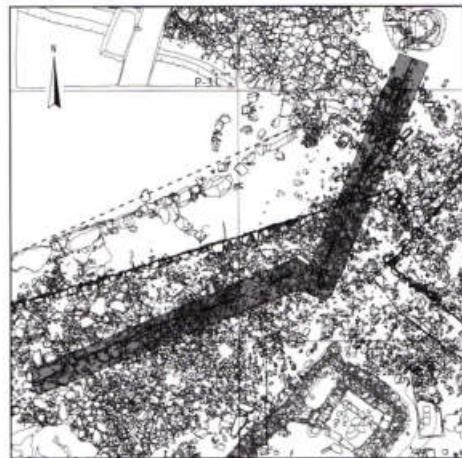
第28図 SB08出土遺物 B・Cトレーニチ・SR10出土遺物

**[名 称]** SR11 (SB08遺構内検出の石列・土留め跡)  
**[位 置]** 今帰仁城跡外郭西区VIII区 (Q-31・32, R-31)  
**[遺構図]** 第29・30・31図    **[図版]** 図版10  
**[検出面]** II層                  **[遺構構成]** 石列 (SR11)  
**[規模]** 約11m    高さ約0.8m

**[所見]** VIII区最大の遺構であるSB08内で確認された土留め石積。東西約11mにわたって1～3石、高いところでは約80cmの高さで積まれており、東側では石列が途切れていた。すぐ隣には同様の機能を持つ遺構と思われるSR10が検出されている。30～50cm大の石を丁寧に並べていたため検出当初はSB08を構築する以前の建物遺構と判断していたが、VIII区を縦断するトレンチ（西トレンチ）調査の結果、石列が一辺で終了していること、SB08との覆土がほぼ変わらないこと、さらに出土遺物の違いがほとんど無いこと等の理由から、当該遺構の構築年代はSB08と同じであると判断できた。外郭地形が北側に向けて傾斜していること、VIII区においてもトレンチ調査において同様に北側に向けて地形傾斜が確認されたことから、当該遺構はSB08遺構を構築する際に造られた土留め石積と思われる。

#### [遺構内堆積層]

ii層：【褐色土層・暗褐色土層】基壇内に大小様々な礫で占められる礫層。部分的な差違はあるが、覆土は褐色と暗褐色土層に分けられる。



第29図 SR10・SR11位置図 (S=1/300)

**[名 称]** SR10 (SB08遺構内及び遺構外検出の石列・土留め跡)

**[位 置]** 今帰仁城跡外郭西区VIII区 (Q-32)  
**[遺構図]** 第30・31図    **[図版]** 図版11    **[検出面]** II層  
**[遺構構成]** 石列 (SR10)    **[規模]** 約10m    高さ約0.5m

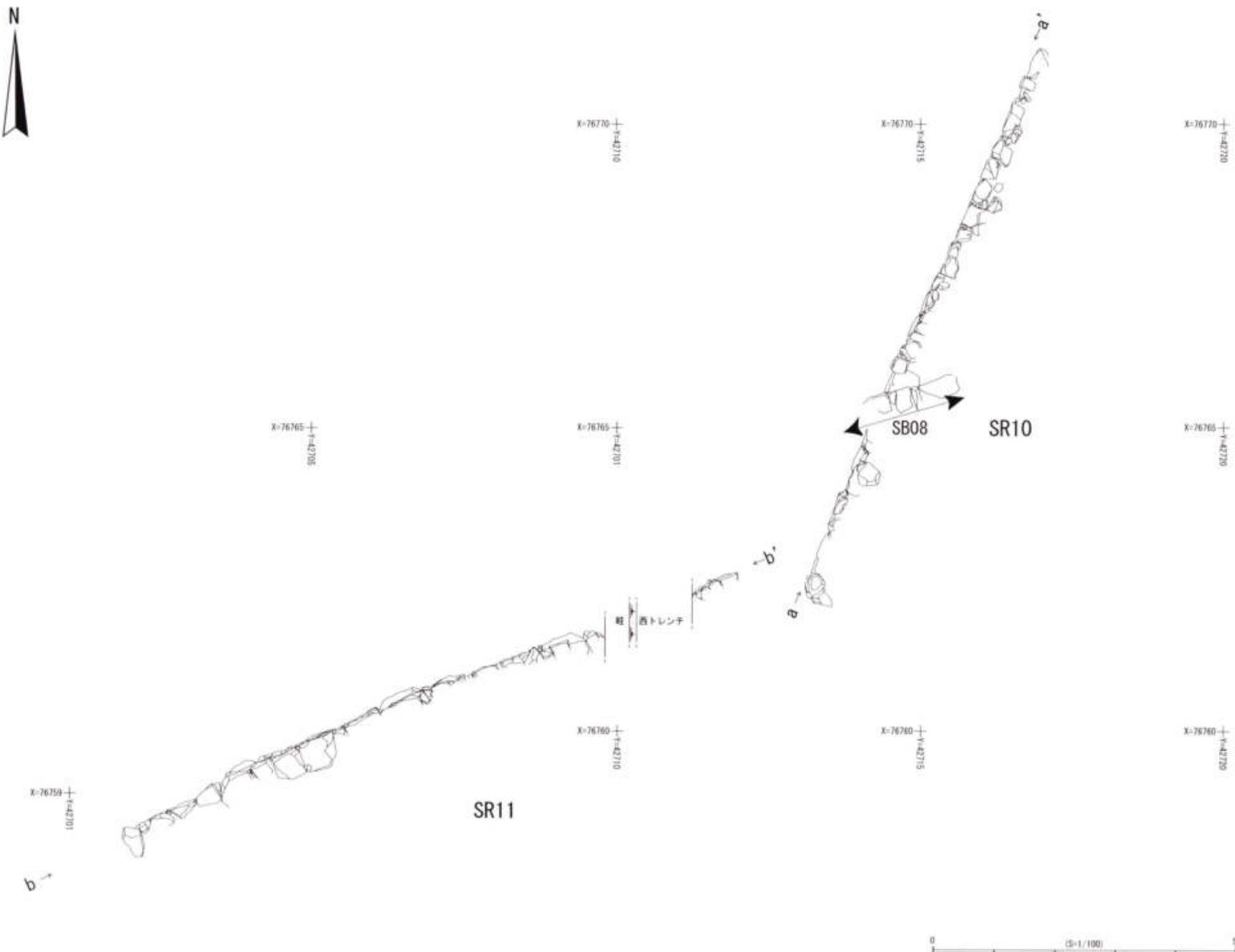
**[所見]** SR11と同様にSB08内で確認された遺構である。しかし当該遺構はSB08の北側遺構外まで延伸し、SB08が当該遺構の上面に積まれて検出されたことからSR11と同様に土留めの機能を持った遺構と考えられる。南西から北東へ約10mにわたって1～3石、約50cmの高さで積まれている。すぐ隣には同レベル検出面のSR11が検出されている。SR11と同様に30～50cm大の石を丁寧に並べていたため検出当時はSB08構築以前の建物遺構と判断していたが、石列が建物状に延びずに1列であることから当該遺構はSB08遺構を構築する際に造られた土留め石積と判断した。

#### [遺構内堆積層]

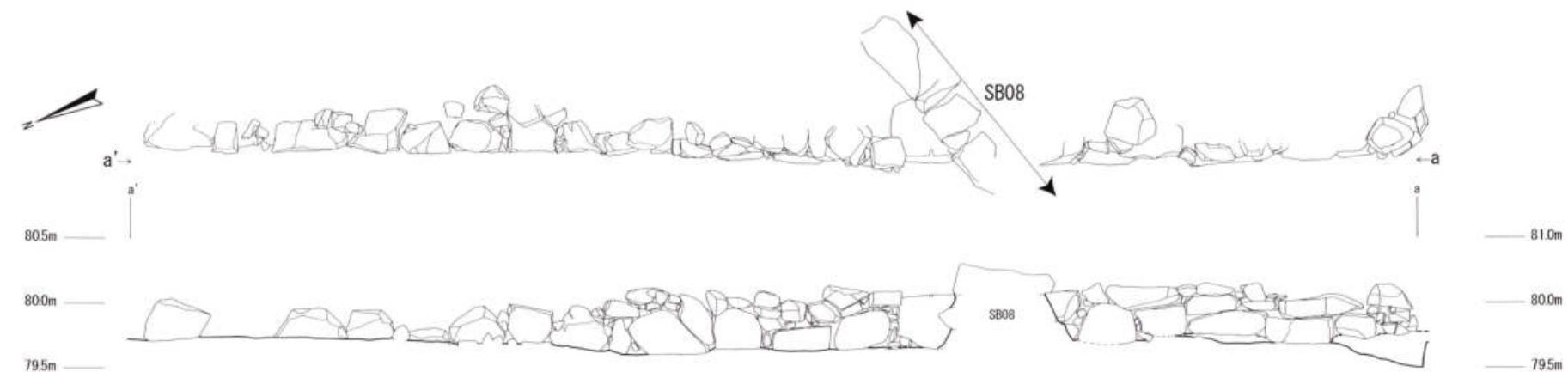
i層：【褐色土層・暗褐色土層】基壇内に大小様々な礫で占められる礫層。部分的な差違はあるが、覆土は褐色と暗褐色土層に分けられる。

#### [遺物]

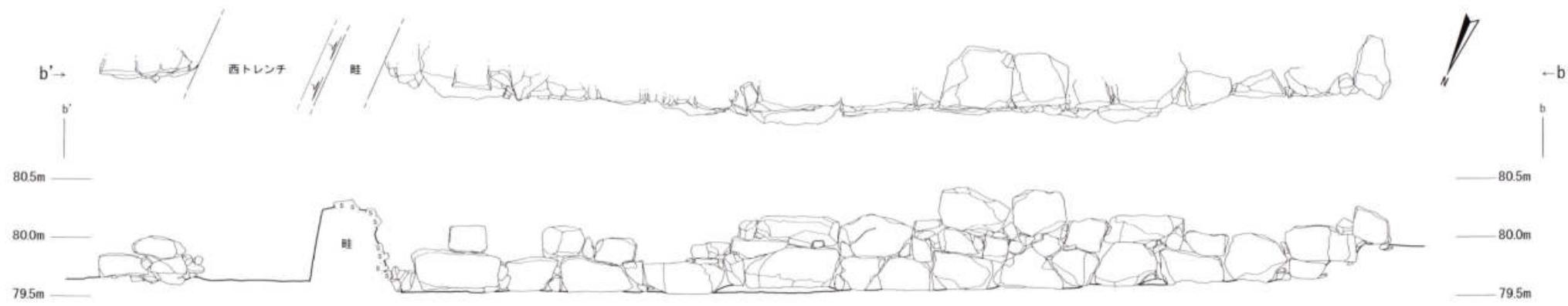
1. 青磁 第28図-20は龍泉窯系青磁V類の無文外反碗である。腰部は大きくふくらみ、胴部に2条の轆轤痕を薄く残す。



第30図 SR10・SR11遺構詳細図



第31図-a SR10

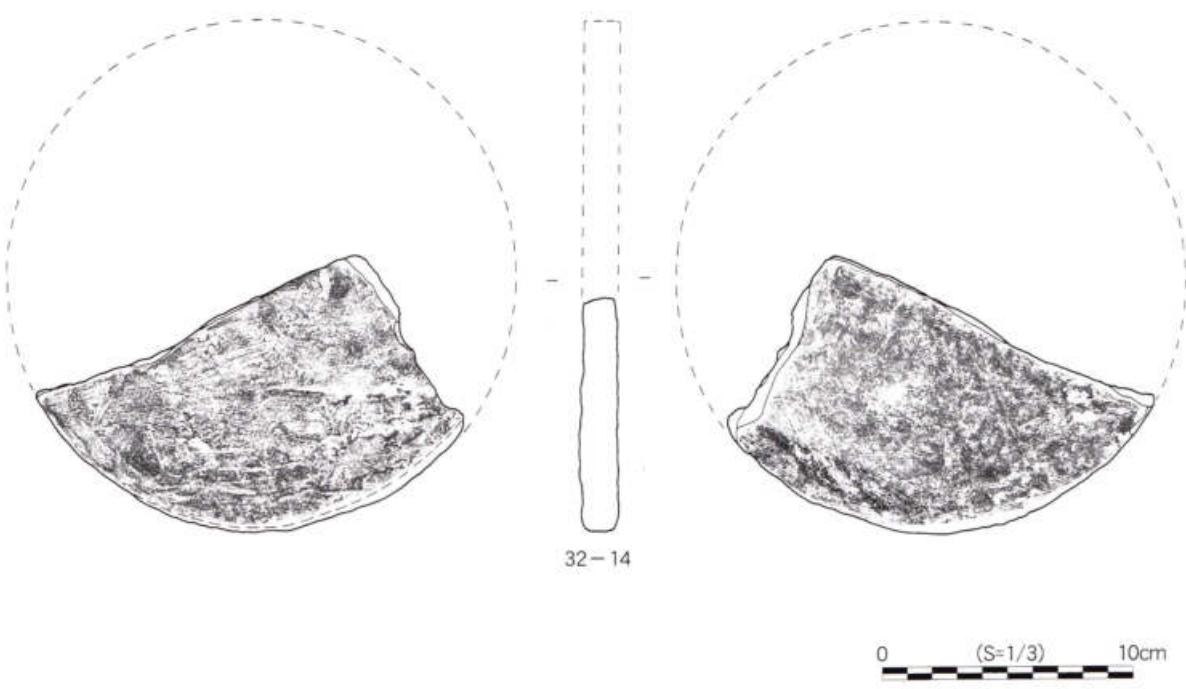
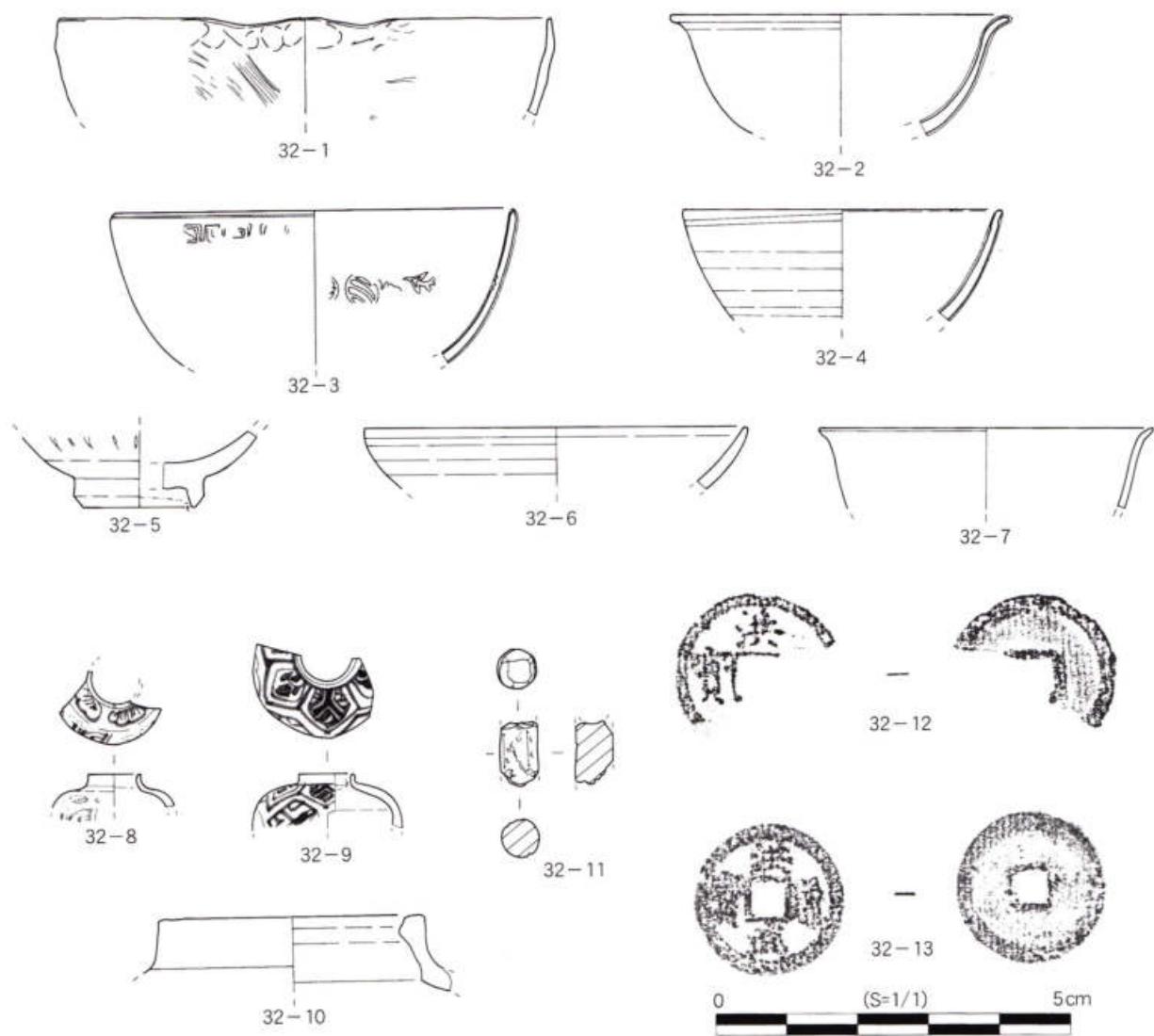


第31図-b SR11

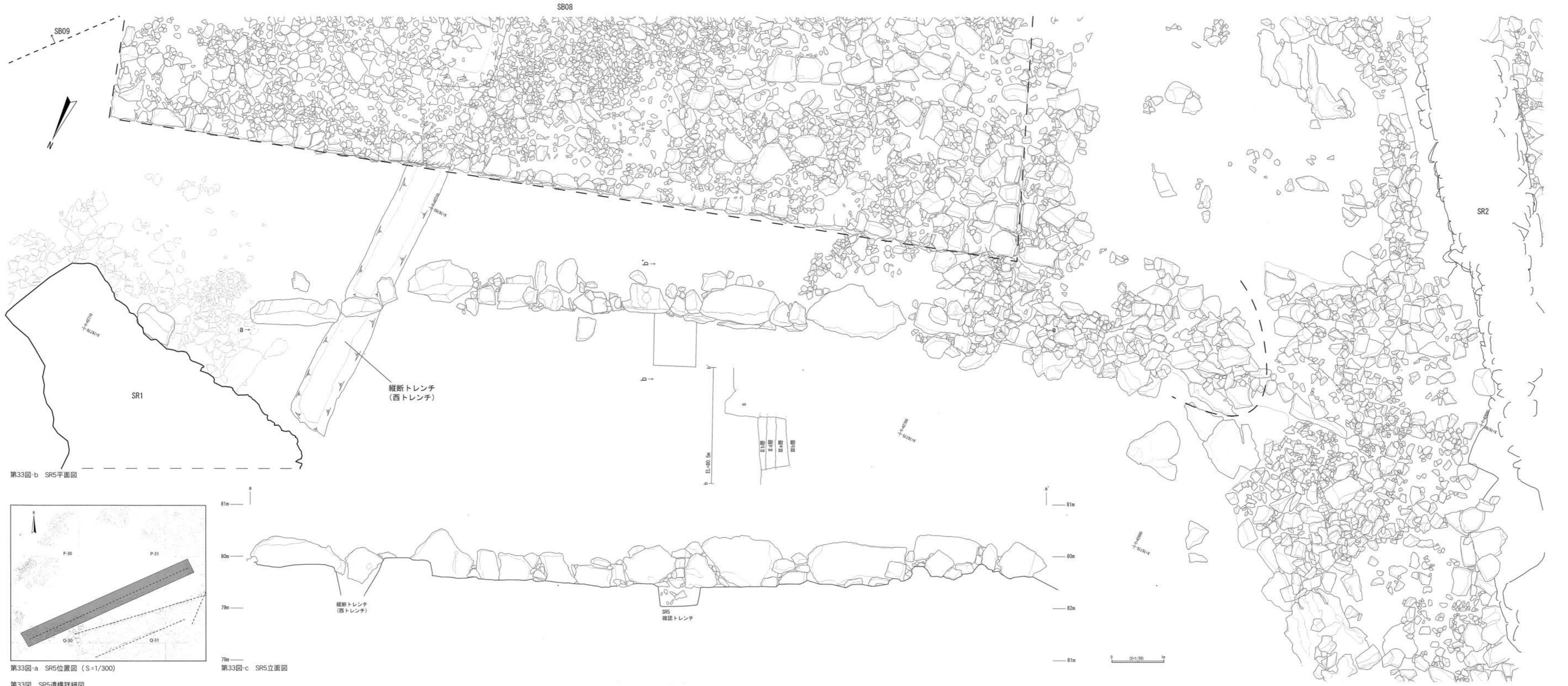
0 (5-1/80) 1m

第31図 SR10・SR11平面図および立面図

[名称] SR 5	[位置] Q-30~32	[検出面] II b 層
[遺構図] 第33図	[図版] 図版12	
[遺構構成] 土留め石積み	[規模] 南西-北東約21m、幅約1m	
[所見] 南西-北東に延びる土留め石積みで、北東側がSR 1（階段状遺構）、南西側がSR 2に接する。調査以前より地上に露頭していて、大きいものでは1mを超える礫を使用している。当該遺構はこれまでの外郭調査で検出されてきた土留め石積みとは少し様相が異なっている。これまでⅢ・Ⅳ区、Ⅶ区で確認されている土留め石積みは、外郭地区に入植してきた人々が平場を構築するために土留め石積みを造りだしていた。しかしトレンチ調査によってSR 5の検出面であるII b層がSB08に被っていることがトレンチ調査で確認され、SR 5がSB08を構築した後に平場を造り出していることが確認された。これまでの土留め石積みとは遺構構築過程で順序が逆になっていること、区画することを目的とした土留め石積みではないことが異なる点として挙げられる。		
[遺構内堆積層]		
II b層：10YR褐色土4/4 黄褐色土が多く混入する層。黄褐色土が多く混ざる。粘性は比較的強く堅く締まっていて、人為的にSB08とSR 5の間に入れ込まれた覆土であると考えられる。		
[遺物] 第32図にII b層で検出された主な出土遺物を図化した。		
1. 土器 1は第3様式の鍋の口縁部で、混和材に粘板岩を入れる今帰仁村内のグスク時代の遺跡では最も一般的なグスク土器である。器壁は薄く口唇は波を打つように雑な造りとなる。		
2. 青磁 2～4は龍泉窯系V類の碗で、2は無文で口縁部が大きく反る。3は直口口縁の外面にスタンプで雷文を、内面にも型押しで文様を施すようであるが不鮮明でモチーフは不詳。4は口縁直下にヘラ状の工具によって1条の線が廻らされる直口口縁の無文碗。5は龍泉窯系VI類の底部で蓮弁文の弁間は広く雑な仕上げとなる。		
3. 白磁 6はC2群（ビロースクII・閩清窯系）の口縁部資料。7は直線的に立ち上がり口縁部で外反する資料で素地などからD群の碗に分類されると推量されるが、小片のため判断は難しい。		
4. ベトナム陶磁 8・9はベトナム産の青花の小壺で、8は肩部上面に梅文、下部に区画文が描かれている。隣接するVII区で出土した小壺と接合することが確認され同一個体であることが明らかとなった（第26集108図-162）。9は器全体に区画文が描かれる。区画内には五角形の幾何学文が配されている。今帰仁城跡内の出土遺物では紹介した本報告32図-8と第26集108図-162のように接合関係にあるものも少なくないと考えられるが、実際に接合が確認されたものは必ずしも多くない。遺跡出土の遺物は、使用の実態を一定程度反映しているものの、廃棄されさらに埋没過程など様々な経過を辿っていることは容易に理解される。今回のような接合資料の確認はそれぞれの出土地区の性格や遺物の使用箇所の帰属位置などを考える上で貴重な事例である。今後も当該事例を増やし遺物の移動や使用の実態の解明について接近したい。		
5. 褐釉陶器 10は短頸の壺で、内傾する口縁部の内側は蓋の受け口状に段差がある。		
6. 不明土製品 11は円柱状に造られた小品で上面端は凹んでいる。混和材として粉碎した貝を用いた用途不明の土製品。		
7. 銭貨 12・13は洪武通寶（明・1268年）。		
8. 沖縄産瓦質土器 14は円盤状の製品で、瓦質土器の蓋である。首里城京の内跡では、瓦質土器の蓋の産地としてタイ、沖縄をあげており（沖縄県教育委員会1998）、類品である当該品も暫定的に沖縄産の瓦質土器の蓋と推定し報告する。		



第32図 SR5出土遺物 (IIb1・IIb2出土遺物)



[名 称] P-33グリッド検出の柱穴群

[位 置] 今帰仁城跡外郭西区Ⅷ区 (P-33)

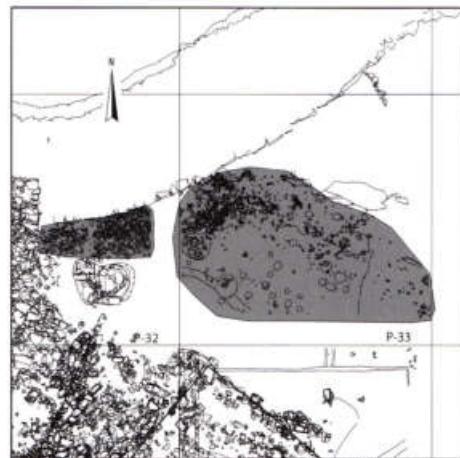
[遺構図] 第34～36図

[図 版] 図版13-1～4

[検出面] Ⅲ層

[遺構構成] 柱穴24基 (774, 776, 778～794)、土坑2基 (773, 775)、溝状遺構 (777)

[所見] Ⅷ区では監守時代の構築と思われる石敷の遺構が多く確認されているが、北側のP-33グリッドにおいては城壁を除いて石敷遺構等が確認されなかったことから、それよりも遡る遺構を求めて掘削を行った。Ⅱ層を除去後、Ⅲ層・地山面において柱穴遺構群を確認することができたが、柱穴列が不均等であったことから掘立柱建物のプランを組むことはできなかった。保存修理事業の観点からⅡ層を除去した段階で発掘を止めたため、遺構内覆土の発掘は行っていない。しかしⅢ層は外郭城壁の下層へと続いている。城壁の年代は14世紀中頃～15世紀前半に比定されていることから、その年代、もしくはそれ以前の年代が当てはめられ、柱穴群は主郭Ⅰ～Ⅲ期段階の時期に比定されると考えられる。



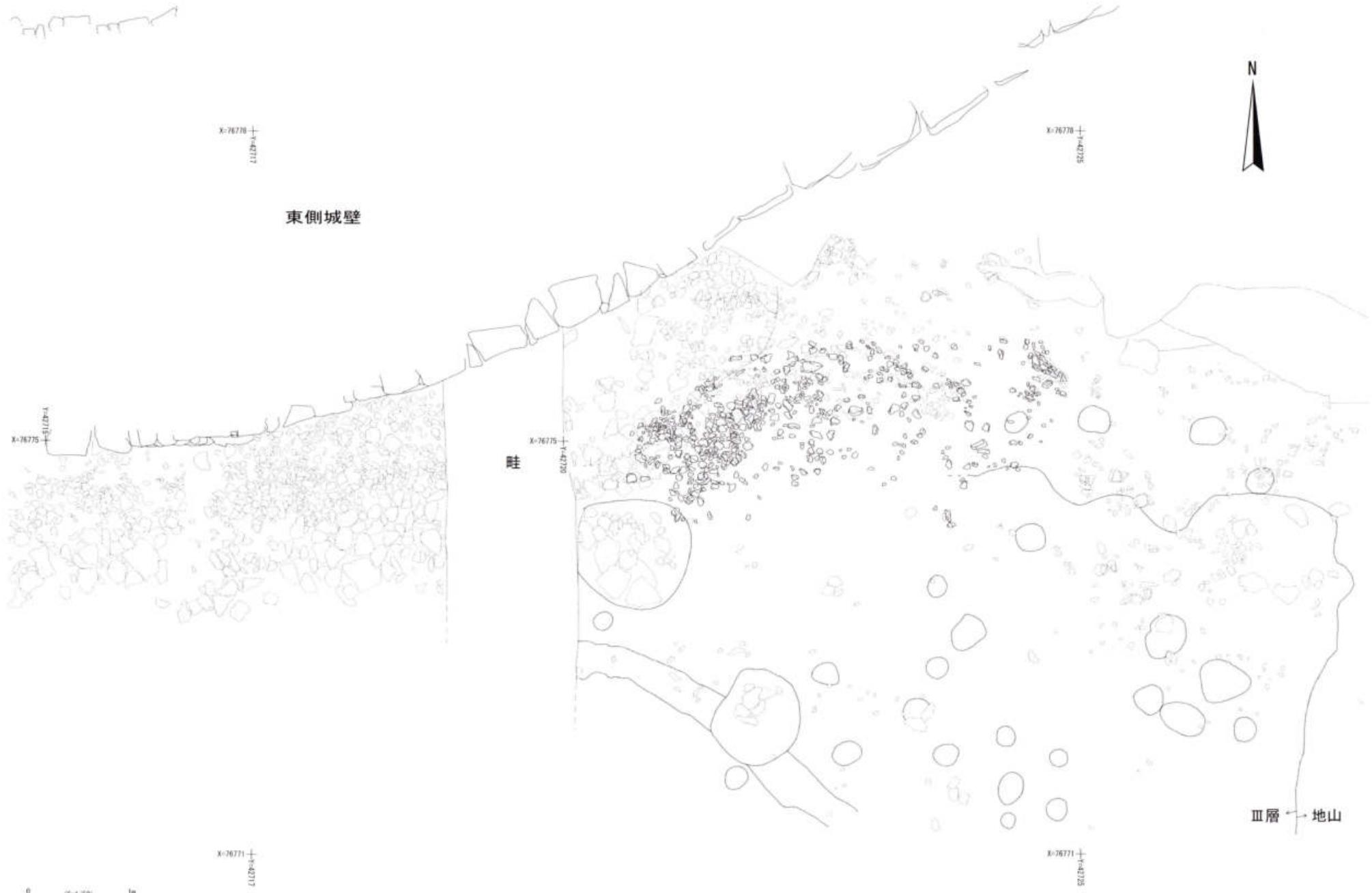
第34図 P-33グリッド検出の柱穴群・礫群位置図  
(S=1/300)

第2表 P-33グリッド検出柱穴観察表

pit番号	検出面	覆 土 観 察	規格・性格	柱痕	楔石	長幅(cm)	短幅(cm)	切り合ひ
773	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	土坑	—	—	115	100	—
774	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土少量、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	18	16	—
775	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	土坑	—	—	90	80	777を切る
776	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	21	20	—
777	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土少量、赤褐色土と炭が微量に混入	溝	—	—	300以上	35～45	775に切られ
778	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	24	21	—
779	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	30	25	—
780	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土少量、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	○	—	23	21	—
781	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土少量、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	○	30	25	—
782	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土少量、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	22	22	—
783	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	32	24	—
784	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土少量、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	22	16	—
785	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土少量、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	○	—	34	32	—
786	地山	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	28	21	—
787	地山	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	34	23	—
788	地山	10YR暗褐色3/4 黄褐色土少量、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	32	31	—
789	地山	10YR暗褐色3/4 黄褐色土少量、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	30	26	—
790	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	○?	43	29	—
791	Ⅲ層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	42	40	—
792	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土少量、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	30	28	—
793	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 赤褐色土多量に混入	柱穴	—	—	45	29	—
794	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	24	22	—
795	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土少量、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	28	22	—
796	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	30	26	—
797	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	13	11	—
798	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 赤褐色土少量、黄褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	19	16	—
799	Ⅲ層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量に混入	柱穴	—	—	25	23	—



第35図 P-33グリッド検出の柱穴群遺構詳細図



第36図 P-33グリッド検出の縄群遺構詳細図

[名 称] R-32グリッド検出の柱穴群

[位 置] 今帰仁城跡外郭西区Ⅷ区 (R-32)

[遺構図] 第37～39図 [図版] 図版14-5～8

[検出面] Ⅱa'層

[遺構構成] 柱穴 (pit. 1048, 1050～1066, 1085～1107)

[所見] 発掘調査以前よりⅧ区にあった古宇利殿内（祠）を移設し（図版4）、表土層を除去すると黒褐色土の層（Ⅱa'層）が検出された。Ⅷ区全体に被覆することはなく部分的に確認されている。R-32の範囲では特に同層が多く広がり、数cm程度掘り下げる無くなりⅡa層となる。しかし古宇利殿内があった箇所にのみⅡa層とならずに明褐色の造成層が確認された。この造成層はSB09覆土のii層と酷似していることから関連性があると思われるが遺構の繋がりは確認できておらず詳細は不明。

Ⅱa'層と造成層面からは柱穴遺構が30基確認されている。遺構内の覆土はⅡa'層とほとんど変わらない。柱穴列は不均等であったことから掘立柱建物のプランを組むことはできなかった。

#### [検出面詳細及び遺構内堆積層]

Ⅱa'層：10YR 黒褐色土 6/6 炭と魚骨が多く混入する層。粘性はほとんど柔らかくてサラサラしている。同層で検出された柱穴遺構の覆土もほぼ同じ土が入っている。

造成層：7.5YR 明褐色 5/6 と 10YR 暗褐色 3/3 が混ざる。なかでも褐色土の混入が多く、明褐色のブロックと赤褐色のブロックが少量混入し、見た目はSB09 ii層に酷似する。全体的にかたく締まっていて、3～5cmの堆積ですぐに無くなる。

[遺物] 第38図はⅡa'層上面で検出された柱穴遺構直上 (Pit.1061) より出土した遺物である。柱穴はいずれも遺構検出面までとしているため、遺構内からの出土遺物は少ないが、検出時に遺構内と判断される回収遺物も少ないながら認められる。

1. 錢貨 1は欠損し腐食も著しいことから「元口口口」と頭文字の一字のみ判読できる。『新版中世出土銭の分類図版』(永井2002) を参考に書体から元祐通寶（北宋：1068）の可能性が高いと判断される。

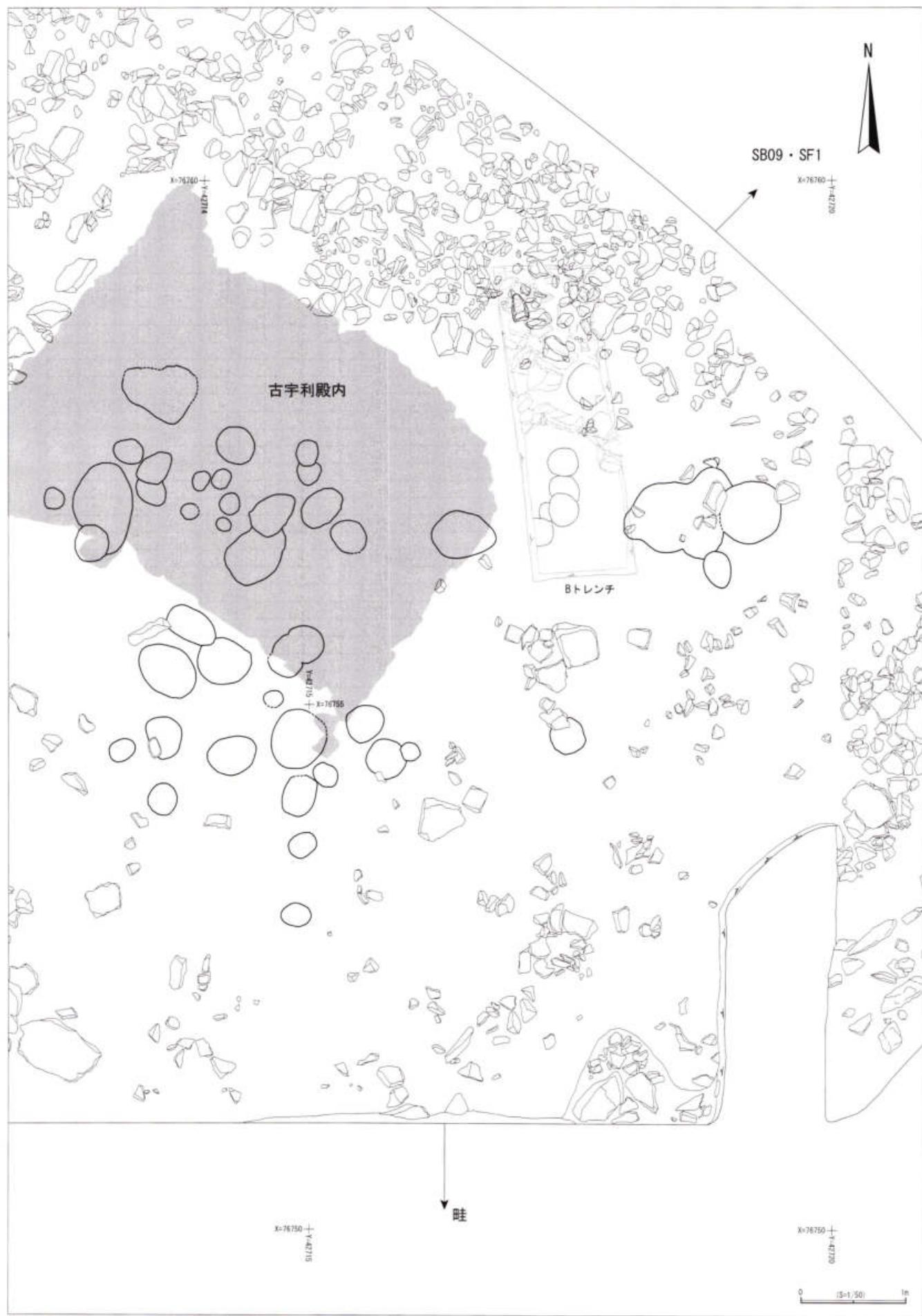
2. 金属製品 2は出土した時点では銭貨と判断していたが、銭貨幣で方形の鐵錢といえば、仙台通寶を考えられるが、サイズなどに若干の相違があるため、暫定的に方形の金属で中央は孔が穿たれた金具と推定した。四方は面取りされているようで、座金具の可能性も考えられるが、同時代の遺跡で管見の限り検索してみたが、類例品は確認されていない。ここでは、用途不明の金属製品として報告し、類品の出土を待ちたい。



第37図 R-32グリッド検出の柱穴群位置図  
(S=1/300)



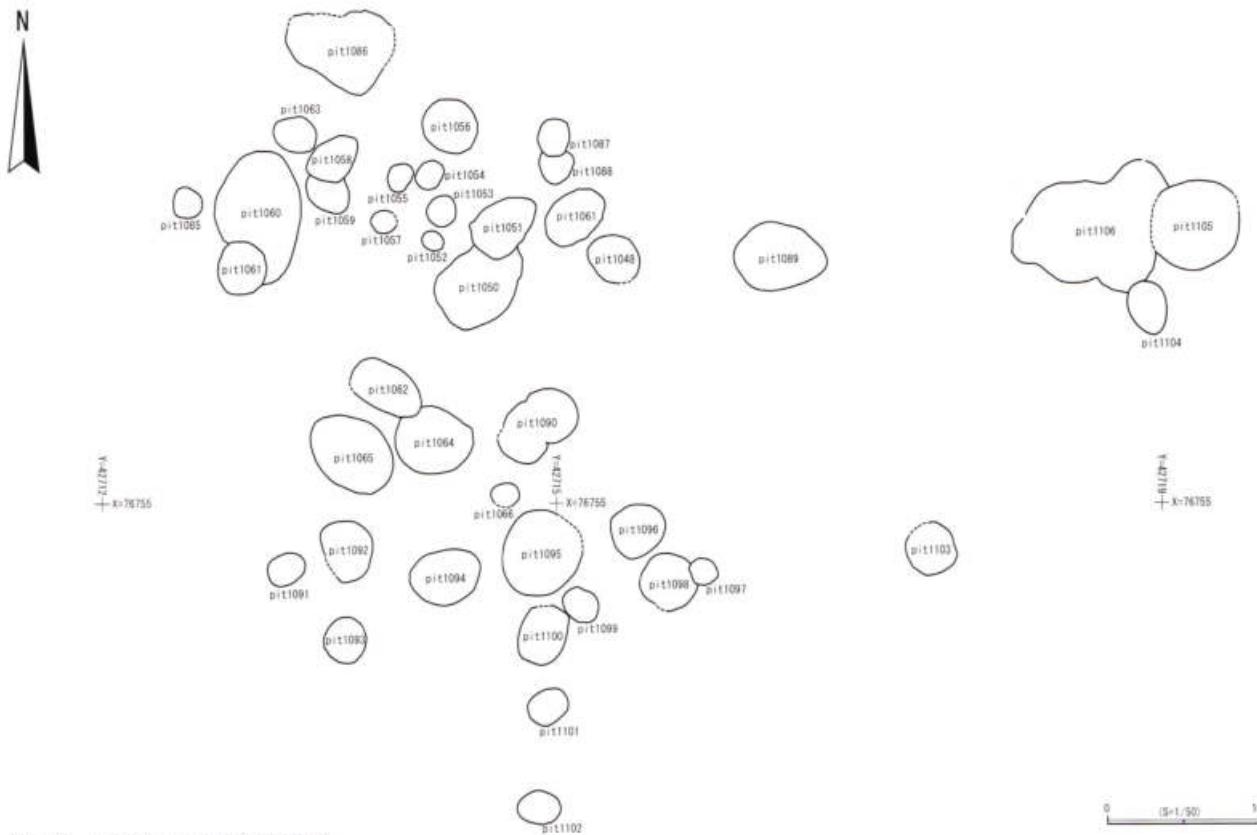
第38図 R-32グリッド検出の柱穴群出土遺物



第39図 R-32グリッド検出の柱穴群遺構詳細図

第3表 P-32グリッド検出柱穴観察表

pit番号	検出面	覆土観察	規格・性格	柱痕	楔石	長幅(cm)	短幅(cm)	切り合ひ
1048	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	○	35	30	-
1050	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	○?	-	30	1051切られ
1051	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	47	30	1050切る
1052	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴?	-	-	15	14	-
1053	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴?	-	-	20	18	-
1054	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴?	-	-	20	15	-
1055	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴?	-	-	20	15	-
1056	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	36	35	-
1057	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴?	-	-	17	15	-
1058	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	40	26	1059切る
1059	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	-	26	1058切られ
1060	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	-	60	1061切られ
1061	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	45	30	1060切る
1062	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	44	26	1064切る
1063	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	24	23	-
1064	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	56	40	1062切られ
1065	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い。微小礫混入	柱穴	-	-	55	47	-
1066	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い。大きい礫混入	柱穴	-	-	24	23	-
1085	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	20	17	-
1086	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	71	55	-
1087	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	26	21	1088切る
1088	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	-	23	1087切られ
1089	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	62	47	-
1090	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	57	37	-
1091	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	26	20	-
1092	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	40	33	-
1093	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	30	26	-
1094	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	47	36	-
1095	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	55	53	-
1096	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	35	33	-
1097	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	抜き取り?	-	-	17	17	1098切る
1098	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	38	38	1097切られ
1099	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴?	-	-	26	21	-
1100	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	40	30	-
1101	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	27	21	-
1102	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	27	22	-
1103	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	34	34	-
1104	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	36	26	-
1105	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	60	55	-
1106	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	柱穴	-	-	70	65	-
1107	II'a'	10YR黒褐色6/6 粘度なく炭や魚骨が多い	溝	-	-	-	65~70	-



第40図 R-32グリッド柱穴群配置図

[名 称] R-30グリッド検出の柱穴群

[遺構図] 第41・42図

[検出面] III層

[所見] R-30では地表面より20~30cm程度掘削すると柱穴遺構が検出された。検出面はIII層であった。周囲で確認されているSB08やSR 2、SR 5は当該遺構よりも上層で検出されていることから少なくとも監守時代よりも古くなる可能性がある。VIII区のトレンチ調査では監守時代以前の層から柱穴遺構が確認されている。柱穴遺構群範囲は狭小で、柱穴遺構は9基と少なかったこともあります、建物遺構としてプランを確定するには至っていない。

#### [遺構内堆積層]

i 層：10YR暗褐色層3/4・褐色層3/3、明褐色土・焼土・炭が微量に混入する。

第4表 R-30グリッド検出柱穴観察表

pit番号	検出面	覆 土 観 察	規格・性格	柱痕	楔石	長幅(cm)	短幅(cm)	切り合ひ
1108	III層	10YR褐色4/4 黄褐色土少なく、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴	—	—	30	26	—
1109	III層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴	—	—	32	32	—
1110	III層	10YR褐色4/4 黄褐色土少なく、赤褐色土と炭が微量混入。石多い。	柱穴	—	○	41	35	—
1111	III層	10YR褐色4/4 黄褐色土少なく、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴	○	—	42	27	—
1112	III層	10YR暗褐色3/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴?	—	—	64	38	—
1113	III層	10YR褐色4/4 黄褐色土少なく、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴	—	—	28	21	—
1114	III層	10YR褐色4/4 黄褐色土少なく、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴	—	—	19	17	—
1115	III層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴	—	—	28	24	—
1116	III層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入。石が多い。	柱穴	—	○	52	55	—

[名 称] Q-30グリッド検出の柱穴群（要検討）

[遺構図] 第41・43図

[検出面] II層

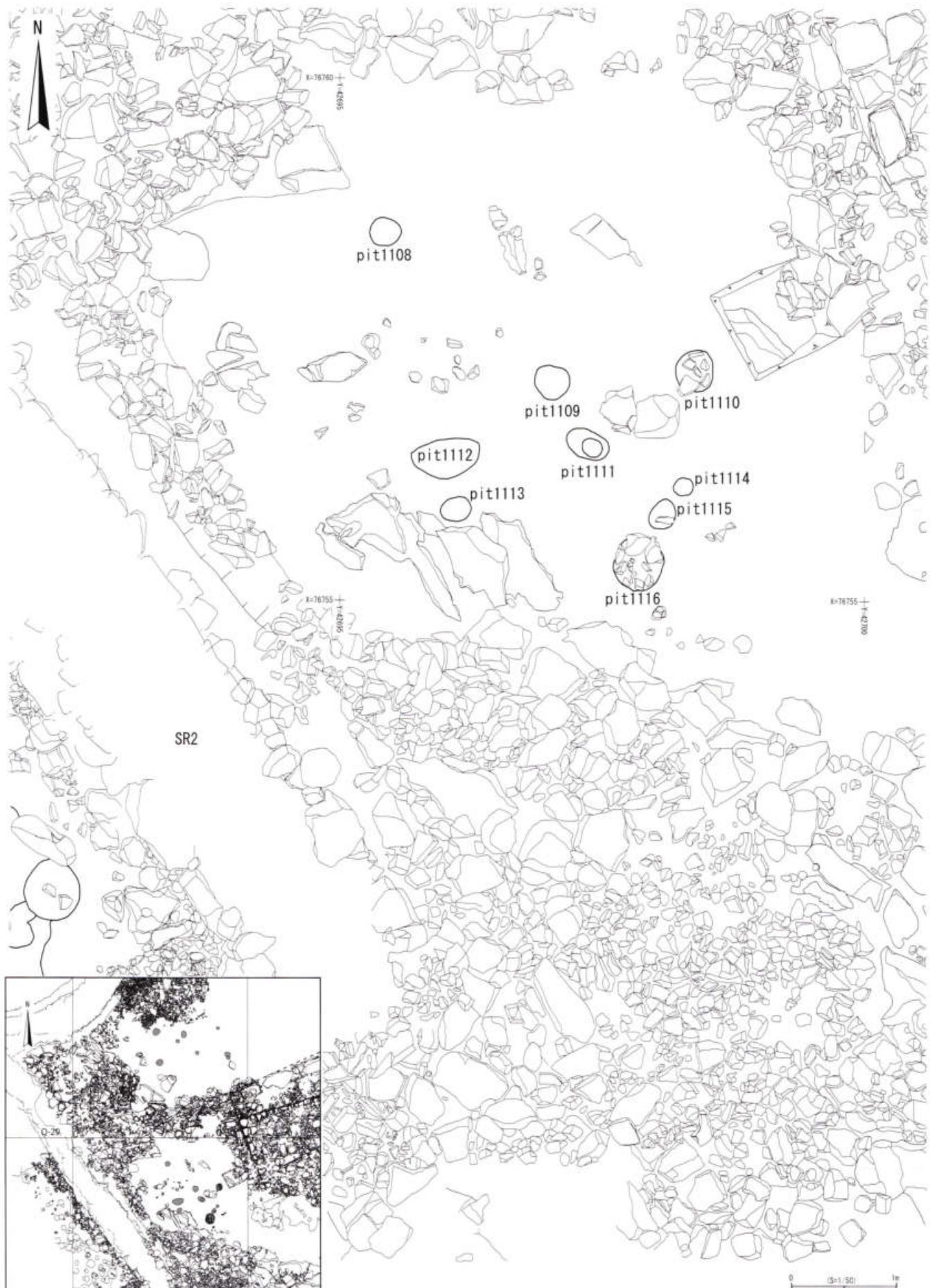
[所見] R-30検出の柱穴群からSR 5を挟んで北側のQ-30グリッドにおいて確認された柱穴群。前者遺構とは検出された標高が低くなる点で異なるが、これは外郭全体が北側へ傾斜していることに起因する。ただし検出された層序はII層で、I層を除去した段階で検出されたことから年代的には南側のR-30グリッドで検出された柱穴遺構よりも新しい柱穴遺構である。確認された柱穴遺構は9基と少なかったこともあります、建物遺構としてプランを確定するには至らなかった。遺構の発掘は行っていないので遺構の詳細は不明であるが、これまで検出された遺構覆土と比較すると殆どが褐色で明るく、柱穴遺構とは別の可能性も考えられる。検出面はII層で監守時代相当の年代が考えられることから監守時代よりも遡る可能性は低い遺構群と思われる。

#### [遺構内堆積層]

i 層：10YR褐色層4/4・褐色層3/3、明褐色土・焼土・炭が微量に混入する。

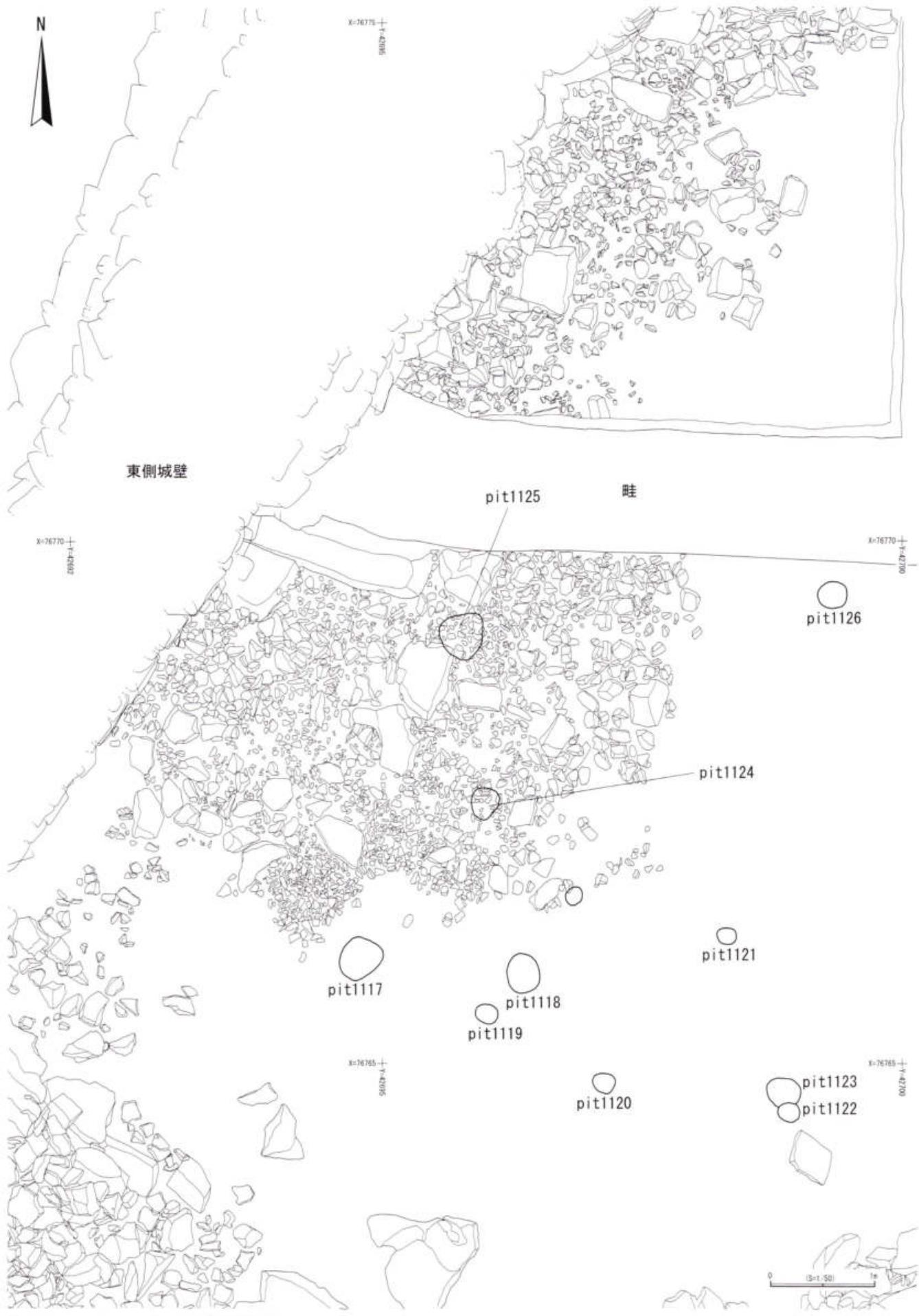
第5表 Q-30グリッド検出柱穴観察表

pit番号	検出面	覆 土 観 察	規格・性格	柱痕	楔石	長幅(cm)	短幅(cm)	切り合ひ
1117	II層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴?	—	—	43	35	—
1118	II層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴?	—	—	37	30	—
1119	II層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴?	—	—	21	18	—
1120	II層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴?	—	—	21	19	—
1121	II層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴?	—	—	18	15	—
1122	II層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴?	—	—	20	18	1123切る
1123	II層	10YR褐色4/4 黄褐色土少なく、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴?	—	—	33	30	1123切られ
1124	II層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴?	—	—	30	25	—
1125	II層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴?	—	—	45	42	—
1126	II層	10YR褐色4/4 黄褐色土、赤褐色土と炭が微量混入	柱穴?	—	—	28	25	—



第41図 R-30・Q-30グリッド検出の柱穴群位置図  
(S=1/300)

第42図 R-30グリッド検出の柱穴群遺構詳細図



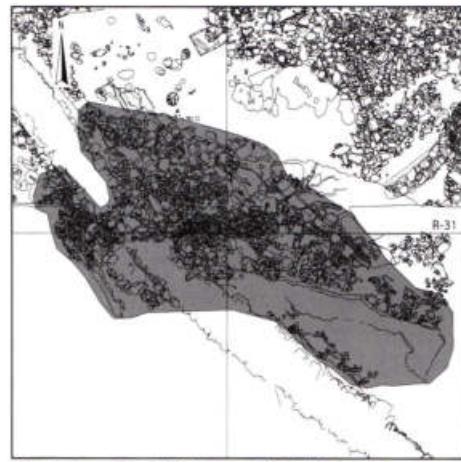
第43図 Q-30グリッド検出の柱穴群遺構詳細図

**[名 称]** VIII区西南検出の石敷遺構  
**[位 置]** 今帰仁城跡外郭西区VIII区 (R-30・31, S-30)  
**[遺構図]** 第44・45図      **[図版]** 図版15  
**[検出面]** II層              **[遺構構成]** 石敷, SR 2

**[規模]** 石敷き通路幅約60~90cm

**[所見]** SR 2 を含む当該遺構は、平成17年度の試掘調査着手前は盛土で覆われ、古宇利殿内へと通用路としてSR 2 の一部が分断され、その上面は簡易にコンクリート舗装され恒常に使用されていた。このコンクリート舗装は昭和42年に瓦葺きからコンクリート造の古宇利殿内に建て替えられた当時に舗装されたものと思われる。舗装道を撤去後、上面に被覆していた I 層・II 層の一部を除去すると当該遺構が検出され、IX区とVIII区を結ぶ通用口であったことが確認された。通用口の幅は60~90cmと狭い造りとなっている。

検出面であるII層は出土遺物等から監守時代相当と考えられることから、調査直前まで使用されていた通用口は形を変えて監守時代から恒常に使用され続けていたと考えられる。遺構の下面からは平坦な面を意図的に並べた踏石と考えられる石敷が確認された。大きいもので約90cm大の礫が敷かれ、また、平坦ではない為に石敷かどうか検討を要するが、10~30cm大の小さい礫も部分的に検出されている。しかし大部分は上層における活動で壊され、SB08や古宇利殿内方向へ延伸するようには検出されなかった。



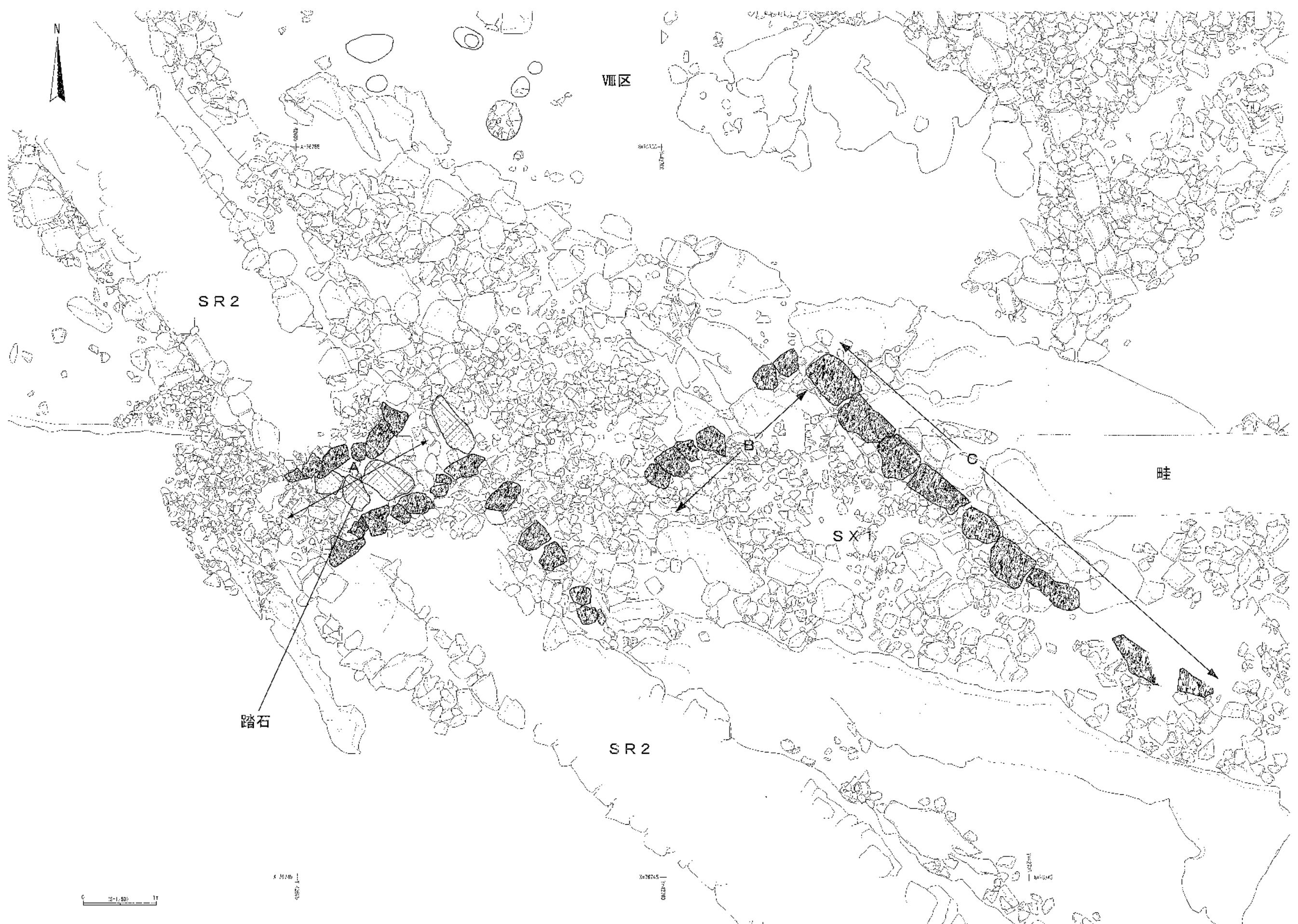
第44図 VIII区西南検出の石敷遺構位置図  
(S=1/300)

**[名称]** VIII区西南検出の石列遺構 (SX 1)    **[位置]** 今帰仁城跡外郭西区VIII区 (R-30・31, S-30・31)  
**[遺構図]** 第44・45図              **[図版]** 図版15  
**[検出面]** II層              **[遺構構成]** 石列

**[規模]** 石列(B)約2.5m      石列(C)約 6 m

**[所見]** SR 2、石敷遺構に隣接する同検出面 (II 層) の石列遺構で、SR 2 から離れて約 2 m欠損しているが、VIII区側の北東方向に約2.5m (B: 第45図表示)、南東方向へ直角に折れ曲がり約 6 mの石列が検出された (C: 第45図表示)。後者石列は殆どが岩盤の上に並べられ現地表面上に露頭していた。しかし大部分は上層における活動や現在も残る樹木等で壊され、石列(B)(C)の延長は検出されなかった。

遺構の使用年代は、検出面のII層が15世紀前半~17世紀前半の年代に相当することから、おおよそ主郭IV期、監守時代頃に構築されたと考えられる。古宇利殿内が構築されるまで使用されていたかは定かではないが、当該遺構の上面にSR 2 が構築されていること、さらに石列(B)はSR 2 とほぼ直角に造られているが分断された箇所(A)よりも約 2 m南東方向へずれていること等、切り合い関係でSR 2 よりも古い年代に相当するものと考えられる。各遺構を年代順に序列すると、最初に石列(B)(C)の遺構が構築され、何らかの理由で石列遺構が使用されなくなりSR 2 が造られる。その後、古宇利殿内が構築され、石列遺構の上層には古宇利殿内へと続く参道が造られたものと考えられる。



第45図 VIII区西南検出の石敷道構詳細図

[名 称] SR 2

[位 置] 外郭VII・VIII区とVI・IX区を区画する石積み遺構

[遺構図] 第46・47図

[図 版] 図版16

[検出面] 東側は現地表面より露出。西側は旧駐車場に埋設。

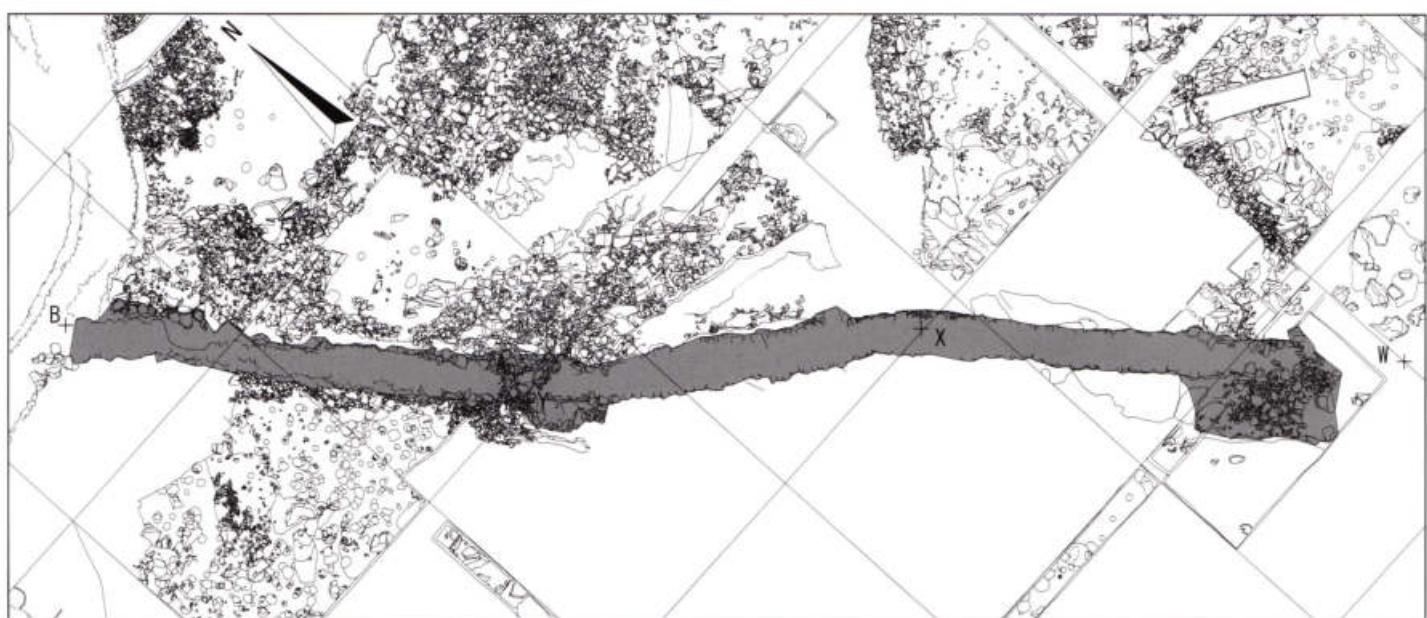
[規 模] 総延長約50m 幅：最大2m、最小1.5m 高さ最大1.5m、平均0.5m

[遺構構成] 石積み遺構2基(Y-X-Wについては報告済み)（今帰仁村教育委員会2009）。

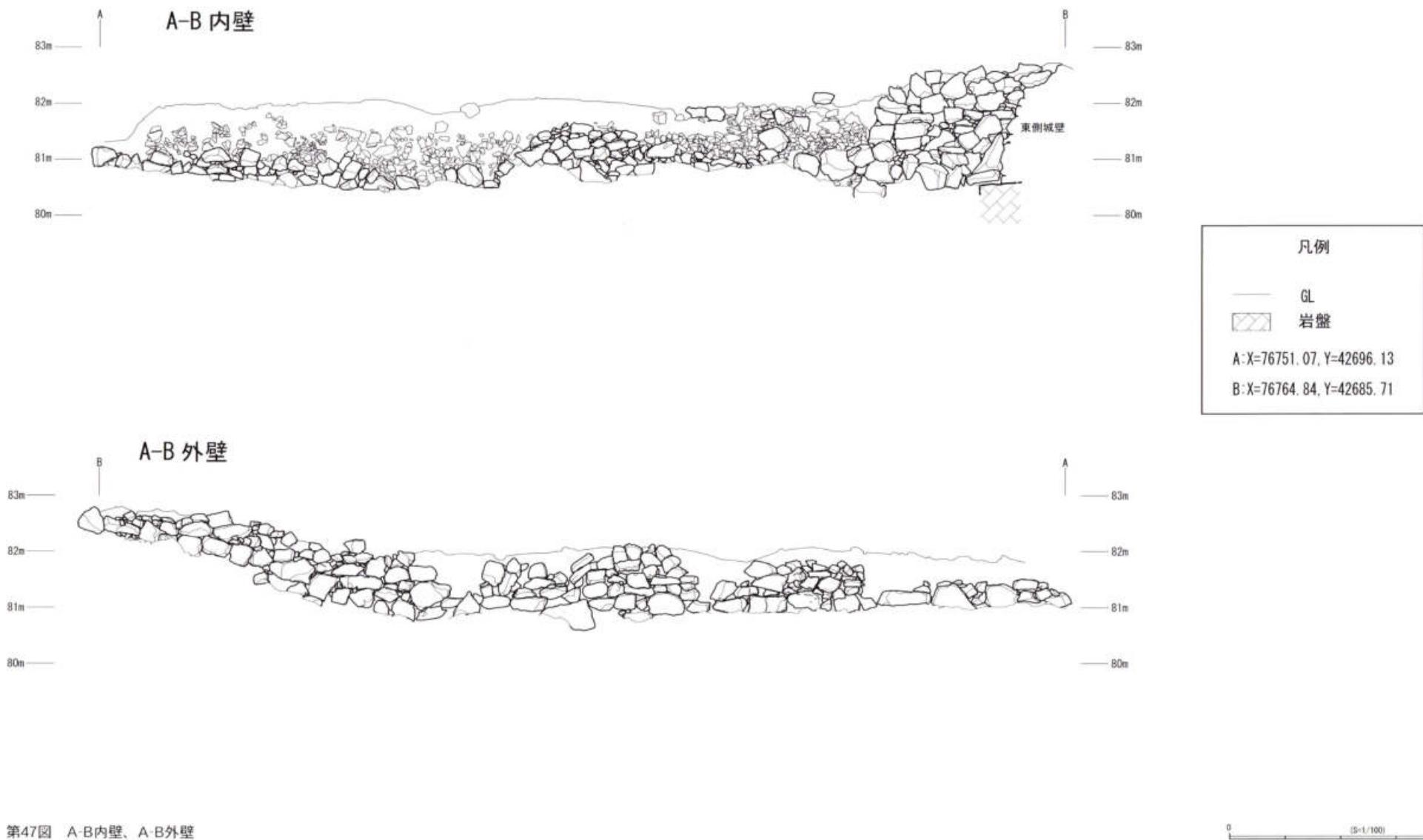
[所見] 外郭東側城壁の基準点Bから南東方向に延びる石積みがSR 2である。B点から17mの地点で古宇利殿内へ通じる道で分断される。ここに基準点Aを設置し、基準点Bまでの区間をA-B石積みとした。ここでは7次調査において石敷遺構が検出されており、IX区とVIII区を結ぶ通用口であったことが確認されている（前項参照）。この通用口に基準点Yを置き、さらに南側に基準点X、Wを設置し南側からそれぞれW-X、X-Yとした。また、IX区側を外壁、VIII区側を内壁とした。

U-32グリッドではSR 2の外壁側は旧駐車場からの客土と現代のゴミに覆われ、これらを除去すると面石の前面は崩落したと思われる礫層で覆わっていた。この礫層は上層で10cmから15cm大の礫で、土の混入も僅かであった。しかし下層になると30cm大の礫の間に土も多く含まれ、遺物は貝殻や獸骨等の自然遺物が大半を占めた。さらに礫層の下からはグスク時代に相当の遺物包含層（Ⅱ層）、面石沿いには礫敷が検出された。この礫敷はSR 2に沿って長さ約4m、幅約2.5mの範囲でのみ検出され、石積み機能時の遺構と考えられる。内壁面においては根石がⅢ下層を約10cm掘り込んで立ち上がるため構築年代は15世紀前後、少なくとも15世紀中頃を下限とする遺構であろう。

U-32グリッド内の内外壁は最も保存状況が良好で、約1.4mの高さであった。これは石積みの幅が2m程度であることから、もともとの石積みの高さもこの程度であったと考えられる。そのほかの場所では面石が2・3石程度の残存状況であり、崩落により面石が途切れる箇所もある。内外壁とも根石の約半分は露頭した岩盤の上に据えられ、もともと岩盤の露頭により区切られていたところに石を積むことによって区画を明確にしたものと考えられる。

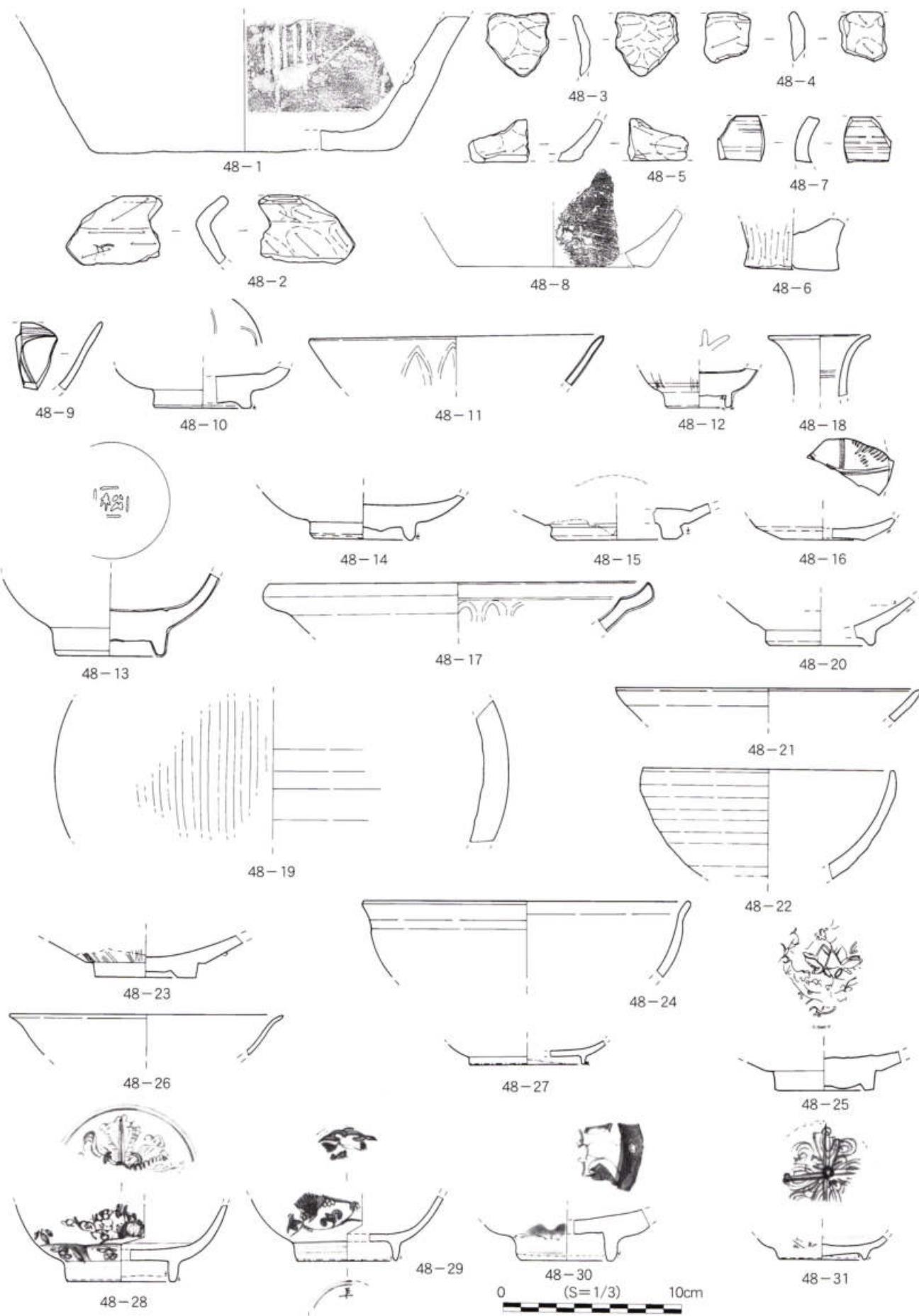


第46図 SR2位置図 (S=1/300)

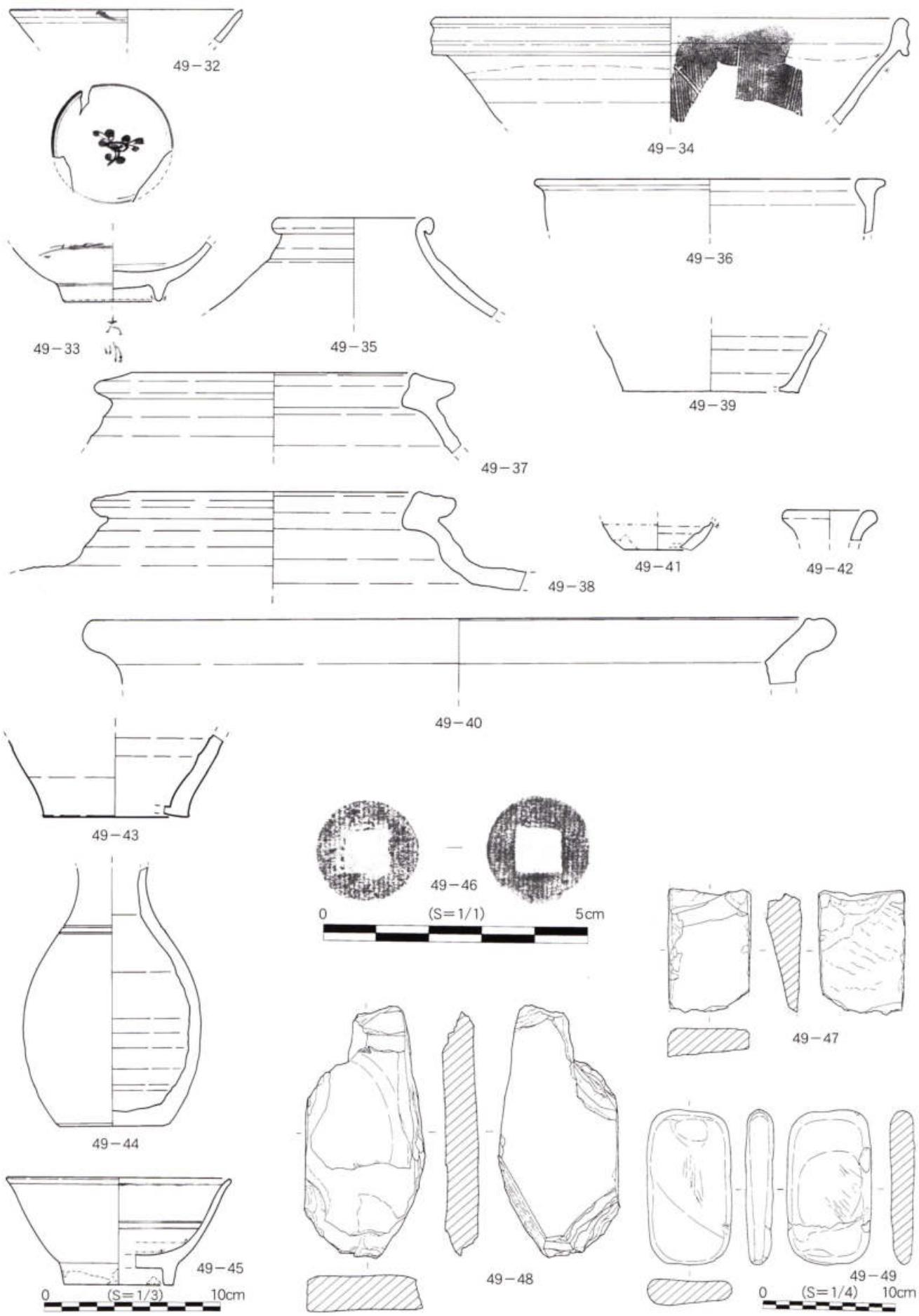


**[遺物]** 第48~49図はSR 2より出土した出土遺物である（既報告第26集で一部報告済み）。

1. 沖縄産瓦質土器 第48図-1は沖縄産瓦質土器の擂り鉢。擂り目が6本確認できる。
2. 土器 2~5は第3様式のグスク土器で混和材に粘板岩を用いる。2は壺、3・4は鍋の可能性があるが小破片の為不明。5は底部資料。6はくびれ平底土器の底部資料である。
3. カムィヤキ 7・8は器壁の厚い造りとなるB群と考えられる資料。7は口縁部の短い壺、8は壺の底部。
4. 青磁 9・10は龍泉窯系I類碗である。9の内面には劃花文が施される。10の見込みにも劃花文が施され、高台削りは浅い。11は同II類碗の口縁部で鎬蓮弁を外体面に施す。13は同III類碗底部資料。見込みにはスタンプで周囲を区画された「松」字が押印されるが、文様が薄く判然とはしない。14は造りは同IV類であるが見込みに白色の鉱物粒があり、粗製の風合いが強い。15は接地面の広い高台を持つ粗製碗で漳洲窯系と目される資料。16は同安窯系と目される平底皿で見込みには櫛描文が描かれる。17は頸縁盤の口縁部で内面は幅広のヘラで蓮弁文を配する。18は瓶の口縁部。19は外面に蓮弁を配する酒会壺の胴部。
5. 白磁 20・21はF群（今帰仁タイプ・浦口窯系）の資料で、20の底部は内面下半は露胎、21は口唇内側を面取りする。22・23はC2群（ビロースクII・閩清窯系）の資料。22は轆轤痕が明瞭に残り、23は見込みが凹み、腰部下半に鉋削り痕が残る。24・25はC3群（無文外反・閩清窯系）。25には印花文が施文される。26・27はE群（景德鎮窯系）の資料。
6. 青花 28は明青花碗I類（小野分類A群・景德鎮窯系）で腰が張る大振りの資料である。外面には梅文、腰部下半は変形蓮弁文、見込みは十字文が施され、外底面露胎とする。29はVII類（森分類B2群）の底部。外底には長命富貴の「長」らしき字款が書かれる。30は粗製の碗でいわゆる福建・廣東系、あるいは具体的な窯名として漳洲窯系と目される資料。内外面に花文？らしき文様が施される。31はI類の皿の底部で見込みに十字文が施される。
7. 肥前陶磁 第49図-32・33は青花碗で、32は荒磯文と思われる文様を施すが、小破片のため詳細は不明。33は見込みに花文、外底に「大明」と字款される。34は擂り鉢の口縁部。口縁部内外面にのみ褐釉をかけ、無釉内体面には櫛によって13本の擂り目を施す。
8. 褐釉陶器 35は口縁部を丸く肥厚させる資料で本報告分類のIII類に該当する資料。36はV類でフの字型の口縁部となる（安座間分類1類）。37・38は口縁部が断面方形となるI類の資料（安座間分類5類）。39は褐釉陶器の底部資料。40は口径が大きいことから甕と考えられ、口縁部は外側に屈曲し、口縁上部を凹ませる。41は茶入れの底部資料産地は小片で中国か断定できないがここで紹介する。
9. タイ陶磁 42は褐釉陶器の瓶と考えられる口縁部資料、小片のためこれも断定は難しいがタイ産の褐釉陶器と推定した。
10. 三彩 43は三彩の壺の底部と思われる資料であるが、綠釉のみが確認できる。
11. 沖縄産陶器 44は沖縄産無釉陶器の瓶の底部から頸部まで残存する資料。45は施釉陶器の碗で外面は褐釉、内面は飴釉、見込みは蛇の目釉剥ぎとなる。いずれも近世琉球から近代沖縄の時期の壺屋窯跡の生産品と推定され、当該遺構周辺で出土した肥前陶磁までの遺物とは若干の時期差があり近傍の古宇利殿内の拝所で使用された遺物と考えられる。
12. 錢貨 46は無文銭、外径19.56mm、厚み1.1mm、重量1.59gの今帰仁城跡出土品としては一般的なサイズである。
13. 石器 47~49はいずれも砥石として分類した。置砥石で扁平な自然石を使用し広部を砥面とし、材質がそれぞれ異なる。47は頁岩、48は砂岩、49は玢岩となる。



第48図 SR2出土遺物 (1)



第49図 SR2出土遺物 (2)

[名 称] 東側城壁（未報告分）

[位置] 今帰仁城跡外郭西区VIII区

[遺構図] 第50～72図

[図版] 図版18～20

[検出面] 現地表面より露出（Ⅲ層検出）

[遺構構成] 石積み（SR 2）

[規 模] 総延長約200m 幅：最大9.5m、最小4m 高さ最大3.1m、平均1.3m

[遺構所見] 東側城壁は今帰仁城跡の最も北側にある外郭の東側を周囲する城壁で、高さ最大3.1m、幅最大9.5mで築かれた空石積みである。調査は平成18年度に平面図を作成し、平成19年度に東南側約100mを、平成20年度に西側100mをPI-3000を用い石垣立面図を作成した。

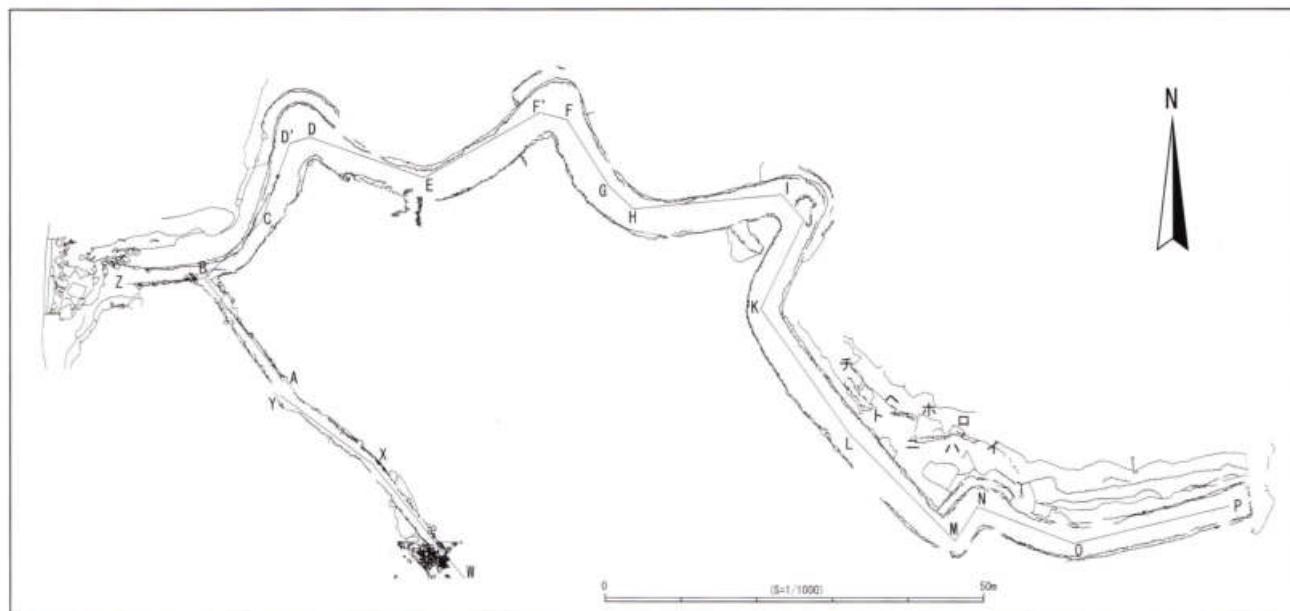
これまでの外郭の発掘調査の成果から、外郭東側城壁は2つの時期の石積みが見られることが分かっている。東側及び西側の城壁を最初に築造した第I期城壁。その後、内壁側では内壁面を後方（内側）に寄せて積みなおし、さらにSR1やSR2を城壁に取り付けている。

外壁側ではI期城壁の面石の上にそのまま積み上げるか、50cmから1m程度後方にずらして積み上げている。この時期の城壁を第II期城壁とする。I期城壁とII期城壁において使用する石材の選び方や積み方にははっきりとした差異が見られた。I期城壁は1m前後の長方形の石材を多用し、面をきれいに揃え重量感のあるしっかりとしたつくりになっている。しかし、II期城壁では50cm未満の小さめの石材を多用し、さらに積み方も雑で面はあまり揃わない。総じて稚拙な作りとなり、その分孕み出しなどの劣化が多く起こっているのが現状である。また、II期城壁はVIII区及びXI区に接する城壁で主に認められている。以下個別の城壁の現況について詳述していく。

#### 内壁

Z-B内壁（第51図-1a・2a、第52図） Z-Bの現状の石積みは東側城壁の一般的な厚さと比べてかなり薄く、2mほどしかない。これはC-D'内壁の途中から測点No.Zに至るまで同じような状況であり、この石積面は第II期城壁である。Z-B内壁において石材は雑に積まれており面はほとんど揃わない。その中で一応安定しているのは中央部でありここで高さ1.0m勾配が75度である。西側は岩にすりつけられている。東側ではSR2が接続するが一部が崩壊し裏栗石が露出している。また、栗石の上に乗っている面石もあるがこの栗石はI期城壁の栗石と考えられる。

B-C内壁（第51図-1b・2b、第52図） B-C内壁はII期城壁である。全体的に積み方が雑で崩壊しつつある箇所があり、現在は前面に土嚢を積んで遺構の保護を図っている。II期城壁の前面は礫敷に



第50図 外郭東側城壁位置図

なっておりこれはⅠ期城壁の栗石と考えられ、Ⅰ期城壁の根石も数石残っている。西側では岩盤が路頭し、1mほど高くなっていく。根石は岩盤の上に据えられている箇所もある。使用されている石材は小さく勾配は81度となる。SR2と接続する部分では両方の面石が互いに噛み合っていることからSR2とⅡ期城壁は同時期に築造されたと考えられる。

C-D'内壁（第53図-1a・2a、第54図）C-D'内壁ではアザナからSR1までがⅠ期城壁、SR1から西側ではⅡ期城壁となっており、B-C内壁と同様、礫敷の中にⅠ期城壁の根石が数石残っている状況である。Ⅱ期城壁は保存状況が悪く測点No.C付近で高さ1.5mが積まれているものの積み方が粗く面もそろわない。そのほかでは崩壊が進み栗石が露出している状況である。Ⅰ期城壁の根石より内側の礫敷の部分では水が捌ける穴があり、栗石が地下まで充填されている。

D'-D内壁（第53図-1b・2b、第54図）D'-D内壁はⅠ期城壁でアザナの内壁部分にあたる。今報告の内壁では最も保存状態がよく高さ2.8m、勾配81度となっている。しかし、面石と面石の間は隙間が大きくなっている。詰石の欠落が考えられる。また、D-E内壁では崩壊が進んでおり、そこに引っ張られるように滑り出している石もある。

D-E内壁（第55図-1a・2a、第56図）D-E内壁はⅠ期城壁とⅡ期城壁が並立する。ただしⅠ期城壁は根石を残すのみでその根石も一部欠損する。Ⅱ期城壁は西側の崩壊した部分から積み始め、SR1まで続く。Ⅱ期城壁は全体的に積み方が粗い。面石と面石の隙間も大きく、平たい石材を立てて使用し控えが短い不安定な積み方となっている。SR1との接続部分ではⅠ期城壁の面石がSR1の内部に続いている。SR1はⅠ期城壁の上に被って築造されている様子が観察される。SR1とⅡ期城壁ではⅡ期城壁のほうがSR1に被っていることから、これらの遺構は古い順に、Ⅰ期城壁、SR1、Ⅱ期城壁となる。

E-F'内壁（第55図-1b・2b、第56図）E-F'内壁はⅠ期城壁のみとみられるが保存状況は悪い。P-32グリッドにおいては発掘によって検出された根石が残るのみでSR1との間には約50cmに及ぶ土層の堆積がある。城壁の内部に土が堆積する状況はP-32グリッドからP-33グリッドにおいて認められる。この間の面石はほとんどが根石のみという状況である。O-33グリッドにおいても残りは悪く、F'-F内壁で山なりに立ちあがっていく。

F'-F内壁（第57図-1a・2a、第58図）F'-F内壁はアザナの内壁である。中央部で高さ2.6m、勾配81度となるがその両側では崩壊が進む。ここでも面石と面石の間の隙間が大きいため、詰石の欠落が考えられる。下端では根石とその上の1石までが前に突き出しており、根石を前に出すアゴ石状の構造とは違った形態となっている。

F-G内壁（第57図-1b・2b、第60図）F-G内壁は保存状況が悪く、根石の欠損も一部で見られる。測点No.F側では高さ1.9mほどになるが、その他では1mに満たないのがほとんどである。根石を30cm程度前に出しアゴ石状にする。裏栗には面石に使用されているよりも大きな石材が多数ある。

G-H内壁（第59図-1a・2a、第60図）G-H内壁はアザナとアザナに挟まれた内壁側に突出する石積みである。測点No.GとHそれぞれの付近では根石のラインは曲線になるがどちらも保存状況は著しく悪く崩壊が進む。特に、P-35グリッドにおいては根石も欠失しておりそのラインも不明となつて

いる。測点No.GとHの間においても本来の高さの半分ほどになっていると思われる。ここでも根石はアゴ石状に前にせり出した形になっている。

H-I内壁（第59図-1b・2b、第60図） H-I内壁も保存状況は非常に悪い箇所である。測点No.HからVII区とV区の境界になる石積みまでの間は根石も欠失している。P-36グリッド内では根石とその上に1、2石を残して崩落している。なお、測点No.Iから約6mの所で不明遺構が内壁面に覆いかぶさっている。C-D'内壁に被るSR1と類似しているように見えるが詳細は不明である。

### 外壁

Z-B外壁（第61図-1a・2a、第62図） Z-B外壁は保存状況が良好であり、面石の天端と栗石の天端がほぼ一致する。しかし測点No.Z付近では根石のみが約5mにわたって残存する。使用されている石材をみると上部と下部ではっきりとした違いが見て取れる。下部では長方形で大きめの石材を使用し、面はきれいに揃えて積まれている。重量感があり、安定している。上部は石材が小さくなり形も長方形、方形、三角形などが使用され面がきれいに揃わなくなる。勾配も上部はわずかに緩くなる。下部の石積みがI期城壁、上部の石積みがII期城壁である

B-C外壁（第61図-1b・2b、第62図） 保存状況は良好である。ここでも下部のI期城壁と、上部のII期城壁に分けることができる。高いところでは2.2m、勾配は74度となる。

C-D'外壁（第63図-1a・2a、第64図） C-D'外壁は全体の4分の1程度が崩落している。しかし残存している部分では大きく孕み出している個所や、石材の割れ、詰石の抜け落ちた箇所が見られる。ここでもI期城壁とII期城壁の境界線が見られる。また、外壁面が2段になっている箇所があるがこれはII期城壁と考えられる。アザナ部分ではいわゆる補強用石積みが取り付けられており、スロープ状になっているため簡単に登ることができるが、これは崩落によるものと考えられる。

D'-D外壁（第63図-1b・2b、第64図） アザナ突出部にあたり、補強用石積みが取り付けられている。ここではII期城壁は見られない。城壁本体、補強用石積みとも孕み出しが見られ、城壁本体の上部で約1mが崩落し、補強用石積みでは西側が徐々に低くなっていく。

D-E外壁（第65・66図） D-E外壁では大きく崩壊している箇所もあるが、面石が残っている箇所では裏込め石までの高さを保持している。ここではI期城壁とII期城壁の線引きがはっきりせず詳細は不明である。面石はよく残っているものの、孕み出しや割れ石が多くみられる。補強用石積みについても孕み出しや崩落が見られる。

E-F'外壁（第67・68図） 面石の残りは比較的よく、I期城壁とII期城壁の境目もはっきりとしている。I期城壁は孕み出し、割れ石が多少みられるが安定しているといえる。一部では石材がやや小ぶりになり詰石が多用される個所が認められる。II期城壁は全体的に石材が小さく積み方も雑であり各所で孕み出しや部分崩壊が認められる。測点No.Eから補強用石積みに至るまでの間は概ね2m以上の高さを保持し、勾配は77度から84度の間にわたります。アザナ部分では2分の1程度が崩落している。ここでも補強用石積みが取り付けられているがC-D'外壁のようなスロープ状ではなく、城壁本体に接続する石積みが検出されている。しかし、補強用石積み自体は崩落が進み、残存する箇所においても孕み出しがみられる。

F'-F外壁（第69図-1a・2a、第70図）アザナ突出部にあたるが補強用石積みを含めほとんど崩壊している状況である。残存している石積みをみると、上部が後方にずれる2段積みになっており、これはC-D'外壁で見られたようにⅡ期城壁と考えられる。わずかに残る補強用石積みも保存状況は極めて悪い。

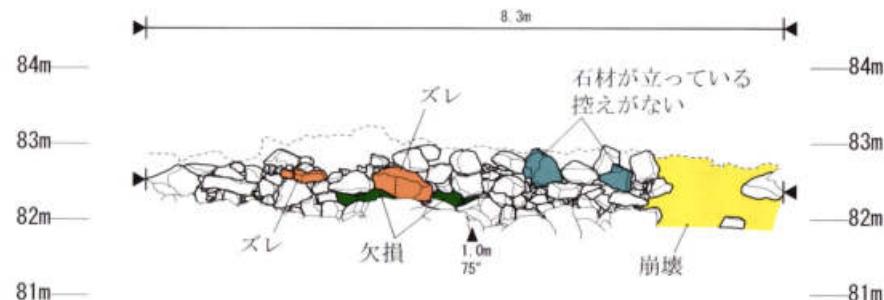
F-G城壁（第69図-1b・2b、第70図）アザナ部分と補強用石積みについては保存状況が悪くほとんど崩壊てしまっている。しかし、補強用石積みの城壁本体に接続する石積みの根石は残存する。それ以外の部分では面石の残存状況は良いといえるがその状態は悪く、大きく孕み出す箇所や石材の割れが認められる。測点No.G付近では崩落も認められる。

G-H外壁（第71図-1a・2a、第72図）G-H外壁は約10mの範囲の中に3ヶ所の部分崩落箇所がある。さらにその周辺ではそれぞれ孕み出しや面石の傾きが認められる。測点No.H側の崩落箇所では内部に土が検出されているが、これは表面的なものでより内部への堆積は認められていない。

H-I外壁（第71図-1b・2b、第72図）外壁面が3分の2以上残り保存状況は比較的良好である。ただし、内壁側がほとんど崩壊していることと、裏込め石までの高さが約1.6mから約2mと低くなっていることから、裏込め石もある程度崩落していることも考えられる。残存する石材をみると孕み出しや割れ石などが認められる。ここでも約2mと小規模ではあるが上部が後方にずれる2段積みになる箇所がみられる。補強用石積みはアザナ突出部を残してほぼ崩壊しており城壁本体に接続する部分やその他の詳細については不明である。

以上東側城壁について、外観から観察して窺える特徴を紹介した。東側城壁は大隅城壁に接続せず崖側に向けてそのまま石積みが消失するように無くなる。西側端は県道115号線など近代の工事によって大きく欠損しており、本来は城門部分を造っていたと考えられるが詳細は残念ながら不明である。これまで確認された東側城壁の構造的な特徴として、城壁は基盤岩である古期石灰岩を積み上げた石積で、今回紹介したⅡ期城壁を含めて後代の改変や修築が数ヶ所見られるが、Ⅰ期石垣の本來的な特徴は、横方向に長手の石材を用い、安定感のある石積で、栗石に土を用いないなど空石積みの城壁となっている。勾配はおよそ79度～86度で、城壁基部の幅はおよそ4m、高さは最大で3.1mを測る。今帰仁城跡内でも主郭、志慶真、大隅などは約7mの高石垣であることを考えると、今帰仁城跡内では低平な石垣である。4つの突出部「アザナ城壁」を築き、それぞれのアザナ城壁の外側に取り付くように補強用の石積が築かれている。アザナ部分などでは城壁基部の幅が8mを測るところもあるが、城壁全体を曲線でもって築かれ、城内の防御戦として独特的な景観を作り出している。城壁は、一部後代によって改築されたと考えられる。これらは今回Ⅱ期城壁とした。Ⅱ期城壁は後述するSR1やSR2の構築などとほぼ同時期に行われた大規模な修築工事と推定される。具体的にはB-C区間の内壁石積で現況で確認できる石積遺構はⅡ期城壁である。またその後背にあるC-D'外壁の2段積みになっている上部の城壁などもこの修築以後構築されたものと考えられる。さて、本城壁の時期的な考察についてであるが、現段階では城壁下へ潜り込んでいる造成層（V区Ⅱe層）の出土状況から、上限を14世紀中頃以降という指摘に留まらざるを得ない。城壁構築年の推定は、防御ラインとして一体であったと考えられ、外郭西側城壁を含めた全体の調査成果を待って検討したい。

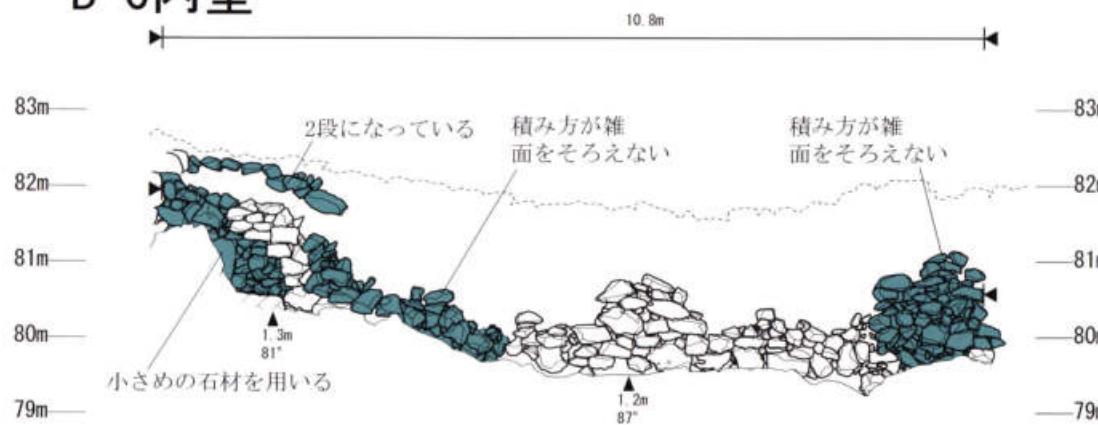
## Z-B内壁



第51図-1a

凡例	
■	ハラミ
■	ズレ
■	ワレ
■	欠損
■	部分崩壊
■	全体崩壊
■	その他
□	岩
□	崩落石
---	栗石天端
—	解体復旧予定ライン

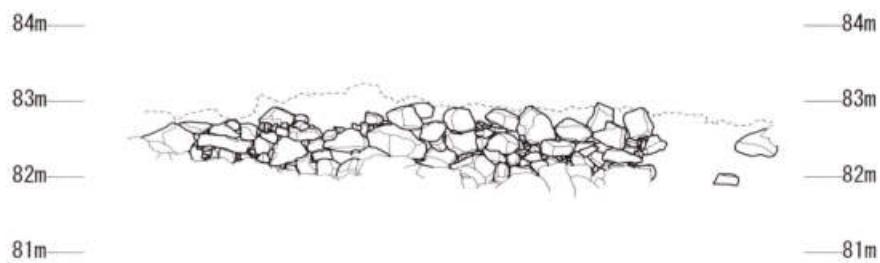
## B-C内壁



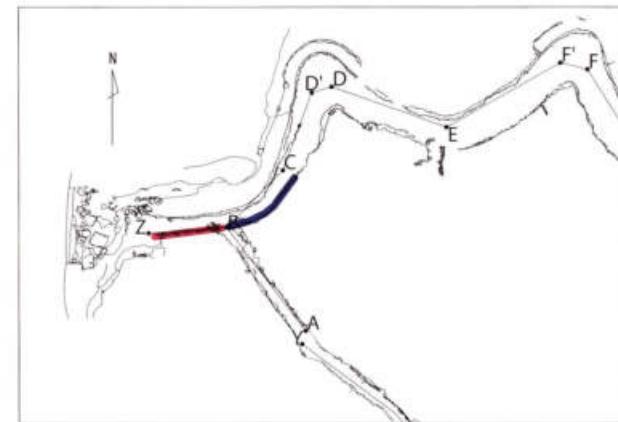
第51図-1b

0m (S=1/100) 5m

## Z-B内壁

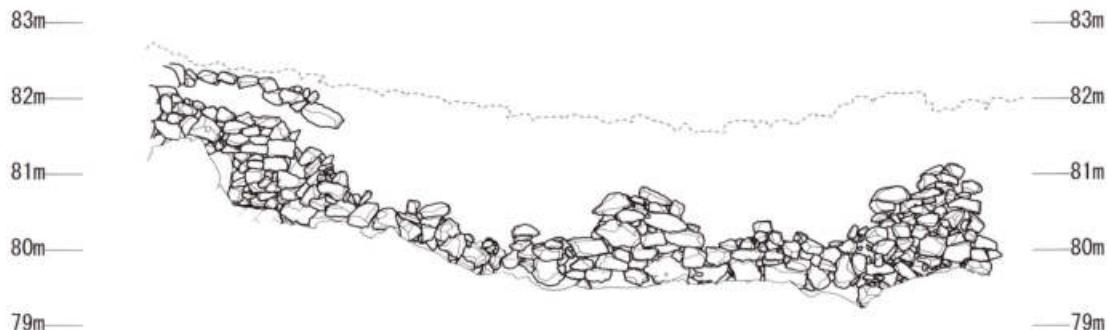


第51図-2a



第52図 東側城壁（内壁）Z-B、B-C 位置図

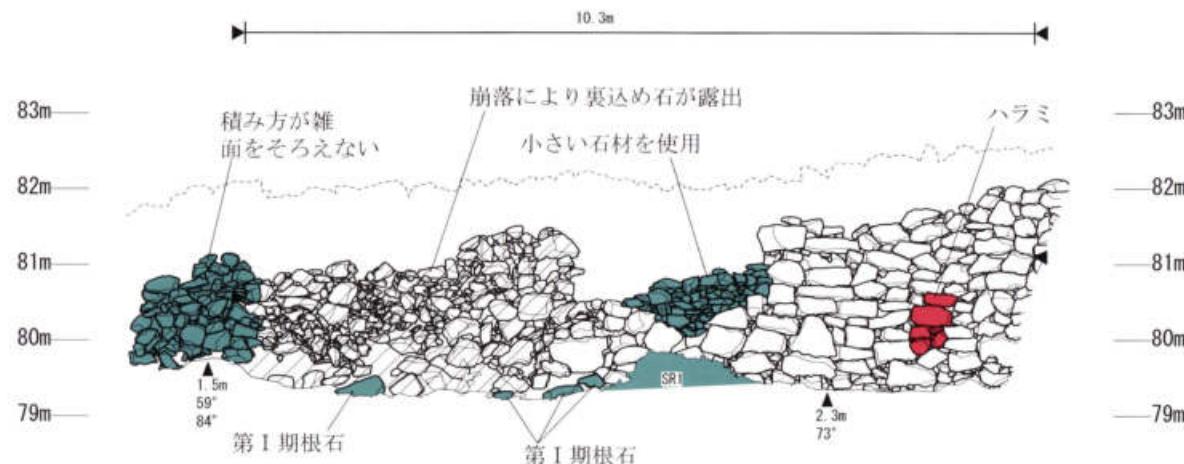
## B-C内壁



第51図 東側城壁（内壁）Z-B、B-C 位置図

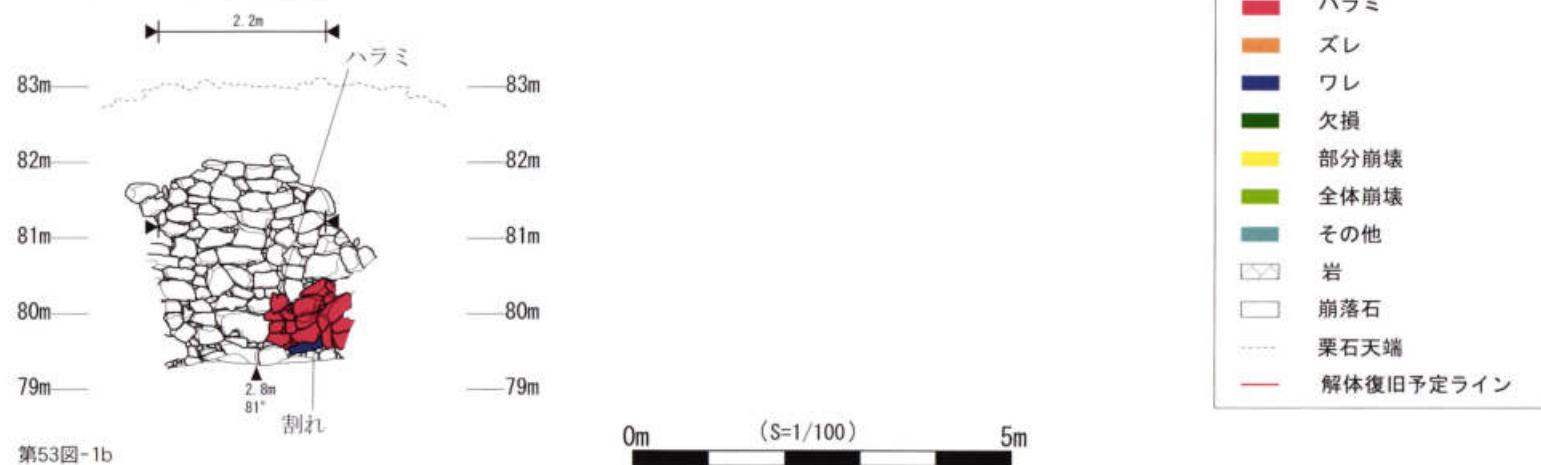
0m (S=1/100) 5m

## C-D' 内壁



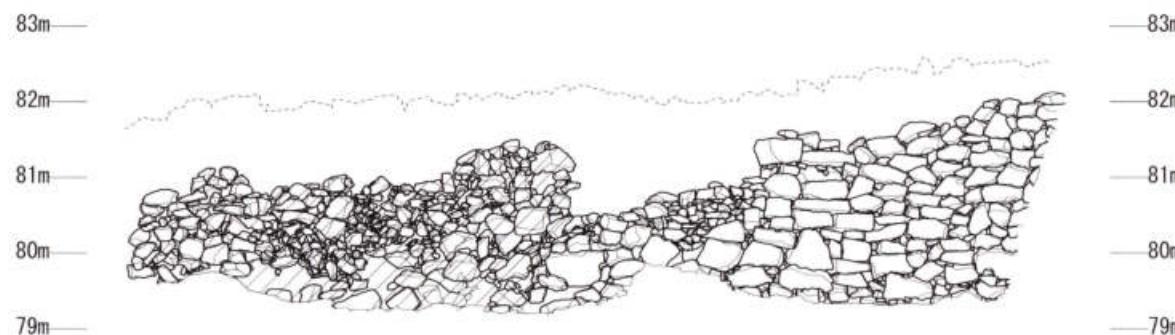
第53図-1a

## D' -D内壁



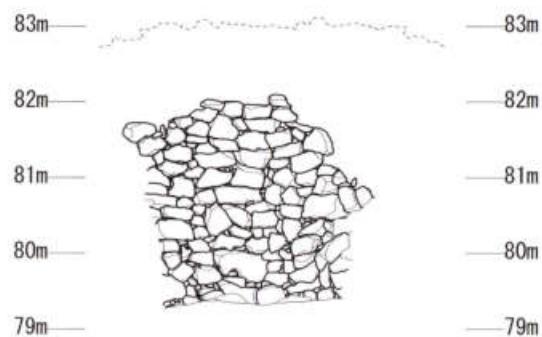
第53図-1b

## C-D' 内壁



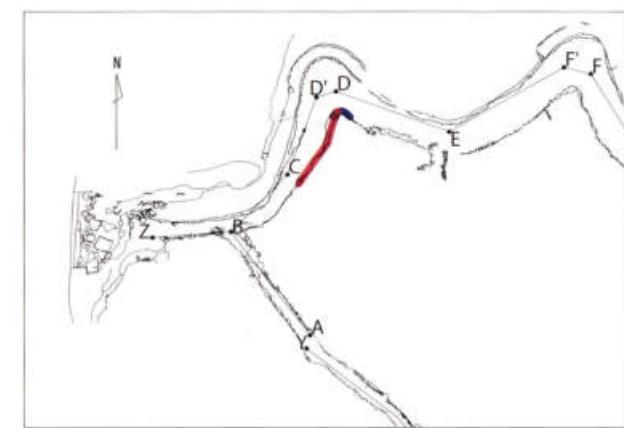
第53図-2a

## D' -D内壁



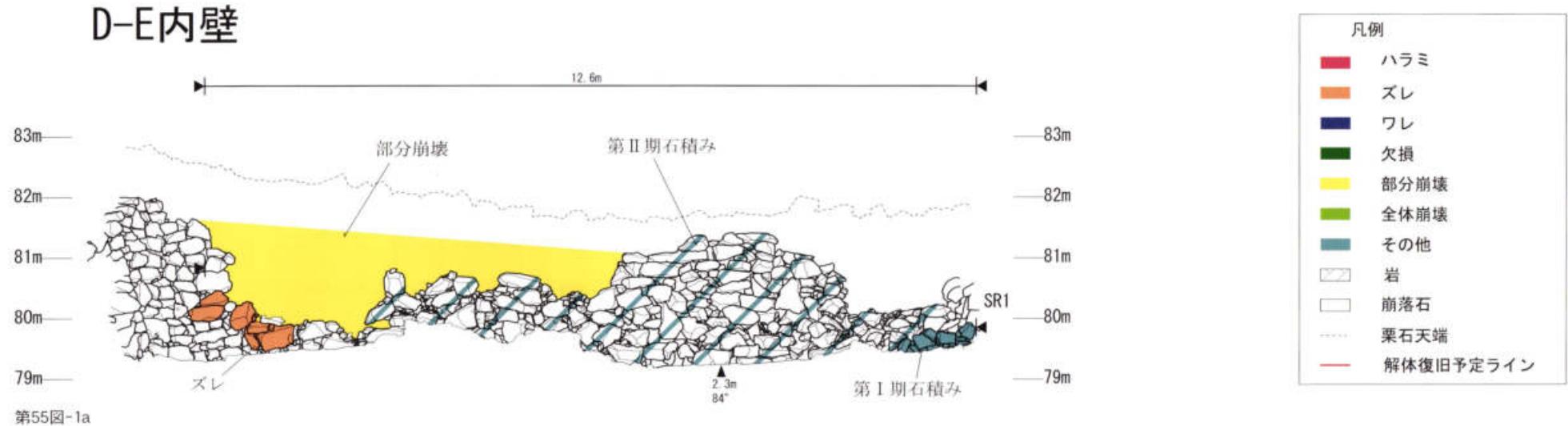
第53図-2b

0m (S=1/100) 5m

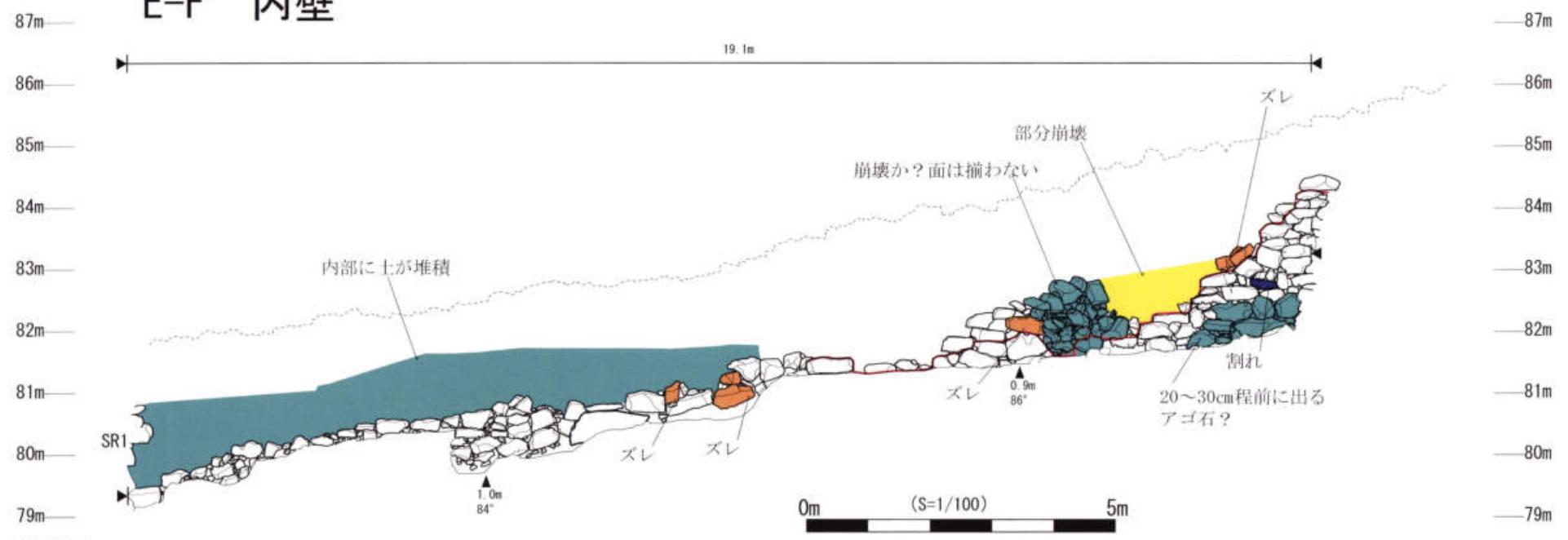


第54図 東側城壁（内壁）C-D'、D'-D 位置図

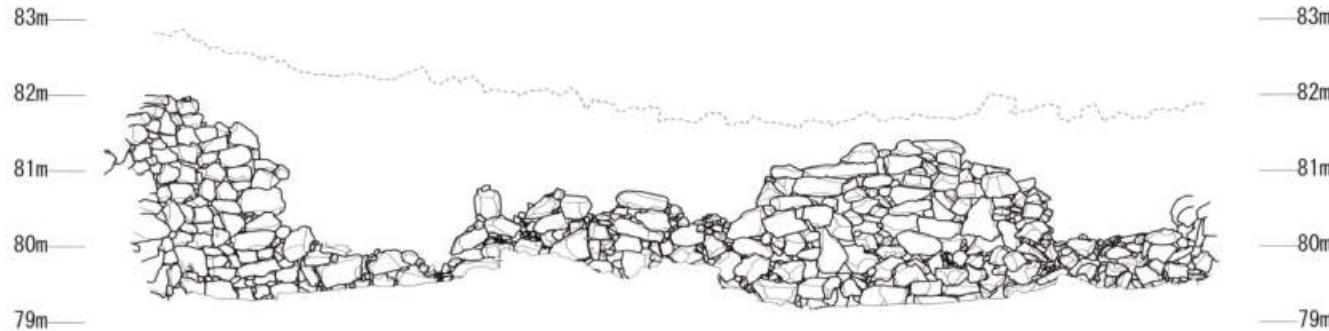
## D-E内壁



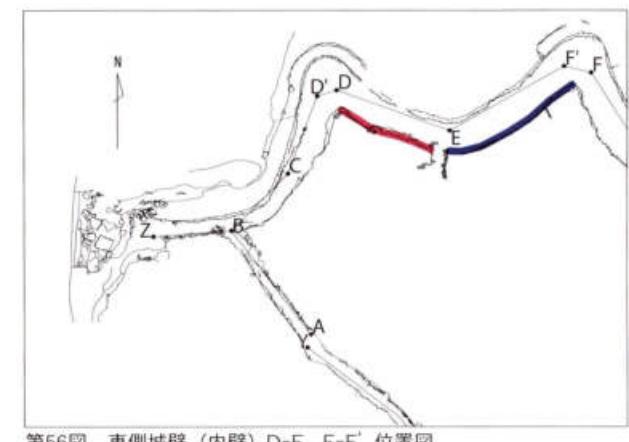
## E-F' 内壁



## D-E内壁

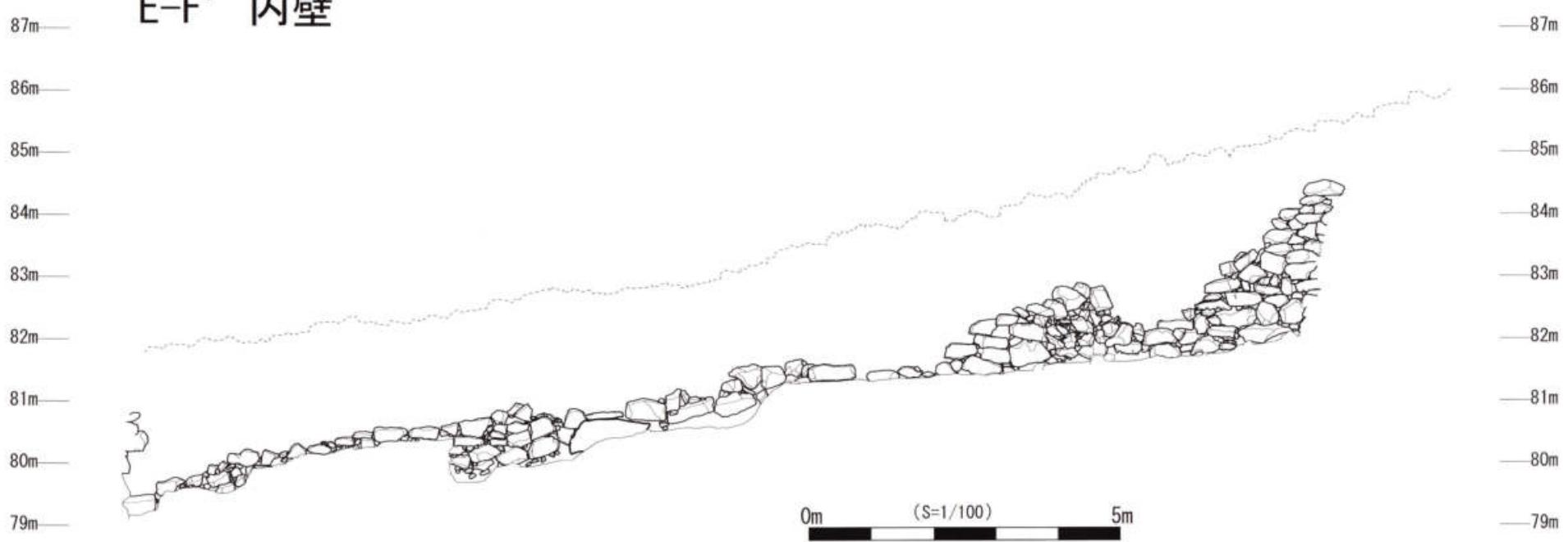


第55図-2a



第56図 東側城壁（内壁）D-E、E-F' 位置図

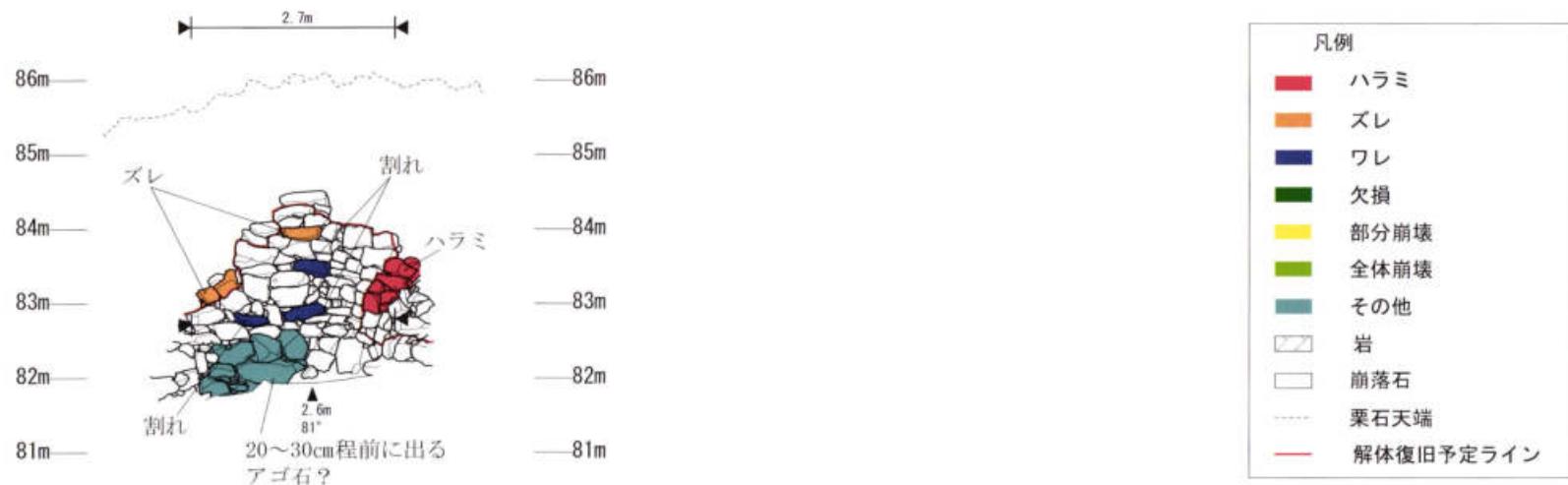
## E-F' 内壁



第55図-2b

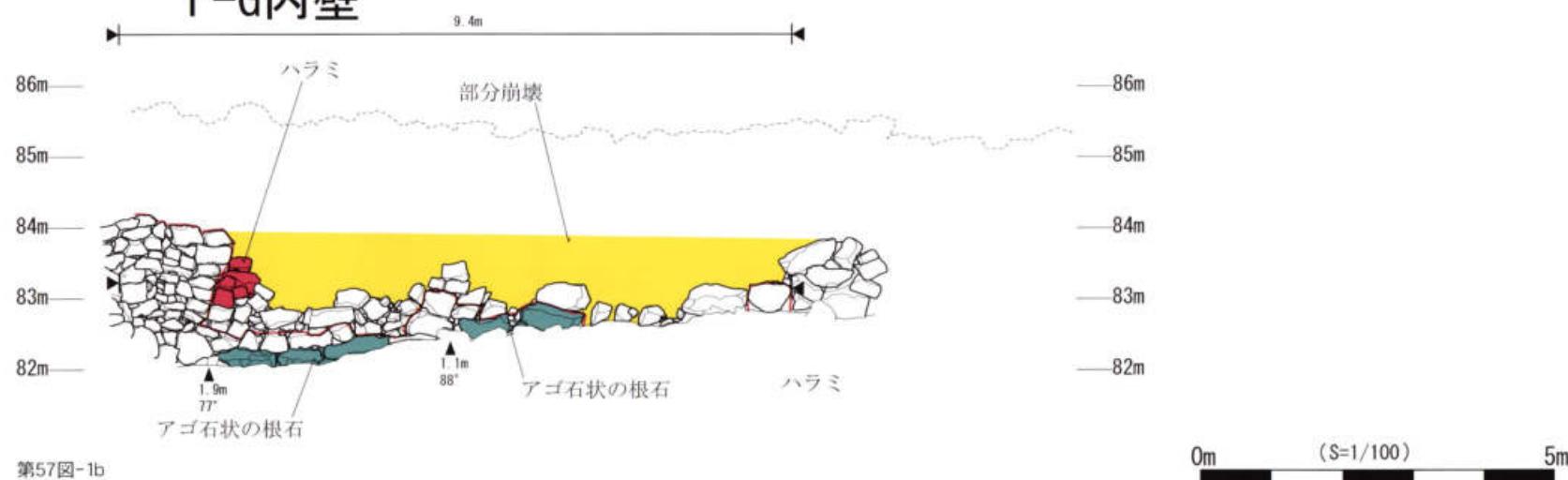
第55図 東側城壁（内壁）D-E、E-F'

## F' - F内壁



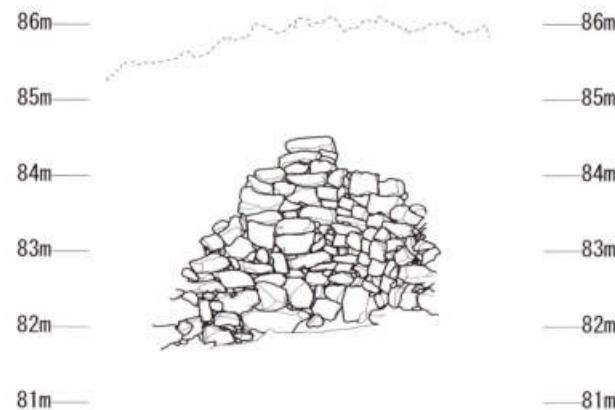
第57図-1a

## F-G内壁

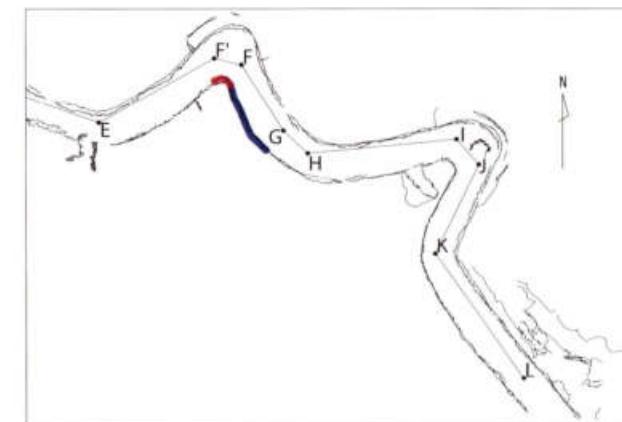


第57図-1b

## F' - F内壁

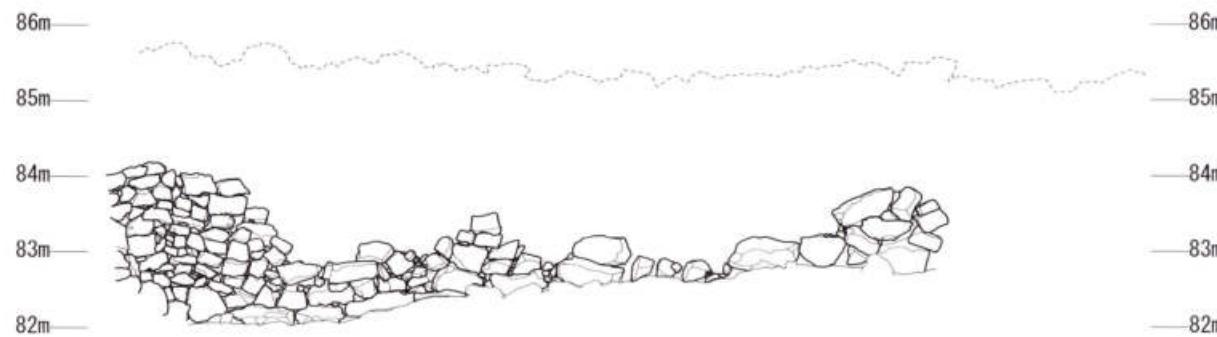


第57図-2a



第58図 東側城壁（内壁）F'-F、F-G 位置図

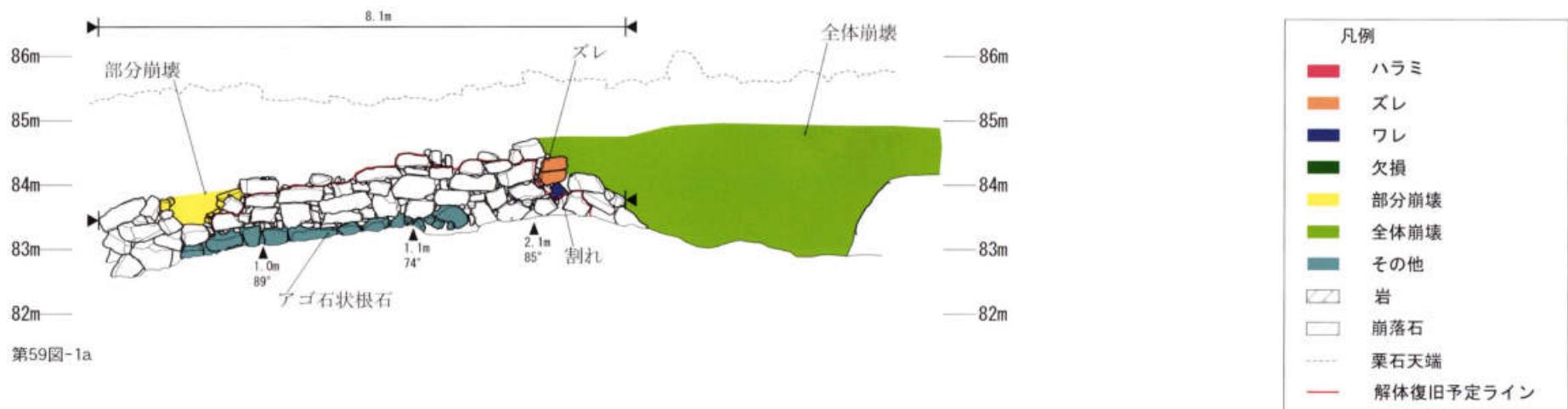
## F-G内壁



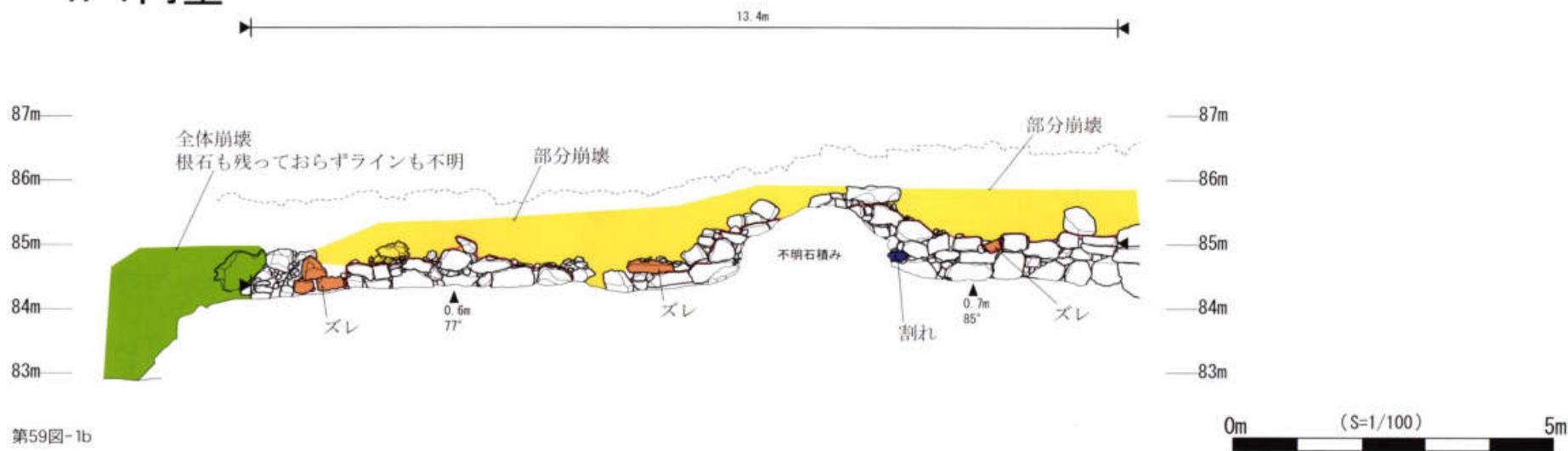
第57図-2b



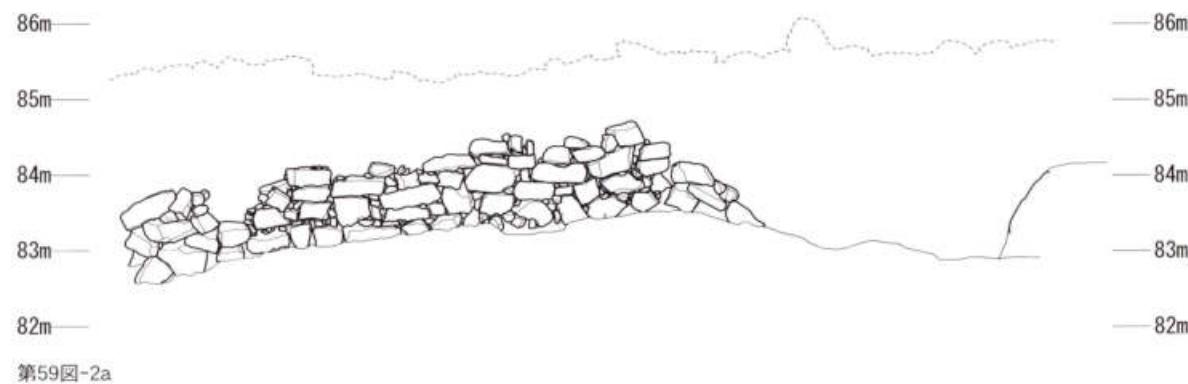
## G-H内壁



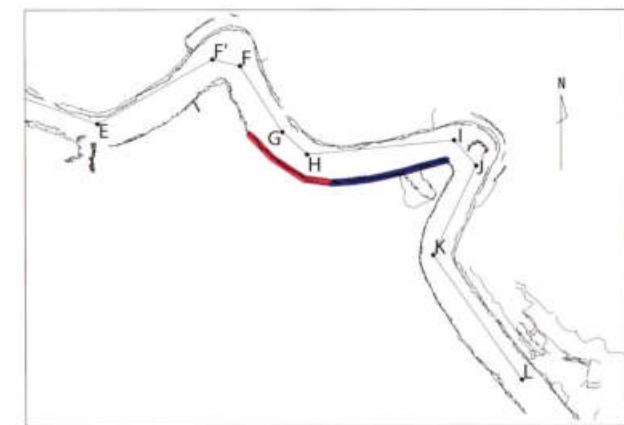
## H-I内壁



## G-H内壁

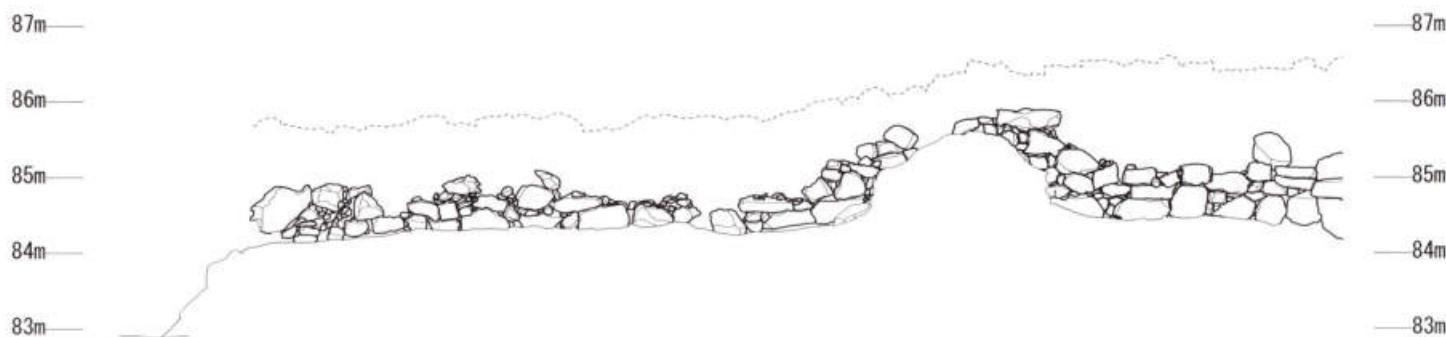


第59図-2a



第60図 東側城壁（内側）G-H、H-I 位置図

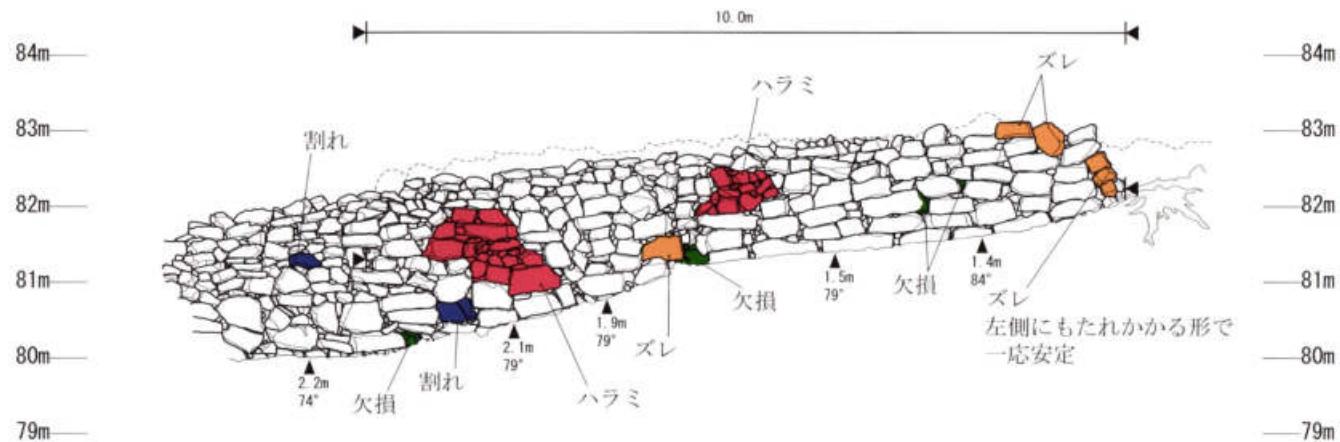
## H-I内壁



第59図-2b

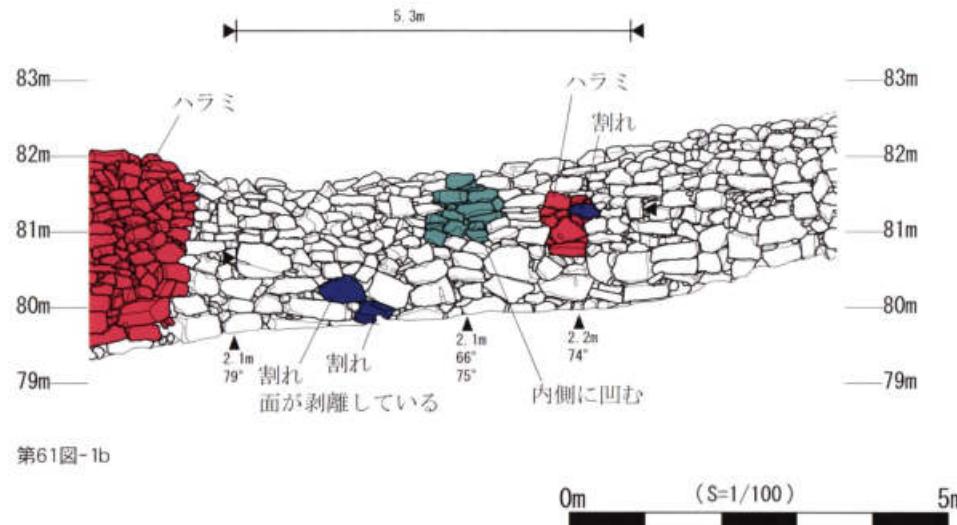


## Z-B外壁



第61図-1a

## B-C外壁

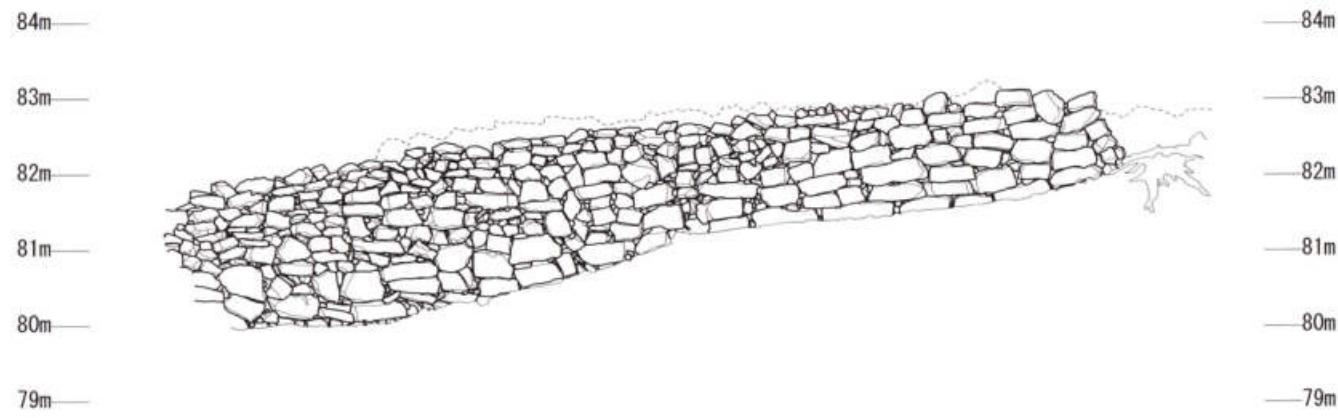


第61図-1b

凡例
ハラミ
ズレ
ワレ
欠損
部分崩壊
全体崩壊
その他
岩
崩落石
栗石天端
解体復旧予定ライン

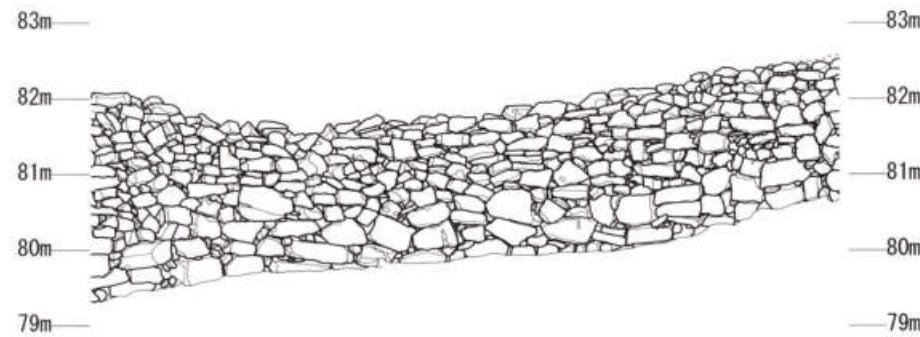
0m (S=1/100) 5m

## Z-B外壁



第61図-2a

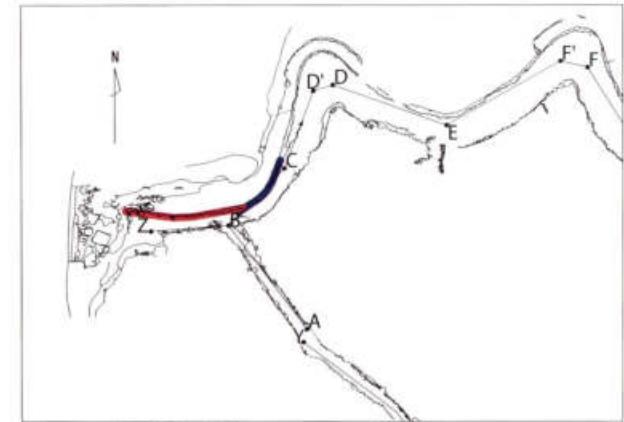
## B-C外壁



第61図-2b

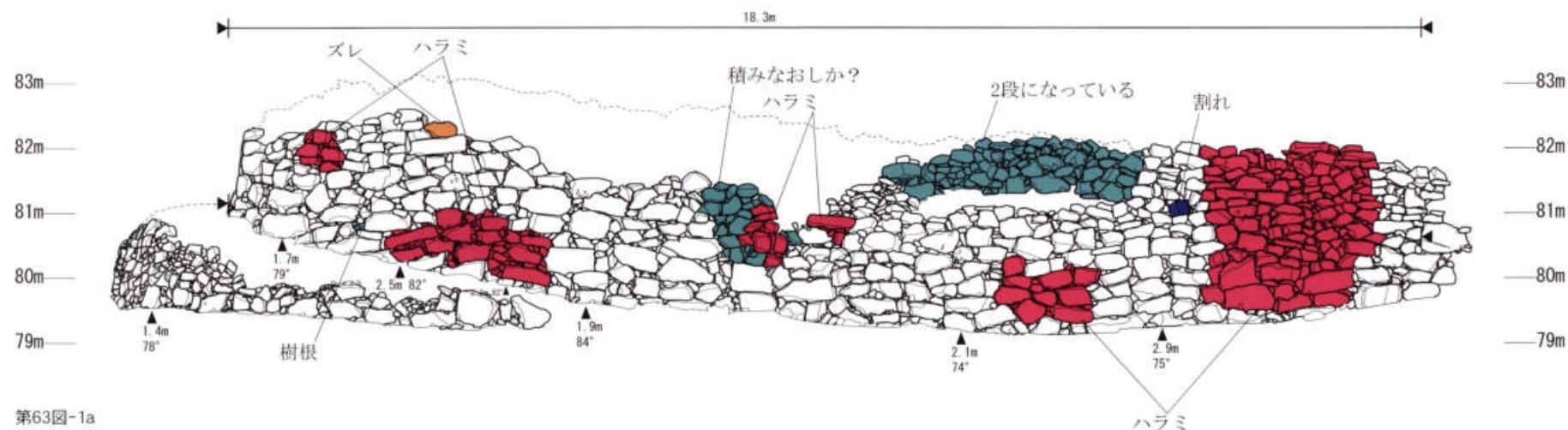
第61図 東側城壁（外壁）Z-B、B-C

0m (S=1/100) 5m



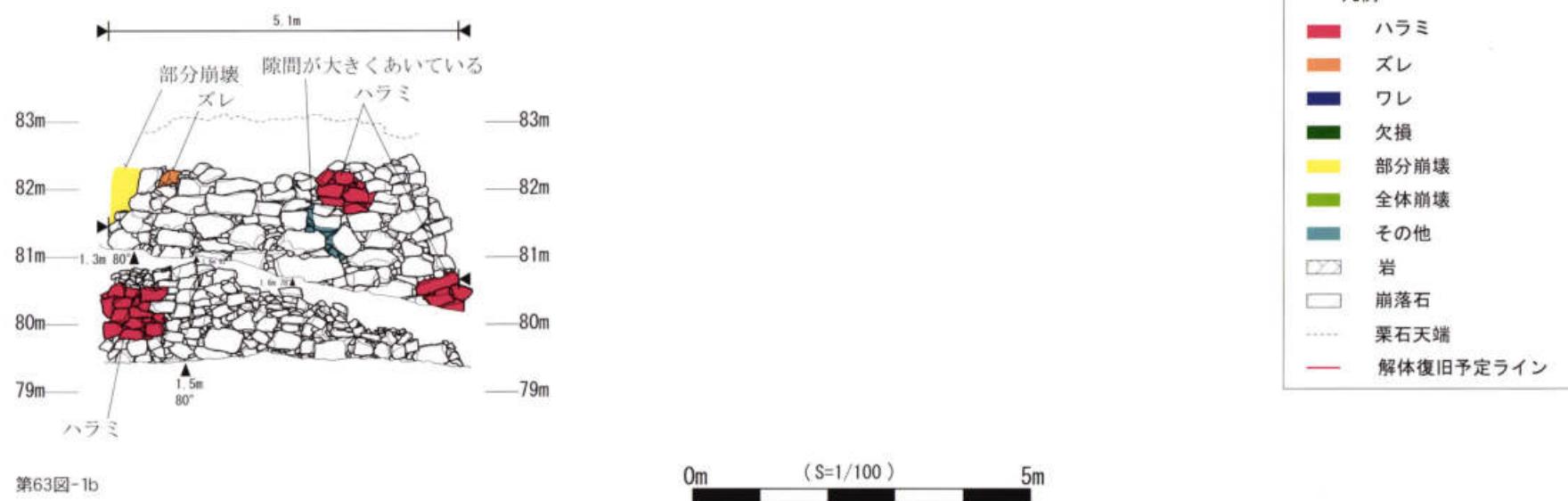
第62図 東側城壁（外壁）Z-B、B-C 位置図

## C-D' 外壁



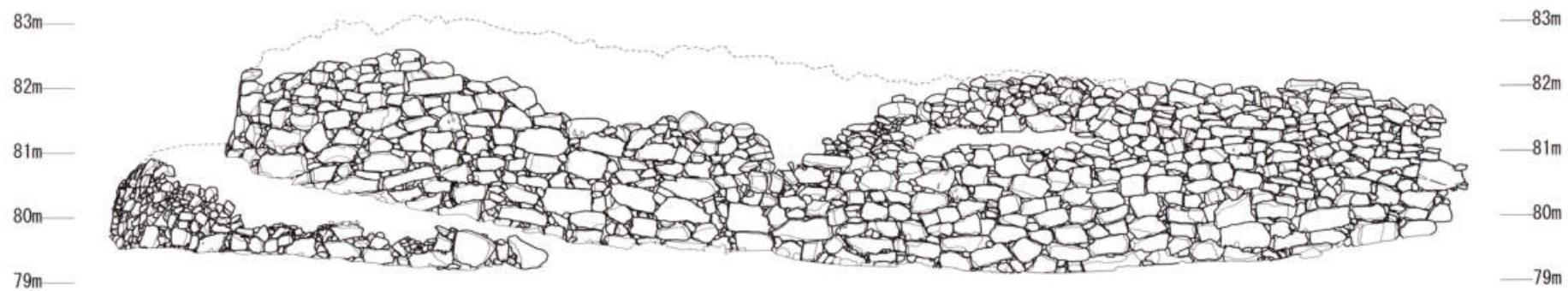
第63図-1a

## D' -D外壁



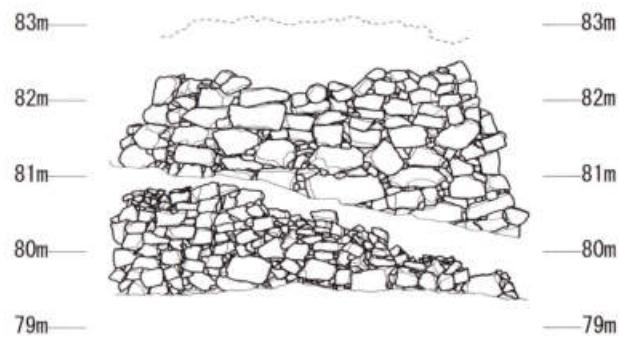
第63図-1b

## C-D' 外壁



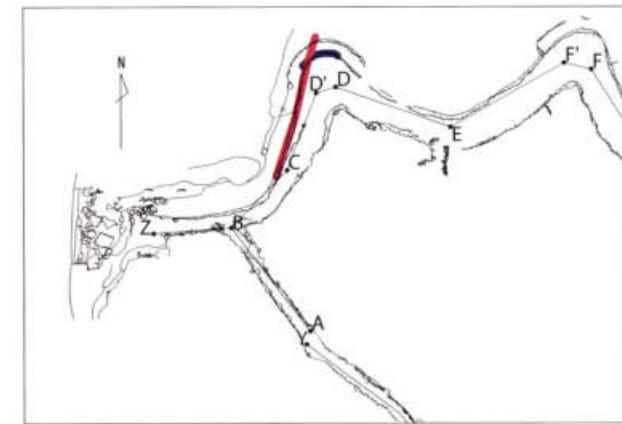
第63図-2a

## D'-D外壁

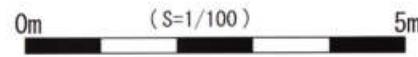


第63図-2b

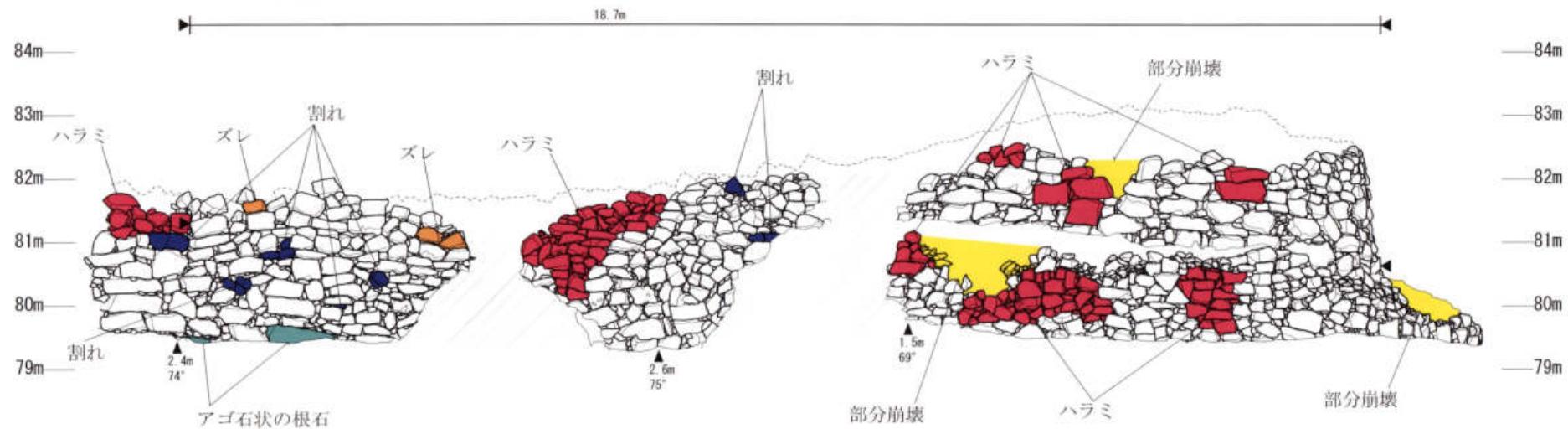
第63図 東側城壁（外壁）C-D'、D'-D



第64図 東側城壁（外壁）C-D'、D'-D



## D-E外壁

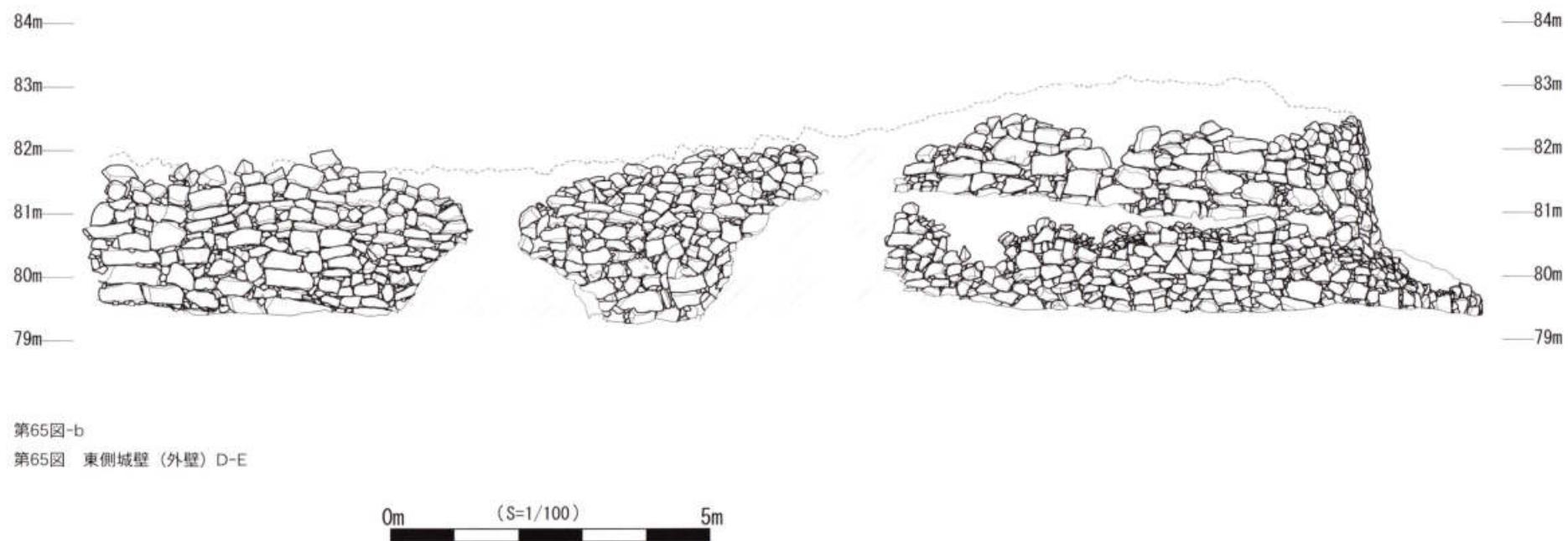


第65図-a

0m (S=1/100) 5m

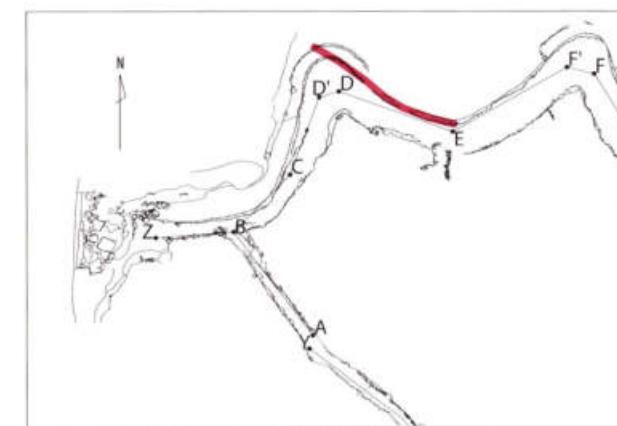
凡例	
■	ハラミ
■	ズレ
■	ワレ
■	欠損
■	部分崩壊
■	全体崩壊
■	その他
□	岩
□	崩落石
---	栗石天端
—	解体復旧予定ライン

## D-E外壁



第65図-b

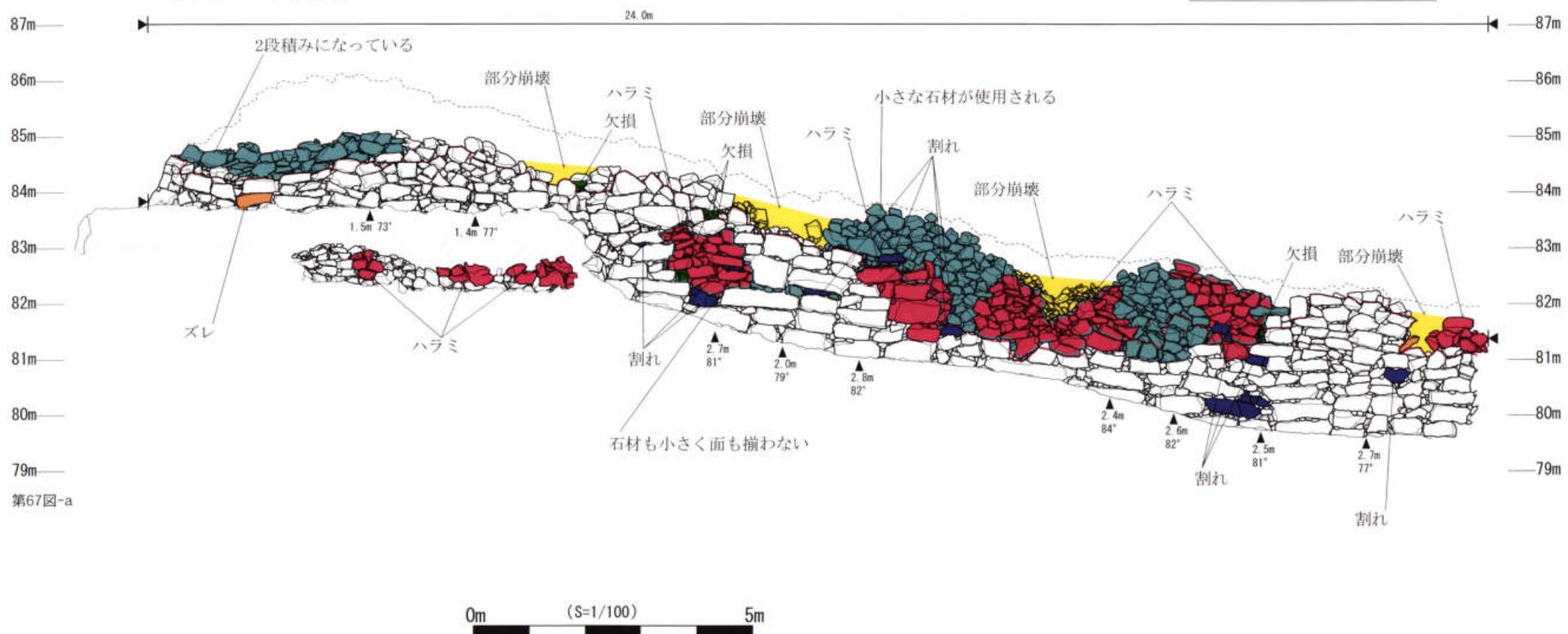
第65図 東側城壁（外壁）D-E



第66図 東側城壁（外壁）D-E 位置図

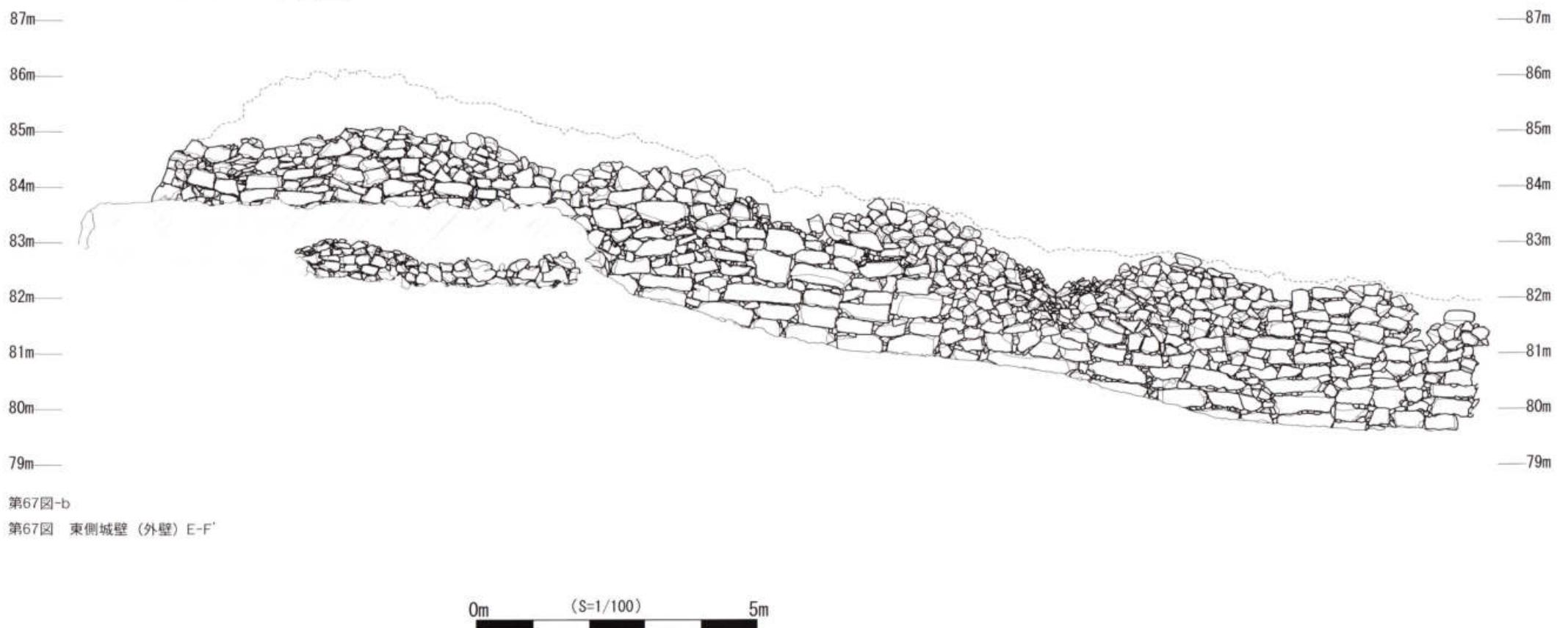
凡例	
■	ハラミ
■	ズレ
■	ワレ
■	欠損
■	部分崩壊
■	全体崩壊
■	その他
■	岩
■	崩落石
---	栗石天端
—	解体復旧予定ライン

## E-F' 外壁



第67図-a

## E-F' 外壁

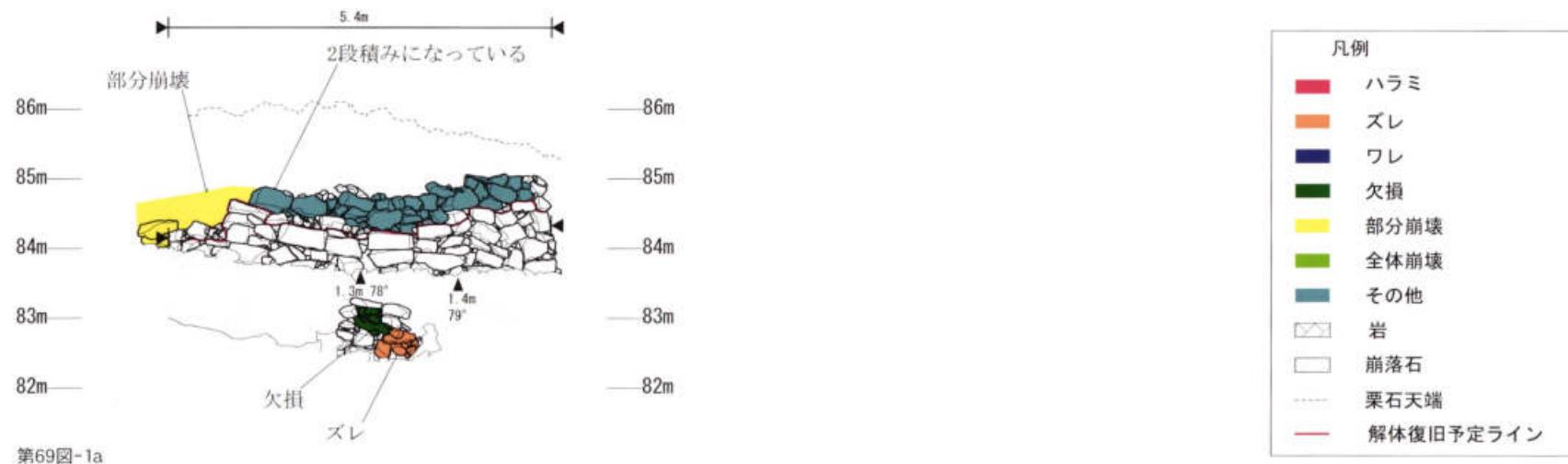


第68図 東側城壁（外壁）E-F' 位置図

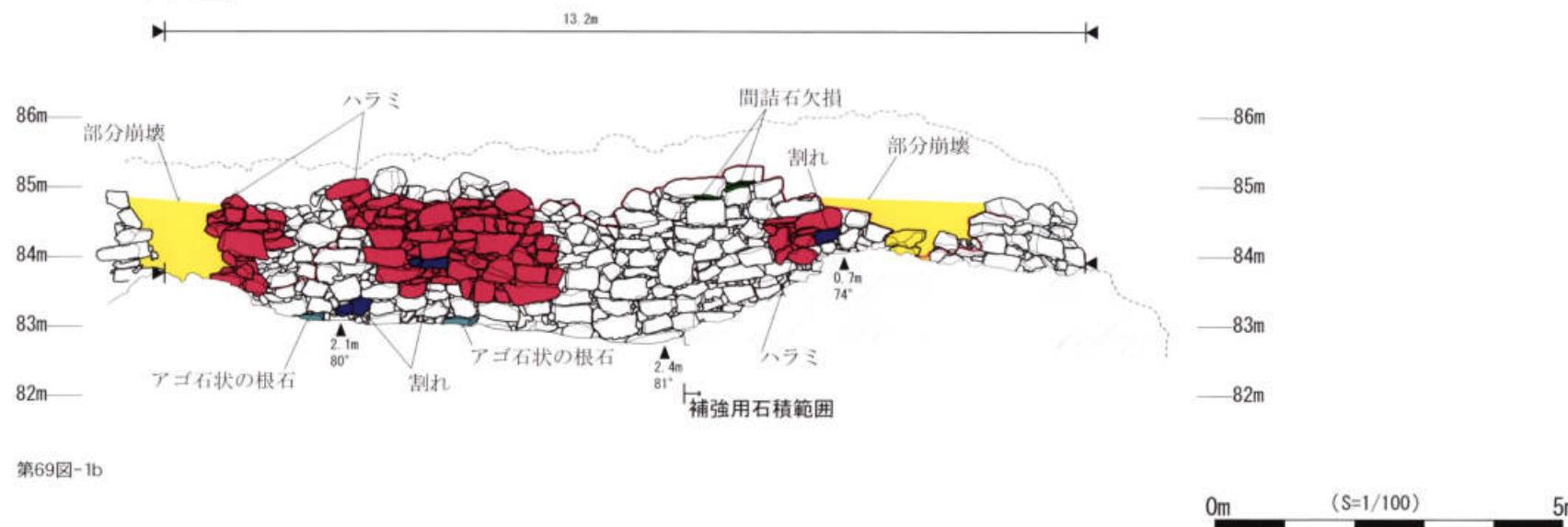
第67図-b

第67図 東側城壁（外壁）E-F'

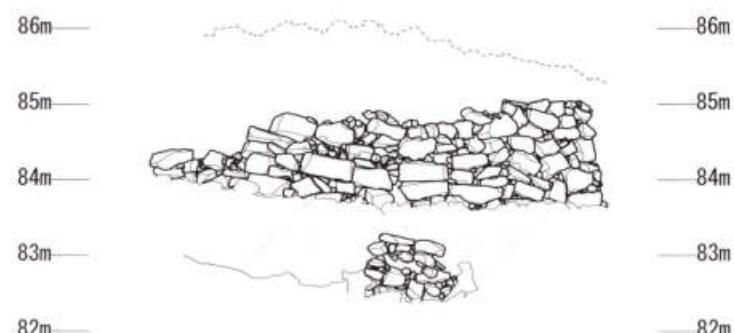
## F' - F外壁



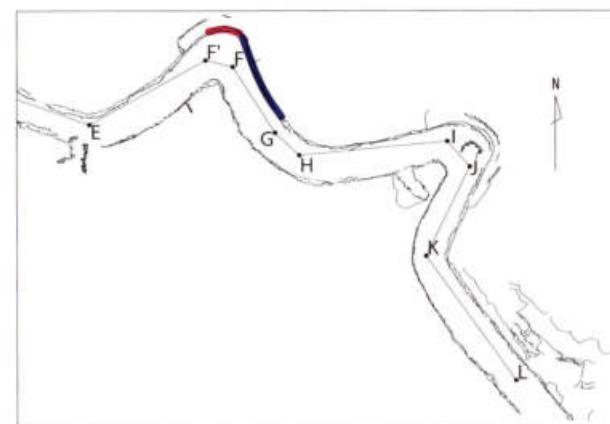
## F-G外壁



## F' - F外壁

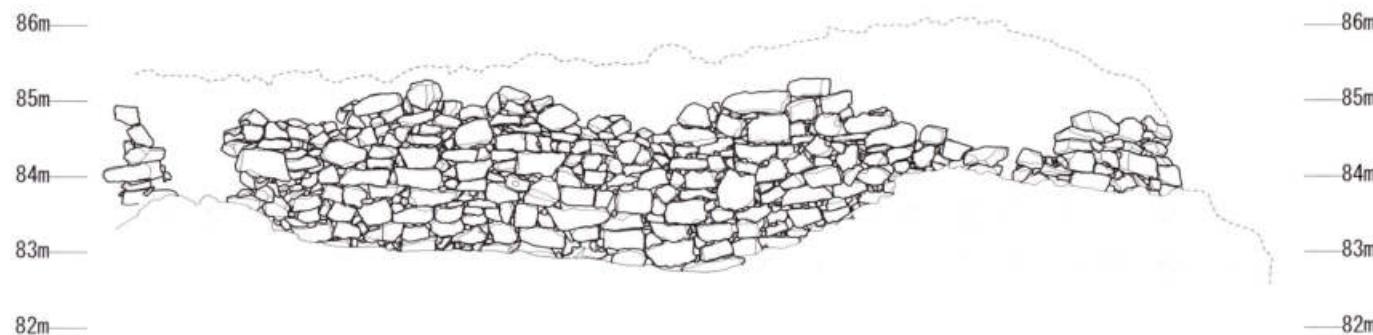


第69図-2a



第70図 東側城壁（外側）F'-F、F-G 位置図

## F-G外壁

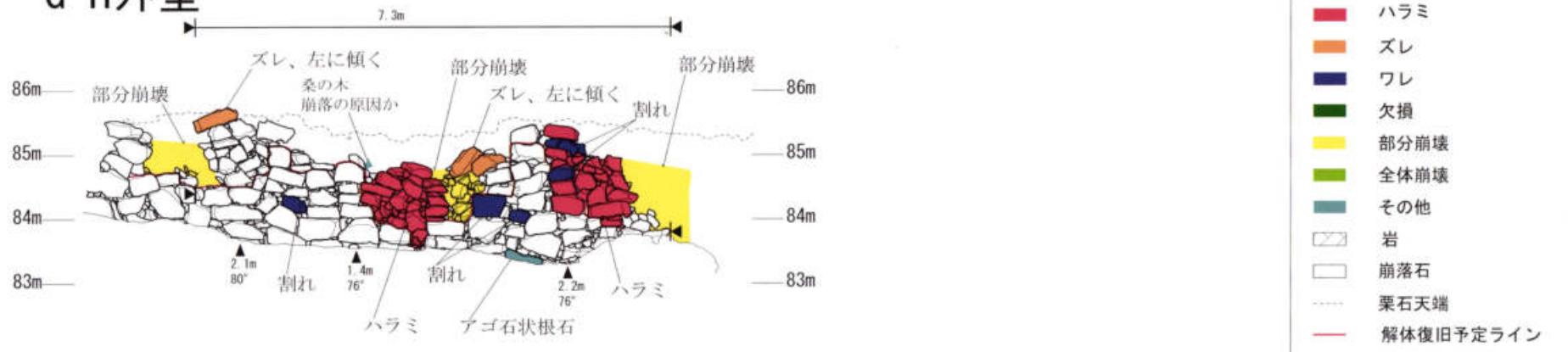


第69図-2b

第69図 東側城壁（外壁）F'-F、F-G

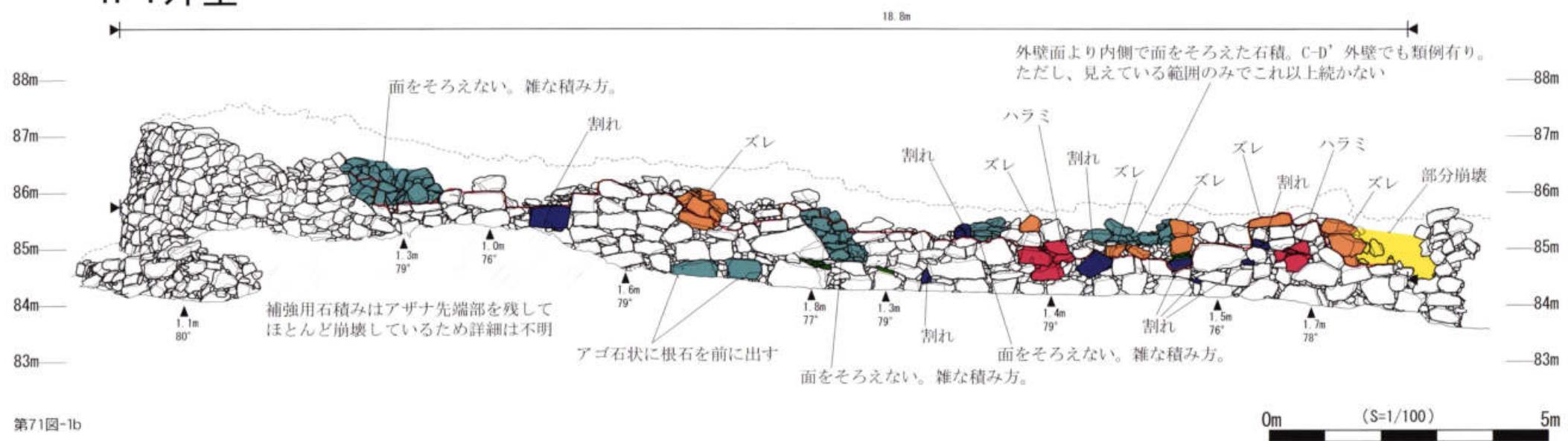
0m (S=1/100) 5m

## G-H外壁



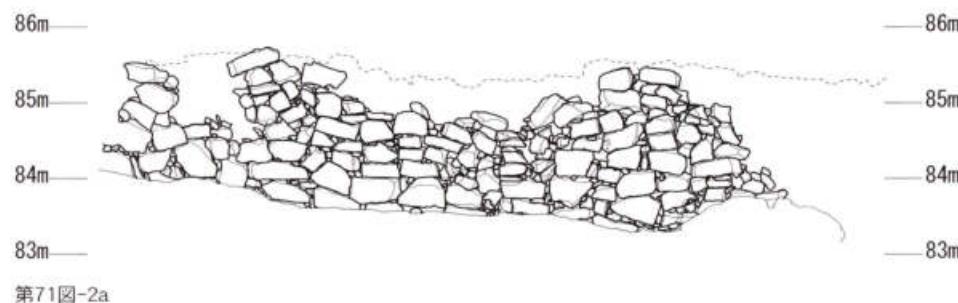
第71図-1a

## H-I外壁

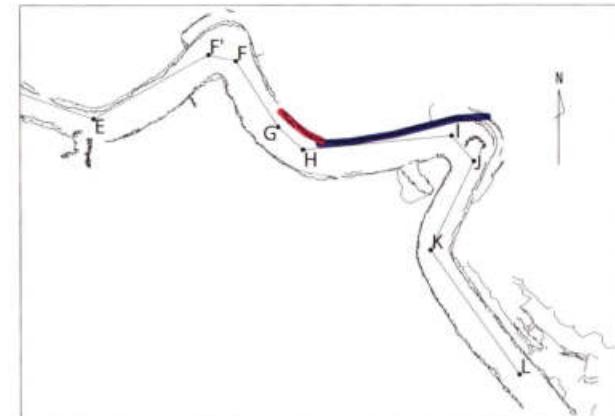


第71図-1b

## G-H外壁

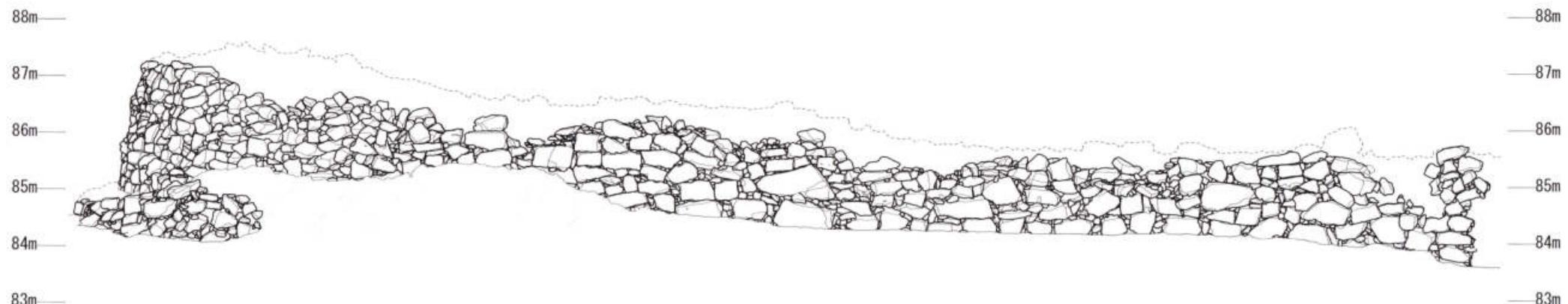


第71図-2a



第72図 東側城壁（外壁）G-H、H-I 位置図

## H-I外壁



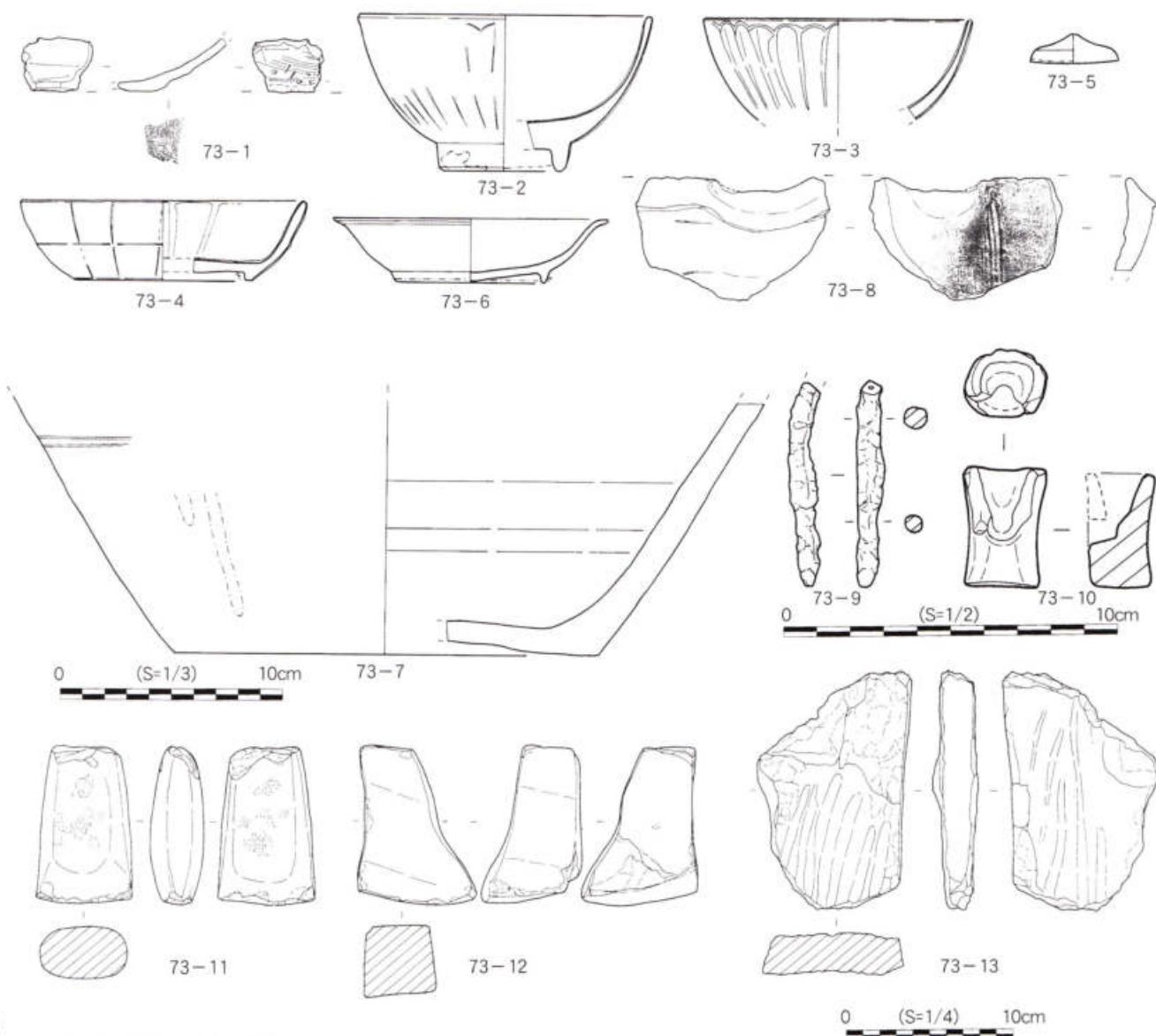
第71図-2b

第71図 東側城壁（外側）G-H、H-I

0m (S=1/100) 5m

【遺物】第73図は東側城壁の調査時及び修理工事で崩落石もしくは城壁内裏込から出土した資料である。

1. 土器 1はグスク土器の第3様式底部で、根石確認トレンチ③（第75図に図示）で回収された遺物である。
2. 青磁 2・3は龍泉窯系VI類碗。2の弁間は広く粗雑な造りとなる。4は碁笥底の杯で、外体面中央に隆帯文、上下に線刻蓮弁を、内面には幅の広い蓮弁文を配する。5は中央が凸形となる蓋で、下面是無軸となっている。接地面と思われる輪状の痕跡が直径約3.2cmで確認できる。小壺の蓋の可能性がある。
3. 白磁 6はE群の皿で今帰仁城跡で比較的多く検出されていて、全面施釉後に高台部分の釉のみを掻き取っている。
4. タイ陶磁 7はメナムノイ窯系の大型褐釉陶器壺で、素地にはタイ産に特徴的な黒色の鉱物粒が確認することができる。
5. 備前陶器 8は備前産の擂鉢口縁部で、9本の擂り目を施す。間壁編年より15世紀頃の年代に相当するIV期段階の資料である（間壁1977）。
6. 金属製品 9は釘で上端は欠損する。
7. 煙管 10は煙管で一部を欠損する。石製であるが石質は不明。
8. 石器 11は石斧。両刃と思われるが刃の部分だけ欠損する。12は砂岩製の砥石。13は砂岩製の砥石と思われる。表面に6本、裏面に5本の筋状の擦痕がある。円形の彫刻刀を研いだような痕である。側面は砥面となる。



[名 称] 東側城壁P-30・Q-30・Q-29内壁（補足調査）

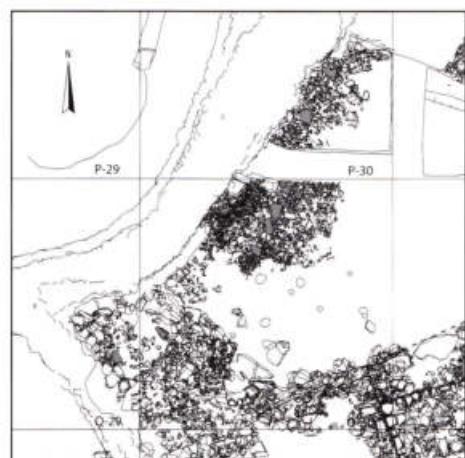
[位 置] P-30・Q-30・Q-29

[検出面] III層

[遺構図] 第74・75図

[図 版] 図版14-4

[所 見] 東側城壁P-30・Q-30・Q-29内壁はp69のB-C内壁の位置にあたる。51図に図示した立面図はII期のものでP-31と同様、積み方が雑で崩壊しつつある箇所であったことから（アミかけ）II期城壁と考えられる。前面の礫敷からはI期石積の根石が確認されているが、根石は総じて残りが悪く、西側の測点No.Bに向けて根石の残存は部分的となる。トレンチ調査では根石に入り込む層から14世紀～15世紀前半（主郭第II～III期）の遺物が得られており（既報告第26集p41・p42第28図）、根石はSR2の下部へ潜り込んでいる。逆にII期城壁とSR2は互いに絡み合い同時期に構築されていることが確認された。



第74図 P-30・Q-30・Q-29検出の内壁位置図  
(S=1/300)



第75図 P-30・Q-30・Q-29検出の内壁平面図

[名 称] 東側城壁P-31内壁（補足調査）

[位 置] P-31

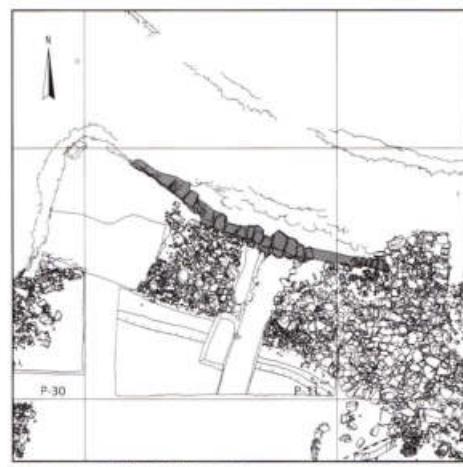
[検出面] III層

[遺構図] 第76・77図

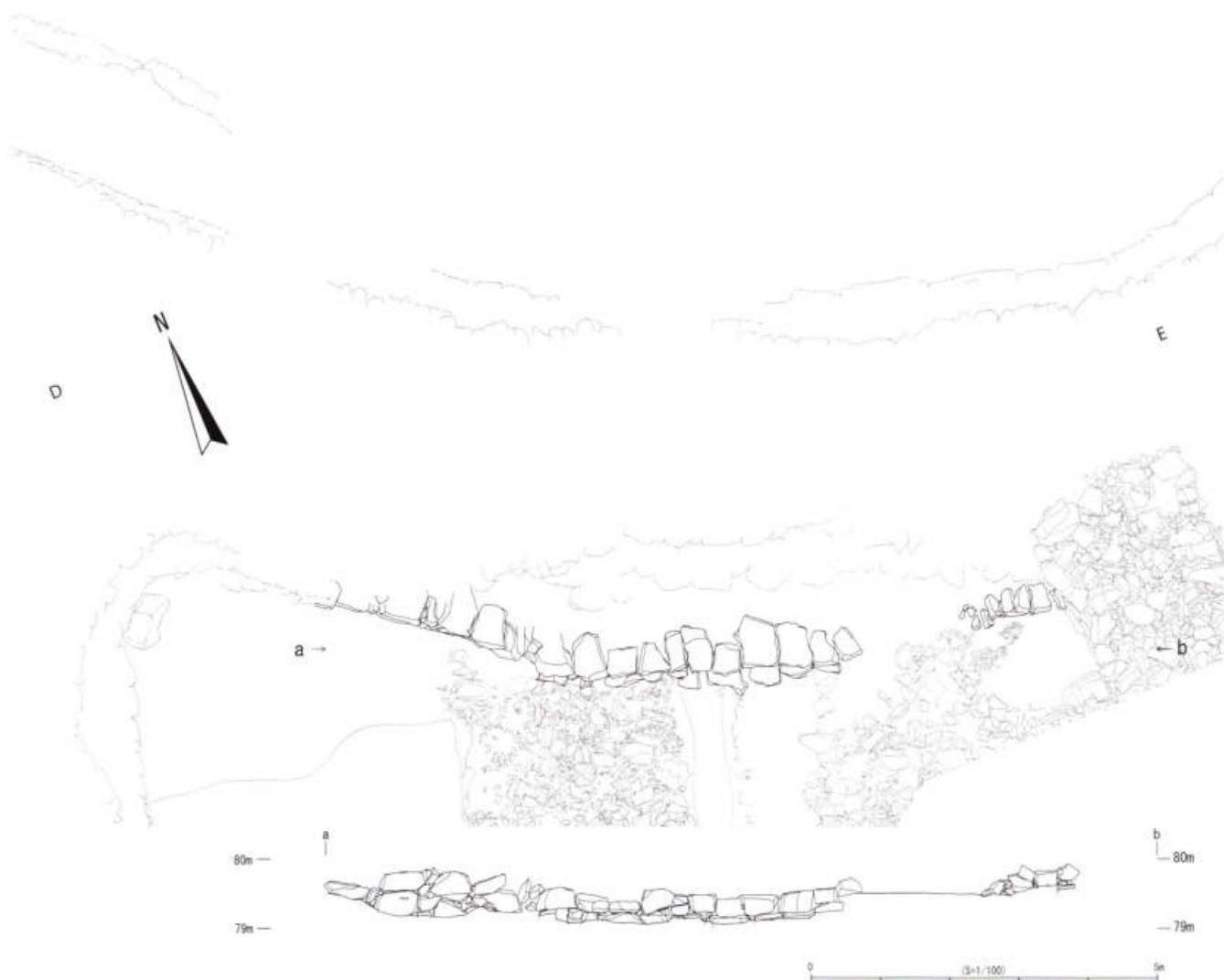
[図 版] 図版5・8

[所 見] 東側城壁P-31内壁はp65で述べたD'-E内壁にあたる。第53図-1a・2a、第55図-1a・2aに図示した立面図はII期のもので雑な積み方であった。もともとI期城壁は測点NoD'で欠損し始め、測点NoEへ内側に抉れるようにII期城壁へと続いている（アミかけ）。前面には近現代の耕作行為や、根石調査の際に退かされ積み上げられたものと考えられるSR 1があり、I期城壁の根石は途切れ全体を確認できていない状態であったことから、2010年8月11日～13日にかけて補足調査を行った。

面石検出はII期城壁欠損の始まるD'部分より東側へSR 1（階段状遺構）まで行い、SR 1側の一部で根石まで欠損していることが確認された。礫層の直上には約20～30cm前面に張り出すアゴ石が検出され、2石目に約50～100cmの大きな礫を並列させる。P-31トレント（旧根石確認トレント②）調査では、城壁根石にIIc'層が被り、III層が潜り込んでいる（第5図参照）。



第76図 東側城壁補足調査P-31グリッド内壁位置図 (S=1/300)



第77図 東側城壁補足調査P-31グリッド内壁詳細図

[名 称] 縦断トレンチ（西トレンチ）

[位 置] R-32～Q-32 [規模] 幅約1m×長さ約20m

[遺構図] 第78・79図 [図版] 図版17

[所 見] I層とした耕作面を10～30cm程度除去すると、直下のII層より拳大の礫が大量に検出されはじめる。これらの遺構はVIII区全体を覆い、礎石建物であった可能性が高い。しかし上面の活動行為によって破壊されたこれら遺構の切り合いを判断するには不明な点が多くあった。そこで、VIII区の中央部分で石が大量に出土していること(SB08)、Q-32グリッドの石列北側において土留め石積みが確認され(SR5)、その内側の堆積層が褐色の土で異なることから、これら全体をカバーするために南北縦断R-32～Q-32グリッドの西側、約1m幅×20mでトレンチを設けた(第79図)。

[トレンチ内堆積層] I層:【にぶい黄褐色土層】腐食・耕作土層。

IIa層:【暗褐色土層】VIII区で検出される遺構のほとんどがこの時期のもので、15世紀中頃～17世紀初頭(主郭第IV期～第V期)の遺物が得られている。

IIb層:【褐色土層】SR5の覆土ともいべき層。当該層がSB08に被っていることがトレンチ調査で確認され、SR5がSB08を構築した後に平場を造り出していることが確認された。

SB08i層:【褐色土層・暗褐色土層】SB08内で大小様々な礫で占められる礫層。

SB11ii層:【褐色土層・暗褐色土層】SB11内で大小様々な礫で占められる礫層でi層とは殆ど色調の違いは見られないが、断面で判別可能。

IIc層:【褐色土層】VIII区全体に被覆するが、トレンチ調査によって礫層の下にもぐり込むことがわかった。遺物は新しいもので15世紀後半の龍泉窯系VI類の出土確認されている。

III層:【にぶい黄褐色土層・褐色土層】当該遺跡の形成期のグスク時代の遺物包含層(IIIc)。当該層序は外郭城壁にもぐり込み、14世紀～15世紀前半(主郭第II期～第III期)の遺物が得られている。

IV層:【灰黄褐色土層・暗褐色土層・にぶい黄褐色土層】当該遺跡の形成期初頭の層と考えられ、炭を含み粘性が強い(IVa～IVd)。層中には焼土、明褐色土ブロックを含む。出土遺物は在地土器を中心とする13世紀後半～14世紀中頃の遺物が主に得られている。

地山層:【明赤褐色土層・黄褐色土層】古期石灰岩の岩盤が至る所で露頭。

[遺物] 第80図は縦断トレンチ(西トレンチ)から出土した遺物である。

1.土製品 第80-1は不明の土製品で半分を欠損する。坩埚とも考えられる資料である。

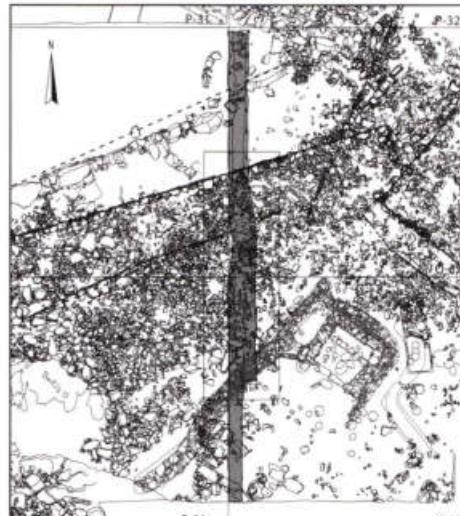
2.青磁 2は龍泉窯系青磁IV類碗で口縁部外面に5本の弦文が巡らされる。3もIV類で無文外反碗。4・5はVI類で細蓮弁を外面に施す。6はIV類の底部で高台は角高台となって外端を面取りし、見込みは広く印花文を施す。7は福建系粗製碗の底部資料で、外体面の轆轤痕は明瞭で、見込みに段を持つ。8はIII'類の底部で大宰府分類III類とは異なって、釉調は鈍く疊付が広い。9はV類の腰折れ皿。10・11は盤の口縁部である。10は内面に笠彫り、11は櫛によって蓮弁文を廻らせる。

3.白磁 12・13はF群(今帰仁タイプ・浦口窯系)の口縁部。釉は青磁にも似るような青みがかつた失透釉で、12はF群でよくみられるように口唇部分を斜位にカットする。

4.肥前陶磁 14は染付雲龍見込荒磯文碗。15の見込みの文様は簡略化されてわかりにくいが、モチーフは草花文か。14・15は肥前陶磁の編年で1650～1690年頃の年代観(肥前陶磁の時期区分III期)が付与される資料と目される。

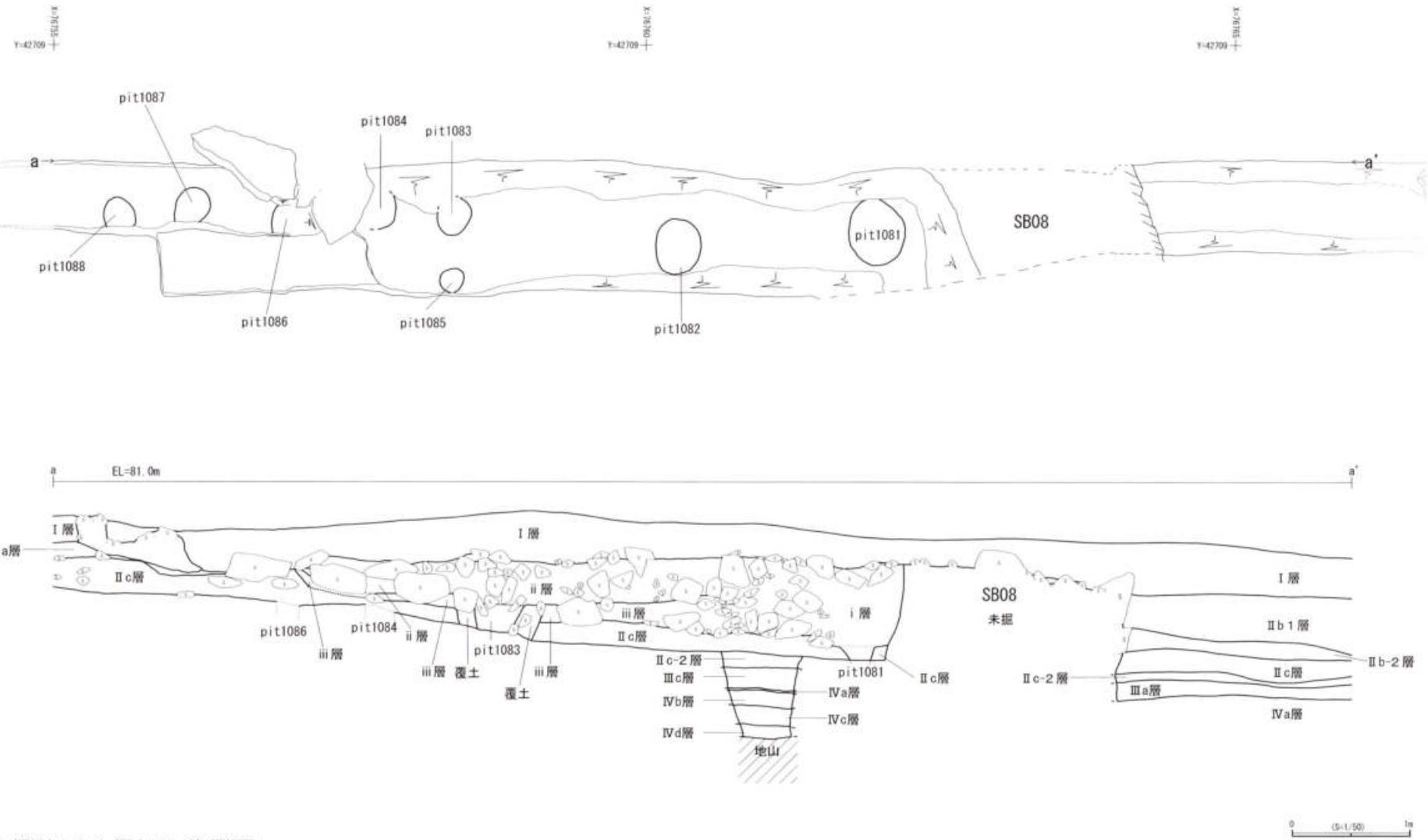
5.玉 16～20は主郭分類c種のガラス小玉。

6.銭貨 21は元豐通寶(北宋・1078年)。

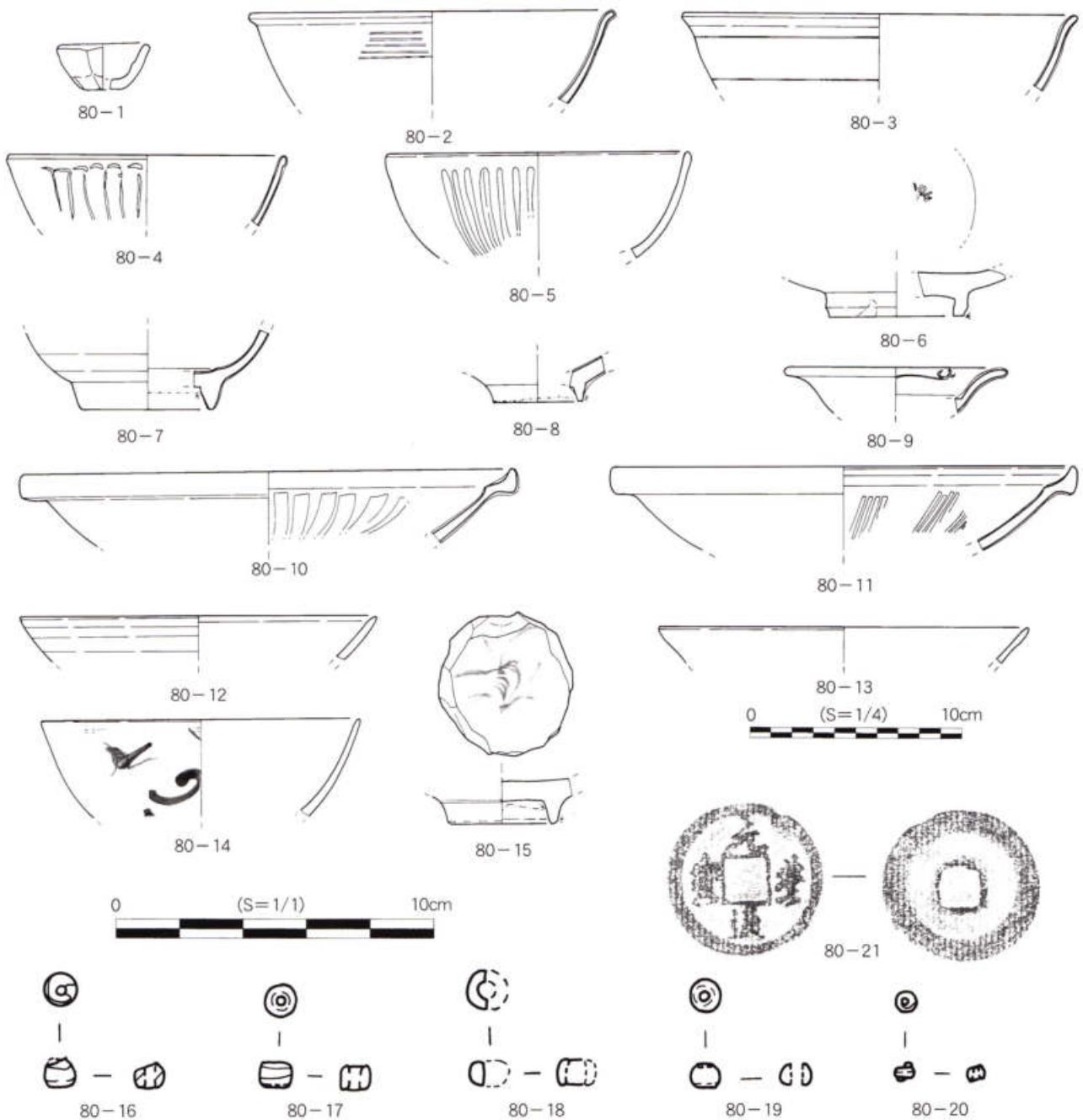


第78図 縦断トレンチ(西トレンチ)位置図  
(S=1/300)

N



第79図 縦断トレーンチ（西トレーンチ）詳細図



第80図 縦断トレンチ（西トレンチ）出土遺物(1)

#### [遺構総括]

発掘調査において検出された遺構は柱穴、土坑、土留め石積み、石敷きなどの遺構である。注目される遺構として、高さ約1mの基壇状となった建物跡で(SB08)、長軸は約17.5mで、主郭・御内原・大庭の主要三郭以外では石を多様する構築物ははじめてである。また、外郭(VIII区)の地形は北側に向けて低く傾斜していることから、低い側の北側にのみ土留め石積み(SR10・SR11)を設け、基壇遺構を構築している。さらに平場増築のために大きいもので約1mの礫を並べ土留め石積み(SR5)を作り出し、褐色の土(IIb層)を造成土として入れていることがトレンチ調査で確認された。この石を多用した遺構は、出土遺物等から15世紀中頃～17世紀中頃の遺物がほとんどで、主郭第IV期、即ち監守時代及び1609年を少し下る時代を含んだ建築物と思われる。

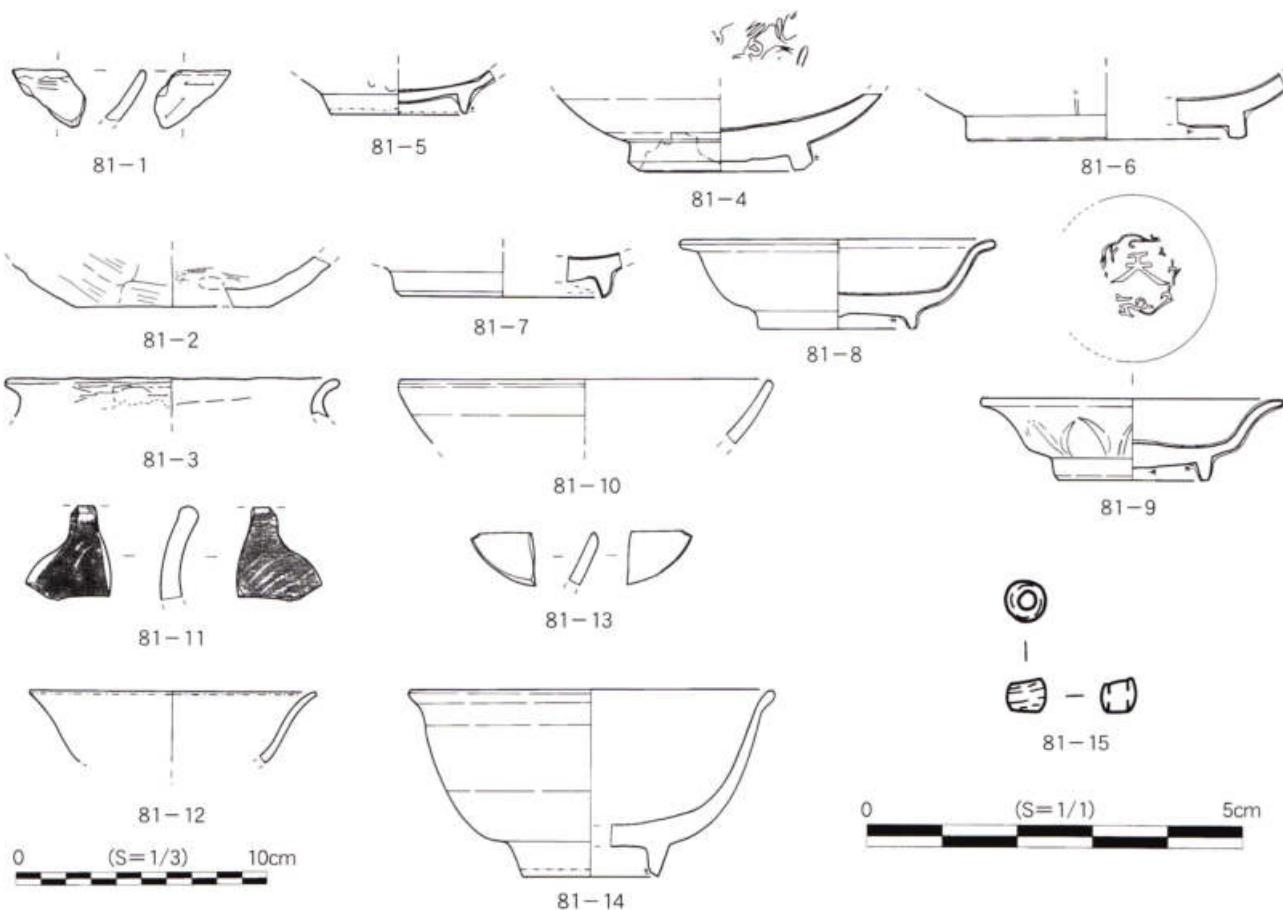
城壁については2つの時期の石積みが見られることが確認されており、東側及び西側の城壁を最初に築造した第I期城壁は良好な石材を使用し、丁寧な造りとなっているのに対し、II期の城壁は小さい石材を使用、雑な積み方で内壁面を後方(城壁内栗石上)に寄せて積みなおし、SR1やSR2を城壁に取り付けていることが確認された。

## 2. VIII区包含層出土遺物

VIII区において出土する陶磁器の多くは15世紀中頃から16世紀に収まるものがほとんどである。これは、一部の試掘調査を除き検出された建物跡の上部で調査を終えていることによる。遺構外の下部の包含層である IIc～IV層の出土遺物は概して15世紀中頃よりも古い遺物で構成されることからも、整合的である（第81図）。遺構外の I～II層の出土遺物を第82図～第111図に一括して掲載し、最後に集計表にて若干の説明を加え紹介したい。

### [ IIc～IV層出土遺物 ]

1. 土器（第81図 1～3） 1は土器碗、2は器種不明の底部資料である。いずれもIV層出土資料で、今回確認できた包含層では最下層の包含層である。3は夔形の資料でIIIc層出土。
2. 青磁（同図-4～9） 4は碗IV類、見込みには印花文を施す。5は皿III類の底部資料で胴部には蓮弁文を施す。6～9はV類、6は盤、7は碗、8は口折皿。9の腰折皿は見込みに「天」字銘が押印される。既刊報告書第20集の第76図-10に掲載されている龍泉窯系青磁V類碗ものと酷似する。デザインはほぼ同様であり検証した結果、同スタンプと思われる。
3. 白磁（同図-10・12～14） 12はA群の口禿碗（IIe層）。10（IIIa層）・13（IIe層）はC2群の口縁部資料。14は。
4. カムィヤキ（同図-11） 器壁が厚いB群の壺（IId層）。
5. 玉（同図-15） 主郭分類b 2種の資料で色調は明るい青色となる。



第81図 縦断トレンチ出土遺物（西トレ遺物）(2)

## [I～II層出土遺物]

1.土器（第82図-1～15） 1～10は主郭のV層以下で多く出土したいわゆる「グスク土器」である。

1・2は壺、3・4は鍋（鉢形）、5は甕形、6は器種不詳の口縁部。7～10は底部資料で器種は不詳、それぞれ形態や成形の手法が異なる。7・8は外面に削り痕が顕著で、9は厚みのある底部で立ち上がり端部が直上させ、10は丸底的に仕上げる。図示したグスク土器は器壁が薄く、仕上げの調整は雑であることから第3様式に分類される。11～15は宮古地域の在地土器と推測される資料。

11～13は肩の張る甕（もしくは浅鉢）形の器形で肩部は張り、口縁部を屈曲させ直上させる。14は大口径の壺ないしは、鉢（鍋）形土器と考えられる。15は底部資料で、器種は壺形土器を想定する。

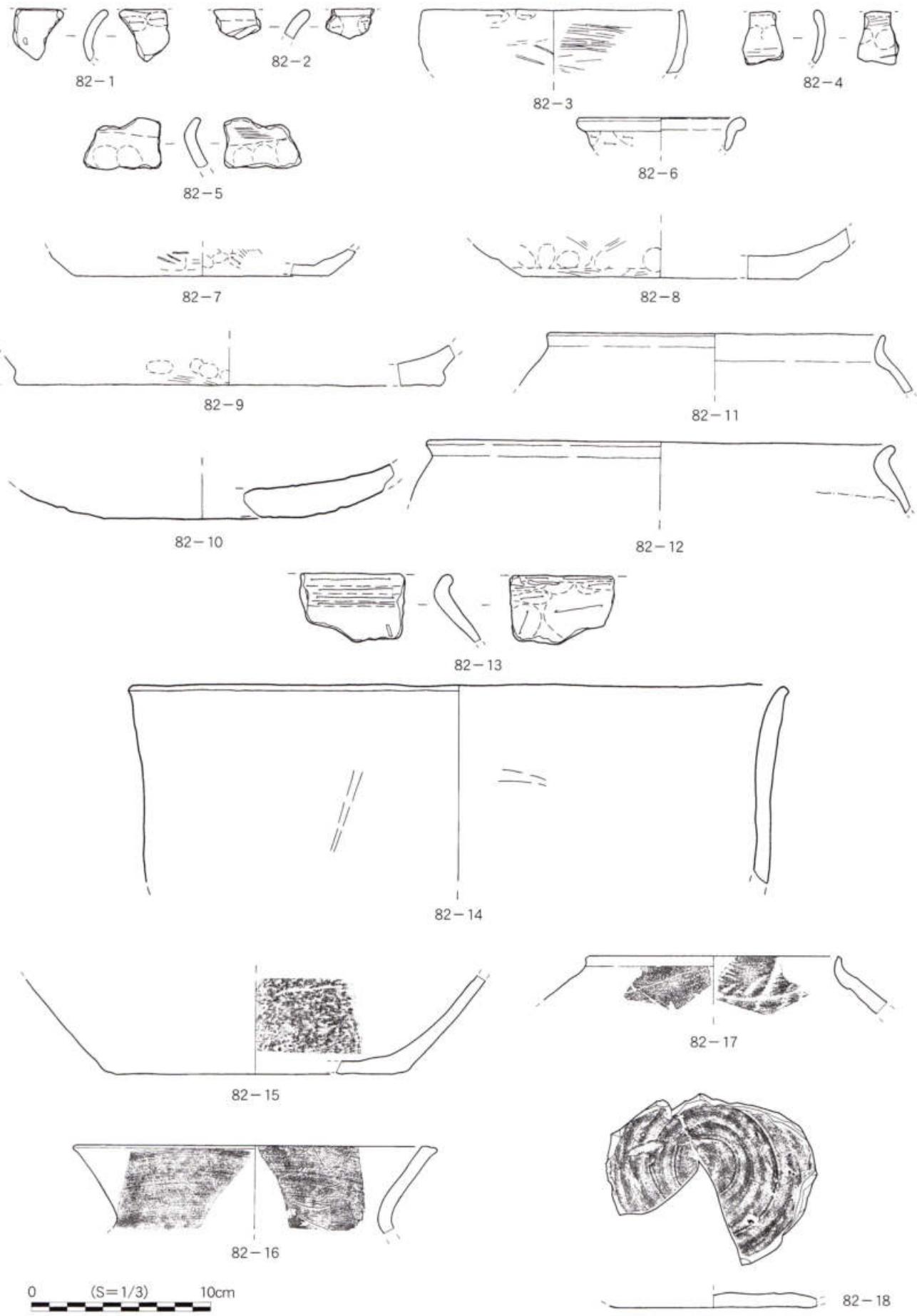
2.カムィヤキ（第82図-16～18） 17は口縁部の短い壺形資料、16は長頸壺、18は底部で、ともに器壁の厚いB群と考えられる資料。

3.沖縄産瓦質土器（第83図-1～11） 1は植木鉢で波状凸帯を口縁下に廻らす。2～5は鉢と考えられる資料で、2は口縁が内傾する。7・8は擂鉢。9は甕。10・11は円盤状の瓦質の蓋で产地は不詳だが、首里城跡の京の内地区の報告ではその他の蓋として大部分を沖縄産に推定しており、これに従った（沖縄県教育委員会1998）。

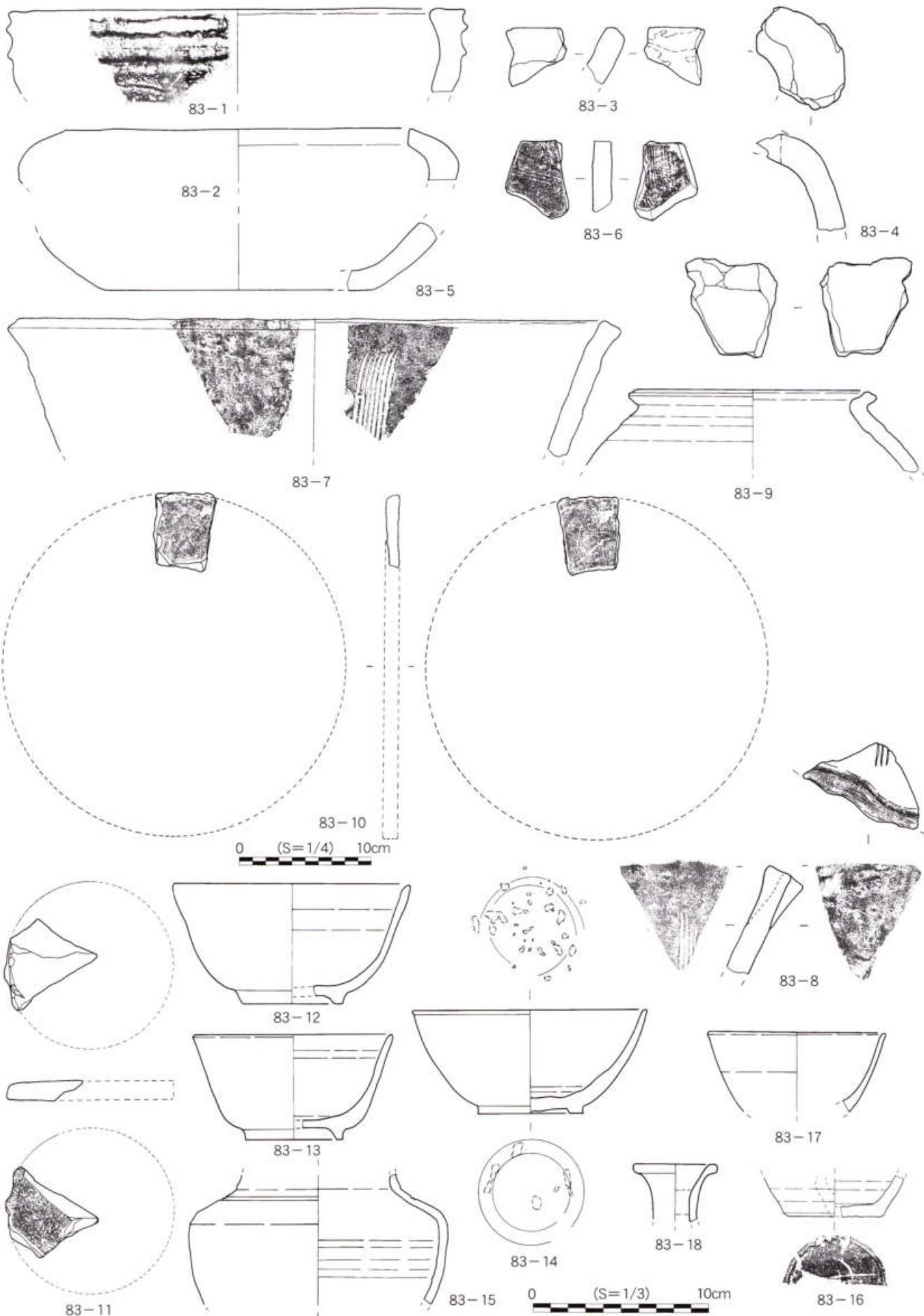
4.沖縄産陶器（第83図-12～18） 12～14は碗で全形を窺うことのできる資料である。低い角高台から直線的に口縁へ立ち上がる資料で、胎土は交胎状にスジが入り、焼成時に枝サンゴを用いた目跡がある点など、特徴は湧田窯跡及び喜名窯跡の資料と酷似する。12は焼成不良で赤褐色の焼締陶器。13・14は焼締は良好で14は疊付と見込みにサンゴの目跡が明瞭に残る。15は小型の壺で肩部資料。外面には泥釉が施釉され光沢をもった赤褐色に発色、比較的薄手の資料。16は瓶の底部で、底部立ち上がりは面取される。外面には黄釉が流し掛けされている。金城亀信、新垣力氏のご教示によれば湧田窯跡の生産品でよいのではないかとのご指摘をいただいた。胎土に交胎様のスジが入るところ、サンゴ目が残る焼成方法、碗や壺、瓶などの器種組成などから喜名窯跡の製品にも同様の特徴が認められており湧田及び喜名窯跡に見る初期の沖縄産陶器と推測される。17は褐釉の施釉陶器碗、18は瓶の口縁部で、いずれも近世末ないしは近代の遺物で一部IIa層の回収もあるが、遺構に伴うものではなく後年造られた拝所や、畑として利用されていた後代のものであると考えられる。

5.青磁（第84～89図） 第84～89図はV層より出土した主な青磁である。

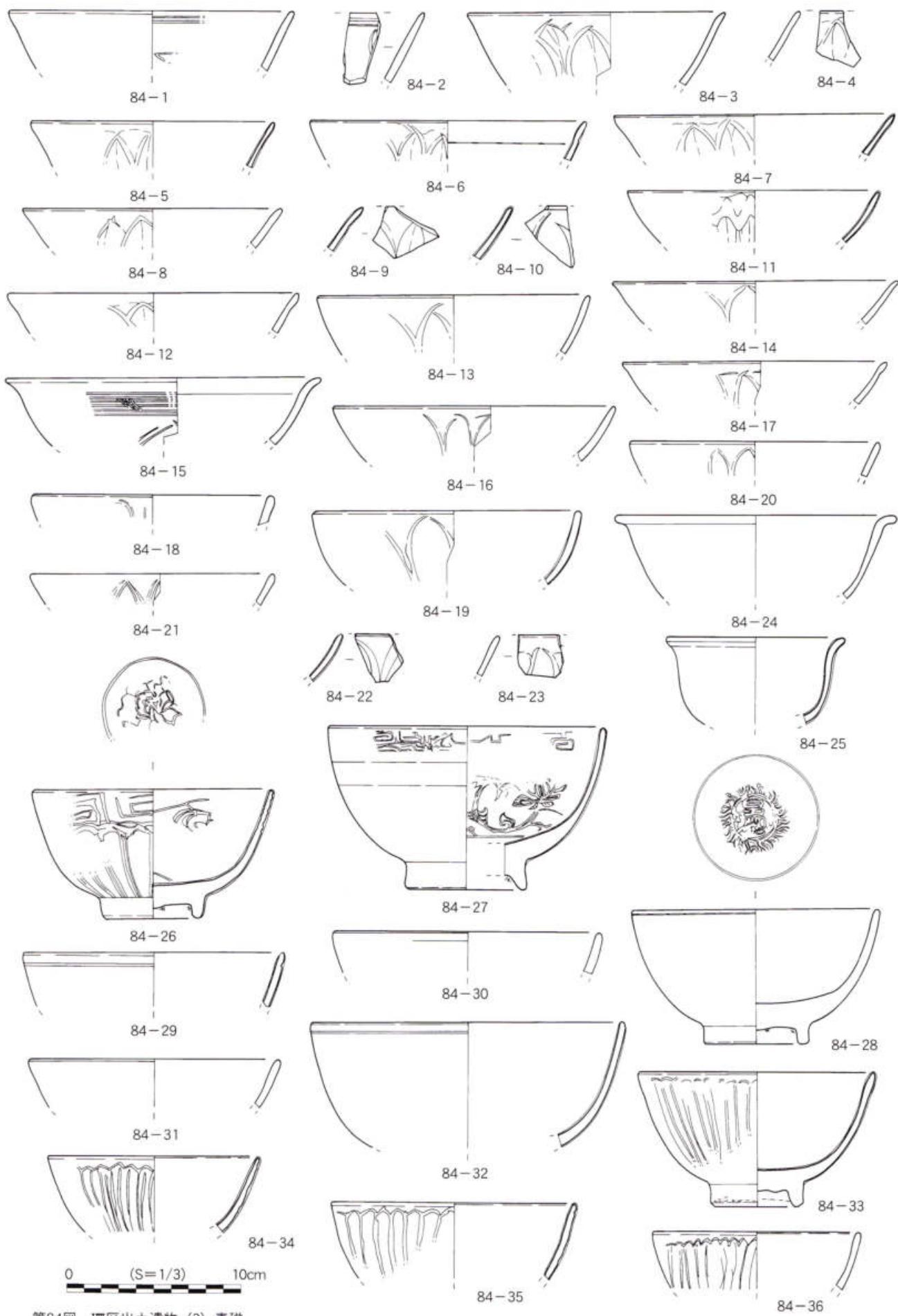
碗：第84～86図は青磁碗。84-1・2はI類で内面に劃花文を施す。3～14は鎬蓮弁文碗。口縁端部が舌状になる資料で鎬が明瞭な1～9と、ヘラ彫りによる簡略的な文様の10～14が見られる。15はIV類と推測され、弦文帯が口縁帯に巡らされる外反碗の口縁資料。16～32はV類碗で釉は厚みがあるのが特徴。16～23は外面に蓮弁を施す資料で蓮弁の鎬は明瞭でなくいわゆる無鎬蓮弁となる。24・25は口縁を折り大きく外反させる外反碗。26・27は雷文帯碗で、26がヘラ彫りによる雷文帯を口縁帯外面に施し、胴部は蓮弁文を施す。27はスタンプによる雷文帯を施す資料。28～32は無文の直口碗で、いずれも口縁外面に一条沈線が巡る。底部まで伺える28は見込みに印花文を押印する。33～36、第85図-37～50はVI類に分類される細蓮弁文の資料で、蓮弁の施し方、口径の大小、施釉方法などにバリエーションが認められる。51～54は素地、釉調など粗製の品でVII類に分類される。51は口縁帯に波涛文が施され胴部に蓮弁、52は口縁帯の波涛文、53は無文の直口碗である。54・55は高台は広く作られ、一見龍泉窯系とも目されるが、見込みを蛇の目釉剥ぎする粗製品。56～58は直口口縁に接地面の広い高台を持つ粗製碗で漳洲窯系とされる資料。第86図は碗底部資料。59～64はI類。59・60・62・63には見込みに劃花文が施される。65～67はII類。68・69はIII類だが、疊付は露胎となるものの底部に厚みがあり高台も幅広角高台となり典型的なIII類とは異なるタイプ。70～74はIV類。75～83はV類。75は底部はやや低く、見込みには口堂口玉の押印がみられる。



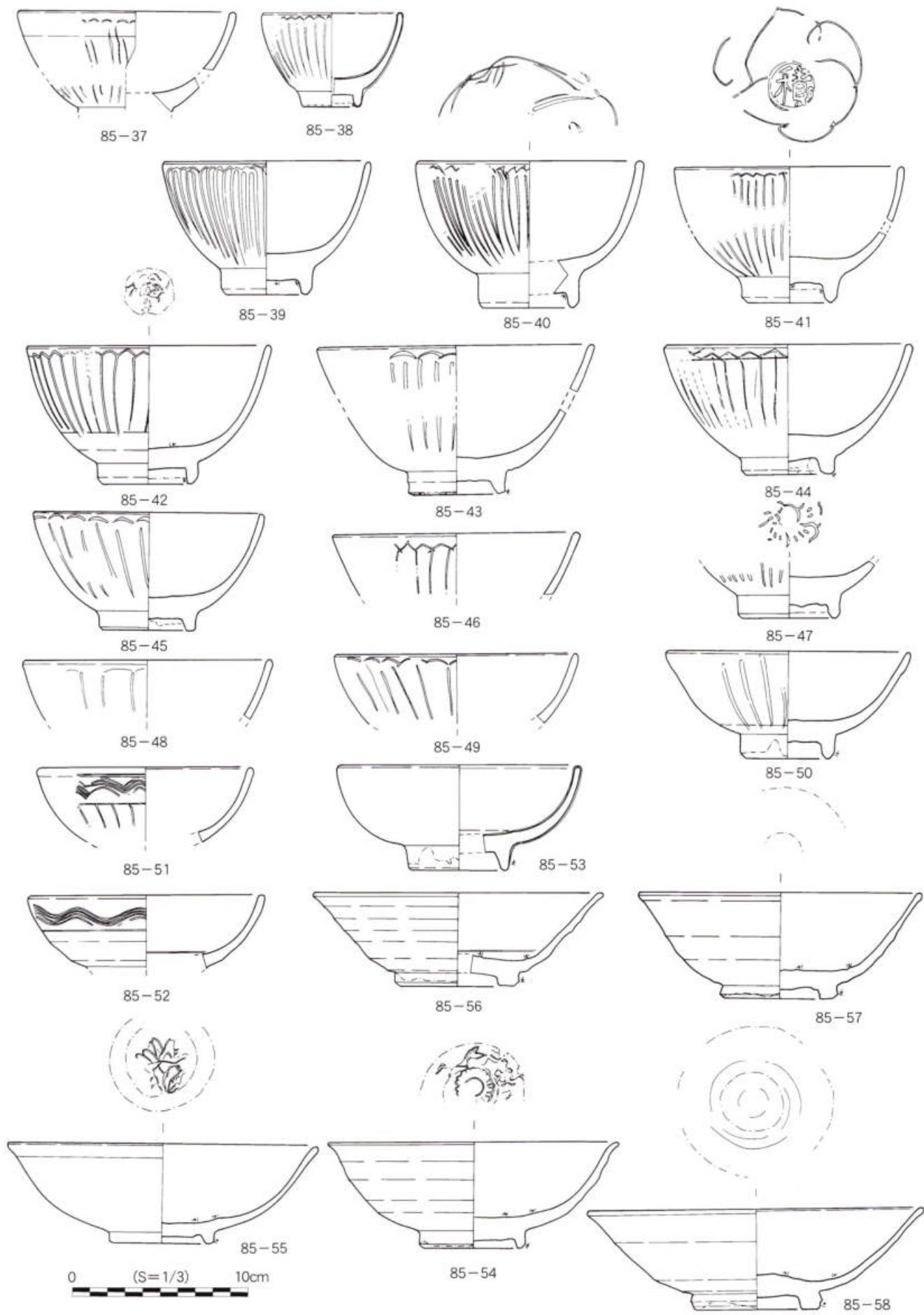
第82図 VIII区出土遺物 (1) 土器・カムィヤキ



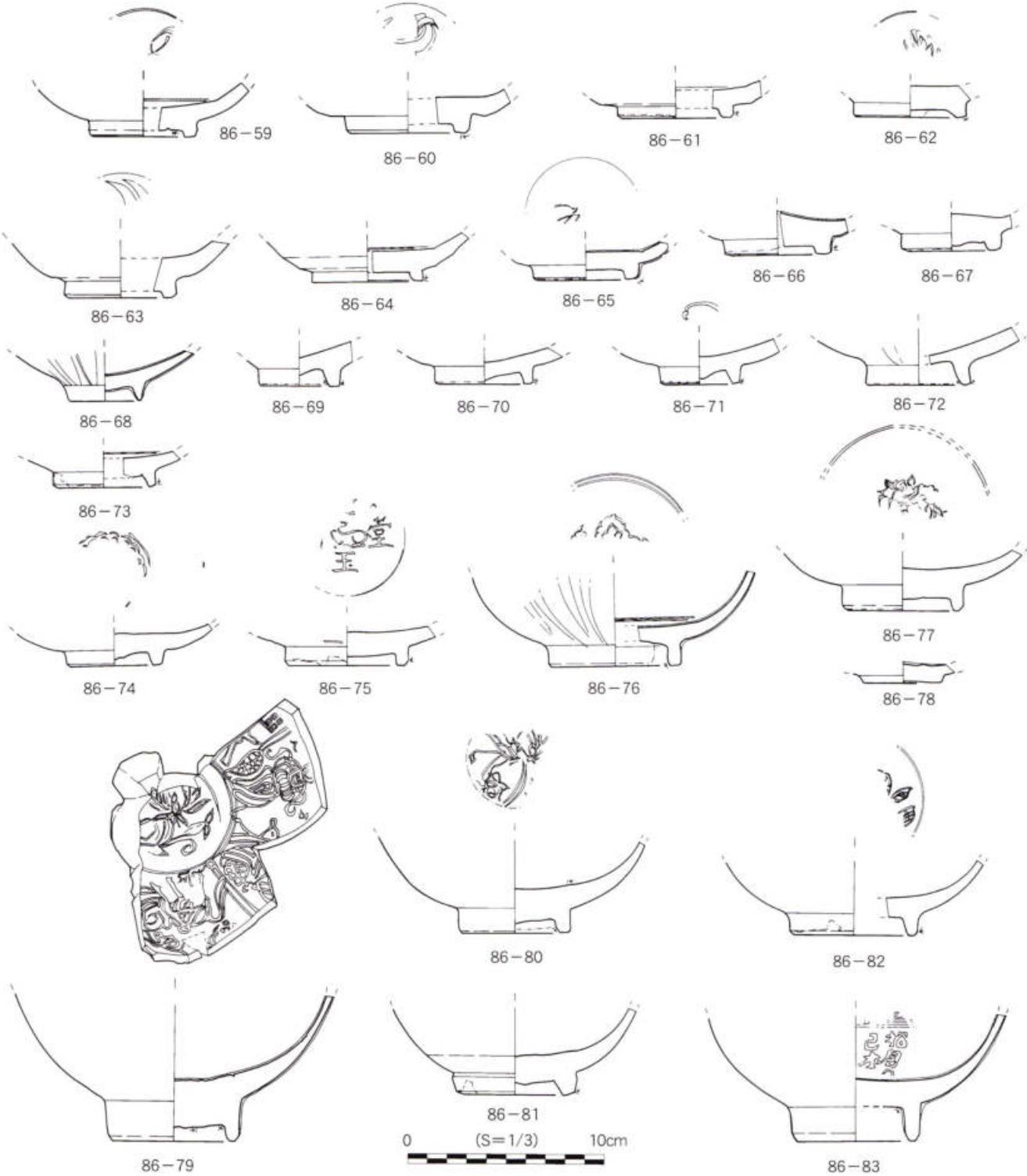
第83図 VII区出土遺物（2）瓦質土器・沖縄産陶器



第84図 VIII区出土遺物(3) 青磁



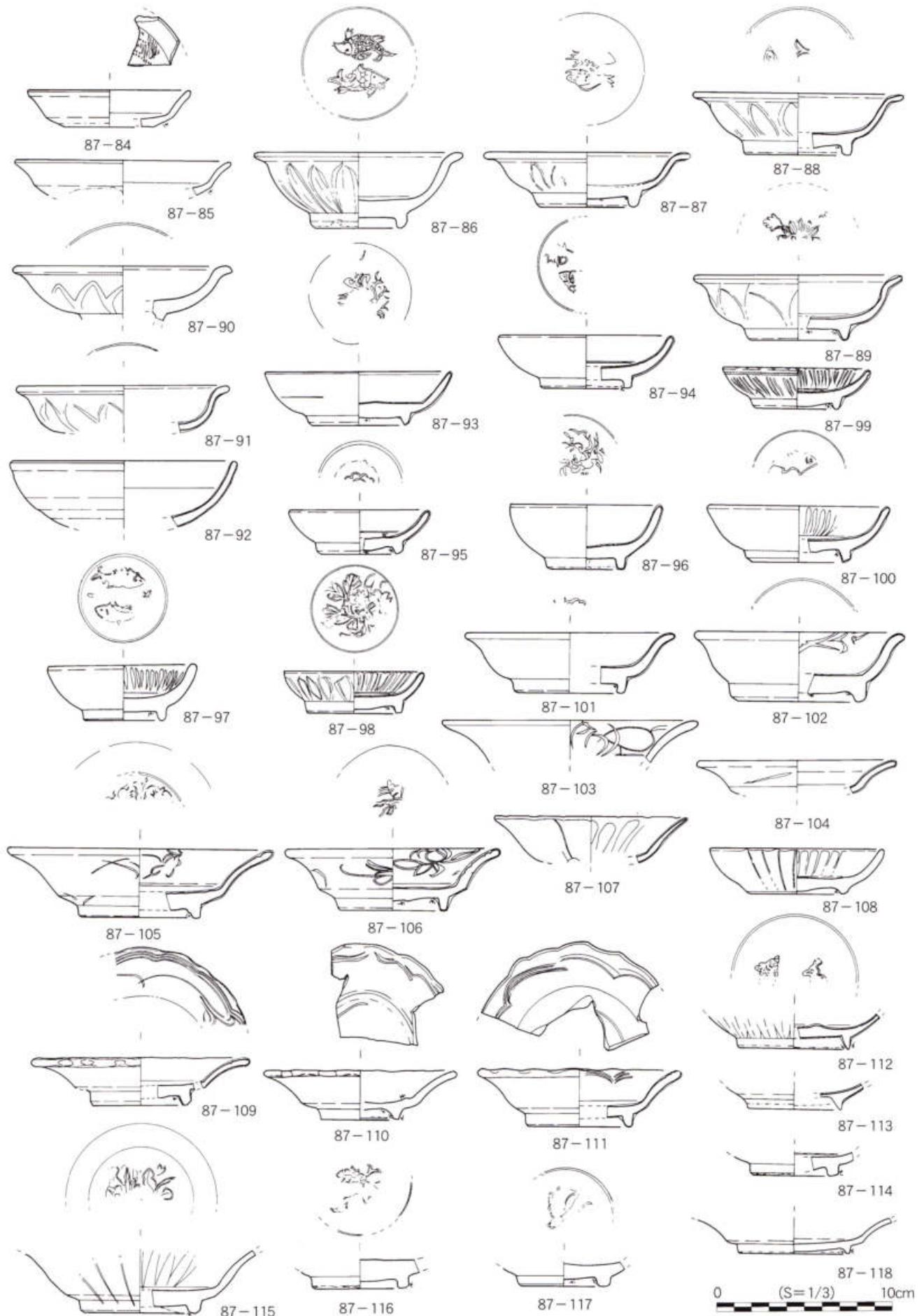
第85図 Ⅶ区出土遺物(4) 青磁



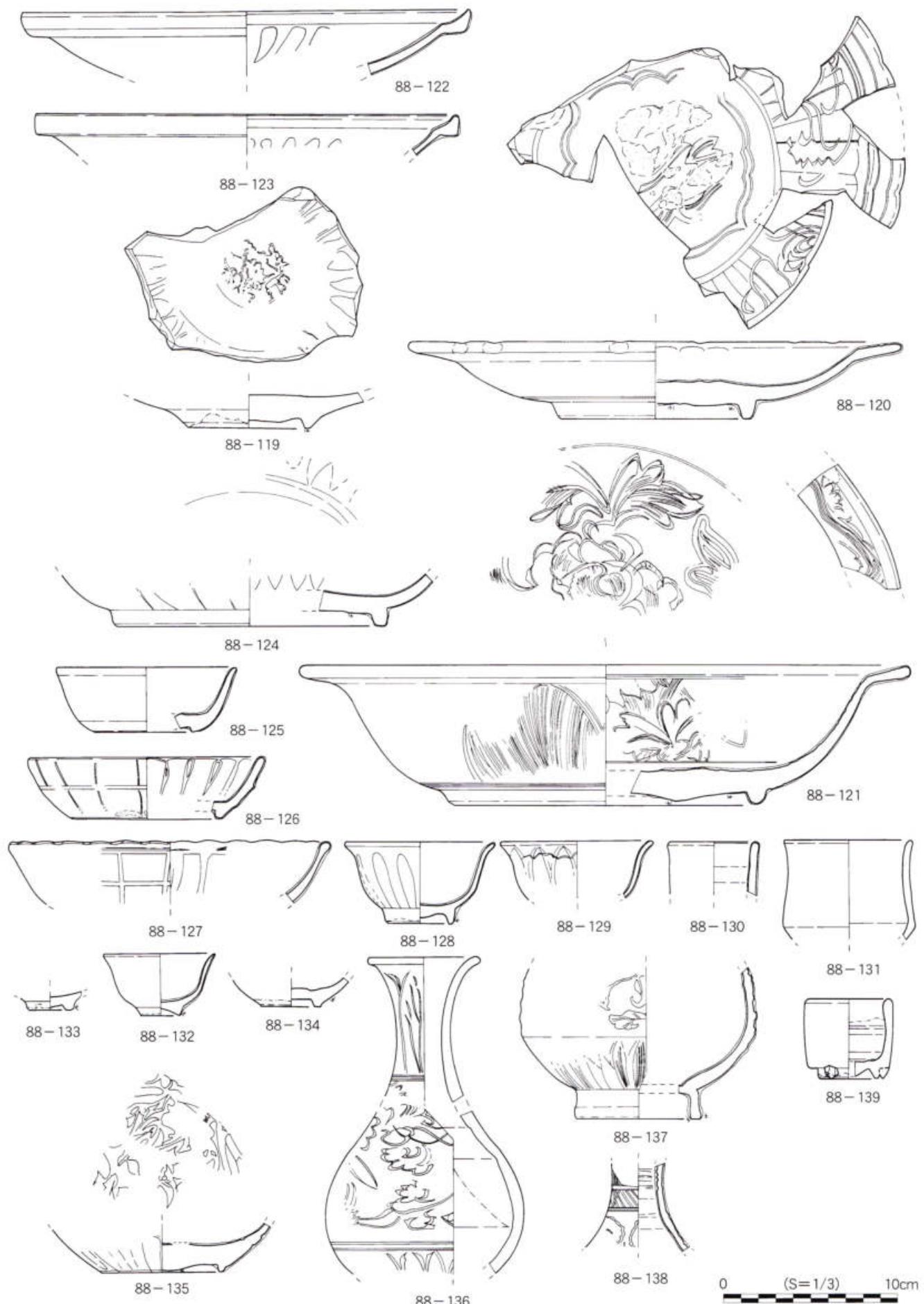
第86図 VIII区出土遺物（5）青磁

76は胴部に蓮弁を施す資料で同一個体ではないが既刊の報告26集（第52図-9）と酷似する。78はベタ底の底部資料で内外面施釉される。小破片のため詳細は不明。80・82は見込みに印花文、79・83は内面に型押しで施す。

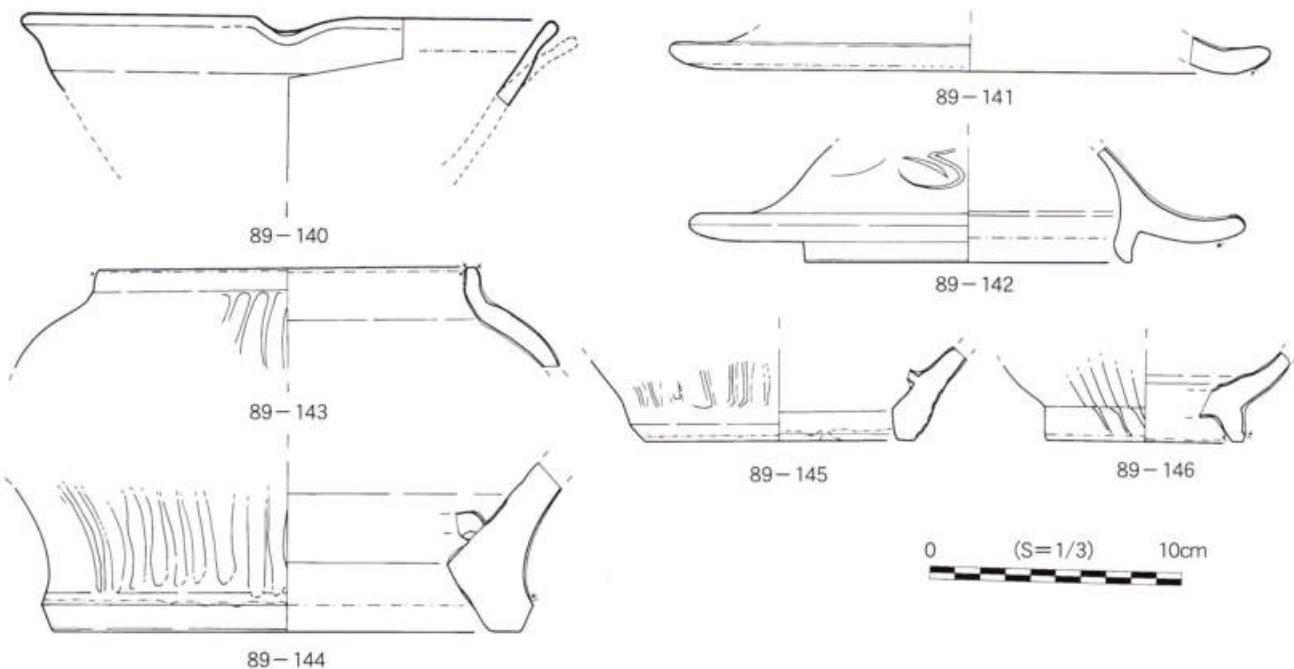
Ⅲ：第87図-84・85は同安窯系の皿Ⅲ類の資料。84は櫛描文が見込みに描かれる。86～106は龍泉窯系V類の皿の資料。86～91は口折皿で外面に蓮弁文を施す資料。92～96は直口の無文皿。97～100は直口の蓮弁文皿。86・97は双魚文を、また図示した資料で底部が残るものは多くに印花文が施される。101～107は腰折皿で102・103は内面、104は外面、105・106は内外面に線彫りで草花文



第87图 VII区出土遗物(6) 青磁



第88図 Ⅷ区出土遺物 (7) 青磁



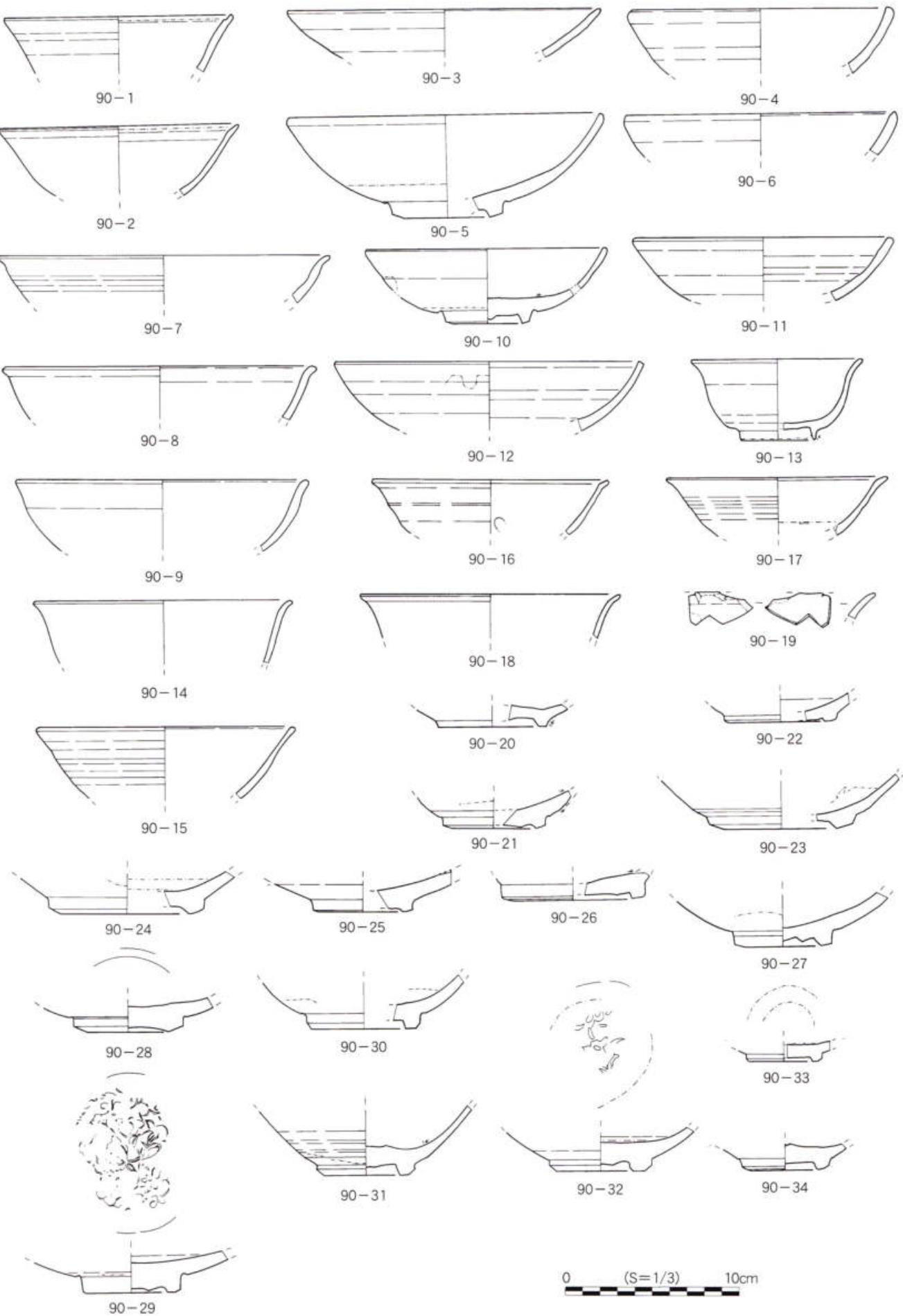
第89図 VII区出土遺物 (8) 青磁

等を描く。108・109・111はVI類の資料。108はいわゆる菊花皿。109～111は腰折で口縁を刻み稜花とする。110はVII類で見込みを露胎とし、釉の発色が悪い粗造となる。112以下は皿の底部資料である。112・113はIII類の底部資料で112には貼り付けの双魚文が施される。114はIV類で口縁部は欠損するが口折皿と思われる。115・116はV類の腰折皿で115は蓮弁文を外面に、116は見込みに双魚文がスタンプされる。117はVI類。118は景德鎮窯系に分類されると推量される。

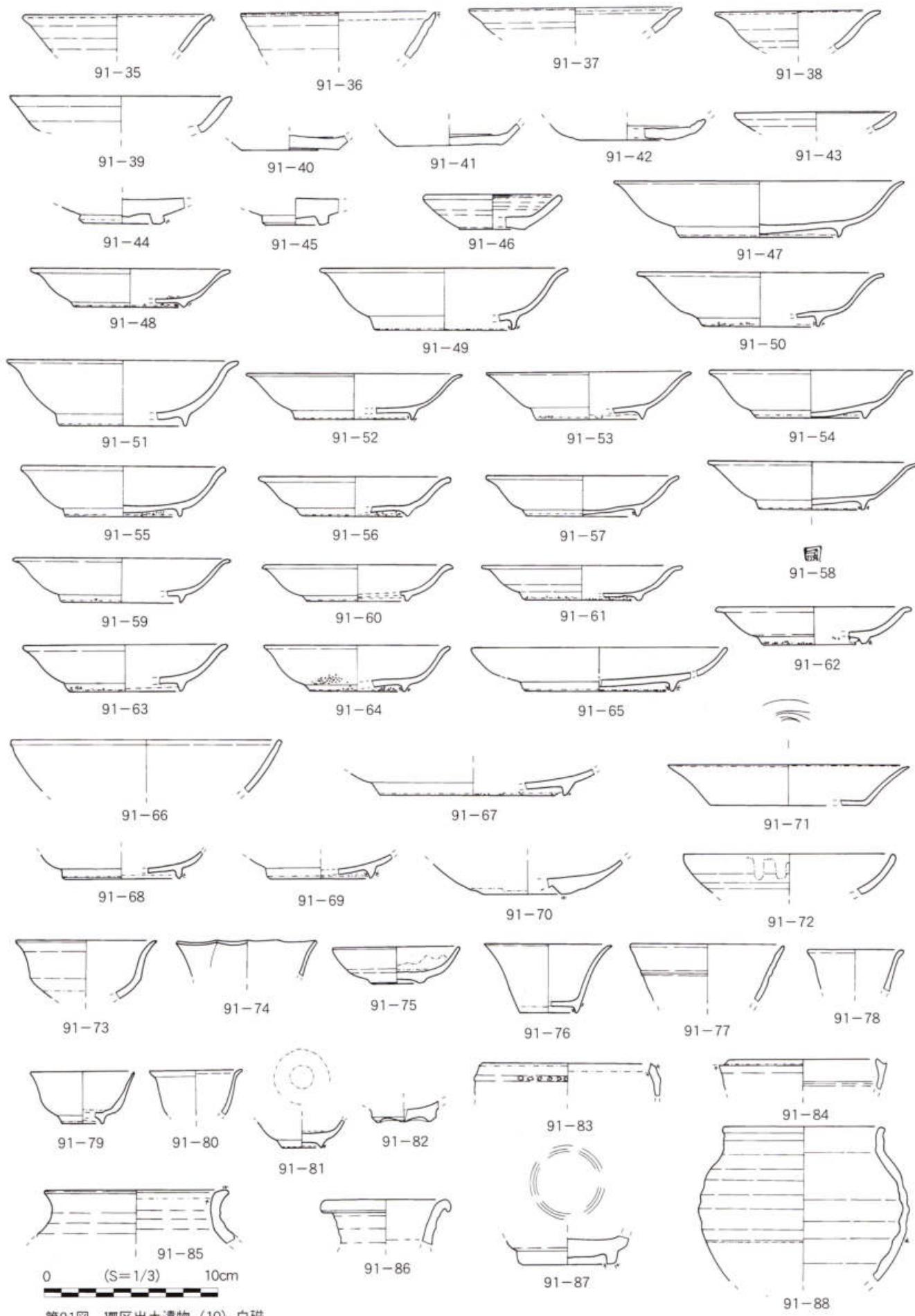
その他器種：第88・89図は青磁の碗皿以外の器種で、119～124は盤。119は底部資料で見込みに印花文を施す。120は口唇が稜花となり、内面には線描きによる蓮弁、刻花文が施される。見込みは蓮弁で区画、中央に花文を施し、重ね焼きの際に釉着したと思われる匣鉢の痕が残る。121は全形が窺える盤で、外面体部には線描きで大きな蓮弁を描き、見込みは陽刻の花文、内面は花文が櫛描で施される。122・123は幅広の蓮弁も体部内面に描く額縁盤で123の稜線は明瞭となる。124は外底を釉剥ぎし線描きによって幅広の蓮弁を施す底部資料。125～127は口径の広い杯で、125は無文直口の碁笥底、126（碁笥底）・127は内外面蓮弁ヘラ彫で描く。128～131は口径の小さい小碗もしくは杯。128・129は腰部が張り口縁部を外反させる蓮弁文杯。132～134は小杯。前述した口径の小さな杯と器形的には近似するがサイズは小さい。135は外底蛇の目釉剥ぎの杯で碁笥底となる。見込みはモチーフは不明だが花文？が施される。136～139は瓶、136は近傍の今帰仁城跡の城外屋敷地5で報告した資料と近似する。137は腰部に蓮弁を施す底部。138は頸部で精緻な文様を線彫りによって描く。139は口径4.7cmの小さな香炉で底部は床面と接着するが、脚部が痕跡として3つ確認できる。140は擂鉢、口縁部を折り注ぎ口をつくる。141～145は酒会壺で、141・142は蓋、143は口縁部、144・145は底部資料である。145はヘラの半分を押しつけて蓮弁を雑に施す。146は判然としないが、瓶等袋物の底部と推察される。

#### 6.白磁（第90・91図）

碗：第90図-1・2・20はA群（口禿・景德鎮窯系）の碗資料。3・21～24はF群（今帰仁タイプ・浦口窯系）。4～6・25～28はC2群（ピロースクII・閩清窯系）、7～9・29はC3群（無文外反・閩清窯系）となる。10～12はD'群（邵武窯系）で内外腰部以下を露胎とする。13はE群（景德鎮窯系）の小碗。14・16・17はD群（景德鎮窯系）の碗。14は内外面体部に黒ずんだ斑点が薄くみられ、17世紀前後の粗製碗の可能性がある。16・17は白濁した釉に口縁部を折り曲げ内面に稜をつくる。18は内面体部に花文もしくは葉文が施される。18・19はD群の可能性があるが小破片のため詳細は



第90図 VIII区出土遺物(9)白磁



第91図 VII区出土遺物（10）白磁

不明。30はG群（庄辺窯系）と考えられる。胎土は精良・硬質で黄色みがかった失透釉を内外面腰部以下は露胎となる。31～34はD群の底部と思われる。

皿：第91図-35～38は口縁、40～42は底部でA群（口禿・景德鎮窯系）の皿。39はC3群（無文外反・閩清窯系）。43～45はD群。46はD'群の灯明皿。47～70はE群で、70の基筒底の底部資料や、疊付露胎となる高台に張りのある胴部から口縁を外反させる広い皿など、大小、高台形、釉調などに若干のバリエーションを認めるが大きくE群としてまとめられる一群である。58は外底面に呉須にて字款銘がある。71は総釉口禿、型作りのベタ底の皿で、底部外端に段がある。器形はA群で釉調はD群に近い。管見の限り福岡市博多遺跡群の佐賀銀行立会（博多39）一括埋納土坑の出土遺物に類品があり（福岡市教育委員会1993年）、16世紀中～後半とされている。72は薄い透明釉を施釉する陶器質の内湾皿の資料である。73・74・82はD群の杯で、82は抉り高台となる。75～81はE群で75は小皿で他は杯。83・84は白磁の合子の身。85・86は壺の口縁、87・88は瓶で87は口縁、88は底部資料である。

#### 7.青花（第92～97図-153～160）

元青花（1～7） 第92図-1～7は元青花もしくは明初の青花磁器である。1は青花皿で明代前半として報告された資料（柴田・ほか2009：『今帰仁城跡発掘調査報告』V,p142,no4・5）と類似する。2は鍔縁盤で、口縁上面に蔓唐草を描く資料。3は断面V字形の小破片で全体形を類推するのは難しいが、中空の破片から注口などの破片資料と推測される。文様は精緻な鱗状の文様から竜などをあしらった注口や取っ手部分と考えられる。4・5は蓋などの胴部片と推定される。4は蔓唐草を描く資料で、裏面には同心円上の輒轍痕が認められる。5は宝相華唐草文を描く胴部片。類品が隣接するVII区で出土している（『今帰仁城跡発掘報告』IV：106-110～112）。6・7は蓋などの縁部分で、外面に雷文帯を上面には蔓唐草を描く資料で、文様、器形とも酷似しており同一個体と推測される。

#### 明青花（8～160・193）

碗（第92図-8～25・第93図・第94図）：第92図-8～16は明青花碗II類（小野分類B群・景德鎮窯系）の資料。8、9は外面に唐草文等を描く外反碗で、同一個体と推察される版片の底部資料の外底面露胎とする。10は唐草文を内外面に描く、呉須の発色は比較的良好が釉上で浮遊し、にじむ。11は口縁帯に七宝文帯に菊唐草の略化したものを描く資料と考えられ、口縁帯に六角形の繋ぎ文を描く資料、菊花文は略化している、胴下文様は不明。12は花文を描く資料。13は花文と推測される図案で、勢いのある筆致で描く、呉須や白色部分の発色が不良。14は宝草華唐草と推定される破片資料で、全体的に釉が白濁する。15は流雲を描いた資料で、雲堂手の類と推定されるが主題は不詳。16は口縁の特徴からII類としたが、釉調等からII類に該当するか検討を要する。

第92図-17～31はIII類（小野分類C群・景德鎮窯系）。17～19は主郭分類ではIII類に外反する資料は無いが、その特徴からIII類とした。蓮子碗の口縁が外反するタイプで、図示した資料はいずれも胴部に草花文を描き、見込みにも同様に草花文を描く。20は前者17～19と同種の文様モチーフながら口縁部は直線的になる資料で、呉須の発色は不良。21～25は今帰仁城跡で一般的に出土する主郭分類III類の資料で、腰部に蕉葉文を描き、口縁帯は波涛文、見込みには蓮華文を描く最も典型的な。外底面はいずれも施釉される。21は全形を窺える資料。22・23は同種の口縁部資料。24～26は同種の底部資料で、24・25の見込みの文様はいずれも蓮華文である。第93図-27は発色が黄みがかりや粗造な資料。28～30はやや発色・素地とともに粗造となる資料で、外底面は露胎となり、施釉は疊付脇までとなる。文様も簡略化が著しく景德鎮窯系とする前者III類資料とは異なる窯焼造り品とも目される。28の文様は口縁は略化した波涛文、胴部は草花文と推量される。29・30は底部資料で見込みは簡略化した文様が勢いある筆致で描かれる。31は小片のため蓮子碗であるとしたが、呉須の発

色は良く、ダミ技法などが認められるため、あるいは後述するVII類などに該当するものかもしれない。

第93図-32はIV類（小野分類無し・景德鎮窯系か？）の碗で、高台はハの字形に外側に開き、見込みは蓮子形となる、小片の文様モチーフは不明。

第93図-33～49はV類（小野分類D群・景德鎮窯系）。33は口縁帯に波涛文を、腰部にアラベスク文を描く今帰仁跡出土品としては最も一般的なV類碗である。口縁帯の波涛文も精緻な34や、やや粗雑な35、更に略化した39・40のようにバリエーションが認められる。36～38はV類の底部資料で、36は見込みに十字文を、37・38花文を描く。39・40は外底が露胎となり、素地も灰白色で粗く、呉須の発色は不良、34～38に比して暗くなる資料。41は粗造の資料の口縁部資料。42は小片のため分類は不確定だが、口縁部直立する形状から当該分類として報告する。

第43図-44～49はV類の底部資料と推測される。44は見込みを欠損するが、見込みの窓枠外周の三角文が認められる。45は見込みにラマ式蓮弁文を連続的に配する資料。46は丁寧なダミ技法による描画で、外底面には「太平」の字款のある資料。47・48はやや底径の小さな碗で、47は見込みに壽字文、48は見込みに捻子花文を描くあるいはII類に該当するか検討を要する。49は見込みの文様は不明、腰部にはアラベスク文が巡る。釉は黄色みをおび陶器質の胎土で焼成は不良。

第94図-50～59はVI類（小野分類E群・景德鎮窯系）として分類した資料である。50は小破片のため判然としないが鳳凰に花唐草文を描く資料。51は、花文部分が僅かに確認できる程度だが、白抜きの牡丹唐草文が胴部に配置された資料と考えられる。（50・51は口縁片のみのため分類は暫定的にVI類とした）。52はダミ技法によって描かれる資料で主題は不明だが人物図等を描いた資料と考えられる。53は丸文内に宝草華唐草を描き、口縁内面は四方櫛文帯が巡る資料。54・55は花唐草の資料。56～59は底部資料である。図示した資料はいずれも見込みが盛り上るいわゆる饅頭心形で、見込みに文様を描き、外底には字款を配する。

56は見込みに人物図、胴部外面には漁網を張る漁師図が描かれ、外底には字款が見られる。57は胴部に獅子もしくは龍図と推定される図柄が、見込みに花文を十字状に図案化したものが描かれ、外底に萬福攸同の字款が記される。58は見込みに花文が、外底字款は不詳。59は牡丹唐草文が見込みに描かれ、外底字款は欠損するが長命富貴の吉祥文と推定される。

第94図-60～63はVII類（上田A-IV・景德鎮窯系）の碗資料。60は胴部外面に梅の文様が描かれる資料。61は花唐草文が外面に、内面に四方櫛文が口縁帯に描かれる。いずれも口唇部がやや肥厚する特徴からVII類と判断した。62は胴部外面に唐子と橋脚や草木のモチーフと思われる図案が描かれる。見込みにも文様が描かれるがモチーフは不明、外底の字款も欠損部が多く判読不明。63は見込みに牡丹唐草、胴部主文様は唐草文で腰部に如意頭文を描く、外底には長命富貴の字款が見られる。

第94図-64～72は粗製の碗で景德鎮窯系とは異なると推量される資料である。いわゆる福建・廣東、あるいは具体的な窯名として漳洲窯が挙げられる資料である。

68は粗製の碗で、口縁に平行して外面に一筆書きの線が描かれる。見込みは露胎していると考えられ、釉調も灰白色で素地の中の粗砂粒が点々と見られる。

64は白濁し焼成も不良のため文様モチーフは不明ながら外面と見込みに文様が配される比較的大きな碗。67は外面に花唐草文と宝文。94は内面口縁帯に四方櫛文が見られる資料、焼成は良好だが、釉調は灰白色で呉須の発色も不良。69～72は先に紹介した67・68と同類の底部資料。見込み脇、腰部に圈線が巡る。図案はいずれも簡略的な図柄を勢いある筆致で描く、素地、釉調などは不良な点も全体的に共通する特徴である。

第94図-73は外面は青磁、内面口縁下に呉須で圈線を描く資料。本項で紹介するが、青磁染付として分類し集計している。

皿（第95・96図） 第95図-74～96・147は主郭分類の青花皿I類（小野B群：景德鎮窯系）である。口径の大小、文様のモチーフ等で数種に分類できると考えると考えるが、ここでは一括してI類としている。74は見込みの中央に琵琶法師が乗馬するようなモチーフがダミ技法によって描かれているようだが、欠損部分が多く不鮮明なところもあり推定としておきたい。口縁帶は四方襷文、外面は唐草文が描かれる。75は外面は唐草文、見込みは十字花文で、胴部内面には如意頭文を描き、器全面に文様が充填される。76は見込みの主文様は欠損部分が多く不詳、呉須の発色は不良。外面は宝相華唐草文を描く。77は見込みは花文、胴部は唐草文を描く。78は見込みが玉取獅子が描かれる。74～78は口径14.7cm(74)～17.4cm(75)、器高と後述するI類皿に比べてやや大きい。79～84・87～90は見込みに玉取獅子、外面に唐草文が描かれるI類皿で今帰仁城跡出土品では最も一般的なモチーフである。85は外面は唐草文、胴部内面には如意頭文が描かれる、先に紹介した75の事例で見たように、器全面に文様が充填され見込みには十字花文が配されたと推定される。86は、先に紹介した77と文様のモチーフが類する資料。90は外底が露胎となる資料。91～96は外面に唐草文、見込みには十字花文が描かれるI類皿。なお、細分すると、74・76・77などは、器形的にはやや腰部に張りがあり、胴部内面は文様を空白帯とし、ダミ技法を用いる等の特徴を持つことからI類皿からは峻別されるべき資料とも考えられる。小野分類ではB2群に該当する資料と目されるが、外底には字款は見られない。

97～107は主郭分類の青花皿II類（小野C群）。いわゆる碁笥底の皿で、腰部の蕉葉文などは多くの資料で共通するが、見込み文様にはバリエーションが見られる。97～106は外面は蕉葉文と口縁帶に波涛文、97～100・103～106は見込みに草花文、101は見込みに捻子花、102は見込みに文様が見られるが、モチーフは不明。107は図化した資料中では唯一外面無文の資料で、見込みには草花文と推定される文様が描かれる。

108・109は小形の菊花皿で、碁笥底の形態であることから皿II類として集計した。

110～113も碁笥底形態の資料で、腰部には蓮弁文が配置される小皿II類として集計した。

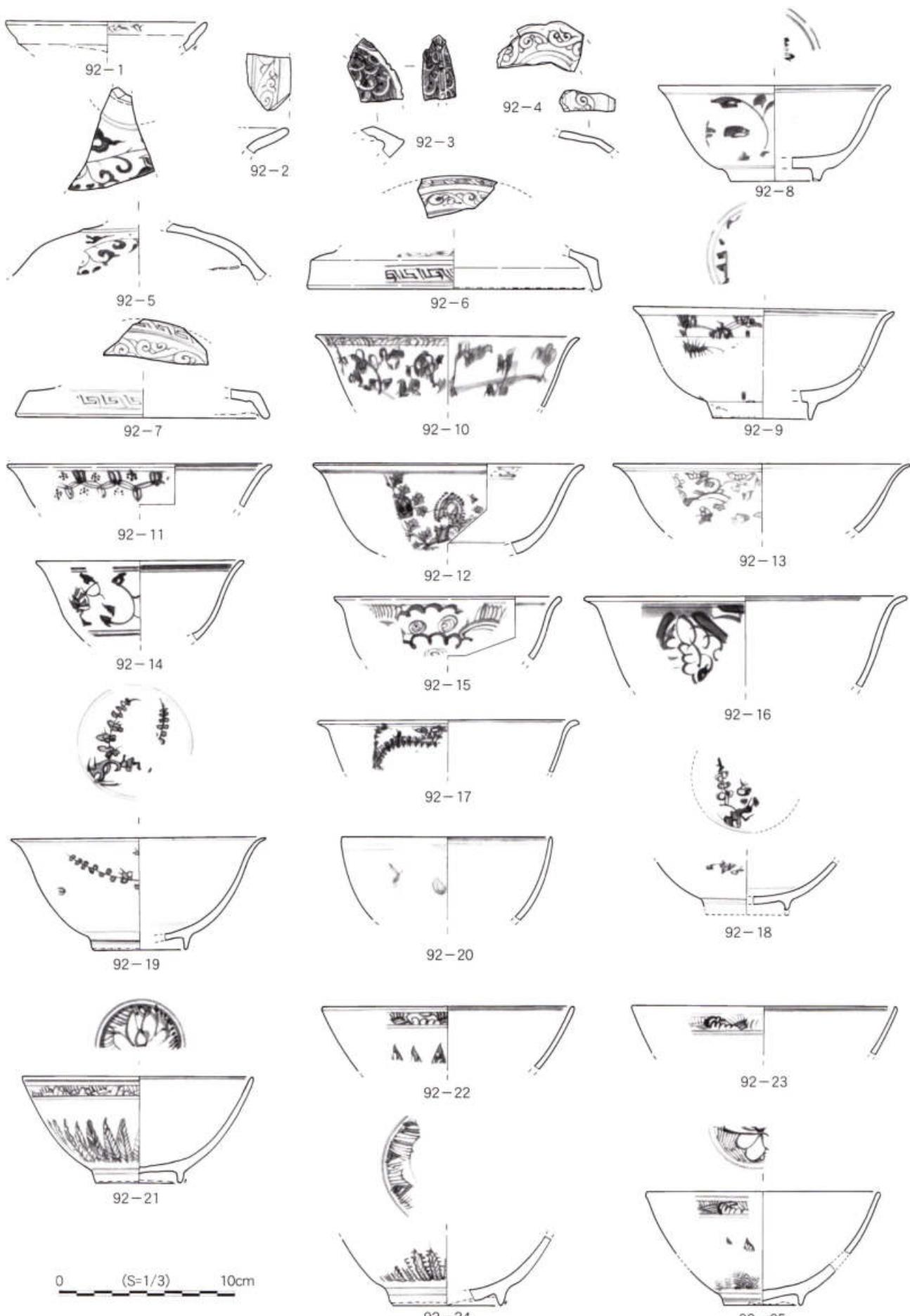
114～118は青花皿III類（小野E群）に該当する。114～117には外面には唐草文がダミ技法にて描かれている。118は外面は無文。117・118は内面口縁帶は四方襷文が配されている。サイズには大小みられるがIII類として分類し集計した。

その他（第96図-119～149・193・第97図153～160） 119～122・125～127は杯I類で、筒形の杯で、外面に隆帶による圏線で区画し丈夫には草花文、隆帶下腰部には如意頭文を配する。見込みは草花文（119・120）、花鳥文（125）がみられる。128はサイズから杯に分類したが、分類は不詳。

129～133は小杯I類で、器壁は薄く外面には唐草文（130・132）や松葉文（131）などの文様を施す。漳洲窯に分類した粗製の小杯144などもここに分類されるべきかとも考えられる。135は杯II類として主郭分類にはない新たに設定した分類である。碁笥底となり、腰部には蓮弁が配されるなど小皿II類としたものと文様や呉須の発色などが類似する。141・142も主郭分類には設定の無い分類で新たにIV類として設定したその他の製品である。141は口縁部上面が推定八角形で、区内には花文が配されている。142は底部資料で饅頭心状に見込みは盛り上がる、文様モチーフは不詳。134は素地や釉調などから明青花ではなく清朝磁器であると推量される。I層の出土であり1点のみの出土である。

143～149は漳洲窯系の小杯と推定した資料である。143～144は直口、145～146は外反の小杯である。147は焼成不良で分類時には漳洲窯系の資料と推定したが、形態的にはI類皿で見込みに十字文が描かれる資料と思われる。148～149は直口口縁のタイプと同一分類の底部資料と考えられる。

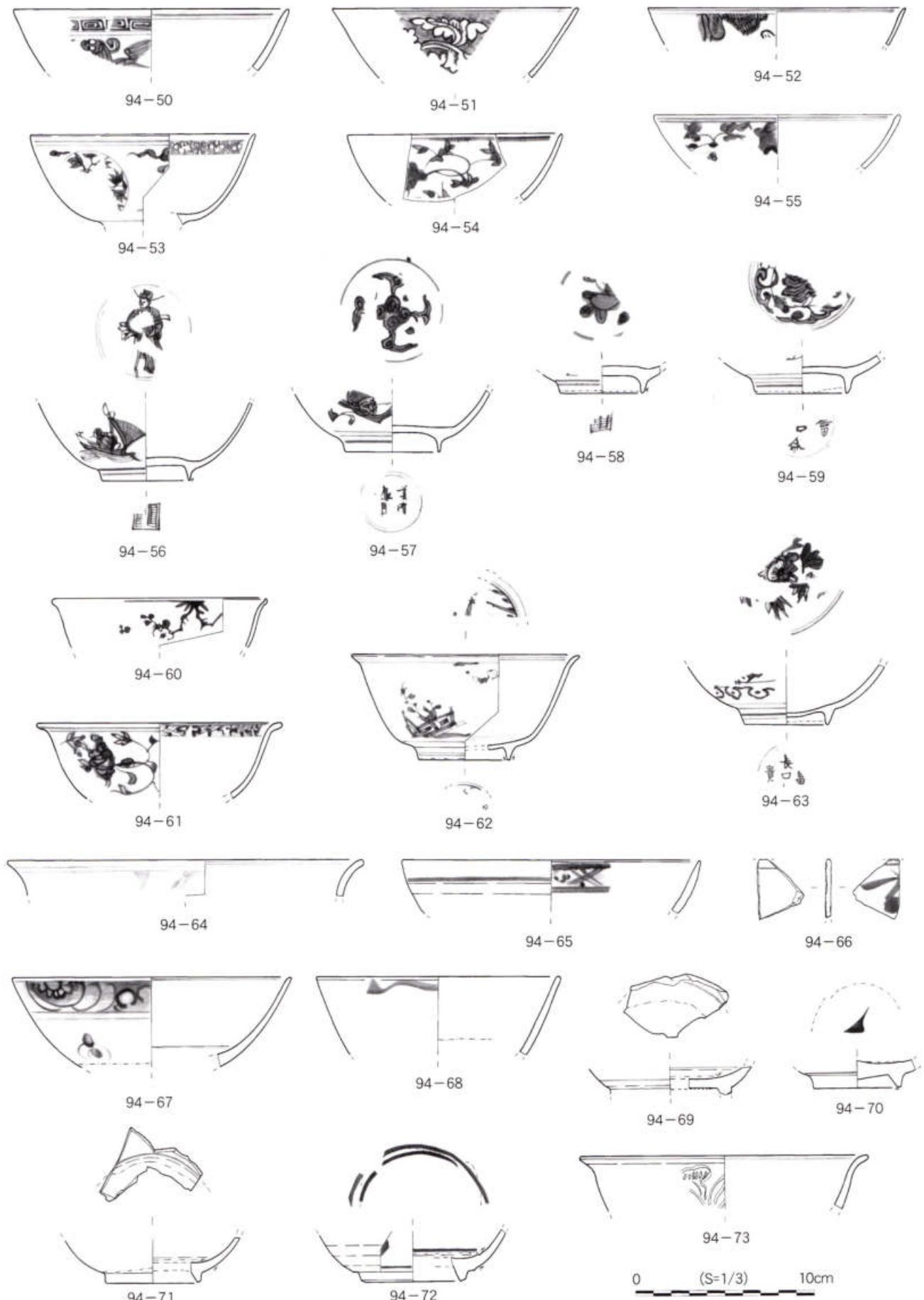
150は酒会壺の胴部片で、腰部にラマ式蓮弁文を配す。193は酒会壺の蓋の破片資料で蓮葉文かと推定される呉須の線描が見られる。



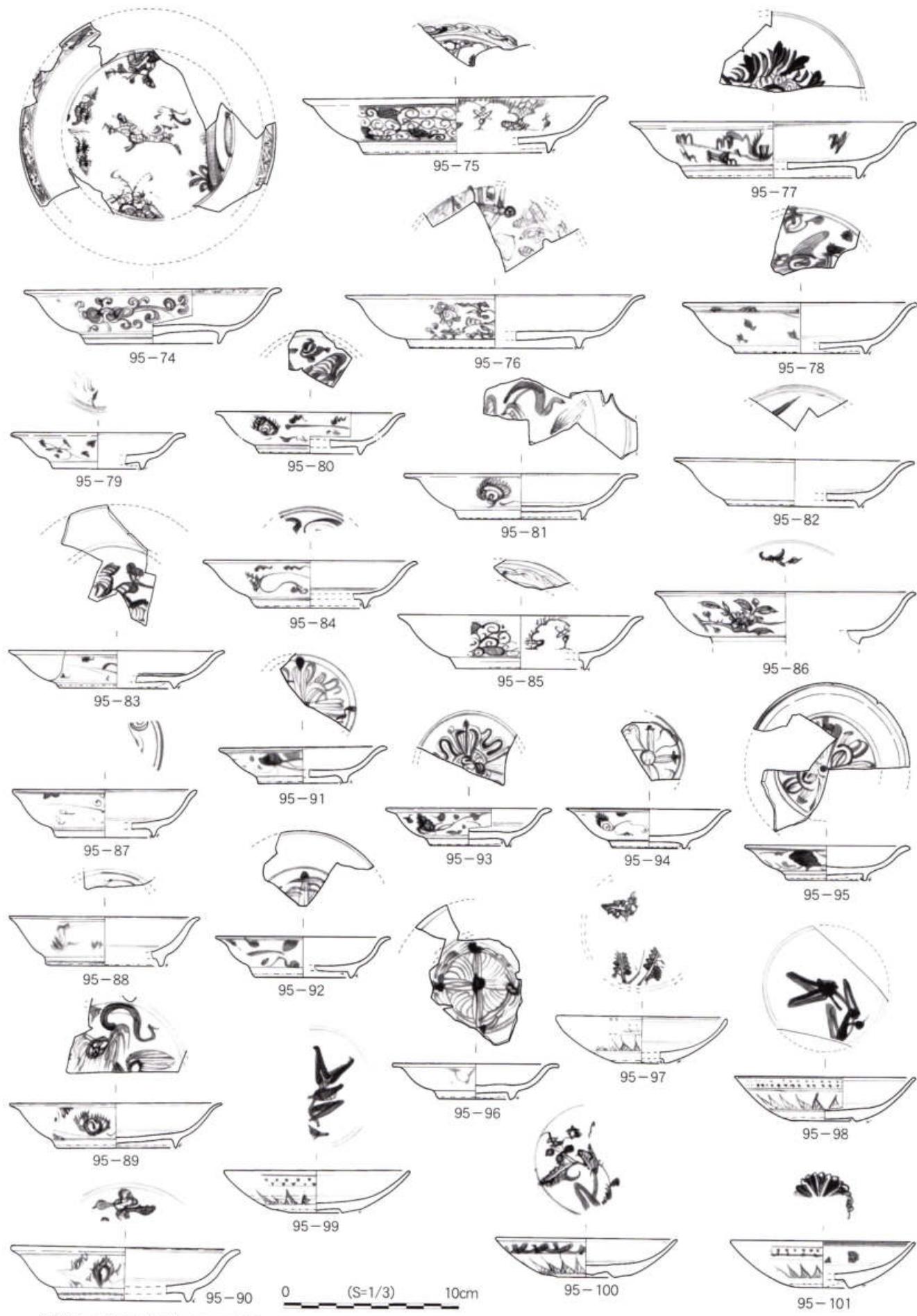
第92図 VIII区出土遺物 (11) 青花



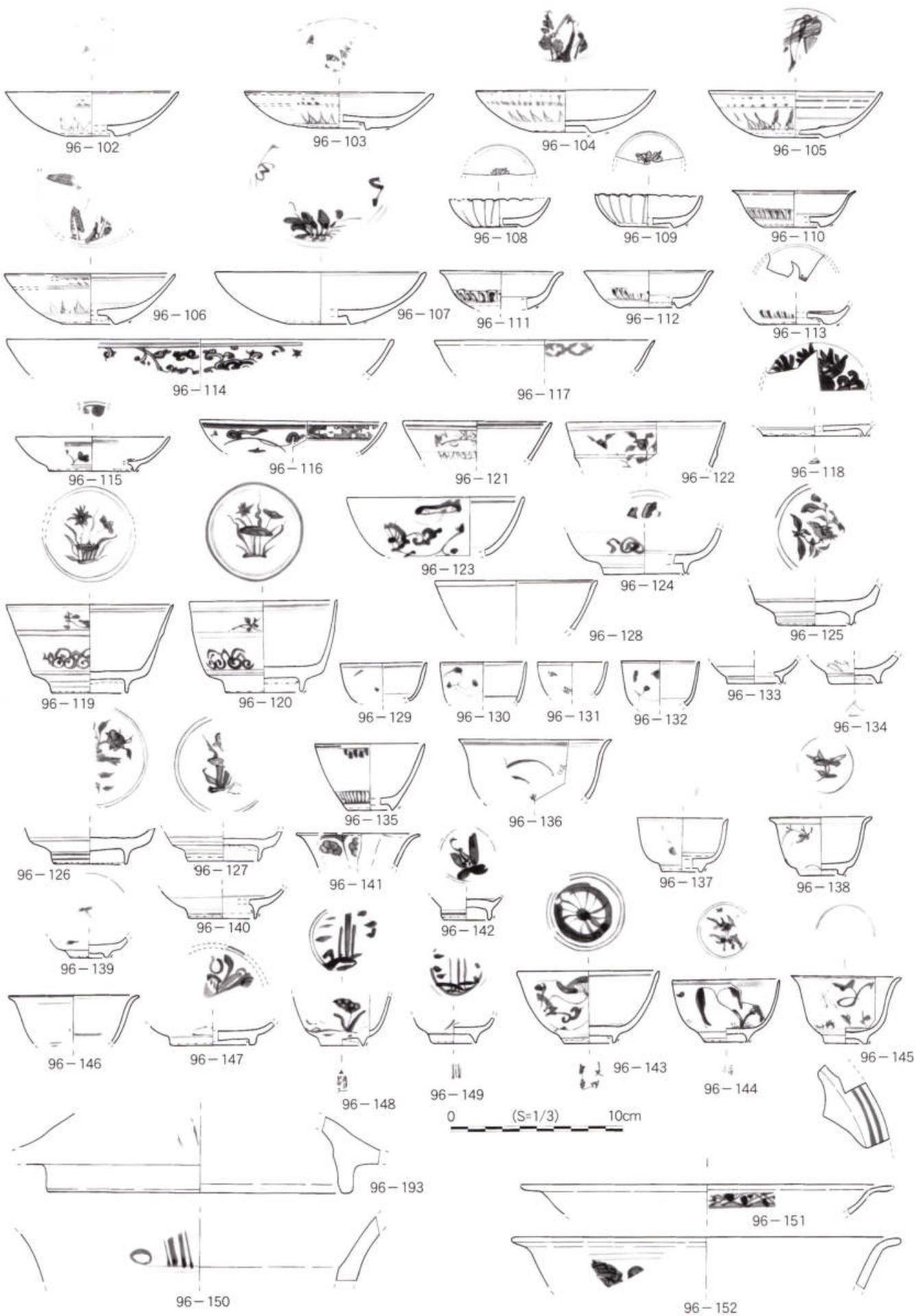
第93図 四区出土遺物 (12) 青花



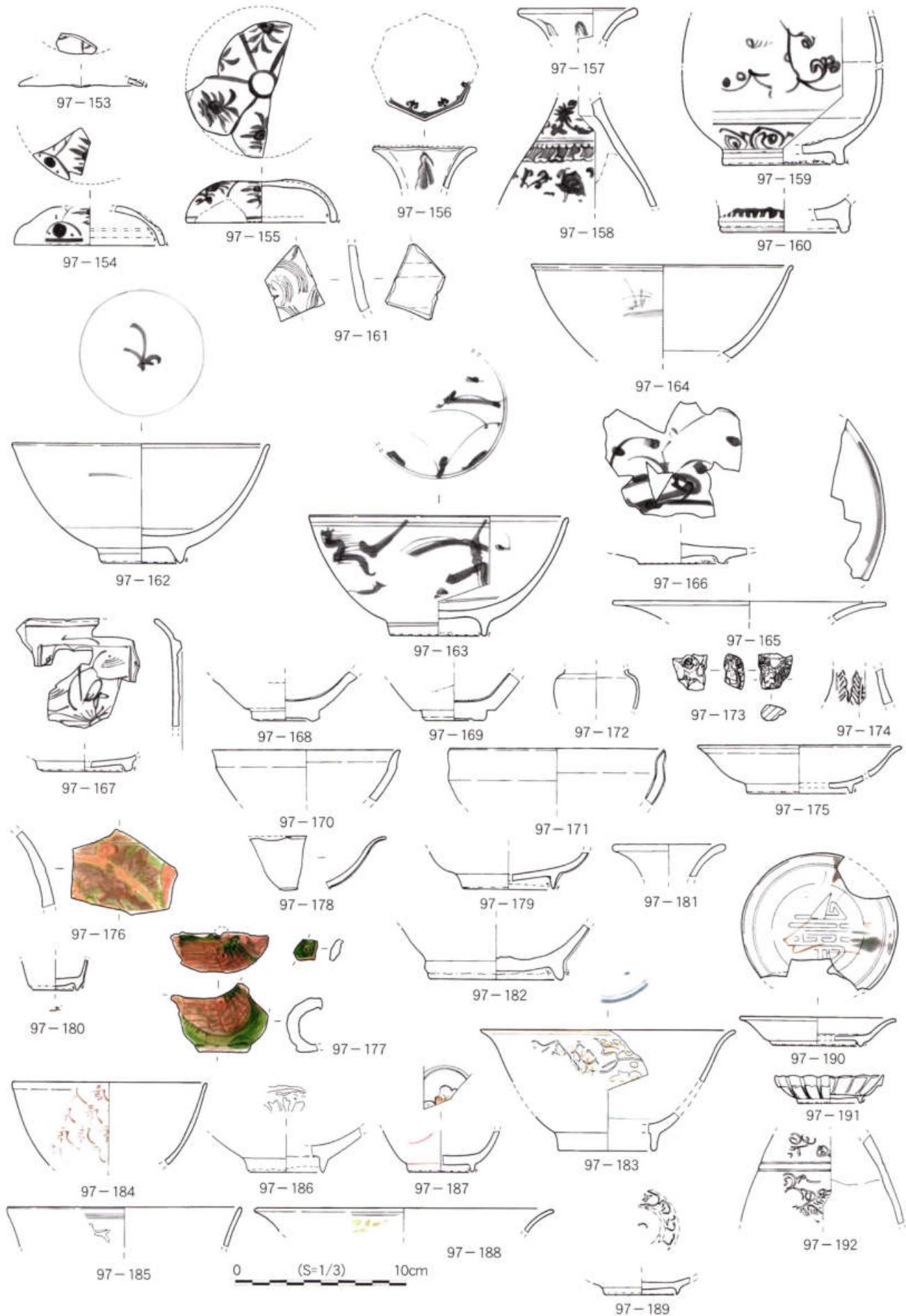
第94図 VII区出土遺物 (13) 青花



第95図 VIII区出土遺物 (14) 青花



第96図 VII区出土遺物 (15) 青花



第97図 VIII区出土遺物 (16) 青花・色絵・赤絵・三彩・翡翠釉ほか

151は折縁になる大皿の口縁小片、比較的薄手のつくりとなる。

152は外反口縁の小片で、推定径が広く暫定的に鉢とした。

第97図-153は小壺の蓋の蓋縁の小片で、文様は葉脈のモチーフから蓮葉文と推察される。154・155は合子の蓋で、六面立体的に仕上げ、区画したうえで区画内に花文を描く、同種の資料は隣接するVII区の調査でも出土している（『今帰仁城跡発掘報告』IV：106-130）。同一個体と考え、接合できるか試みたが、報告資料とは接合しなかった。156は上面観八角形の瓶の口縁資料で、外面には蕉葉文が描かれる。157も瓶口縁部で、蕉葉文が描かれる。158は瓶の肩部資料で、胴主文様は欠損部分が多く判然としないが、牡丹かと推定される花唐草、頸部にはややモチーフの異なる花唐草文が描かれる。ダミ技法により比較的精緻な文様が施されている。159は瓶底部資料で胴部主文様は牡丹唐草文である。前者158とは筆法は異なり勢いある筆致で描かれており、当該資料が古式と目される。160は底部資料で瓶等の袋物と推察される。高台のみの破片資料であるが、筆致は158に近い。

**8.青白磁**（第97図-161） 第97図-161は青白磁の胴部小片で、見込みには轆轤痕、外面には櫛描きによる文様が密に施される。文様モチーフは不詳。

**9.肥前陶磁**（第97図-162～167） 162～164は碗で、163は染付雲龍見込荒磯文碗。164は染付山水文碗。162も同様に染付山水文と推量されるが欠損部分が多く、また略化した文様であるため不詳。図示した碗3点はその特徴から、肥前陶磁の編年では1650～1690年頃の年代観（肥前陶磁の時期区分III期）が付与される資料と目される。165は外側に大きく開く口縁資料で口縁部上面に圈線を呉須で描く染付皿。166は皿底部、見込みには草花文と推定する略化した文様が施文される。167は染付角皿、見込みの文様モチーフは略化し、欠損部分が多く不明。肥前陶磁については、野上建紀氏に出土品を一度実見いただき、幾つか年代判断の難しい資料（97-166, 49-34, 17-38・35・等）もあるが、およそ17世紀第3四半期までには収まる資料群との所見をいただいた。

**10.黒釉陶器**（第97図-168～172）は黒釉並びに褐釉陶器のいわゆる茶器類である。中国産の陶器と推定される。168・169は底部資料で、いずれも高台脇を一度削り出す特徴を持つ資料。170・171は口縁部資料で、口縁下で一端くぼみ外反するタイプ。いずれもこれまでの今帰仁城跡出土資料と比べても一般的な資料といえる。

172は一般的に茶入れと呼ばれる小形の壺で、肩の張るいわゆる肩衝である。

**11.翡翠釉**（第97図-173～175・191）は翡翠釉の資料で、173は龍を象った資料で、本来は器に付された取っ手等の装飾された部位の破片と推定される。翡翠釉の外反口縁の皿で、主郭等これまでの今帰仁城跡の発掘でも出土例のある資料。174は外面は翡翠釉の色は剥落して失われるが、内面に翡翠釉が良く残るため、辛うじて翡翠釉と判断できる資料である。瓶の頸部と考えられ、蕉葉文が線彫りによって描かれる。191は翡翠釉の型造りの菊花皿である。

**12.三彩**（第97図-176・177） 176は壺と推定される胴部の小破片で線彫りによる唐草文が描かれる、文様は黄釉、地は緑釉が施される。177は型作りの鳥形水滴、胴部片と顔の小破片資料で、体部羽は黄釉、胴と顔は緑釉が施される。

**13.瑠璃釉**（第97図-178～182） 178は瑠璃釉の皿で外反口縁。179は瑠璃釉の碗底部。180は瑠璃釉の小杯底部資料で外底には文字が施される。181は瑠璃釉の瓶口縁部資料。182は瓶底部資料である。180はこれまで今帰仁城跡の発掘調査でも初例だが、その他図示した資料は今帰仁城跡の出土事例としても一般的なものである。

**14.赤絵・色絵**（第97図-183～190） 183は色絵碗で、口縁下内外面に圈線、見込みの文様は呉須による下絵付け。外面には赤と緑による上絵付けによる宝草華唐草文を描く外反口縁の碗。184は下絵付けによる赤絵で梵字文を連続的配置する資料である。文字の濃い部分は釉が浮遊しやや色とし

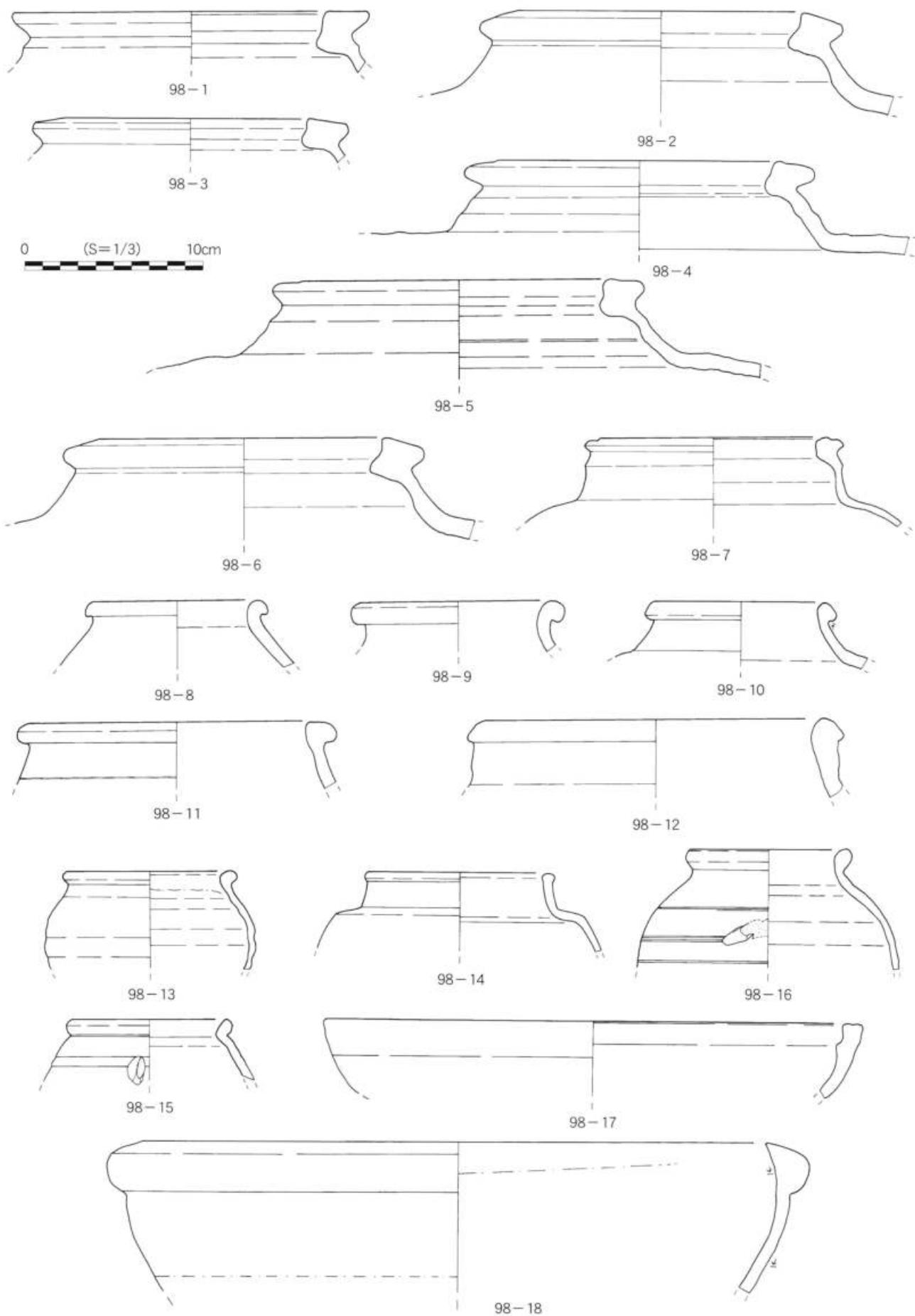
ては緑色に見える。185は直口碗の口縁小片で、外面に上絵付けにより赤と緑で絵付けするがモチーフは不詳。186は上絵付けの釉が剥落し絵付けした色彩は不詳だが、色絵と推定される碗底部資料。見込みは窪む蓮子型の碗で、見込みには花文もしくは、ラマ式蓮弁文が描かれる。187は色絵小碗の底部資料で、素地は黄みがかり前述した磁器質のものとはやや異なることから、あるいは肥前等国産の色絵とも推量される。見込みには梅花文が描かれるようだが、上絵付けの釉の剥落が著しく小片のため不明。188は色絵の外反碗口縁資料で、小片だが、今帰仁城跡の主郭などでこれまで出土する赤絵碗（『今帰仁城跡発掘報告Ⅱ』75図-5）と同種の資料である。189は周辺遺跡の今帰仁ムラ跡屋敷地2の出土例（『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』59-131）に類品がある。見込みを蛇の目状に釉剥ぎし、釉剥ぎした部分は線彫りによって花弁を描く、上絵付による施文は剥落著しく不詳だが、先例同様に文様が描かれていたと推量される。190は腰折れの外反皿で、「壽」字を押印して見込み中央に配し、上絵付けで山と推定される文様を描く。

15. 緑釉（第97図-192） 192は灰白色の比較的焼きの良い素地で、轆轤成形した瓶の肩部である。圈線で頸と胴体部を区画し、胴に線彫りで草花文を施すがモチーフは破片資料のため不明。

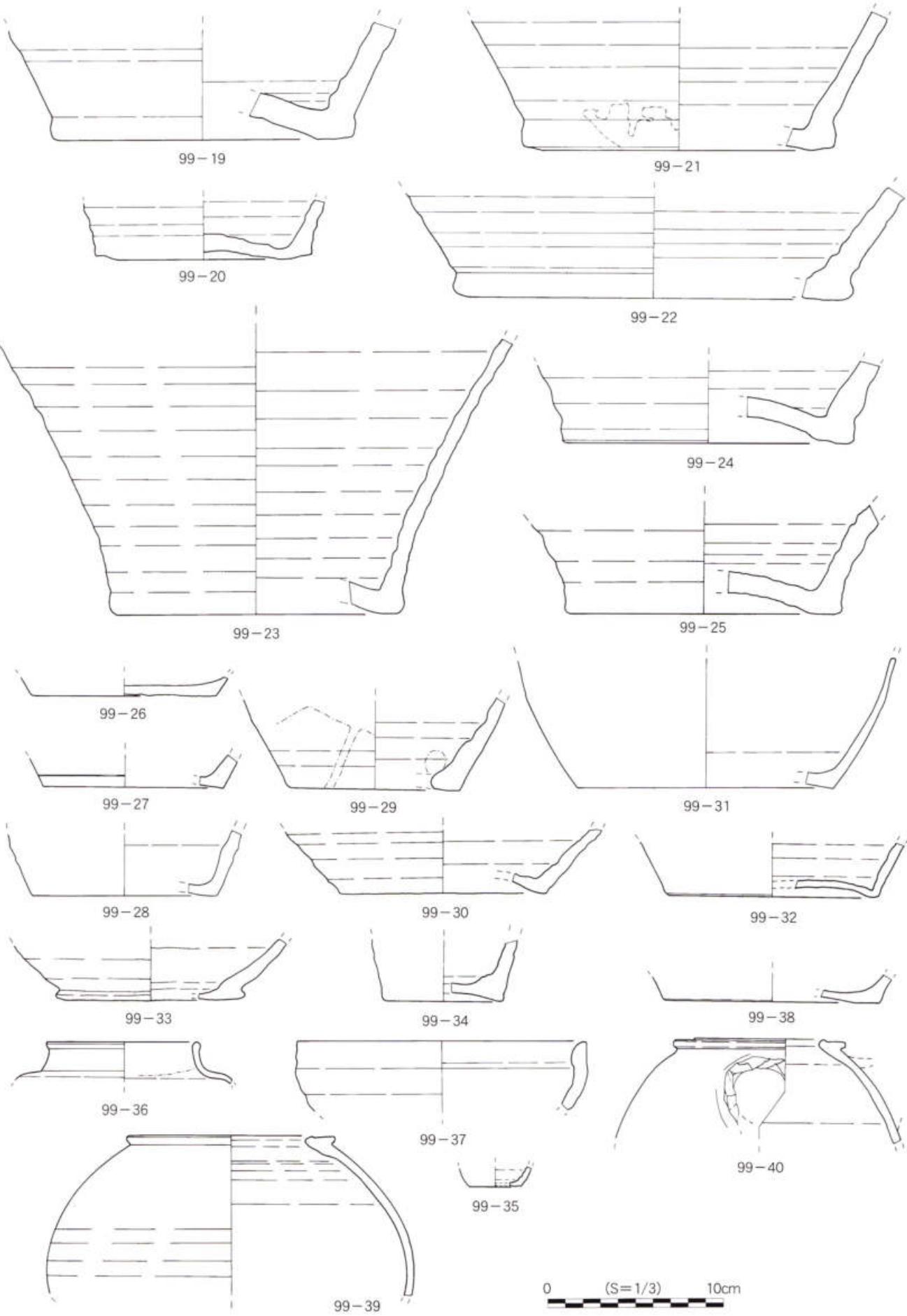
#### 16. 褐釉陶器（第98・99図-19～36）

壺：今回出土した褐釉陶器は素地や釉調、器形等から壺形資料を口縁を11類に分類し報告する。1～6は口縁部の断面形を方形とする大型の壺で今帰仁城跡をはじめ沖縄のグスクで出土する最も一般的な壺の口縁部資料である。当該資料の底部は18～25が該当する。安座間分類（瀬戸ほか2007、以下本項では安座間分類）の5類に該当する。7は釉調や器形などからI類と同系の資料だが、やや器壁が薄く、口縁部の造りも薄くなることから独立して分類した。小片ながら安座間分類の6類に該当すると考えられ、安座間分類では5類より6類が後出すると推測している。8・9はIII類として分類した。口縁部を丸く肥厚させる口縁小片で、口縁部上面は釉がかからず、8は重ね焼きの痕跡が残る。肩部には張りがあることから安座間分類4類に該当すると考えられる。10はIV類で、口縁形が断面三角形の資料で、口縁上端の釉は拭き取られており露胎とする。III類と同系等のものと考えられるが、器形や釉調が異なるため独立して分類した。11はV類で、安座間分類1類に該当する。フの字型の口縁部に頸部と肩部の間を線彫りし、圈線が廻る。口縁部上面は露胎、胎土は赤褐色、釉調は茶褐色。12はVI類、赤褐色の胎土に粗い石英粒が混和材に用いられている。直立する口縁部で口縁端を外側に肥厚させる資料。13～16は小形の壺で、胎土、釉調、器形からそれぞれ個別の分類を設けて紹介する。ただし出土量は多くは無い。13はVII類で釉調、胎土などはII類に近似する資料で、無耳壺と推定される小形の壺。器形に若干の相違点はあるものの、今帰仁城跡主郭（『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』73-3）に類例が見られる。14はVIII類、無耳小壺で茶入れ壺の器形として一般的なものである。類例として今帰仁城跡主郭V層の出土品（『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』37-3）に類例が見られる。15はIX類、灰白色の比較的精製された胎土で、白色粒を混和材に用い、釉は灰黄色で薄く施釉する。口縁部は外側に屈曲させ、肩部に横耳が付される。安座間分類では古手（14世紀前半以前）とされ大宰府分類耳壺VI類に相当するものと推定する。X類とした16は釉調が全体的に灰白色で薄く、口縁上面は露胎とする。口縁は玉縁状に成形、球胴形の壺で類品をあまり知らない。

褐釉陶器の壺の底部資料を19～38に図示した。器形にバリエーションが見られるが、口縁部との相関関係を釉調や胎土から想定できるものの、確定的に判断できないため、先に記した口縁と後述する底部とはそれぞれ紹介していきたい。19～25はI類の底部資料と考えられる。口クロ痕が明瞭に器壁は凹凸する。外底部にしばしば窯内で接着した様子が見られることから、重ね焼きして焼成したことがわかる。26は黄白色の胎土に外底端部を平滑に削る褐釉底部資料口縁IV類の底部資料と推定。27は粗砂粒を混和材とする壺底部で、VII類の底部と推量される。28は赤褐色の胎土で小片な



第98図 VIII区出土遺物 (17) 褐釉陶器



第99図 VII区出土遺物 (18) 褐釉陶器

がらⅢ類かⅤ類の底部資料と推定。29は壺形には類似する胎土は見られないが、30はⅡ類の底部資料と推定される。凹凸はⅠ類の底部資料に比して消失し、器壁も薄い。31はかなり粗い砂を混和材として使用する壺で、厚みがある底部資料。31は内外面に褐釉を施釉する壺底部で、暫定的に中国としたが、産地を含めて検討を要する（薩摩・苗代川窯系か？）。32は腰部まで施釉されない底部資料で、外底端のみが置いた時の接着面となる、Ⅴ類の底部資料と推定される。33は白色の細砂粒を多量に混和材に用いる。腰部は下ぶくれで底部外端部が外側に押しつぶれたように張り出す。内面は釉が施釉されるが外面は露胎。34は黒色の粗砂粒を混和材とし、灰白色の精製された胎土を用いるⅨ類の底部と推定される。35・36は赤褐色の粘性のある精製された胎土で、混和材はほとんど含まない。いわゆる茶入れの褐釉陶器。36は口縁部が直立、口唇は肥厚させ、肩部に張りのある小形の壺。35は小壺の底部小片で底裏に糸切り痕が明瞭に残る。

**鉢**：17は胎土に粗い粗砂粒を混ぜる、内面に2条の突帯を有する鉢型の褐釉陶器。18は口縁を玉縁状に肥厚させ、内面には10本を1つとする櫛目が等間隔に配置される擂鉢。

#### 17. 焼締陶器（第99図-37～40）

37は鉢形で、口縁内面を肥厚させる灰色に焼成、粗砂粒を混和材とする資料。38～40は赤紫色の焼締陶器で、主郭で出土した擂鉢（『今帰仁城跡発掘報告Ⅱ』74-7）やSR2で出土した既報告資料（『今帰仁城跡発掘報告Ⅳ』32-14）と類似の資料群である。同一個体の可能性がある。取っ手が付され口縁部に向かって内傾し口縁を三角形に肥厚させる広底の容器と推定される。

#### 18. タイ陶磁（第100図-37～40、第101図-20・22）

**褐釉陶器** 褐釉陶器壺は、胎土、釉調、器形などから大きく2つの窯系に分類される。一つは1～8で図示したシーサッチャナライ窯系で、もう一つが9～12で図示したメナムノイ窯系である。前者はやや暗赤灰色の胎土で、後者に比して胎土は精製され粗砂は散見的、口縁形は角があり、ラッパ状に外側に大きく開く。一方後者は口縁部は玉縁状に肥厚し外反は前者ほど大きく開かず、胎土の色調は赤みが強く小豆色の粗砂粒を混和材に用いている。1～5はシーサッチャナライ窯系の口縁部資料で、口縁端部の造りなどに若干のバリエーションを認める。6・7は同窯系の底部資料と推定される。9～11はメナムノイ窯系の大型壺の口縁部資料で、12は同窯系の中小型の壺である。12は同窯系の底部資料である。

14は瓶、小壺など袋物の底部資料である。釉調からタイ陶磁の褐釉と推定したが釉が残るのは僅かなので暫定的な分類としておきたい。

第101図-20・22は褐釉陶器の小破片で、20は型作りの置物あるいは袋物。22は口縁部で内傾する褐釉小壺の小片、先に紹介した14と同一個体であれば褐釉の双耳壺のような資料の一部かと推定する。

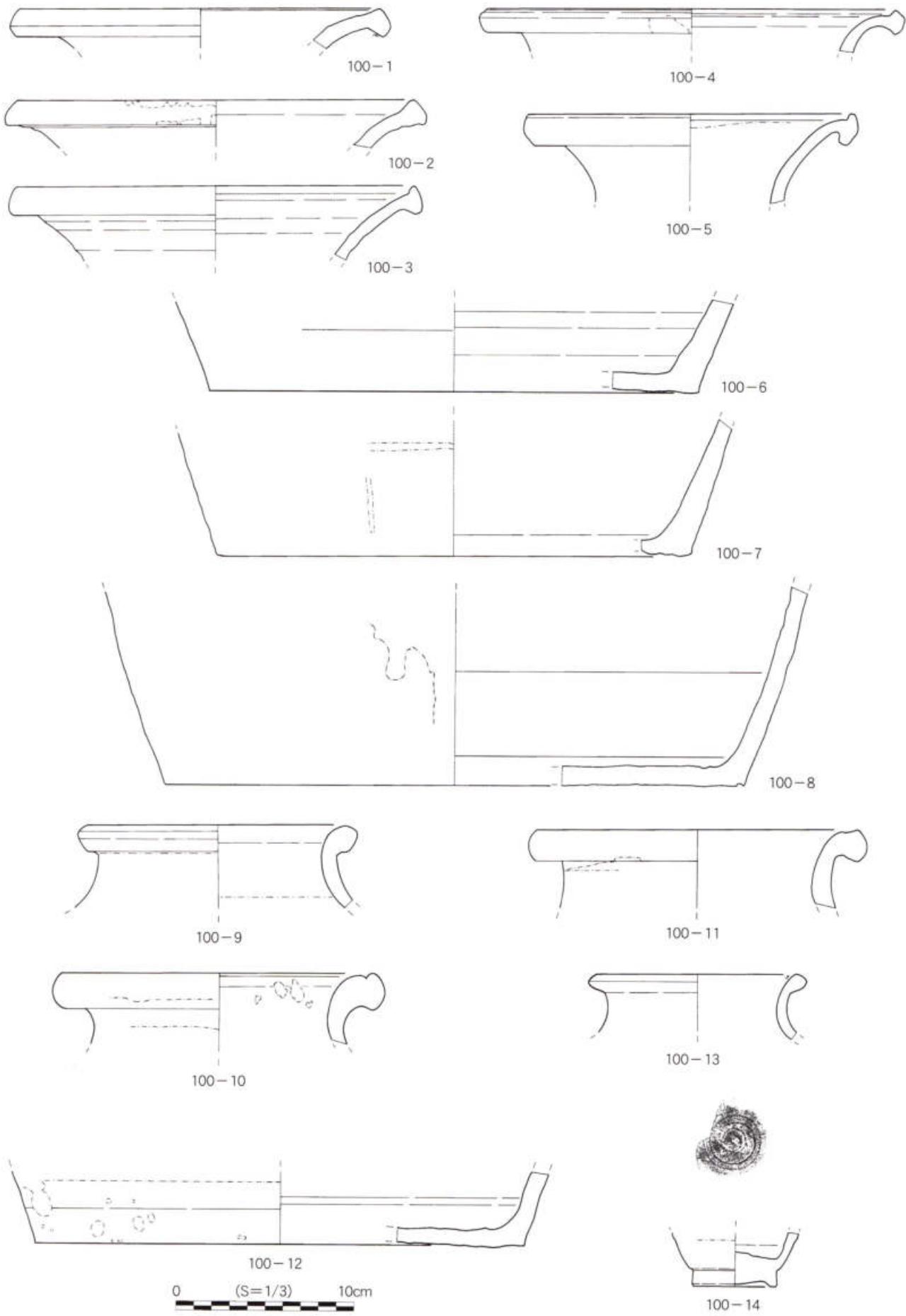
**鉄絵** 15～19は鉄絵の合子で、15・16は蓋、17～19は身である。文様や口径などから推定して、15と19、16と18はそれぞれセットになると考えられる。21は鉄絵の碁笥底の底部資料で器種不明。

**土器** 23～25は半練土器の蓋で、いずれも落とし蓋のタイプである。27～30は半練の壺形土器の身と推定され、27・28は口縁部、29・30は胴部資料で、身の出土例は希だが、今帰仁ムラ跡屋敷地3で報告されている（『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』）。

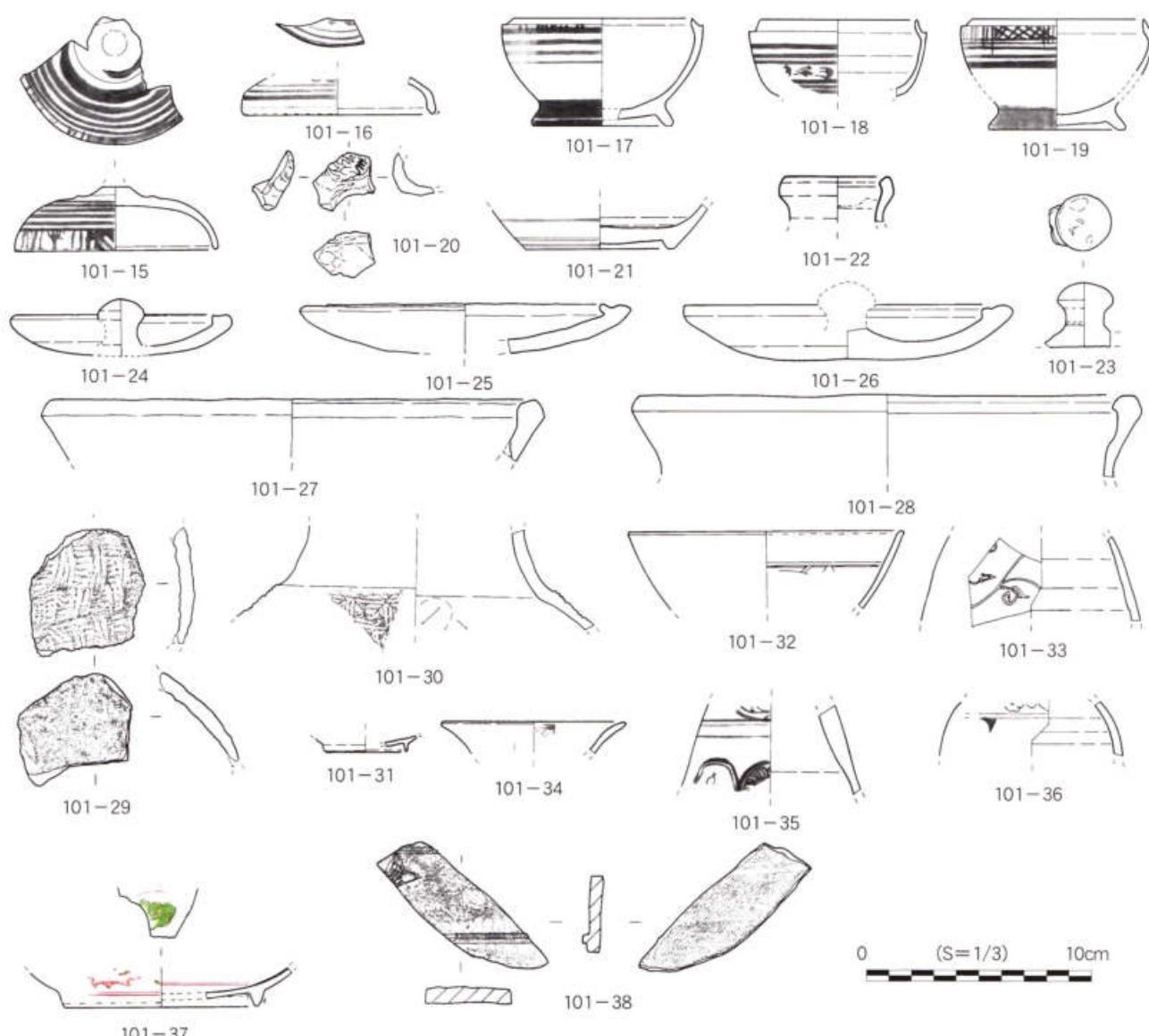
#### 19. ベトナム陶磁（第101図-31～38）

**白磁** 31は小形の碗で小片のため暫定的にベトナムとした。32は口禿の碗口縁部で型押しによる印文が確認されるがモチーフは不明。33は瓶胴部片で唐草文を線彫りする。

**染付** 34は瓶の口縁小片で、内外に淡い呉須による絵付けを見る。35は瓶で頸部に圈線を廻らせ、上下に分割する呉須は発色が良く、素地も白色で精製されておりベトナムか中国か判然としないが、主郭でベトナムとした資料（『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』82-7）と比較し近似するためベトナムとした。36は瓶と推定される肩部の小片資料である。



第100図 VII区出土遺物 (19) タイ産陶磁



第101図 VIII区出土遺物（20）タイ産陶磁・ベトナム陶磁

**色絵** 37は色絵の碗で中国かベトナムかの判断は難しい資料だが、暫定的にベトナムとした。底部小片で、見込と胴部に赤と緑の上絵付けによる唐草文を描く。

**褐釉陶器** 38は褐釉陶器の胴部片で、赤褐色の精製された胎土で壺や鉢などの胴体部と推定される。類品が未報告ながら今帰仁城跡主郭でも出土例がある。体部に突帯文を廻らせ区画内に魚の尾と考えられる文様が添付される。

## 20. 錢貨（第102・103図）

錢は出土総数99枚、うち実測図化した資料は遺構出土のものも含めると59点である。図化資料は第9表に観察所見を掲載しているが、未図化資料についてもあわせて計測値等観察表として第10表に示した。

出土した錢の総数99枚のうち錢銘が判読できたものは34枚で、唐（2枚）6%、北宋（15枚）44%、南宋（3枚）9%、元（1枚）3%、明（38枚）38%で出土錢種の構成は、今帰仁城跡のこれまでの調査や、沖縄の同時代の遺跡出土例として一般的な構成となる。

以下、個別の資料について記述する。1は開元通寶（唐・621年）。2～3は咸平元寶（北宋・998年）。4は景德元寶（北宋・1004年）。5は一部判読不明だが、天禧通寶（北宋・1017年）と判断される。6は欠損するが、熙寧重寶（北宋・1071年：折二錢）と判断される資料。7は元豐通寶（北宋・1078年：折二錢）。8は元祐通寶（北宋・1086年）。9は崇寧通寶（北宋・1103年：当十錢）。10はやはり欠損するが、政和通寶（北宋・1111年：折二錢）と推定される。11は咸淳元寶（南宋・1265年）。12～15は洪武通寶（明・1268年）で、12は二枚重ねの内の一枚が洪武通寶と判読され、1枚は不明。16～18は永樂通寶（明・1408年）。19は宣徳通寶（明・1433年）である。

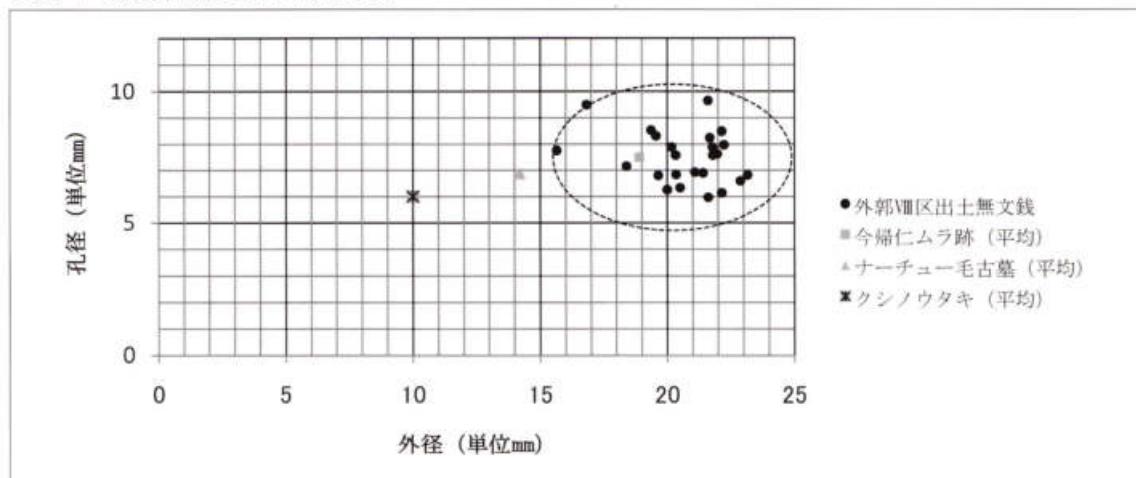
20～29は一部錢銘が判読できるが、断定的には錢種を判断できないものの、想定として以下の錢種と判断した。20は「□□□寶」が判読でき、書体や部首（へん）から洪と推定、洪武通寶（明・1268年）と判断した。21は「□樂□□」と判読でき、永樂通寶（明・1408年）と推量される。22は「元□□□」錢種判断は困難であった。23は「□元通□」で、おそらく開元通寶ではないかと考えられる。24は「□□元寶」で、これも僅かながら「寧」と推測できる拓本から熙寧元寶（北宋・1068年）と推定される。25は銘があるようにも見えるが、判読は不能。26は「□□□寶」一部割れが有る資料で、拓本ではうまく表現できていないが、資料を実見すると元豊の字がうっすらと判読できることから元豊通寶（北宋・1078年）と推定した。

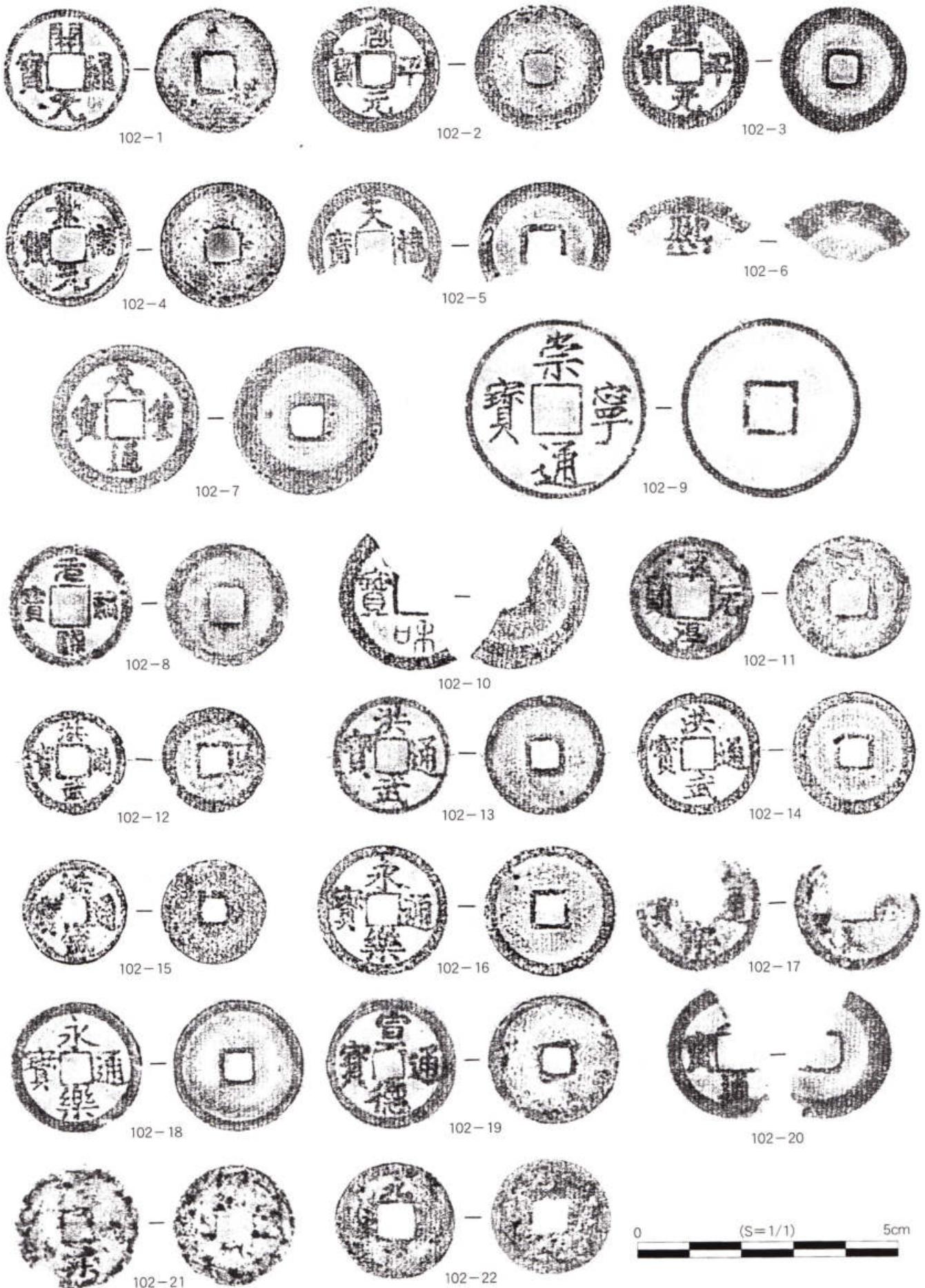
27～29は錢銘は不明。32・33は錢銘があるようにも見られるが無文錢とも考えられる。これらの資料は輪郭がうっすらと拓本に写る程度で、ほとんど無文錢の特徴と変わらない。

30・31、34～48は無文錢である。大きさに大小有り、全形がうかがえる資料では、最大のサイズは、図示した34の外径23.16mmで、最小は46の外径15.65mmである。重量では38の2.09gの資料が最大となる。無文錢で一部欠け割れのある34・36・43・47・48を除いた平均サイズは、外径が20.67、錢の厚さが0.99mm、重量は1.44gとなっている。参考に代表的な遺跡出土例とサイズを比較した（グラフ1）。

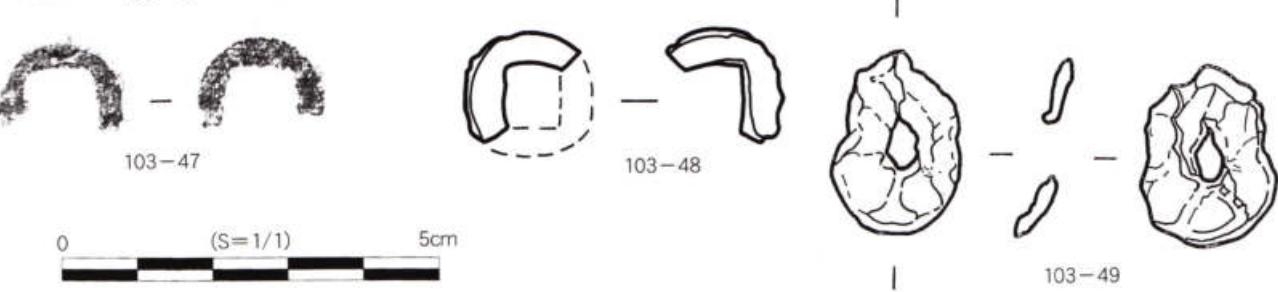
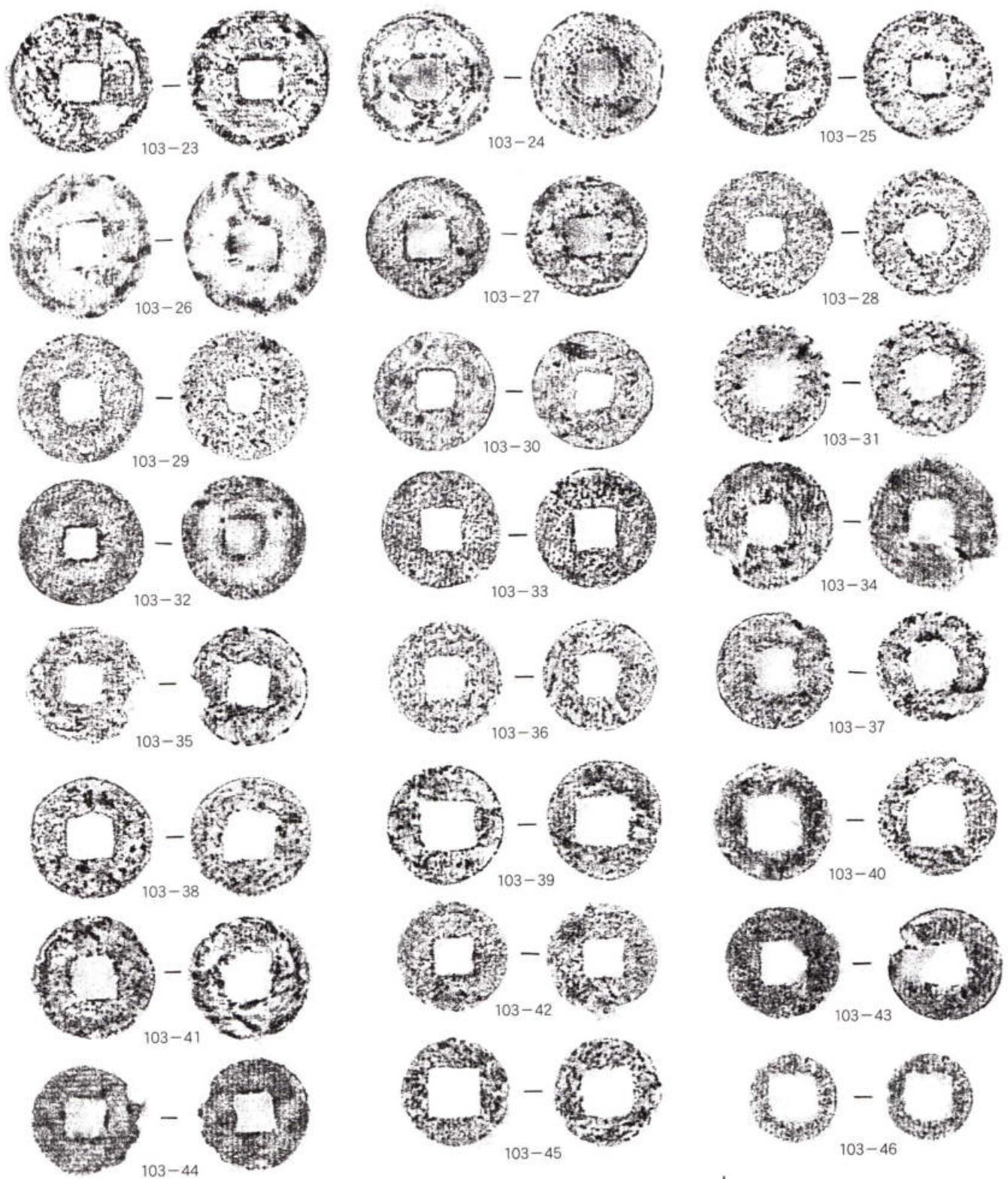
49は、錢銘不明の資料で、2枚の錢が変形し癒着重なっており、二次焼成等によって変形したものと推測される。

グラフ1 外郭出土無文錢のサイズクラス





第102図 VII区出土遺物(21) 銭貨



第103図 VIII区出土遺物 (22) 銭貨

## 21. 金属製品（第104～106図）

金属製品は出土総数892点（第6・7表）、うち実測図化した資料は遺構出土のものも含めると63点（鉄34点、銅29点）である。

出土した金属製品を大別すると、鉄製品と銅製品に大別される。ただし銅製品は純銅の製品という意味ではなく、銅の合金と推定される資料に分類されるもので、多くは緑青が付着する。鉄製品は、遺構出土資料は別としても、包含層特にI層の出土資料の中には時期不詳のものも含まれているため、注意を要する。以下個別に紹介していきたい。

### 鉄製品（第104・105図）

**蹄鉄（1）** 1は馬具の一つである蹄鉄である。U字型に鍛造によって製作されたと推量され板状の剥離が著しい。

**鎌（2）** 2は鎌（かすがい）で、断面円形で、長軸約13cmの大きな鎌である。

**板状鉄製品（3）** 3は板状の製品でこのような鉄板が複数回収されているが、全形は不明である。鉄鍋等の破片資料とも推定されるが、口縁などの特徴的な部分が見られないため判断が難しい。

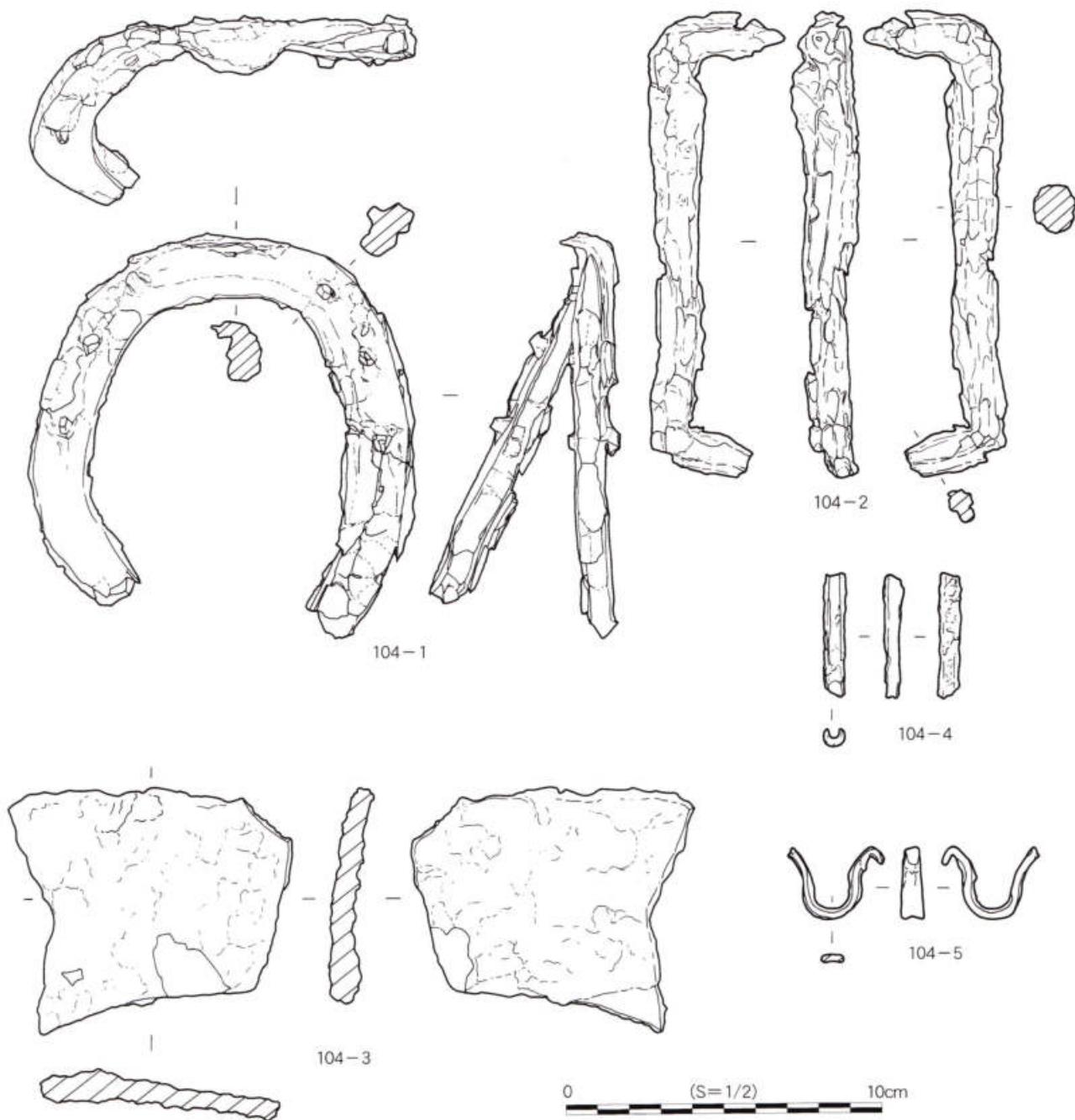
**金具類（4・5）** 4は断面がU字型になる鉄製品で覆輪状の金属製品と推定される。5は引き金具等と推定されるU字状の製品に端部に返し状の加工が施される。4・5は一般的には銅製品に多く見られる資料である。

**刀子（6～10）** 6～10は刀子で、志慶真門郭や主郭の調査では刀先で外反りになるI類と、刀身中央で外反になるII類に大別される。全形を伺える資料は多くないが、7はI類、8・10はII類に分類されると考えられる。茎を含めた最大長でも10の資料に見る12.8cmでいずれも小品である。6は刀先が欠損する茎のみの資料。7は一部茎が欠損していると思われるがおおよそ刀身の形状が推定できる。8は鋒ぶくれも無く全形の伺える資料で、幅広で刀身から茎の境がくびれて細くなっている。9は刀先の部分のみの資料である。10は今回出土例の中では最長の資料で鉄鋒が著しく刀身と茎の境は不明瞭ながら棟部分は直線的になる資料である。11は細い板状の製品で、細身の刀子の欠損品かと推定した。

**釘（第105図-12～23）** 12～23は釘である。（23は銅製）12～22は鉄製品である。図示した資料は包含層12点だが、釘と推定される資料は今回の調査地点から476点回収されている。いずれも断面正方形、頭部で折りたたむように折れる皆折のいわゆる和釘で、大小見られる。図示した資料では20・21が最大の資料で20が長さ11.2cm、21の重量37.5gを計量する。一方、小さな物では22が短く長さ2.9cmを計測し、重量1.9gを計量する。図示したものは、全体的に形状が直線的なものを選んでいるが、未図化のものの中には、12・23で図示したように途中でL字型に折れ曲がるものも少なくない。また16や21のように釘の先端部が欠損しているものもあることから、回収された釘の中の多くは、当該地域で使用され遺跡中に埋没したと推定される。23は緑青が付着し磁石に付かないことから銅製の釘と推定される。

**釣針（第105図-24～26）** 24～26は釣り針で、全体の長さが2～3cm程度の小品である。断面形は円形で24・26は返し部分の形状まで良く残る資料である。

**鎌（第105図-27～32）** 27～32は鉄鎌で形状的には3類見られる。I類刃先を平坦とするバチ型の資料で今帰仁城跡出土例では最も一般的な資料である。II類は28に図示した先端が尖り龍舌形となる資料で、骨鎌で一般的に見られる形の資料である。III類は32に図示した矢先端部が二股状になる雁又形の資料である。27はI類で茎部分が欠損する。28はII類で茎部分が欠損する、鎌下部は断面形は方形とみられる。29はI類で鋒ぶくれが著しく一部剥離している。30・31は全体が伺える良品で、茎が矢籠接続部へ向かって尖る形状がよくわかる。サイズ的には27・29に比べてやや細身である。32はIII類で雁又となる今帰仁城跡の調査例では初出の資料である。



第104図 VIII区出土遺物（23）金属製品

#### 銅製品

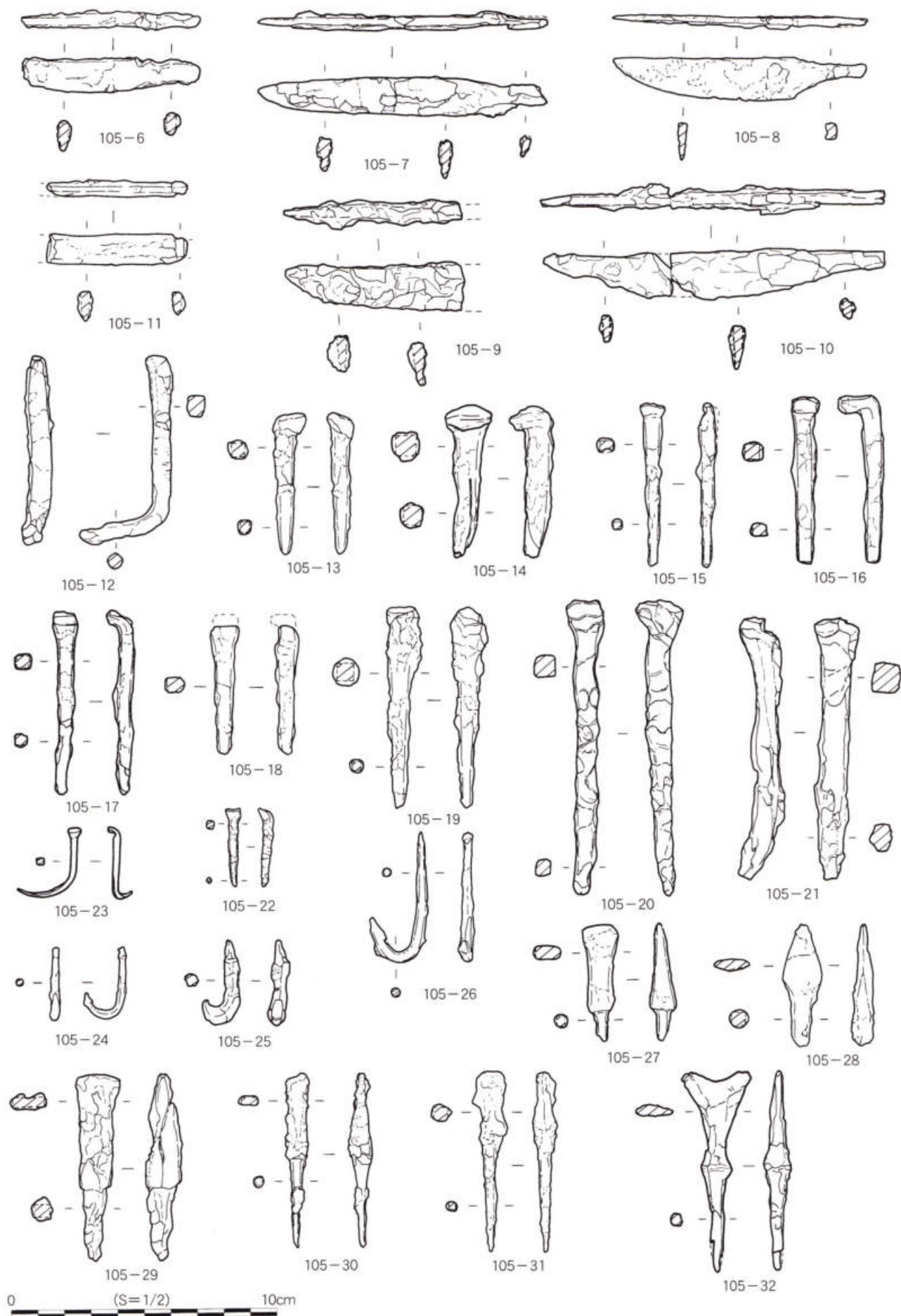
**印章**（第106図-33） 33は長軸2.3cm、短軸0.8cm、高さ0.6cm、重量3.1gの小品で、背面には小さなつまみが付され紐通し穴が穿たれている。印面はややつぶれ、文字様のモチーフが鋳出されるが判読できない文字である。一見すると漢字やバスピ文字の様にも見られる。資料については渡辺美季氏に実見いただきいたき、類似の資料として志慶真門郭出土印とともにご検討いただいた（渡辺2009）。

#### 金具類（第106図-34～60）

34は鉢で、頭部は円形、端部は割ピン状に二又となる製品である。35・36は八双金具で板状の銅板に毛彫により文様が描かれているのがX線写真において確認できる。35は唐草文と推定される。

36は文様モチーフは不明だが、毛彫と魚子繩による文様が施される。37は渡金された板状の金具。

38は覆輪縁金具と推定され断面形状はU字状で折れ曲がっているが、もともとは直線的な調度品や



第105図 VIII区出土遺物(24) 金属製品

鎧等の縁を飾ったと考えられる端部は両方とも折れている。

39・40は座金具類と推定され、39は座金具に付される環、42は環座金具で鉢も含めてセットとなって出土した資料で渡金が良く残る。40は菊花状に縁を加工した座金物。

**切羽** (41) 41は木瓜形の切羽で茎孔縦2.1cm横0.8cmとなる。

**鏡** (43) 43は鏡もしくは調度品等の部品の一部と推定される。紐部分と推定される部分が紐通しだきるように付される。

**簪** (44・45・51) 44は長さ9.9cmの簪である。竿は比較的太く先端は断面菱形、胴部は断面六角形になる。匙状の端部のつくりはL字型に折れ、太さも深いつくりとなる。45は折れているが復元的に推定される全長は6.6cmで、匙状の端部は浅く小さく今帰仁城跡のこれまでの出土例と比べても一般的な形状といえる。51はL字状に折れ曲がっており両端部とも失われる竿の上部を捻るタイプの簪である。残存する復元推定長は9.1cmを測る。

**板状製品** (46~49) 46は縁金具と推定され、菊花文が毛彫りされる板状の銅製品で、わずかながら渡金の痕跡が残る。形態的に直線的ではなく曲線的に湾曲する形状から首里城京の内出土の鍬形台の飾り金具（沖縄県教育委員会2009）や鎧湾曲部に付された金物と推定される。47は板状の製品で厚みがあり重量感がある。48も板状製品だが47に比してやや薄手になる資料。49はやや厚みのある板状の製品で中空になっていると推定される。

**取っ手** (50) 50は板状の製品で、両端部が欠損するが、おおよそ全形をうかがうことのできる資料である。形状は半円弧を描き、端部がやや反り返ることから、両端部を容器状の製品に掛け使用した取っ手状の製品と目され持ち手と推定する。中央部分は幅が厚く端部に向かって細くなる。

**針金状製品** (52) 52は針金状の製品で、針金そのものは近代以降の製作される製品のため近現代のものと考えられたが、出土位置が遺構覆土であることから図示した。類例をもって検討したい。

**鈴状製品** (58) 56~58は鈴状の製品で、半球形の上端部に小さなつまみが付され紐通し穴が穿たれている。57はつまみ部分が欠損しているが、56は孔が穿たれた板状の部品を溶接したつまみ形状、58は本体に孔を穿ち割りビン状の板状の部品を用いつまみ形状としており、つまみ形状に若干のバリエーションを認める。なお、58は渡金が認められる資料である。

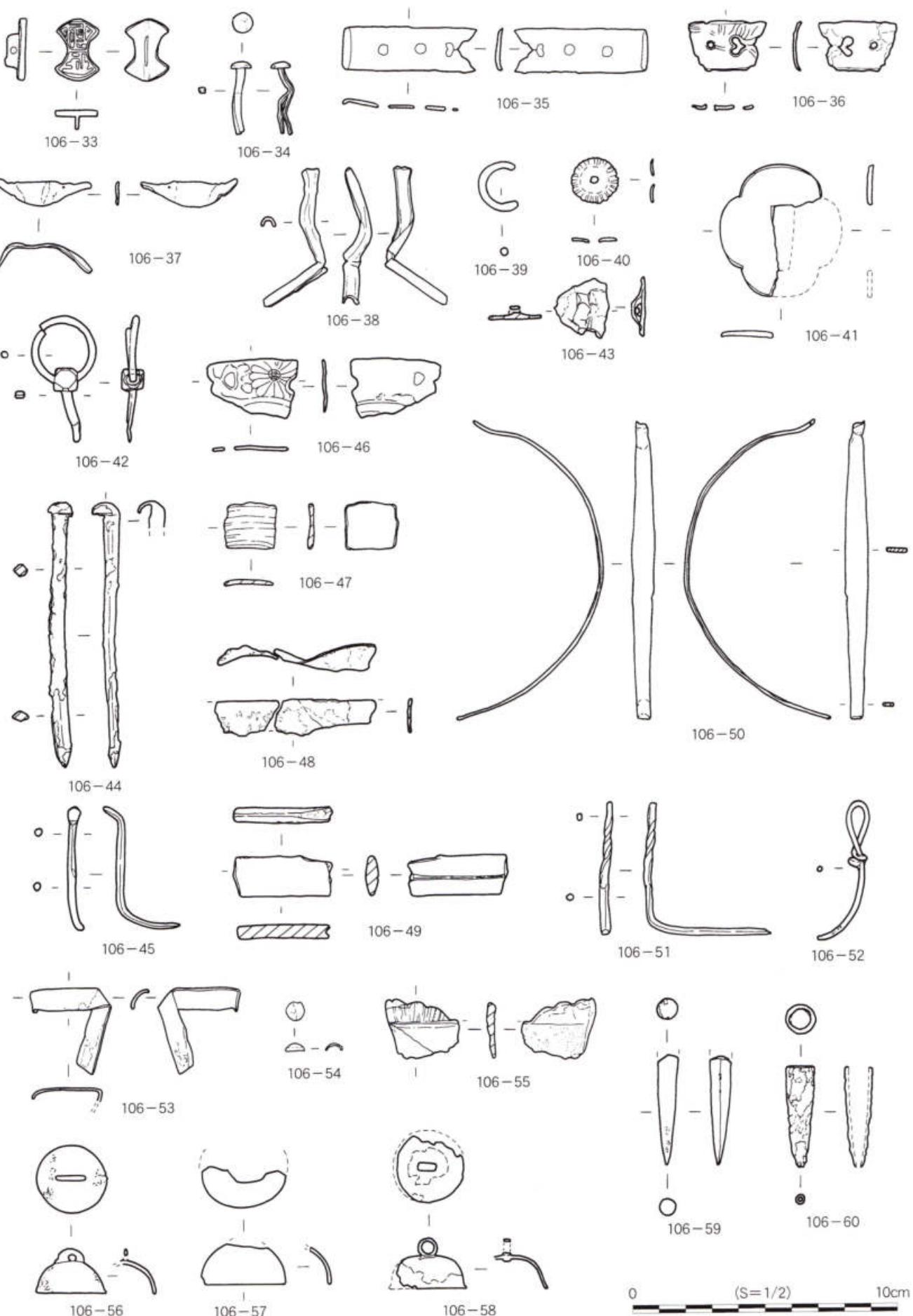
**不明** (59・60) 59・60は不明の弾頭形をした製品である。

## 22. 玉類（第107・108図）

玉は出土総数209点のうち実測図化した資料は遺構出土のものも含めると80点である。図化資料は第9表に観察所見を掲載しているが、未図化資料についてもあわせて計測値等を第11表の観察表に記載し示している。

出土した玉は主郭分類を参考に形態的特徴からI類：勾玉、II類管玉、III類丸玉として分類した。丸玉はa種、b1、b2、c種に分類される。8、67の管玉は主郭等のものとも異なる形状のため本来は別分類とするべきかもしれないが、暫定的に管玉とした。これに材質などからガラス製のものと、石製、土製のものに分類でき、色調などからも複数種に分類可能である。

出土総数209点のうち、勾玉は5点、管玉は4点、丸玉は200点であった。丸玉は更にa種1点、b2種98点、c種101点出土している。丸玉（b2種、c種）の色調バリエーションについて概述しておくと、色調の分類が可能な187点を色見本に基づいて分類しその出現頻度と色見をオフセット印刷で印刷した際のプロセスインク4色の網点パターンをシアン（C）、マゼンダ（M）、イエロー（Y）、ブラック（B）で示した。実際の印刷の仕上がりは条件によって異なるがグラフ2の各色調と出現頻度は分類された色見の出現頻度と個数の割合となっている。なお、個数は溶着しているものは1個としてカウントしている。青系のものが主体33.6%で、占有率は異なるが、首里城京の内



第106図 IV区出土遺物 (25) 金属製品

出土例（沖縄県立埋蔵文化財センター 2009）も青系のものが筆頭となっており近似する。

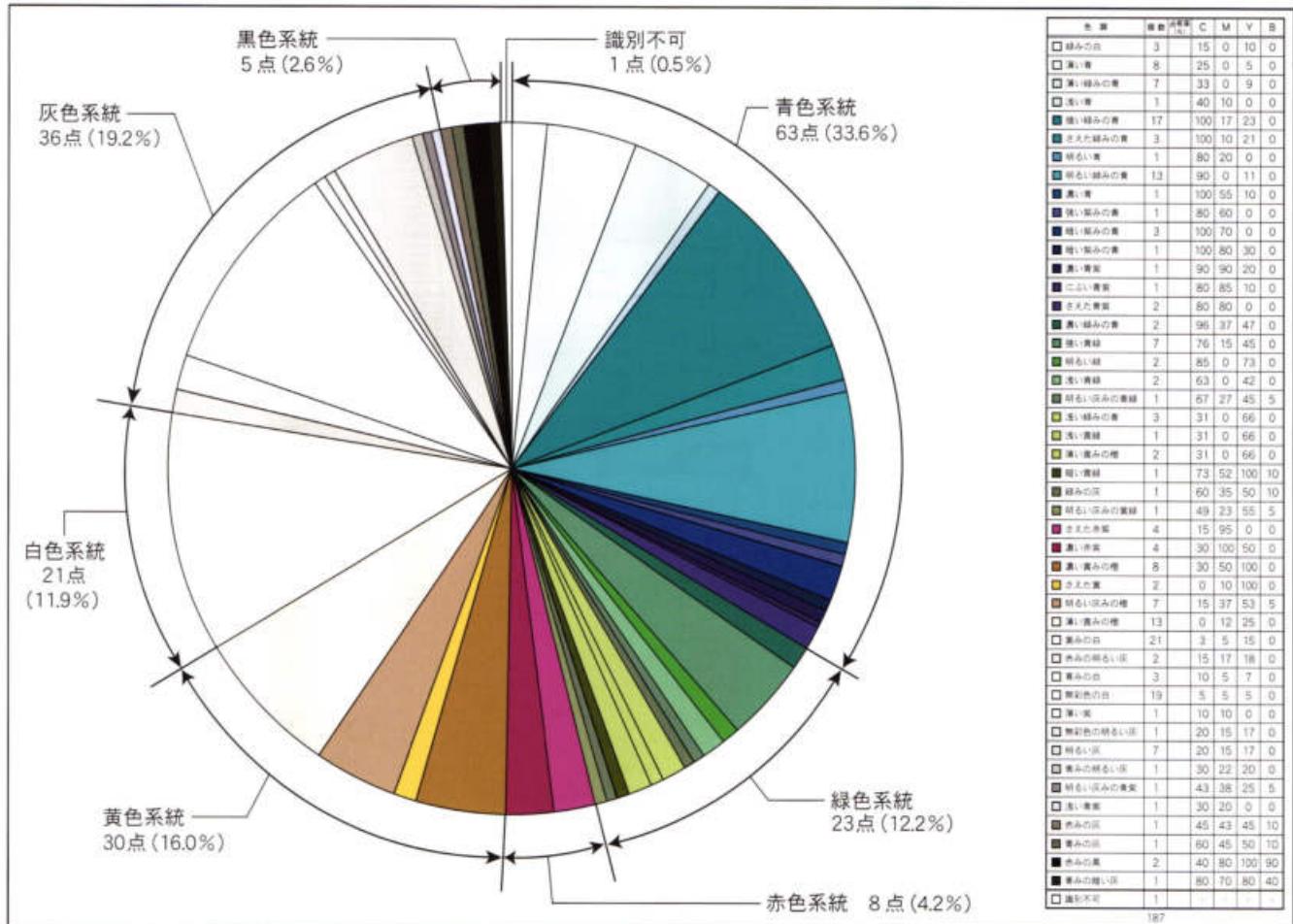
以下、特徴的な資料を中心に紹介していきたい。

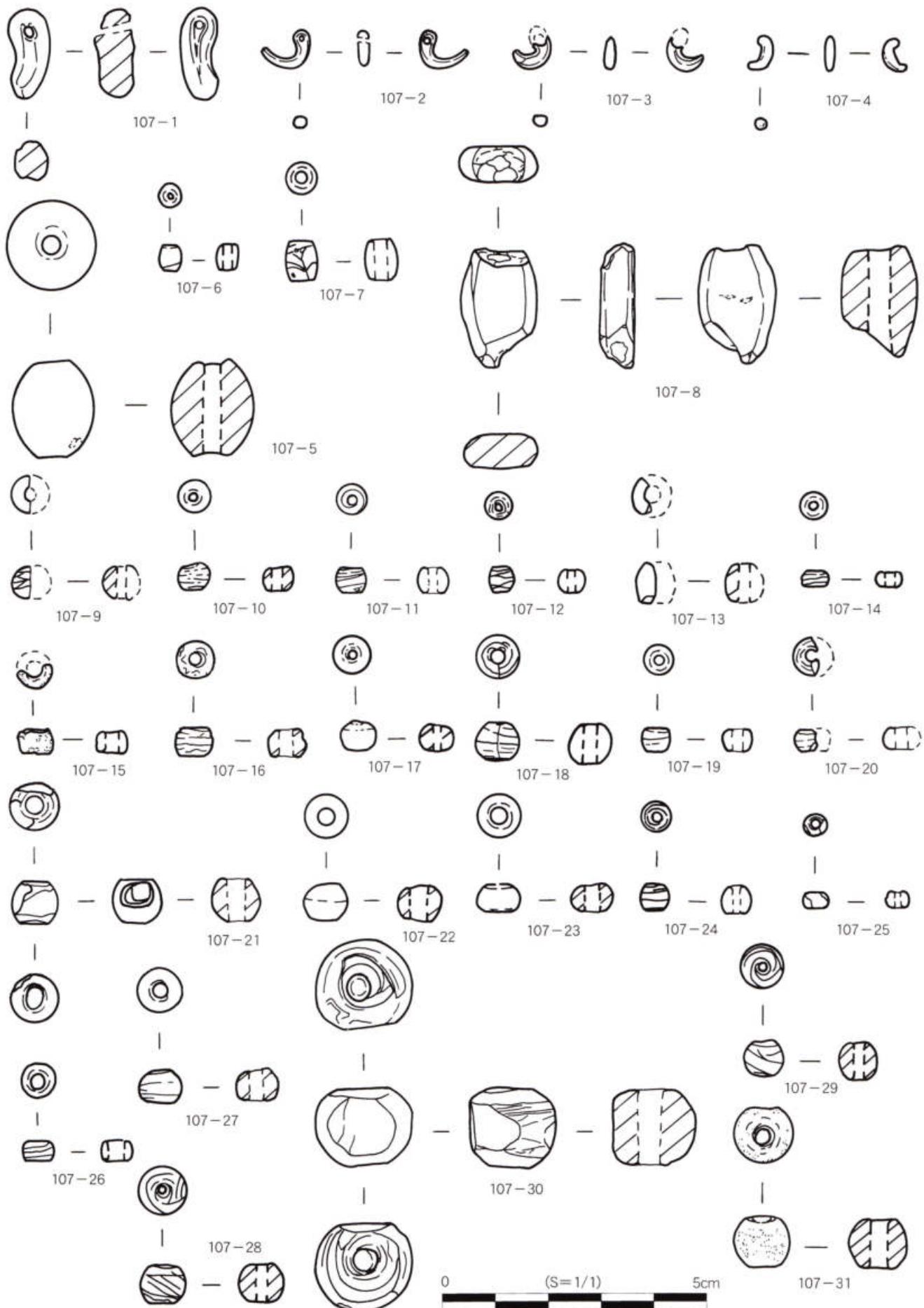
**I類：勾玉（1～4）** 1は青色系のガラス製の勾玉で、端部は欠損したものと推定される。2は小品で材質は表面に光沢があることから骨のようにも見えるが材質不詳の遺物である。3・4はガラス製の勾玉で小品で、3は巻き上げの際の筋状の痕跡が残り製作方法を窺うことができる。

**II類：管玉（6～8・67）** 6～7はガラス製の巻き上げによる小品で、6は風化が著しく本来的な色調は不詳、7は青色系の資料である。8はガラス製の資料と推測される琥珀色の管玉である。67は6面体に面取りされた管玉で、トンボ玉状に類似するものである。

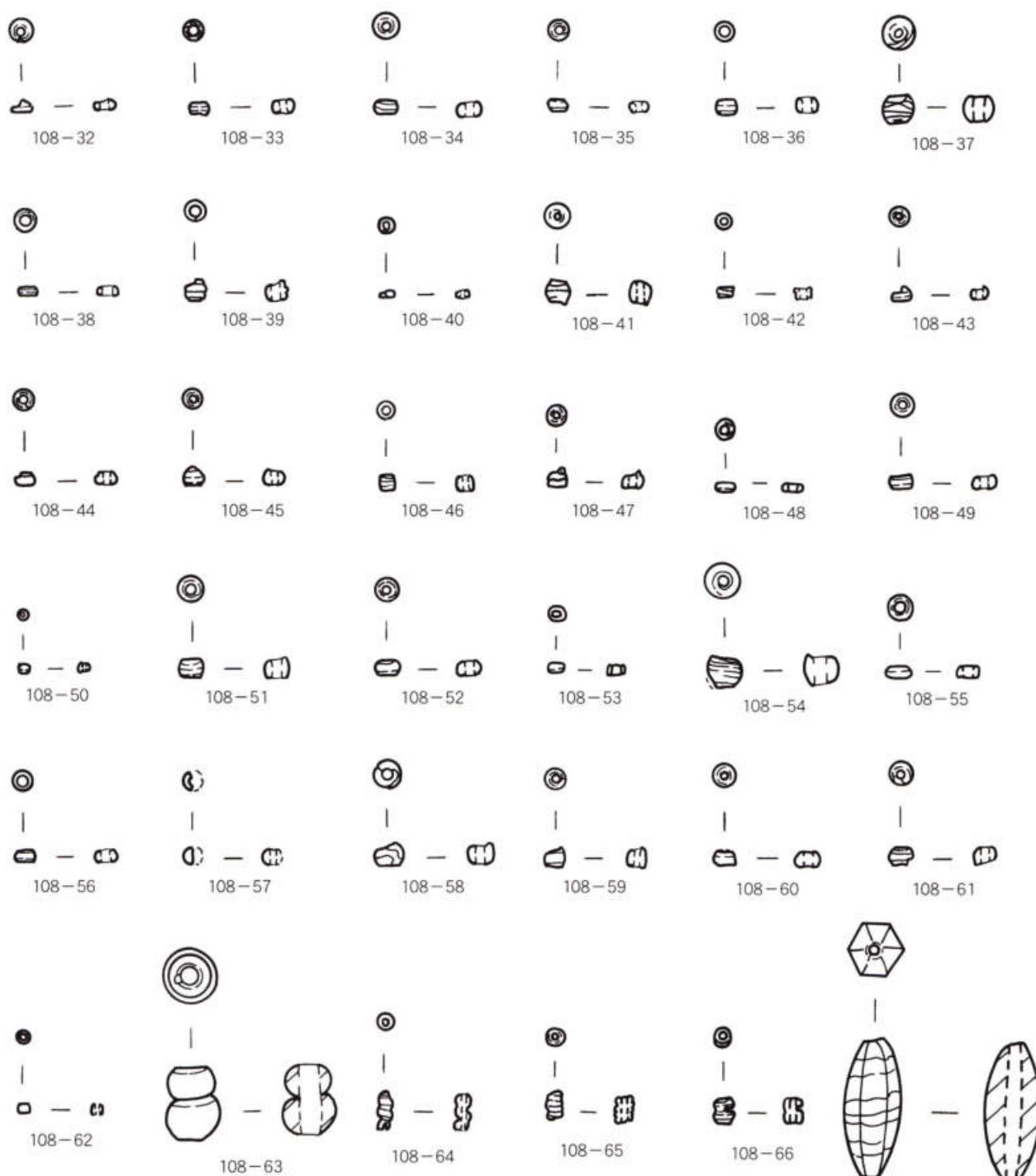
**III類：丸玉（a種：5、B2種：9～31・63、c種32～62・64～66）** 5は水晶玉で、ノロの伝世の勾玉一連として所有するものに類似する。9～31はb2種としたガラス製の丸玉で、サイズは30の外径14.63mm、厚さ18.07 mm、重量7.12 gが最大で、飴状になったガラスを複数回巻き上げて製作されたガラス玉である。回数が1～3回程度の小品をc種（32～62）とした。63～66は複数個の玉が溶けて接着したものである。

グラフ2 ガラス玉色調別出現頻度





第107図 VIII区出土遺物 (26) 玉類



0 (S=1/1) 5cm

第108図 VIII区出土遺物(27)玉類

## 23.石器（第109～111図）

石器は出土総数182点、うち実測図化した資料は遺構出土のものも含めると38点である。石器の集計は第8表に示した。図化資料は第9表に観察所見を掲載している。

出土した石器は大別して砥石、磨石、敲石、石斧、石錘、硯、石臼、その他に分類される。また破片資料で石器片と推定されるものは、不明石製品や研磨痕のある石器片として集計した。

**錘（1・23）** 1は定型形の錘で、長軸と短軸に各一条を彫ったものである。23は、自然礫の一端に孔を穿った資料である。既刊の報告書第14集第109図-5と類似する資料である。

**砥石（1～5・8～17・24～26）** 砥石は上原静氏の分類があるのでこれを用いる（上原2010）。主郭の報告書では砥石を使用形態から提砥と置砥に大別した。2～7・26は提砥、8～17・24・25が置砥となる。上原分類では、更に提砥を懸垂棒札型砥石とし、A類（角棒形）とB類（札形）、その他の三大別している。規格定形板柱型の砥石は基本的に置砥で、A類（短冊形）、B類（表札形）、C類角柱形、D類角柱半欠形、Eその他の5つに分類されている。自然礫型はA類（楕円・略楕円形）、B類（略方形・略長方形形）、C類（不定形）、D類（小礫形）の4つに分類されている。打割礫型はA類（略方・略長方形）、B類（不定形）に2つに分類されている。

**懸垂棒札型（2～5）** 2～5はA類（角棒形）に分類される。

**規格定形板柱型（9・15・16・24）** 9・16・24はD類（角柱半欠形）小型に分類される。15はC類（角柱形）c種である。24は、側面に花のような模様が線刻された資料である。

**自然礫型（10～11・13・22）** 22はA類（略円・略楕円形）で砥石面として平滑な面は表裏の広い面だが、片面は凹凸がある。10はB類（略方・略長方形）a種に、11・13は不定形に分類される。

**打割礫型（8・12・14・17・25）** 8・12・25はA類（略方・略長方形）、14・17はB類（不定形）に分類される。8は砥石として集計したが、破片資料のため断定はできない。裏面には浅い線彫で「雄」と思われる字が判読できる。

**敲石（18～20）** 自然礫を用いた敲打具で、長軸端部及び平坦面に敲打痕を残す資料である。図示した18・19は材質は砂岩で破損部があるが1kgを超える資料である。20はチャート製の敲打具で円礫の両端部が敲打によって欠損している。

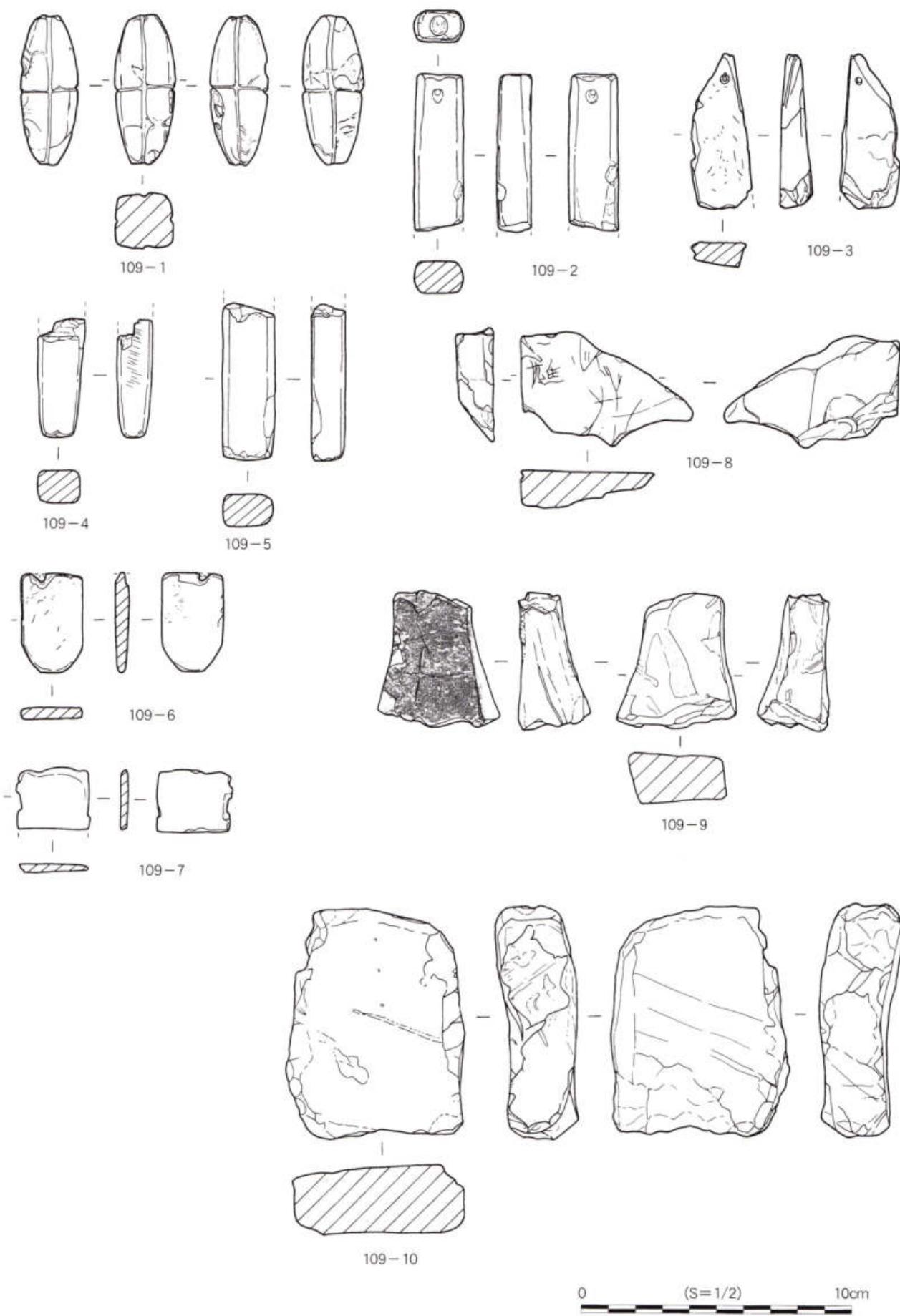
**石斧（21）** 石斧が調査地区から6点出土している、全形が窺えるのは図示した21のみである。撥形の石斧で、刃部は両刃となる。

**石製品（6・7）** 石製の模造品で用途不明の石製品として報告する。

## 24.煙管（第111図）

煙管は石製（もしくは瓦質土器の加工品を含む）のものが、9点出土しており、このうち6点実測した。

28～33は煙管雁首と推定される資料で、32は瓦質土器の陶片を加工し製作した製品と推定される。いずれも円筒形の資料で火皿を上面から挿り鉢形に中央部まで穿ち、体部中央に羅字を差し込む孔が開けられている。首里城で陶首I類とされているものに類似する。こうした形状のものはグスク時代からみられるが、近代の遺跡・遺構からは出土しないものとみられている（大堀2010）。



第109図 VIII区出土遺物 (28) 石器



第110図 VII区出土遺物 (29) 石器